
ドッペルパスはかく語りき

175の佃煮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドッペルパスはかく語りき

【Nコード】

N9435L

【作者名】

175の佃煮

【あらすじ】

急いで登校中、曲がり角の先でぶつかったのは異形の化物だった。どこからともなく現れる怪物達に、それから市民を守っているという胡散臭い会社、怪物達を崇める怪しい宗教団体、そして魔術とか呼ばれる物理法則を無視した力。当たり障りの無い大学生活は一変する。

青年はそんな非日常の世界を享受し、夢を叶える力を手にした。望むのは全ての生物が幸せに暮らせる世界。これは生きる目的を探す物語。

0001：新たに刻まれた境界

寝起きのぼんやりした頭を、なんとか流し台の前まで連れて行く。マグカップに紙のドリッパーを載せ、コーヒーの粉を大雑把に入れてからポットのお湯を注いだ。落ちるのを待つ間に、リモコンでテレビの電源を入れる。アナログという文字の入ったフレームに、脂ぎった顔の中年男性がドアップで現れ、少し萎えた。

淹れたてのコーヒーを口に含み、いつものインスタントとは異なつた少しだけリッチな気分を味わう。

将来の夢は「サッカー選手」、「お花屋さん」だなんて、とびきりの笑顔を浮かべて話していたのは、いつのことだったろう。早く大人になりたいと願い、親が苦笑いを浮かべているのを不思議に思っていたのは。

テレビのニュースでは、揚げ足を取り合う与野党が取り上げられている。軽率にも「どうでもいいこと」を口走ってしまった今しがたのおじさんが、テレビカメラとインタビューを避けて黒塗りの車に乗り込んでいった。タレントを感じない世襲政治家ばかりで構成された政権と、文句や恨み言だけで何も行動に移さない国民は相性抜群で、国会は忙しない椅子取りゲームと化している。

続いて取り上げられた就職氷河期は、来年就職活動を控えている私にとっても動向が気になるところだ。デフレスパイラルだなんていかにも悪い名前をした経済現象は改善の兆しを見せているらしいが、休日にもかかわらずシャッターが下りたままになっている店や、橋の下に広げられたブルーシートを数えている限りはともそうとは思えない。先端に重りでもぶら下がっているかのような景気動向指数グラフを見せられて、安心しろというのが無理な話だ。

その後も、これでもかとはかりに、テロ、自殺、火災と暗いニュ

ースが続いた。最後の動物のコーナーで、少しだけ和んだ。

思い描く将来像が曇って見え始めたのは、いつからだっだろう。夢なんて言葉を口にするのが、とても恥ずかしいことに思えてきたのは。あの苦笑いの本当の意味を理解したのは。

未来を悲観する原因を生み出しているのは、この不景気だけではないと思う。

止まらない少子高齢化と、負担は上がり給付の下がる社会保障。どこへ流れているのか不思議な税金と国債。着実に増加している精神病患者と自殺者。あげくに、私の嫌いなものは無くなればいい、私が臭いと思うものには蓋をすればいいなんて、危ないからと撤去される遊具、制限される表現、規制されていくドラッグ、煙草、酒。がんじがらめに拘束された起伏に乏しい生活で何を見出せというのか。

人類を滅ぼせるだけの戦力を持ちながら、落とす所のない軍備の拡張を行わざるを得ない国々。片や日がな一日コンピュータの画面を睨む生活、片や子供を働きに出してなんとか衣食を確保できる生活を送る国々。同じ地面の上でありながら国間には深淵が横たわる。それを掘り下げるのは距離か、言語や宗教か。

着実に急速に悪化していく地球環境に、長いこと警鐘が鳴らされ続けている。国々は汚染する権利を売買し、企業は顧客の目を気にしながら利益を損なわない程度の環境保護に取り組む、人々は不便ではない程度の節電・節水を心がけ、割安ならエコな製品を買い求める。心のどこかで手遅れなことを悟っていながらも。

人々が悲観するのはおそらく、無力な社会と見失った目標。

この世界は何処に向かっているのだろう。争いの無い世界、すべての生物が幸せに暮らすことのできる世界なんていうのは夢物語なのだろうか。人々はターニングポイントに立ちながら、ずるずると

選択を先延ばしにしている。

いつの間にかテレビでは、次番組であるドラマが始まっていた。ため息をついて窓の外に視線を移した。いくら偉そうなことを思い描こうとも、自分とて何も行動しない、何もできない人間の一人に他ならない。権力、武力、経済力――。もしも世界に訴えかけられるだけの力を手にしたなら、行動を起こすことができるだろうか。遮られることなく降り注ぐ光に照らされた屋根瓦が眩しい。公園では雀が盛んにさえずって、忙しく何かをついばんでいる。今日も暑くなりそうだ。葉桜の並ぶ、二年間見続けている代わり映えのない景色を背景に、××××が悠々と空を飛んでいった。

学生の見当たらない通学路の坂道を、息を切らせながら勢いよく自転車で駆け上がっていく。後ろからクラクションを鳴らされ、車道の脇に寄った。

信号にひっかかり、舌打ちしながら携帯電話を取り出した。表記された時刻は、一限目が始まってから既に二十分も過ぎてしまったことを示している。まったく、朝から黄昏ている場合ではなかった。代筆してくれていると助かるのだが、村田に送ったメールには返信がない。

携帯をズボンのポケットにしまう。なかなか変わらない信号に痺れを切らして、ハンドルを住宅街に向けた。道が狭く見通しが悪いので普段は敬遠しているが、今日は異様に――いや、幸い車や人の通行量が少ない。流れていく石壁、家々の間を快調に走り抜けていった。

十字路に差し掛かり、ブレーキをかけて徐々にスピードを落とし始めた。ここを曲がれば、まもなく大学前の道に合流できる。急ハ

ンドルを切り、体を横に向けた。

突然ペダルが不自然に軽くなった。しゃかしやか音を立てている足元を見ると、車輪がアスファルトから離れている。重力から開放されたような気がしたのは、やっぱり気のせいで、自分のおかれている状況が分かったのは地面と平行になってからなわけで、直後、行動をとる余裕もなく車体と共に地面に叩きつけられた。思わず苦痛の声を漏らす。

先に地面に打ち付けた尻が痛い、頭が何ともなかったことはせめてもの救いだろう。痛みを我慢して自転車を起こしながら立ち上がった。腕にできていた擦り傷を舐める。滲んだ血に無数の小さな小石がくっついていてのを見て、気分が滅入った。

曲がる時には見えなかったが、車にぶつけられたのかもしれない。いや、ぶつけたのかも。こういう時はどちらの過失になるのだろうか、なんて考えながら憂鬱な気持ちで振り向くが、やはり道の四方に車の姿は無かった。

べちゃりと、液滴がアスファルトの上に落ちた。雨だろうか。宙を振り仰いで視線を移すが、上空は気持ちのいいくらいに快晴模様だった。この景色の為だろうか、急速に自身が広がっていくような感覚がある。それだけならただの自然への感動体験で済むのだろうが、同時に吐き気がひどくなっていた。……不安。この場に無関係なはずの二文字が脳裏にちらつく。何も無いはずの宙から目を逸らすことができない。

「——シュ——」

それは何度目だったか。聞こえてくる煩わしいものを目覚まし時計の音だと認識する、朝の一時に似ている。耳が圧力の変化を捉え、ようやく生々しい音への変換に成功した。口端から吐き出される息。もう聞き逃すことはできなかった。

——そして私は、十字路の真ん中に立つ異分子を認識した。

四肢を伸ばし悠然と地面に立つ、炎みたいに鮮やかな赤い色のライオン。象並の巨体はごわごわした毛並みで覆われており、長く太い尾の先には鋭い無数の棘が生えている。黒ずんだ紅の口内には、三列に並んだ牙が覗いている。いずれも内側に曲率をもっており、あんな口で噛み付かれたら、ブラックホールにでも吸い込まれたみたいにな二度と引っ張り出すことは出来ないだろうな、と思った。

生物の外形は、その環境で生き残るために進化して得た極地の形態である。だとすれば目の前のこの怪物は、一体どんな過酷な環境で生活してきたのだろう。突然姿を現したこともそうだが、他と隔絶したその禍々しい姿にぞっとする。

顔周りの筋肉が発達しており、刻々と変わる表情にはどこか人間の面影がある。そこから心情を判断するのなら、憎悪をもってこちらを睨んでいるようだった。

下半身の力が抜けて、ストンとその場に座り込んでしまった。横で自転車が騒々しい音を立てて倒れた。

化け物がゆつくりと片足を上げた。毛皮の下に浮かび上がる、絡み合った筋肉の隆起は金剛力士像を想起させる。足首は木の幹みたいに太く、五本の鋭く反った黒い爪が覗いている。

地面を伝わる衝撃が脳髄まで届いた。四方に飛び散った黒い瓦礫が、壁に当たって跳ね返る。眼前に下ろされた太い足の下でアスファルトが陥没していた。

『ピンチ』の三文字が頭の中で点灯を始める。自分が危地に立たされていることを、ようやく身をもって知った。次は当てるぞ、とも言いたげに、握りこぶし大の黒目が私を見下ろしている。短い悲鳴を漏らして、必死に後退しようと体を動かす。手足の動作が上手く噛み合わず、じたばたしているだけでなかなか化け物から離れ

ることができない。

化け物がもう一方の足を上げた。今度こそ、あの臼みたいな杵で潰されるのだと確信し、気が遠くなった。

足を振り下ろす素振りを見せた——まさにその時だった。既に怪物の目は私を映してはいなかった。機敏な動作で道の中央まで飛び退き、何かに向かって低い声で唸り警戒心をあらわにする。

助かった、のだろうか。思い出したみたいに急に汗が噴出し、また傷が痛み出した。

「大丈夫かい？ 立てそう？」

無気力に、声の聞こえた方を振り向いた。いつからそこにいたのか、温厚そうな顔をした白髪交じりのおじさんが私のことを見下ろしている。頷いて立ち上がろうとしたが、膝に力が入らずまた座り込んでしまった。

「ああ、いいいいいよ、そのまま。悪夢はすぐに終わるから」

おじさんが顔を上げる。つられてその視線の先を追った。

二人と一匹が見つめる中、軽やかで楽しげな足取りを思わせる、ブーツのヒール音が響いた。あの化け物が警戒するなんて、どんな魔獣が出てくるのかと思いきや、なんてことはない、歩いてきたのは女の子だった。化け物の前で進行方向を変えて対峙したその後ろ姿は、キャンパスで目にするような、ニットワンピースを着こなした普通の女子大生である。

今まで見受けたことのない、奇怪な光景が目の前に広がっている。例えるなら、『美女と野獣』？——確かに女の子は可愛い顔をしていて美女に含まれるのかもしれないが、そんなロマンチックなものではない。『飼育員と動物』？——いやいや、それでは関係が

逆さまだ。そう、直感は『餌と捕食者』だと告げている。

女の頭上めがけて、針に覆われた尾が振り下ろされる。まるで雷に撃ち抜かれたようにアスファルトが砕けた。

一瞬の出来事だった。言葉が出てこず、引きつった声で悲鳴を上げた。

「あ、あの娘、潰され……」

隣で怪物を眺めていたおじさんに向かって、身振り手振りで必死に訴える。あの娘の知り合いだったようだが、彼はいたって冷静に一点を見つめ続けていた。

「五月蠅い。その部外者黙らせて」

声は十字路の中央から返ってきた。再び怪物に視線を向ける。攻撃の衝撃で巻き上がったいた塵煙が晴れていた。

怪物の赤い尻尾がピンと伸びきっている。その先、針のうちの一本を女が掴んでいた。

「いやあ、そういえば元ブロッカーだったよね。僕もちよっただけドキッとしちゃった」

おじさんが場に似合わない陽気な声で笑う。

よくよく地面を見ると、女を避けるようにして円弧状にアスファルトが砕けていた。直撃したと思ったあの攻撃を、どうやってか避けていたらしい。

女が腰にぶら下げたヒップバッグに手を入れ、円筒形の物体を取り出した。側面は光沢の無い茶色の紙で包まれ、片端には短い紐が

垂れ下がっている。

あれは何だ。脳内で候補に挙がった棒的な菓子もバトンも、すぐに却下された。

「我が声を聞け、彼に従いて街を往け」

女が自分に言い聞かせるような小さな声で呟きながら、もう一方の手でジッポーを取り出し、流れるような動作で『導火線』を炙って火をつけた。花火にしては包装が味気ない。まさかとは思ったが、あれはダイナマイトだ。

小さな火花を散らして導火線が短くなっていく。というのに、彼女は怪物に投げつける素振りも見せず、しっかりと筒を握り締めていた。さつさと手放して逃げればいいのに、何かトラブルがあったのだろうか。あのままでは怪物諸共、爆発に巻き込まれてしまう。隣に立っているおじさんをすがるように見上げる。この位置だつて安全ではないかもしれないのに、彼は相変わらず平然としていた。彼女に視線を戻す。黒いアームカバーの手の甲の部分に、白い円状の模様が描かれていることに気付いた。

「我が聖域から絶滅せよ、——執行！」

ダイナマイトに火が入る。耳をつんざく轟音が大气と地面を揺らし、建造物を軋ませる。瞬間、コンクリート塀に貼りつく赤い液体が噴き付けられていた。

鼻につんとくる臭いが立ち込める。破片がぼとぼと音を立てて顔からこぼれ、アスファルトの上に溜まっていく。活力を失った巨体、顔の碎けた怪物が倒れて横たわった。

立ち上がって尻についた土を払った。なぜこんなところに座り込んでいたのか、よく思い出せない。夢でも見ていたみたいに頭がぼんやりしている。自転車を起こし、ブレーキレバーを引いて壊れていないか確認してみた。

「ここで見聞きしたことは早く忘れた方がいい。いいね？」

横から、温厚そうな顔をした白髪交じりのおじさんが話しかけてきた。自分の思考にデジャビュを感じる。そう、先程も彼と会話を交わした気がする。覚えていないということは、大したことは話していないのだろうが。大人しく頷き、十字路に背を向けた。

ふと、足元に小汚いソフトボールが転がっているのを見つけた。見た目のこともあるが、直感的に不快に感じ、あまり触りたいとは思えない。しかしながら、あのおじさんの物だとすると、このまま通り過ぎるのも気まずく感じる。仕方なく、濡れてぶよぶよしたそれを拾い上げた。

「コレ、あなたのですか？」

振り向きざまボールを放り投げる。おじさんはオーバーに驚いて受け取ってから、苦笑いを浮かべてありがとうと言った。

扉をゆっくり開けて中の様子を確認する。講義室では、まばらに座る学生達が机の上に広げられたルーズリーフにシャーペンを書らせていた。なんとか欠席だけは免れたようだ。

頭を低くして部屋に足を踏み入れるが、今更何しに来たんだ、という呆れた視線を四方から感じた。それもそのはず、授業は終わっていたようで、教授が黒板に宿題を提示している。

隅っこの席に見知った顔を見つけ、空けてもらった横に腰掛けた。

「社長出勤とは頼もしいな、テスト前はよろしく。……ああ、代筆代は缶コーヒでいいや」

入学当時の友人である村田が、黒板から目を離さずに言った。
××××××に会ったのは運が悪かったが、こいつには本当に感謝。

「この、刺身の上にタンポポをのせる仕事なんてどうだ？」

「——ちよつと気になるけど、パス。お前がやれよ」

痛恨の欠席から三日後。私は村田と共に家でだらしながら、自分の新しいアルバイト先を探していた。奴はソファに腰掛けアルバイト雑誌をめくっており、たまに微妙な仕事を紹介してくる。徐々に減り続けている求人だが、今週は特にひどく、この近辺は二ページ分しか掲載されていなかった。

男女雇用機会均等法なんて国は銘打っているが、現実には性別による適不適があるわけで、暗黙のうちに半数は選択肢から除外される。私もネットで検索を試みているが、結果は同様に、なかなか目ぼしい仕事が見つからなかった。

しばらくは短期で繋ごうか、なんて思いながら何気なく開いたページのハイパーリンク先に、妙な表示があった。

給与、アクセス欄には何も記載されていない。一方、勤務内容には『営業事務時給850円から急募モノレール高妻駅徒歩5分』云々と表示されていた。要するに、入力を間違えたようで、募集要項を一箇所に書き込んでしまっている。見ればこの近場なのに、どうりで検索にヒットしていないわけだ。

「熱心に見てるが、本当に大丈夫なのか、そこ？」

いつの間にか村田が後ろからパソコンの画面を覗き込んでいた。場所は自転車を通える射程圏内、期限はまだ有効、勤務内容と時給はそれほど魅力的ではないが、妙な縁にどこか心惹かれるものがある。

「待遇が良かったら紹介しろよ」

この男は気が早いことに、もう私が働くことを前提にして話している。まあ人のことをよく分かっているというか、私は面接を受けてみるだけ受けてみようと思っていた。

訪れたビルは、壁面の塗装が剥がれコンクリートが露出した古びた建物だった。狭い階段を上り二階へ。カラオケパブと焼肉屋の間を通り、突き当たりの区画で足を止める。壁には『阿部警備保障 高妻事務所』と書かれたプレートが掲げられていた。

携帯のサブディスプレイを見ると、指定された時刻の五分前だった。丁度いい時間だ。前髪を整え襟を正して気合を入れる。

ドアをノックする。アルミの扉が予想以上に大きな音を立てた。ワンテンポ遅れてから、「はい」とドアの向こうからやる気の無さそうな男の声がした。寝癖の直りきっていない頭に、のんびりした表情。ドアの隙間からによっきりと覗いた顔は、見事に声と一致していた。年齢は私よりも年上、三十前くらいに見える。

「すみません、一時からこちらで面接を受けさせて頂く予定になっている永田です」

「ああ、はい。聞いてますよ。どうぞ中へ」

男がドアを大きく開いて促してきた。シワだらけのＴシャツにジーンズなんて格好が、さらにだらしなさを強調している。ビジネスカジュアルをしてきたのが場違いに感じてきた。彼に会釈をして事務所の中に足を踏み入れた。

部屋はビルの外観から想像できる通りに狭く、どこか圧迫感を感じる。それもそのはず、椅子が動かせないくらいの間隔で机が四台積み込まれ、大きな印刷機と棚は防災の条例に引っかかりそうな配置になっている。

机には、肩にかからない程度のショートカットをした女性しか向かっていなかった。釣り目がちできつそうな顔立ちをしている。まだ幼さが残った雰囲気から、大学生の一回生ではないだろうか。胸の名札には栗原と書かれているが、うちの大学で見たり聞いたりしたことはないと思う。こちらには興味ないといった様子で、黙々とキーボードを叩いている。その娘のしていた黒いアームカバーが妙に心に引っかった。

対応の男はドアを閉めた後、窓の方を向いて大きく息を吸い込んだ。名札には青木と書かれていた。

「ヤマシタさん、面接の子」

「ごめん、今ちよつと手が離せないや。こっち来てくれるー？」

振りの割りに普通のボリュームで張り上げられた声に対して、ついたての陰から手が上がった。驚くことに、この部屋の奥にさらに机が一台詰まっているようだ。

「足元に気をつけて下さいね。……最初は馬鹿げた話だと思つかもしれないけれど、今は流し聞いていればいいと思いますよ」

意味深なことを言って、青木さんは自分の席に腰掛けた。パソコンの壁紙がアニメチックな少女の絵だったのを見逃さなかった。

しかしながら狭い。こう足の踏み場が無いと、忠告どおりに気をつけようもない。やっとこ椅子やらダンボールやらを跨いでいき、ついたての奥に辿り着いた。

こちらに背を向けて腰掛けていたのは、紳士といった雰囲気、なで肩で爽やかな身なりをした中年男性だった。最近あの白髪交じりの頭を見た気がするのだが、どこでだったか思い出せない。

「永田君だね。そこに座って」

男は振り向かないまま、器用に丸椅子を指差す。机の上に積み重なった書類の整理が忙しいようだ。

歩み寄るにつれて心の引っかかりが大きくなっていく。そうだ、この男性は、あの時慌てて受け取った男に似ている。——何を？ソフトボールを。いや、瞳を上に向けたあれはボールなんかではなかった。

席に腰掛け、眼前の後頭部をまじまじと見つめた。もう少し、もう少しで、何か重大な記憶を掴み出せる。

あんな晴れ空の下、水浸しになっていた十字路。黒い地面。濡れた石壁。漂う生臭さ。——生臭さ？ 錆びた鉄の臭い。排泄物とガスの臭い。——どこからそんな臭いが漏れているのか？ 一面の赤、アスファルトの上に溜まった血液に浮かぶ四肢。

ひどく記憶が混乱している。横たわるライオンの巨体。眼前に振り下ろされる、木の幹みたいなたさの足。ダイナマイトを持った女。憎悪で歪んだ顔が削げ、一瞬で赤く変わる。……身に覚えの無い光景が脳裏に浮かぶ。前後関係が矛盾しないように画像を繋ぎ変え、

五感の情報を加えて再構築していく。

作業が一段落ついたようで、男が振り向きながら口を開いた。

「はじめまして、今日の面接の担当になっている山下です。まあ、気楽な感じで進めていきたいと思っているんで、よろ——」
「あの時のおっさん！」

思わず言葉を遮り、椅子から立ち上がって叫んでいた。おじさんは、化け物の目玉を渡した時と同じくらいに慌てていた。

——そして私は再び、異なる世界の姿を認識した。

0002：魔術師見習いという名のタダ働き、はじめました

私はアルバイトの面接に訪れた阿部警備保障の高妻事務所で、うろたえた面接官を見下ろすという常軌を逸した状況に陥っていた。

いつの間にかキーボードを叩く音も止んで、部屋の中は緊張と静寂に包まれていた。しきりの向こうで二人も聞き耳を立てているのかもしれない。遠くで走っている車の音だけが聞こえていた。

「……松尾の住宅街で会ったお兄さんか。お久しぶり。いやあ、こんなところでまた会うなんて、世の中狭いもんだねえ」

山下さんは何事も無かったかのように元の表情に戻り、咳払いをしてから言葉を続けた。

この白々しい態度は間違いない、彼らはあの場で何があつたのかを知っている。自分が何故、今の今までの化け物のことを忘れていたのか分からないが、今度は煙にまかれないうちに気合を入れた。再び椅子に腰掛けて口を開く。

「大きな声を出してしまつてごめんなさい。それで、あの化け物はなんだつたんですか？」

「何のことだい。君は覚えていないようだけれど、私が話しかけたのは君が道で倒れていたからなんだよ。……夢でも見ていたんじゃないかな。あんまりおじさんを困らせないでくれ」

大げさに両手の平を上に向けて山下さんが言う。あくまで化け物のことは隠すつもりらしい。いや、それ以上踏み込まないようにと、俺に警告してくれているのかもしれない。

この話題について話すことを止めれば、再びあの光景を忘れられる気がする。

「あの席の――、栗原さんでしたっけ。彼女も一緒にいましたよね？ あのアームカバーの模様もはつきりと覚えているし、確かなはずです。ダイナマイトは手の中で爆発したように見えんですが、どうやって化け物の顔を削ぎ取ったんですか？」

それでも、いまさら引き返すつもりは全くなかった。喋りながら、ついたての向こうを指差した。さすがに言い返すことができないように、山下さんは再び苦々しく口元を歪めて沈黙してしまった。私の後ろに視線を移し、何やらアイコンタクトを送っている。

振り向くと、青木さんと栗原さんがしきりの影から顔を出していた。二人とも首を横に振って、多分、お前の負けだというジェスチャーをしている。

「やれやれ、少し一線に近づきすぎていたように見えていたけれど、やはりこうなってしまったか。……あの化け物は、いや、あれらの化け物共は、諸説あれども僕は神の使いだと思っている」

山下さんがようやく化け物の話を始めてくれた。だいぶ渋りながらではあるが。

「神の使い……ですか？」

神なんて言葉が出てくるから急に胡散臭くなった。しかし実際に目にして、実際に殺されかけたのだから一笑に付すことはできない。結果として苦虫を噛み潰したような顔をして聞き返していた。

「というのも、あの怪物達はもともとこの世界のどこにも存在していなかった。確かなことは、奴らは空にできた裂け目を通して何処からかやってくるということだ。裂け目の向こうのことは何も分か

「つちやいないが、我々はそこを錬金術の呼称を借りて『マクロコスモス大宇宙』と呼んでいる」

話を理解できず首を傾げていると、山下さんはそう呼ばれるようになった経緯について説明してくれた。

伝説的な錬金術師であるヘルメス・トリスメギストスは『大きな世界』に対比させて、人間をミクロコスモス小宇宙と名付けた。何故なら、太陽と月に対して右目と左目、骨や肉に対して山や丘というように、人間には世界に対応する器官が存在しているからだ。

裂け目を通して現れる怪物達はどこか、この世界で暮らしている動物達に似ている。そのため彼らのいた世界を、我々人間の世界――小宇宙と対比させて大宇宙と呼ぶに至ったそうだ。

「山下さんは神の使いだと思ってるって言っていましたけど、化け物は何の目的があって、そのマクロコスモスから僕達の世界に現れるんですか？」

山下さんは、さあと苦笑いを浮かべて首を大きく傾げた。

「色んな人が色んな面白いことを言っているんだけど、怪物は喋れないんだから、結局想像の域を出ないんだよねえ。僕は、『神が人を戒めるために送っている』っていう宗教観の入り混じった説が好きだけど」

人類に警告を与える神の代理、それで『神の使い』。宗教観が入り混じったというのは同感だが、納得した。

「そういえば、なんで僕は化け物のことを忘れていたんですか？それに、化け物って全然世間で騒がれていませんよね。山下さん達が何かしているとか？」

「永田君は、見えたりする方？　幽霊とか天使とかオーラとか」

質問を質問で、それもオカルチックな質問で返されるとは思っていなかったので、数秒の間固まってしまった。

「いえ、これまでの人生の中では一度も。幽霊とあの怪物にどういう関係があるんですか？」

「見える人間と見えない人間がいるという点だね。——今の世界は科学で証明されることによって広げられているけれど、まだこの世界には私達の認識できないものがたくさん存在している。実際にいるのかどうかも分からないけど、ここでは幽霊というのは可視光域外の電磁波で構成されているんだと仮定しよう」

人の眼は電磁波の内、可視光線と呼ばれる紫外線と赤外線の間のごく一部の波長の光しか知覚できていない。山下さんが話しているのは、『幽霊とか天使とかいうのは、特殊な人間や装置が可視光域外の電磁波を捉えたのにすぎないのではないか』なんていう、いかにも科学主義的な説である。まあ仮にすべての波長を認識できたとしたら、電磁波過敏症人間には卒倒ものの力オスな光景が広がっているだろうが。

「するとどうだろう。幽霊と呼ばれるものは確かに存在しているのに、大半の人間はそれを知覚できないということになる」

俺はあの交差点で姿を知覚するまで、怪物のことを認識していなかった。山下さんはそう言いたいのだろう。しかし俺は特殊な装置を用いることなく怪物の姿を視覚で捉えることができた。天使や幽霊とは前提条件が違う気がする。

まるで疑問を抱いているのを見透かしているかのように、山下さんが言葉を続けた。

「生物が発生する前の世界は、もともと連続した一つの存在だった。そこに生物の必要性に応じて区切れ目を入れ、名前をつけていくことにより認識は行われる。では、その逆はどうだろう。必要性の無い存在は世界から切り離されず、名前をつけられず、認識が行われない。……下のものは上のものごとく、上のものは下のものごとく。見えないものは信じられない、信じないものは見えてこない」

「命の危機に瀕したから、必要に迫られて世界のその一角に区切れ目を入れたということですか？」

なけなしの頭をフル稼働して求めた答えを漏らすと、山下さんは満足そうに頷いた。

「なんとなく分かりました。……じゃあ、山下さん達はあの時何をしていたんですか？ 僕からあの怪物のことを忘れさせようとしているように見えましたけど」

「阿部警備保障は表向きは警備会社ということになっているけれど、その実、国に害をなす面妖な脅威を滅ぼすことを生業としているんだ。正直眉唾ものだけど、その前身は陰陽寮で、1300年もの間続けているなんて上層部は言っている。安倍晴明の『あべ』だなんてね。まあそれはともかく、我々はこの高妻の担当として、市民をマクロコスモスの怪物共から守っている」

「五人だけで、それも大した装備も無しにですか？」

この名前が高妻事務所と言うからには、入り口前の机が四台、それと山下さん、たった五人だけであの怪物と戦っているということになる。

正面に座っている紳士を頭の前からつま先まで眺めた。それに、とても戦闘に向いた体つきをしているようには見えない。

「いいや、今は三人だよ。装備は無くても、我々には魔術がある」

魔法、魔術、妖術、呪術。漫画やアニメでしか目にするこのない不思議な力。しかし現実には怪物を見てしまった今では、それらも実在することを信じざるを得ない。あのダイナマイトを使ったものが魔術と呼ばれるものだったのだろうか。

あの青木さんも、栗原さんも、そして山下さんも、選ばれた特別な人達。そう思ったら、目の前の紳士に少し嫉妬を覚えた。私も特別な人間でありたかった。自分の信念を貫けるだけの力が欲しかった。

「——君の夢は？」

考え込んでいたところに話しかけられ、慌てて顔を上げる。山下さんの指差す先、窓際の小さな机の上に視線を移した。

それは、ただの壺だった。一輪挿しの小さな花瓶。側面に、栗原さんのアームガードに描かれていたものと似た、ごちゃごちゃした円の模様が刻まれている。

ごくりと唾を飲み込んだ。体の奥に何か芽吹いたような、高揚に似た感覚がある。この図柄を見たせいだろうか。

「世界が正しい方向に進めるように導くことです」

質問の答えを言い終えてから、恥ずかしさで口をつぐんだ。いつもだったら地に足のついた夢を答えるところだが、今日はどういう訳か本音を話してしまっていた。この風変わりな雰囲気には酔わされただろうか。

失笑されるかと思ったが、俺の返答を聞いた山下さんは不思議と優しい表情をして頷いていた。

永田和真はビル前の歩道まで自転車を押していくと、またがって走り出した。山下、栗原、青木の三人は事務所の窓からそれを見下ろしていた。

「世界を導くつて！ あはは、お前は中学生かつ！」

建物の影に入り姿が見えなくなると、栗原がからかうように笑い声を上げた。

「そつ人の夢を笑うもんじゃあないよ」

栗原には聞こえが悪いかもしれない。感想は心の中に留めておき、山下はいつものようにのんびりした口調で答えた。

「それで、あの夢見る青年は使えそうなの？」

「意思もはっきりしているし、真面目そうないい青年だったよ」

「誰が面接した感想を教えろつて言ったのよ。あたし達のチームに相応しいかって聞いてんの」

栗原が眉間を押さえて苛立たしげに言う。

永田和真は面接が開きになったと思い込んでいたようだったが、それは違う。怪物の存在を認識している人間はとても貴重で、この手の業界では引き手数多である。情報が渡れば市外の事務所はもちろんのこと、おかしな宗教団体まで勧誘に来るだろう。

その前に彼らは見極めなければならない。永田に、怪我で入院したアルバイトに代わって仕事をできるだけの技量があるのかどうか。

「魔術のことかい。人となりの方が大切だと思うんだけどなあ。…

…机の上を見ての通りだよ」

栗原はしばらく辺りを見回したり、窓際の机の上を漁っていたが、やがて手を止め、山下を睨んで口を開いた。

「ハローワールド
練習の壺は？」

「彼を見送っている間に消えてた」

山下の返答を聞き、それまで興味無さそうに黙り込んでいた青木が、目を輝かせ興味深々に部屋の中を歩き回り始めた。山下はニコニコして見守り、栗原は口元を歪めてさらに怒り心頭に発している。

「移送は——、部屋を見る限り違うみたいですね。転移、それとも分解でしょうか？」

「いいや、それは無いな。あれには最低限の魔術しか組み込まれていないから、そんなエネルギーは取り出せない」

「——目星は付いてんの？」

何か喋りたそうにしている青木を遮り、栗原が投げやりに尋ねる。

「数個心当たりはあるけど、情報が少なくてまだ何とも言えないなあ」

やれやれと首を振る山下。永田和真の履歴書に、『要監視』という文字の入ったスタンプが押された。

授業後の大学の正面ゲート前は、帰宅する大勢の生徒で混みあっていた。その中に混じって村田の隣を歩く。溜まってきたレポート

の進捗状況や、そろそろ就活だなあなんてとりとめもない話をして
いたが、村田が思い出したように話を切って尋ねてきた。

「昨日面接だったんだろ。手応えはどうだった？」

「ダメ。俺には過ぎた仕事だったし、面接官を大声で『おっさん』
呼ばわりしたしな」

ビルを出る時には、すっかり面接ということを忘れ去っていた。

お約束の、何時何時までに電話します、なんてやり取りもなかった
し、もう落ちたも同然だろう。何をやっているんだか、と村田に大
笑いされた。

駅に続く岐路に差し掛かると自宅生がいなくなり、だいぶ道がす
いた。先日怪物に襲われた住宅街に繋がっている道もあちらにある。
軽い斜面を、自転車を押して上がっていく。今日はなんとなく遠
回りの道に足を向けていた。道の両脇が林になっており、夏場は自
転車で通り抜けると気持ちいい。

歩道一帯に影がかかった。日がかげったのかと思ったが、すぐに
また晴れた。

「いつも言ってるけど、チャリとか原付買えよ。歩きじゃ生活圏が
狭いだろ」

村田に話しかける。私の脇では自転車が走りたそうに車輪をから
からと回している。

「……いいんだよ、三十まで乗っていなければ魔法使いになれんだ
よ」

魔法使いという言葉で昨日の三人のことを思い出し、少し心が痛

んだ。三十から自身の年齢を引いて、さほど残っていないことに気付いてさらに心が痛んだ。

羽ばたく音が聞こえた。すかさずの骨をした鳥の羽音なんてたかが知れている。だとすれば、あれは鳥ではない何かの翼が空気を捉えた音。

空を見上げる。太陽を覆う巨大な影。

鳥のシルエットをしたそれは、腹部を下にして飛行していた。鱗の生えた脚と鋭い鉤爪。優雅にたなびいて流れる茶色の尾羽。そして猛禽の頭と胸部が位置するはずの上半体は、目を疑うことに人間の姿をしていた。

無感情の口と視点の定まらない青い瞳を真下に向けた、白い肌の女性。金色の長い髪はひどく癖毛になっており、痛んでいるというか荒れている。顔にはシワが刻まれ老けて見える。無防備な胸部には張りの無い乳房が垂れていた。

「どうした？」

村田が怪訝そうに話しかけてきた。彼には見えていないようだ。ということは、あれは以前見たライオンの怪物と同じ神の使いなのだろう。

「いや、なんでもない。よく晴れてると思ってさ」

視線を戻して村田に返事をした。こう度々非日常的な状況にあわされていると、さすがに悟って開き直らざるを得ない。

人間鳥は私の真上で巡回している。猛禽類と同系列に扱っているのか分らないが、私か村田のどちらかを狙っているのは確かだと思う。さらに第六感に言わせるのなら、私に標的が絞られている可能性が限りなく高い。

「ということで、洗濯したいから先に帰るわ」

啞然としている村田を置いて、自転車を急発進させた。素っ頓狂な声を背中に受ける。

彼には悪いが、巻き込まない為にはこうして引き離すくらいしか思いつかない。ペダルを踏み込み加速する。目指すのは、昨日尋ねたばかりの阿部警備保障、高妻事務所。こういった異型から市民を救うのが生業と言っていたし、彼らならきつと何とかしてくれる。

自転車をこぎながら後ろを振り向いた。人間鳥は案の定私を追ってきている。シルエツトが大きくなっており、先程よりも低いところを飛行しているように見えた。

快調に歩道を走っていたが、進む先に歩行者の姿が見えた。対向車がないことを確認して車道に飛び出す。

直後、背後から激しい金属音が聞こえた。

U字の形をした車止めのポールが跳ね回りながら、勢いよく進行方向に向かって転がっていく。林の中に突っ込んでいき、木々の幹を傷つけてようやく止まった。歩行者が驚いて固まっている。

体を動かしているのに涼しさを感じた。あのまま歩道を走っていたら、巻き込まれて大怪我をしていたと思う。

無表情な顔をこちらに向けた人間鳥が私の側方を通り、前へ飛んでいた。

自分のしようとしていたことの無謀さを実感する。所詮、選ばれた人間ではない一般人には、助けを呼ぶことも、逃れることすらも無理なのかもしれない。

ハンドルをクツと捻りギアをトップに入れる。サドルから腰を上げ、ペダルを力いっぱい踏み込んだ。

——だとしても、こんな人に見えない相手に屈するなんて悔し過

ぎるだろう。何が神の使いだ、後で慌てて間引くくらいなら、二週間かけてもつと広い世界を作っておけ。

死ぬ気になって全力で脚を回す。激しい空気抵抗を全身に受けるが、体勢を低くして風を切る。

前にいた人間鳥が空中で反転した。醜く耳障りな鳴き声を上げながら、鉤爪を立ててこちらに向かってくる。

スピードは落とさない。ギリギリ衝突前のタイミングを計り、思い切りハンドルを切ると共に重心を傾けた。茶色い風の塊が過ぎ去っていく。羽が肩を擦り、乾燥した音を立てた。

体を傾けすぎて転びそうになった。寸前で地面を蹴り、ハンドルを戻してなんとか体勢を整える。路上に描かれたタイヤの跡の端に、後輪を覆っていた泥除けが転がっていった。

怪物の攻撃をやり過ごし、爽快な気分で軽快に自転車をこぎ進んでいた。下り道のお陰で、だいぶ体力が回復した。後ろを振り向くが、視界に人間鳥の姿は無い。なんとか諦めてくれたようだ。ほっと息をつき、正面に視線を戻す。

翼が風を切る音。枝葉の擦れる音。林の上から飛び出した影。――怪物は音を立てないようにして、死角から側方に回りこんでいた。サドルに跨った状態からの行動なんて限られている。既に振り下ろされている鉤爪を避けることは叶わない。鋭い黒い爪が八本の弧を描き、視界を隅から覆っていく。趾の隙間から見えた白い顔は、目に生氣を取り戻して醜悪に笑っていた。

光が戻る。爪は標的に届く前に引つ込められていた。人間鳥は仰け反り、顔を歪め醜い声を漏らしている。

自転車を止めた。バランスを崩し、転がり落ちてアスファルトの

上に座り込む。こういう絶妙のタイミングで助かったことは、つい最近もあつた。

「もう大丈夫だ」

いつの間にか横で停まっていた車の中から声がした。白髪交じりの男が運転席から降りて歩いてくる。白い毛糸のセーターと黒のスラックスに身を包んだ落ち着いた佇まい。山下さんだ。

気分を害したらしく眉間にシワを寄せた人間鳥が上空で反転し、もう一度突進してきた。

山下さんが正面に手を突き出す。すると人間鳥は見えない壁にでも当たったかのように不自然に動きを止め、身を翻して飛び立った。茶色の大きな羽が数枚舞い散っていた。

「束縛せよ——」

山下さんが、普段の態度からは想像できない冷淡な声で呟く。すると人間鳥は羽ばたこうと翼を開いた姿勢のまま、彫像にでもなつたみたいに空中で動きを止めた。

いくら生まれつき飛ぶことに特化した姿をしていようと、刻一刻と変わる風にあわせて姿勢をつくらなければ体を浮かせることはできない。揚力を失った怪物は、無様に回転しながら落下し地面に叩きつけられた。

「……やはり私の魔術では仕留めきれないか。栗原君、後は頼んだ」

山下さんの要請に応じて、車の助手席から女が降りる。こちらも眉間にシワを寄せて気難しそうな表情をしていた。もっとも、可愛さは段違いだが。

言葉通りに人間鳥が起き上がった。地面に激突した衝撃で翼が複

雑に折れていて、もう飛ぶことはできないようだった。

「さらりと詠唱インタープリター省略であんな大規模な魔術を使っておいて、頼むなんてよく言えたものね。出番を与えてやる、の間違いじゃないの？」

返事をした栗原さんは既に、導火線に火のついたダイナマイトを握っていた。怪物に向かって腕を突き出し、口を開く。

「我が声を聞け、彼に従いて街を往け。我が聖域から絶滅せよ、執行！」

今回は魔術と呼ばれるその奇跡を目の当たりにできた。

火が入るダイナマイト。握られたままだった紙筒が焼け失せ消滅する。しかし手の中で爆発は起こらず、代わりに人間鳥の前の空間が突然炸裂した。

爆ぜ上げられた血と肉片が降り注ぐ。へこんだアスファルトの上には猛禽の下半分だけが残されていた。

黙々と肉片をトングで挟みゴミ袋に詰め込んでいく二人を、ぼんやりと見守っていた。どれだけの数をこなしてきたのか、だいぶ手馴れている。あつという間に、路上に残っているのは小さな肉片だけになった。

「立てそう？」

トングを箒に持ち替えた山下さんが声をかけてきた。はいと返事をして、今回はなんとか立ち上がった。

「怪物の報告があつて駆けつけてみたら、君が追われていたからびっくりしたよ。ひきつけてくれていたんだよね。お陰で人だかりの中で戦わずに済んだよ、ありがとう」

こそばゆくて視線を逸らすと、山下さん達の乗ってきた白いセダンが目に入った。そういえば彼らが駆けつけてくれたとき、既に車には二人しか乗っていなかった。

「青木さんはどうしたんですか？」

「青木君なら、一般市民がこの惨状を目撃しないように見張つてくれているよ」

認識できるかはともかく、何の事情も知らない人がこんな光景を見てしまったら、一生物のトラウマになりそうだ。とはいえ人間はダメと言われるとしたくなる生き物で、見てはいけない、なんて説得できるとも思えない。おそらく彼も魔術を使っているのだろう。

その後促されて、人間鳥に追われることになった経緯について順を追つて説明した。山下さんは顎を撫でてしばらく考え込んでいたが、やがて答えを見つけたようで口を開いた。

「しかし君も災難だったね。普段認識されていないだけに、怪物も自身に向けられた視線に対して敏感になつているのかもしれないなあ。……今後またこういうことがないとも言切れない。どうだろう、うちで自衛の為の勉強を試みるというのは？」

想像していなかった提案に驚いた。前回と今回の件で自身の無力さを痛感していたので、そうしてもらえらるありがたい。しかし彼らと同じ場所に立つには腑に落ちないものがあつた。

「でも、僕は山下さん達みたいに特別な力を使えませんよ？」

「永田君は何か勘違いをしているみたいだなあ。魔術は奇跡を願う力、強い思いがあれば誰でも使うことができる」

息を呑む。私でも彼らと同じように特別な力を、魔術を使えるという。自身の無力さを恨まずに済み、遠く手の届かなかった場所にも訴えかけられる。この世界を変えることができるかもしれない。諦めかけていた夢に光が差した気がした。

「どうでもいいから、さっさと後片付け手伝ってくんない？」

栗原さんが大きなちりとりを掲げている。遠まわしに歓迎してくれていたのか、単に人手が足りなかっただけなのかは分からないが、背中を押されたのは違いない。

山下さんの手から簾を受け取り、大きく息を吸い込んだ。

「やらせて下さい、よろしくお願いします！」

こうして自衛の為の勉強は、まずは道路の掃除から始まったのだ。
った。

0003：手緩い授業、手痛い指導

先に降りた阿部警備保障の三人に続いて、後部座席から立ち上がった。二階建ての駐車場には、私達の乗ってきた会社所有の白いセダンしか停まっていなかった。だからといって、ここが寂れた店というわけではない。その原因はこの中にいる。

有名古本屋チェーン店の名前がプリントされたガラス扉を通って中に入った。火災報知機のベルがやかましく鳴っている。店内には客だけでなく、売り場に立っているはずの店員の姿も無い。

先頭を歩いていった山下さんが、壁に設置されていた発信機のボタンを冷静に引き戻した。ベルの音がぴたっと止まり、店内が静まり返る。

「うん、先遣がすっかり誤魔化してくれたみたいだね。青木君は外で待機、栗原君は僕と一緒に怪物の駆除をよろしく。永田君は、――僕らと行動しようか」

山下さんの言葉に対して、青木さんが元気よく返事をして店から出て行った。その後姿を見送りながら二人に尋ねる。

「青木さんって戦闘以外の担当が多いですね」

「適材適所だよ、魔術にも特性があるからね。彼は魔法陣のプロフェッショナルだからサポーターが適任なんだ。――おっと、そうだった、まだ布陣のことを教えていなかったっけ」

少しだけ記憶を辿ってから頷いた。ついでに、なんで彼らと一緒にこんな場所に来ているのかも思い出した。

車で通りかかった山下さん達に会ったのは学校帰り。魔術のことを教えてやると言われ後部座席に着いたところ、ここまでつれて来

られて今に至る。怪物の出た現場に向かっているなんて、ちつとも話してくれていなかった。

「魔術を用いる戦闘においては、古くから伝わる布陣が使われることが多い。この布陣では三人で一つのユニットを組むことになるんだけど、内訳は、敵を攻撃するアタッカー。敵の攻撃からアタッカーを守るブロッカー。その二つを補助したり、敵を攪乱するのがサポーター、またの名をインターセプターだ。うちではアタッカーを栗原君が、ブロッカーを僕が、サポーターを青木君が務めている」

ロールプレイングゲームというパーティー。前衛の勇者と格闘家、後衛の魔法使いといった感じだろうか。いや、実際全員魔法使いなのだけれども。

思い返してみれば、怪物と戦っているときはいつも栗原さんが攻撃していたし、人間鳥のときは山下さんが守ってくれた。

「それで栗原さんばかりが攻撃していたんですね」

「栗原愛なんて、かわいい系の芸能人みたいな名前をしておいてコレだからねえ」

山下さんが無神経に笑った。不意を突かれて吹き出しそうになったが、爆発物を常備しているアタッカーの目に留まるわけにはいかない。神妙な顔を作ってなんとか堪えた。

「五月蠅い、気にしているんだから放っておいて。……それと永田君さあ、そっちの方が年齢では先輩だし、名前で呼んでくれていいよ」

ムツとした様子の栗原さんがこちらを振り向いて言う。私としては苗字の方がしっくりくるのだが、仕事の先輩命令に大人しく従う

ことにした。

山下さんが私達を交互に見ながら口を開く。

「いやあ、いいよね、そういう甘酸っぱい感じ。僕も健治君って呼んでくれないかなあ」

「だから五月蠅いつて言っているでしょう、この狸が」

栗原さん改め、愛さんが一蹴。もはや名前ですらなくなっていた。当人が恍惚の表情を浮かべているのは見なかったことにしておく。六回目の顔合わせにして、ようやく彼らの性格や立ち位置が分かってきた気がする。ひょうきんだが頼りになる店長と、魔術のことになると多弁になる正社員、それにぶっきらぼうで照れ屋なアルバイト。人間観察に不自由しなさそうな職場だ。アルバイトの契約をしていないので私は居候みたいな立場にあるが、案外ここの居心地を気に入っていた。

先頭に愛さん、間に私を挟んで後ろに山下さんが立ち、身長よりも高い本棚の間を歩いていった。

大河ドラマのコーナーが用意された歴史小説、背表紙だけでもセンスが見受けられるハードカバー、怪しい言葉の並ぶ啓蒙書。一生のうち、この膨大な蔵書の内の何万分の一を読むことができるのだろう。積み重なった人の軌跡にはただただ頭が下がる。

愛さんが足を止めた。前方の床の上に本が散らばっている。どのページも刃物で切られたように鋭く引き裂かれていた。

ハアハアと規則的に発せられる荒い呼吸音。視線を上げると、本棚の影から熊の尻が突き出ている。一瞬ぎょっとしたが、これが今回の対象なのだろう。落ち着いて相手を確認する。

毛先が固まり、ごわごわしていそうな黒い毛皮で包まれている。

尾は蛇になつており、先端についた頭が閉じた口から舌をチロチロと出していた。シルエットから判断して、てつきり尻だと思つていたのだが、もしかしてあれが上半身なのだろうか。

蛇の頭がこちらを振り向いた。尻がもぞもぞするのを止めて前進（後退）を始める。すると本棚の影から出切つた下半身（上半身）にも犬の首が三つ並んでいた。紛らわしいが、こちらが本当の頭らしい。

三つの頭は肩のあたりでくっついており、ドーベルマン似の長い首が不気味さを際立てている。どういう訳か首の内の一つは目を閉じてがくんと頭を垂れており、残りは耳をぴんと立て、牙をむき出しにして敵意をあらわにしていた。

「我々を包んでいる大気の中には、ハドロンやらクォークやらニュートリノやら、何だかよく分からないけれど世界に重要な影響を及ぼしている素粒子がたくさん存在しているらしい。そして魔術を可能にする粒子もそういったものの中に存在しているとされている。それは姿形こそは見えないものの昔から存在を信じられ、アゾットやら霊光やら大作因やら様々な呼び名で呼ばれてきた。現在を生きる我々は、それを奇跡の粒子と呼んでいる」

山下さんが足を進め、私の横を通つて愛さんと並び立つ。愛さんは既にダイナマイトを手にし、導火線をジッポで炙っていた。

怪物が体勢を低くし、後ろ足にバネを溜めた。口の端から唾液がねつとりと垂れ落ちている。

「脳をとある条件下におくことで奇跡の粒子が共振を始め、深層心理に沈んでいる願望や妄想を具現し奇跡を引き起こす。まあ、奇跡の粒子はあくまで媒体であつて、現実には奇跡を引き起こすにはそれに応じたエネルギーが必要になるんだけどね」

涎が振り切れた。怪物がこちらに向かって猛スピードで駆け出し、地面を蹴って跳び上がる。重さを感じさせず、天井すれすれまで体が浮いている。それぞれの犬の頭が大きく口を開いて前衛の二人を狙う。しかし牙を突き立てる前に、見えない壁にぶつかったように空中で跳ね返された。

「ちなみに僕の魔術はエネルギーの相殺。エネルギーは車のバッテリーから拝借してる」

転んだ怪物がすぐさま体を起こした。体を正面に向け、後ろ足を踏ん張って再び駆け出そうとする。

「……我が声を聞け、彼に従いて街を往け」

店の中に荘厳な声が響く。いつぞや耳にした、愛さんの用いる魔術の口上。

「脳は非常にデリケートだから、ささいな思念や外乱で奇跡の粒子の作用は妨害されてしまう。そこで魔法陣や詠唱によって情報を追加入力し、脳の挙動を補助するんだ。魔法陣は主に魔術の範囲や対象、エネルギー源を。詠唱は主に魔術の程度——つまり濃度や威力を制御する」

「我が聖域から絶滅せよ、——執行！」

怪物が再び地面を蹴る前に詠唱は終わっていた。手中のダイナマイトに火が入り、犬の首の前で炸裂する。両脇の本棚が返り血を浴びて、ねっとり真つ赤に染まった。

頭を失った怪物が、自身の作った水溜りに向かって前屈みに倒れこむ。辺りには血と、鼻につんとくる火薬の臭いが漂っていた。あ

れだけ凄まじい威力だったのに周囲や術者まで被害が及んでいないのは、魔術の範囲や威力を絞った結果なのだろう。

「あたしの魔術は力の転移。必要なエネルギーはそんなに大きくないから、自分の体温を指定しているわ」

愛さんが自身のアームカバーに描かれた魔法陣を指差して言った。私は慌てて目をそらした。

「数サークルだけの簡単な内容なら、こうして小さい魔法陣で済む。……ええと、どうかしたの？」

山下さんも手の甲に刻まれた刺青の魔法陣を見せてきたが、私は慌てて目を閉じた。

「人の魔法陣を見たり詠唱を聞いたりしても、暴発したりしませんよね？」

「急造でなければシリアライズしてあるから、当人以外には使えないから大丈夫」

恐る恐る半目になりながら尋ねると、納得いったようで魔法陣を隠しながら答えてくれた。掃除の間中、神経質だなあと二人に笑われ続けた。

テーブルの上に並んだラーメンとチャーハンに向かって手を合わせた。正面には青木さんと愛さん、横には山下さんが座っている。ここは大衆向けの中華料理店である。現場の片付けが終わって外に出ると、既に空は暗く夕飯の時間帯になっていた。帰りの車の中

で山下さんに奢ってやると言われ、ついつい断りきれずについてきてしまった。

手を合わせたものの、まだ体に血の臭いが残っているような気がして食欲が出ない。同じ光景を見ていたはずなのに、三人は美味しそうにラーメンをすすっており、不思議というか感心させられた。食べるのを諦め箸を置く。

「実際に魔術を間近で見えてみてどうだった？」

そんな私を気にかけてくれたのか、山下さんが話しかけてきた。

「イメージとだいぶ違っていて驚きました。正直に言った方がいいのか分かりませんが、その、もっと派手というか、手の平から火とか水を出すようなものを想像していたので」

私が返事をする、三人が顔を見合わせて苦笑いをした。少し失礼な返答かと思ったが、反応からしてどうやら言われ慣れているらしい。

「地味っていうのも案外重要なんだよ。中には永田君の言っているような魔術を使える人もいるかもしれないけど、あんまり派手だとあつという間にエネルギーを吸い取られて魔術を使うどころではないからね」

山下さん談。確かに、発電所の全電力を消費してシューティングゲームばりのレーザーを一発放つよりも、愛さんみたいに体温の余熱を利用して範囲の絞られた攻撃をした方が断然戦闘に向いている。うだ。

「そういう理由があつたんですね……。使える魔術って人によって

違うみたいですけど、どんな風に決まっているんですか？」

「奇跡の粒子のことは聞きました？ 奇跡の粒子によって引き起こされる奇跡は、どうも深層心理の影響を受けているようなので、魔術は自分でも気付いていない心の奥底に眠っている願望に基づいていると言われています。学者の受け売りですけどね」

青木さんが答えてくれた。魔術のことになると途端に元気になり滑舌がよくなる。

願望を叶えるものと聞き、あまりいい印象を受けなかった。ふと思ったのだが、魔術を見られると願望までばれてしまうのだろうか。私の魔術が、AVの企画物に出てくるような煩惱丸出しのものだったらどうしよう。

三人の顔を見回すと、山下さんが眉毛をVの字にして珍しく真面目な顔をしていた。

「……栗原君の魔術は、自分の思いをもっと素直に伝えたいという心の現われだと僕は思っている」

「夢にとどめるまでもなく、素直に伝えてあげるわよ。さつさと化け物に喰われて死ね、クソ狸」

愛さんは冷笑と共に答えて、ラーメンのスープの油を繋げる作業に戻っていた。山下さんお得意の冗談なのだろうけれど、言われてみると、彼女がそのように思っているような気もしてくる。

私の隣に座っている、考えていることがよく分からない男、山下さんはどんな願望をもっているのだろう。食べ終わるのを待ちがてら、考えを巡らせてみる。確か彼は、エネルギーを相殺する魔術だと言っていた。

「その考え方でいくと、あんたらの代表は組織を瓦解させたい願望

でも持っているんじゃないか。こいつはいい、傑作だ！」

明らかに私達に向けられた男の声。考えを見透かされたような気がしてドキリとした。

背後から馬鹿にしたような笑い声が聞こえてくる。四人が一斉に視線を向けた。

こちらに背を向けて一人でテーブルについていたのは、スーツ姿で細身の男だった。首元まで伸ばされた黒い髪は、癖毛で髪質が太く、鈍く光を映している。

「エアケントニス……」

愛さんが憎しみのこもった声で呟くと、その反応を待っていたかのように男が振り返った。四人の顔を見回してから、私の方を向いて驚いた素振りを見せる。

「おや、見ない顔がいるね。新しく阿部警備に入った人？」

私の顔をまじまじと見つめ、馴れ馴れしく話しかけてきた。顎を上げ下目遣いで見てくるのが人を馬鹿にしているように感じ、あまり関わりたくない男だと思った。

「いえ、ただ夕飯を一緒にしているだけの、しがない大学生です」

「僕はエアケントニスの一員の、菅原樹だ。今後も度々顔を合わせることになると思うけど、よろしく」

話を聞いていないようだ。阿部警備の三人も肩をすくめて呆れているようだ。

「自己紹介がてら、こんな話をしよう。『罪と罰』の主人公である

ラスコーリニコフが、監獄の病院で寝込んでいた時に見た夢だ」

菅原は立ち上がって両手を広げ、人の反応を待たずに話を始めた。

「旋毛虫のような人体にとりつく寄生虫が全世界に猛威を振るった。それに感染すると、かつて人々が一度も抱いたことのないほどの強烈な自信を抱き、自分の信念が絶対に正しいと思いつくようになる。すべての人が不安におののき、互いに相手が理解できず、他人を見て苦しんだ。何を悪とし何を善とするのか意見が一致しなかった。人々はつまらない恨みで殺しあつた。意見がまとまらないので生産活動を行うことすらできず、飢饉が始まった。そして人も物も滅びてしまったのだ」

話は終わったようだったが、正直なところ感想に困る。手洗いうがいも大切だね、と真面目な言葉を返せばいいのだろうか。そもそもどこら辺が自己紹介だったのだろうか。

「果たしてこれは彼の言うように、馬鹿馬鹿しいで済まされる夢なのだろうか。——いいや、理性やしがらみから逃れ、人間の本質、本来の姿に立ち返った素晴らしい世界ではないか」

菅原が愉悦に浸った様子で口の端を歪めた。綺麗に揃った白い歯が覗く。

「汝強大な力をもつ皇子、土星の星の名を冠する者よ——」

その口から発せられたのは、あろうことか魔術の詠唱だった。途端に阿部警備の三人が慌しくなる。

「あの馬鹿、こんな人中で詠唱を……！」

愛さんが悪態をつき、テーブルを跳び越え菅原に殴りかかった。狙っているのは喉笛。声を封じるつもりなのだろう。

「——青木君、インターセプト！」

山下さんはテーブルの上にあった食器を跳ね除けていた。ガシャンと音を立てて、落ちた食器が割れる。

「やってます」

何処からともなくマジックを取り出した青木さんは返事をして、テーブルの上に大きな円を描いた。その中に幾何図形を組み合わせた絵が加えられていく。多分これは魔法陣だ。魔法陣のプロフェッショナルと呼ばれるだけあって、とんでもなく速い。あっという間に円の中の隙間が埋められていく。

横から、食器の割れた音や悲鳴が上がった。慌てて振り向くと、愛さんが無関係の客の席に頭から突っ込んでいた。

菅原が半身の構えを解く。顔をこちらに向け、青木さんの作業に興味深そうに眺めていた。

「示す聖印と天使の御名において召喚する。安息の第七日の主たる支配者よ」

菅原の詠唱が続く。愛さんの急襲が通用しなかった以上、青木さんのインターセプトが生命線である。間に合うだろうか。三人の切羽詰った表情が伝染し、私まで緊張していた。

「——ここに力を」——心が満ちる日が来たらんことを」

二人が詠唱を終える。同時に終えたように聞こえたが、こういう

場合魔術はどうなるのだろう。私は結局、何も行動を起こすことができなかった。

山下さんに、青木さんに、愛さんに視線を移す。三人とも顔に冷や汗を浮かべていたが、特に変わった様子はない。菅原は口の端を歪めて無言で笑っていた。

「間に合ったの？」

沈黙を破ったのは愛さんだった。口元の血を拭ってから口を開く。三人の視線が青木さんに集中する。

「いえ、彼の目的は最初から僕達ではなく――」

「店長を呼んで来い！」

青木さんが言い終える前に、店の入り口付近から男の野太い声が上がった。

「なんだこの盛り合わせは。写真と全然違うだろう。詐欺だ！金を返せ！」

大声を出しているのは客のようだった。椅子を倒して立ち上がり、顔を真っ赤にして声を張り上げている。

メニューの写真は美味しそうに見えるように撮っているもので、現物とは多少違ってても仕方がないと思うのだが、なんで彼はあんなに怒っているのだろう。

青木さんが深刻そうな顔をして、必死に魔法陣を描き直していた。

「てめえ、そのアルバイト！　なんだその目は！」

男は周囲を見渡すと、偶然近くにいたウェイターに近づいていた。気の弱そうな青年である。シフトに入るタイミングが悪かったなあと同情した。

「——いつもいつも食いカスを飛び散らかしやがって、てめえは豚か！ もっと上品に食べ、掃除をする側の立場になって考えてみる馬鹿野郎！」

ウェイターが男に向かってどなり、殴りかかった。掴みかかって倒し、馬乗りになって上から何度も拳を叩きつける。

青年がパニックになりながらも頭を下げている様子を思い浮かべていたので、自分の目を疑った。むしろ私がパニックになってしまい、呆然と菅原の言葉を聞いていた。

「暗い感情は誰しももつものだ。しかし、知性的な生物である人間らしくない、他人に白い目で見られる、相手が可哀そう、なんて世界の価値観と照らし合わせた否定する理由を作り、人は自分を律し押し殺す。それが倫理。それが道徳。——僕の魔術は、それらのしがらみから人々を解放つ。生物らしく、自身を世界の中心に据えて生きることが可能にする」

おばさんが、夫らしき隣のおじさんに殴りかかった。子供が脅えた目を向けている前で、養育費についてヒステリックに喚き散らす。コックに向かって客が次々に皿を投げつける。ウェイター同士が胸倉を掴みあう。叫ぶ。叩く。割れる。絞める。刺す。零れる。折れる。飛び散る。蹴る。潰れる。噛りつく——。

店の中はまるで地獄のようだった。私達以外の全ての人が狂気に取り憑かれていた。

「――心が満ちる日が来たらんことを」

青木さんが描き直した魔法陣で詠唱を終えた。それと同時に、店内に渦巻いていた興奮が一気に収まった。

人々が振りかざしていた拳を下ろす。誰もが顔を青くして絶望の表情を浮かべていた。

「警察を呼ばれでもしたら色々と厄介だ、出よう」

山下さんの言葉に、三人が黙って頷いた。レジに金を置き、罵声や泣き声の聞こえる店を後にする。いつの間にか店内に菅原の姿はなかった。

私達は無言で車に乗り込んだ。静かに車が発進し、ウィンカーを出して道路に合流する。

とても人間のものとは思えない醜い表情が脳裏に焼きついている。車の中でも膝の震えが止まらなかった。

「あの人は、一体何なんですか？」

「あいつらはエアケントニス。怪物の存在を知らながらそれを擁護する、狂った連中だよ」

どうして、マクロコスモスや魔術のことを知っている人間は皆良人であると思い込んでいたのだらう。力は目的ではなく手段。使い次第で正義にも悪にもなってしまう。魔術を教えてもらった暁には、世界の為に正しく使っていきたいと思った。

0004：レッドドラゴン

無数の光の粒子が一点に収束していく。——詠唱完了。杖から放たれた極太のピンク色レーザーが、蜥蜴人間リザードマンを薙ぎ払い、魔導人形ゴレムの腹を穿つ。射線上の敵が一斉に消滅した。

阿部警備で魔術の勉強を始めてから十日ほど経ったある日のこと。午前中で授業が終わったため、私は村田と共に家でぼんやりテレビゲームに興じていた。

画面には敵をなぎ倒しながら進む、私の操作する魔法使いの女の子と、村田の操作するマツチョなレスラーの男が表示されている。強制縦スクロールシューティングというジャンルに属するこのゲームは、ゲームセンターやボーリング場に置かれているようなアーケードから移植されており、通算十回はエンドロールを見ているのだが、それでも十分楽しめる。感動も燃えもポロリもある、なかなかの良作である。

ステージの背景とBGMが変わり、最終面のボスであるドラゴンが画面一杯に表示された。今までのようにごり押しで勝てる相手ではない、気合を入れてコントローラを握る。

弾の撃ち合いが始まったのと同時に、チャイムの電子音が鳴った。なんともタイミングが悪い。しぶしぶコントローラを置いた。

うちのチャイムが鳴らされるのは、宗教か新聞の勧誘が来たときくらいだ。廊下と部屋の間ドアを閉めながら、断り文句を用意する。玄関に向かい、ドアノブを回しながら扉を押した。

「こんにちは。へー、割といいところに住んでるじゃない」

開けた扉の向こうに立っていたのは、宗教勧誘のおばさんでも、

新聞勧誘のおじさんでもなく、阿部警備の愛さんだった。首を伸ばして家の中を眺め回している彼女の顔をぼかんと見つめる。

「……それはともかく、召集。そこに車停めてるから、すぐに来て」

愛さんは親指で後ろを指差しながら言葉を続けている。プライバシーも何もあつたもんじゃないとか、でもお迎えが愛さんならちよつと嬉しいかもとか考えを巡らせていると、背後からカチャリとドアノブの回る音がした。

「おい、お前のキャラ死ぬ——、ぞ？」

村田は部屋の扉を開け、玄関に立つ彼女を見たまま固まっていた。顔を見て立ち尽くすとか、男二人して失礼だと思う。

「分かった、今行く。村田、家を出る時に鍵かけてもらえるか？」
「女か。やはり友より女なのか」

ふてくされている村田に向かって鍵を放り投げて施錠を頼んだ。帰ってきてからも色々と厄介なことになりそうだ。

村田は扉を開けたまま、すぐごとテレビの前に戻っていく。座った彼の隣に空いた座布団があるという、その光景が何故か脳裏に焼きついた。

車は追い越し車線に乗ったまま海岸線を疾走している。私は体を小さくして後部座席に座っていた。車を追い抜き大きな音が鳴る度に、小心者のハートがびくつと反応する。

「今回の怪物って、どんな奴なんですか？」

沈黙を破って尋ねた。行き先は例のごとく怪物退治だが、今日は三人とも緊張した面持ちをしており、いつもと様子が違った。

「我々はいつに、オフィオモルフオスという識別名称を使ってる。まあ、エアケントニスの連中が使っていた呼称をパクっただけだね。その凶悪さは、名を与えられた歴代の化け物——、土蜘蛛や酒呑童子、九尾にも引けを取らないと思う。……見た目は、そうだなあ。もしも暴力が形を成したなら、あいつみたいな姿になるんだろうと思うよ」

山下さんが運転しながら答えてくれた。怪物の名前を口の中で呟き繰り返す。

今までの化け物には書面上の番号くらいしか付けられていなかった。名前が与えられているだけで、その手強さが伝わってくるようだ。というか、妖怪が神の使いだったことがさりと明かされた。

「ポツと現れたのは、一ヶ月ほど前だ。一番最初に交戦したのが僕達だった。手も足も出せなくて、怪我をした前任のアタッカーをつけて撤退したのがせいぜいだった。あれから幾つかの町でうちの社員が戦っていたみたいだけど、未だに手傷を負わせたという話すら聞かないねえ」

自虐気味に話す山下さんを見ていて、ふと助手席の窓ガラスに映った愛さんが唇を噛んでいるのに気付いた。

現在入院しているという、前のアルバイトの話たまに耳にすることがあった。当時ブロッカーだった愛さんが攻撃を受け損ねたところを、身を挺してかばって怪我をしたらしい。会ったことはない

けれど、普段からそういう理念を持っていなければ怪物の攻撃に対して自らを投げ出すことなんて出来ないだろうし、凄い人間だと思う。

「そうだ、今のうちにこれを渡しておくよ」

山下さんがハンドルから片手を離し、名刺ほどの小さな紙の袋を差し出してきた。無言で受け取り、とりあえず開けて中身を確認しようとする。

「——中には魔法陣が描かれたカードが入ってるから」

慌てて袋を閉じた。危ない、何の心構えもなく見てしまうところだった。

「昨日青木君に描いてもらったんだ。本当はもっと色々なことを教えてから渡そうと思っていたけど、オフィオモルフオスと対峙する以上、そんなことも言っていられなくなってしまったからね」

山下さんの顔はいつもより真剣に見えた。こうして危ない場に駆り出され、魔法陣を渡されたのは、戦力として期待されているからだと思っていいいのだろうか。

「エネルギー源は自分の体温で、規模と範囲は詠唱に依存するようになっています。魔術の初心者向けの典型的な魔法陣ですよ」

誇らしげな顔をした青木さんが口を開く。

頼りにされているのではないような気がする。この十数日の間経験したように、この三人の魔術はとも強力だ。どんな怪物だろうが負けるはずがない。カードをポケットの奥に仕舞いこんだ。

魔法陣を描いてもらったお礼を述べていると、山下さんがサイドブレーキを引き、エンジンを切った。目的地に着いたようだ。三人に続いて、後部座席から降りる。例のごとく駐車場には一台だけしか停まっていなかった。

統一感のある工場が立ち並ぶ。目的地や車種に応じて細かく指定されている道路。清潔感のある建物を、切り揃えられた木が囲む。そこは、小奇麗に整備された工業団地だった。

山下さんと青木さんを先頭にして、愛さんと共に歩いていく。小道を通り、工場の脇を抜ける。その先で目に入った光景に、思わず息を呑んだ。

まるで天災がまとめて訪れた後のような悲惨さだった。アスファルトが砕けて土がむき出しになっている。並木は全て根元から折られ、少なくとも視界の内には転がっていない。圧縮と引張に対する強度を併せ持つはずの鉄筋コンクリートの壁が、おそらくは一撃で砕かれ、へし曲げられている。その中央には、長い指の手形が押し付けられていた。

「これはひどい……。従業員をどうやって言い包めればいいのか、今から頭が痛いなあ」

安全標語の書かれた看板を拾いながら、山下さんがため息をついている。

「どうしてこんな辺境を襲ったんでしょう？」
「火のないところに煙は立たぬ」じゃあないけど、アイツはどうも、火のあるところに現れる傾向があるみたいなんだよね。ここも

溶鉱炉があつたせいで狙われたんじゃないかなあ」

周囲を歩き回っていた青木さんが尋ねると、自信は無いけど、と付け加えて答えていた。視線の先、工場の中では巨大な金属製の容器が潰れていた。

地面に伝わる振動。一回、二回。辛うじて立っていた柱が倒れ、瓦礫も落ちた。

地震にしては周期が長い。これは型破りな足音だ。気を引き締めて辺りを見渡す。案の定、建物の影から尖った顔が突き出した。

大きな頭蓋を支える、太く長い首。体長の倍以上ある尾が、緩やかに弧を描いて地面に横たわる。引き締まり均整がとれた、知性を感じさせるシルエット。その怪物は、恐竜のような姿をしていた。規則正しく並び体表を覆いつくしている赤い鱗が、金属的な光沢を放つ。蝙蝠のように蛇腹に折り畳まれた翼には、仄かに赤味がかった膜が張られている。

長い吻をもった頭の後部には、鋭いトゲが対称に突き出している。開かれた口は首近くまで裂けており、びっしりと生え揃った長い牙が覗いていた。澄んだ金色の瞳に、不気味な縦長い瞳孔が浮かんでいる。

肢体から目を離すことができない。大きさも力も今までの怪物とは格が違うのは見て取れ、恐怖に取り付かれても仕方ないと思う。しかしその時私の心には違うものが取り付いていた。その整った体は荒々しくあり、繊細でもある。足の運び方、首のしなり具合、その一挙一動が計算し尽くされたように優雅で、神性を感じざるを得ない。つまり私は、この竜の化け物に魅了されていた。

「ようやく会えたわね、クソ蜥蜴。今日こそ串を刺して丸焼きにし

てあげるわ」

愛さんが不敵に微笑みながら、早速ヒップバッグからダイナマイトを取り出した。山下さんが頷き、大きな声で指示を飛ばす。

「対魔術師の布陣をとる。作戦はカウンター、各個無用心に前に出ないこと」

言葉を受け、皆が移動を始めた。愛さんが先頭、そのすぐ後方に山下さん、そこから少し離れたところに青木さんと私が立つ。

竜は近づいてきた愛さんに狙いを定めたようだった。体をねじって腕を思いきり後方に引く。よじれた鱗が金属みたいな軋む音を立てる。そしてしなつた腕が横から振られ、鉤爪が薙がれた。まるで鉄球クレーン。あれが、鉄筋コンクリートの壁を打ち砕く一撃。

しかし鉤爪は、愛さんの横でピタリと止まった。山下さんが右手を突き出し、冷や汗を浮かべている。エネルギーを相殺する魔術。

一瞬、竜がたじろいだように見えたが、気のせいだろう。愛さんが火の灯ったダイナマイトを掲げた。導火線はほとんど残っていない。竜は再び腕を引いて攻撃の準備をしているが、予備動作が長期間に合わない。

「我が声を聞け、彼に従いて街を往け。我が聖域から絶滅せよ、執行！」

詠唱を終えるのと同時に、爆発の衝撃は愛さんの手の中から竜の顔の前に転移し、炸裂した。

爆発は確かに頭部を直撃していた。竜がバランスを崩し、ゆらりと体を反り返る。地面を揺らして、紅の巨体が仰向けに倒れこんだ。

「よしっ……」

愛さんが小さくガッツポーズを作る。青木さんと共に、彼女の元へ向かおうと足を踏み出す。

「まだだ！」

山下さんの方から慌てた声がした。足を止め、倒れている竜に視線を戻す。

長細い影が走る。地面を這っていた尾が、急に跳ね上がった。弧を描いて鞭のようにうねり、前衛の二人を同時に狙う。

とっさに山下さんが手の平を向けて魔術を使っていた。尾が見えない壁にぶつかったように空中で止まる。

竜が長い首でバランスを取りながら体を起こした。ダイナマイトの衝撃を受けたはずの顔、金属光沢をもつ赤い鱗に傷はない。高所から見下ろす金色の瞳には、呆然として直立する愛さんの姿が映っていた。

側方に回転し翻る、紅の巨体。遠心力で勢いのつけられた尾が振り下ろされる。

山下さんが再び手の平を向け、見えない壁で防いだ。かに見えたが、尾は再び動き出し、壁を振り切って地面を叩いた。直撃は免れたものの、砕けたアスファルトに巻き込まれて愛さんが吹き飛ばされた。

「栗原君！　おい？！」

当惑した山下さんが側に駆け寄って膝をつき、必死に話しかける。しかし愛さんは目を閉じたまま返事をしなかった。

それは、唐突に、淡白に、呆気なく。この十日間の彼女との記憶が走馬灯のように蘇る。容赦なく怪物を倒していく彼女の格好よかつた背中。魔術の勉強をする決心をさせてくれた彼女。照れ臭そうに名前と呼んで欲しいと言った彼女。私も側へ駆け寄ろうとしたが、青木さんに肩を掴まれた。

「大丈夫、呼吸をしています」

足を止め、倒れている愛さんの姿をよくよく見る。確かに胸が上下しており、気を失っているだけのようだ。

「……くそっ、なんて力だ。たった三発でスタックオーバーフロアだつて?!」

山下さんが立ち上がり、竜の方を振り返った。竜は続いて山下さんに狙いを定めたようで、ゆっくりと体を正面に向ける。

スタックオーバーフロアは、エネルギー不足で魔術が停止した状態のことをいう。山下さんの魔術のエネルギー源は車の電源と言っていたから、今頃駐車場のセダンはバッテリーが干上がってしまったのだろう。アタッカーは意識不明、ブロッカーは魔術使用不可。絶体絶命だ。足が震えるのを止められない。

突然、竜がしきりに首を振り始めた。山下さんの姿を見失って、必死に探しているように見える。彼は依然、そのすぐ目の前に立っているのだが。山下さんは好機とばかりに、愛さんを背負いその場から離れた。

「効いているみたいですね。怪物には通用しないと思っていたのですが、あいつの脳の構造は人間に近いのでしょうか」

青木さんが竜の姿に重なるようにしてカードを手を持っている。

どうやら竜が混乱しているのは、彼の魔術の影響らしい。

「人に似た脳の構造、か……。さて、このままだと逃げることもすらままならなさそうだ。年齢に似合わない無茶を試してみようかな。永田君、車の中で渡したカードを」

歩いてきた山下さんの言葉に頷き、ポケットから袋を取り出した。

「僕の予想が正しければ、君の魔術は――」

抜き出したカードに視線を落とす。白地に黒いインクで描かれた円を形作る模様。視覚から情報を追加入力することで魔術の補助をするという、魔法陣。面接で壺を見たときと同じように、気持ちが高ぶる。深層から強制的に引きずり出された思念が、奇跡の粒子と共振を起こす。

視線を戻す。竜の下半身、尾の中央辺りで、光の縁をもった正方形の鏡が宙に浮かんでいた。見えたのは一瞬で、光が頂点に片寄り四散する。

断裂。肉と骨が覗く断面が露になる。尾の先が転がった。それ自体が意思を持っているかのように、身をよじり動き回っている。

竜が憎悪で目元を歪ませ、甲高い声で咆哮する。誰かを狙うわけでもなく、腕を振り被り地面に叩きつける。砕けた土石が、私のところまでも飛び散り飛んできた。体に小さな破片がいくつか当たった。

先程の光の正方形が私の魔術だったのだろうか。あれのせいで更に状況を悪くした気がする。

「点より線、線より面、面より空間で捉えるんだ。青木君、マルチスレ協奏詠唱！」

「分かりました。永田君、僕の詠唱を重ねて補助します。準備はいいですね？」

山下さんの言葉を受けて、青木さんが即答した。

彼は車の中で、このカードに描かれているのは初心者向けの典型的な魔法陣で、規模と範囲は詠唱に依存すると言っていた。竜を倒すなら、あの巨体を覆うくらいの情報量を持たせた詠唱を行わなければならない。

「我は汝を呪い、汝の祈り、喜び、居場所、あらゆる権利を剥奪し、深淵に幽閉する。来る最後の審判まで」

山下さんが左手の平を竜に向け、荘厳な声を出して詠唱を始める。右手の魔法陣は既にエネルギー源が尽きているので使用できない。どうやらそれぞれの手に違う魔術を仕込んでいるようだ。

「たぎる地獄の業火、永遠の炎よ——束縛せよ」

詠唱が完了する。竜がぴたりと動きを止めた。おそらく先日の間鳥に使われた魔術と同じものだが、その完成度は桁違いだった。呼吸や瞬きは続いているものの、体はコンマ数ミリも動いておらず、まるでそこだけ時間が止まっているかのようだ。

「全ての知恵と知識の習得者であり指導者よ、我は崇め、祈り、汝の名を賛美する」

続いて青木さんが詠唱を始めた。彼の声を聞きながら、落ち着いて自分の詠唱を始める。言葉は自然と心の内に浮かんできた。

「星煌く天は我が顔、海は我が胸、大地は我が足……」

「最も恐ろしく最も慈悲深い汝の恩寵で、心が満ちる日が来たらんことを」

青木さんの詠唱が終わった。私は先程魔術を使った時に思念が浮かんでいた場所に意識を傾け、残りの詠唱を続ける。

「風が充たすは我が耳、輝く光を遠矢に射る太陽は我が目なり」

裏を向けていたカードをひっくり返し、魔法陣を目に焼き付けた。

「――我は汝に啓示を与えるものッ！」

詠唱を終えた瞬間、巨大な光の立方体が現れた。六方から竜を包む断崖。縁からは光が放たれ、面には灰色の平原が映っている。どこの景色だろう、なんて思い気が逸れたのが悪かったのか、立方体は急速に縮小し、光の点になって消滅した。

辺りは嘘みたいに静かになっている。夢ではないと伝えるかのように、地面に転がっていた尾が一度だけぴくりと動いた。竜は光の立方体に吞まれて、消えた。

どっと気が抜けた。魔術のせいなのか、疲労感が半端ではない。座り込むのをなんとか踏み堪えた。

「君の魔術はおそらく、消滅。構成粒子の崩壊か、反物質の生成か、あるいは人知を超えた力なのか。原理は分からないけれど、相当に強力な魔術だ」

声のした方を振り返ると、山下さんが愛さんを背負いなおしていた。強力な魔術と言いながら、不安そうな表情を浮かべていたのが印象に残った。

住民の寝静まった、深夜のマンション。一階の通路に、こつり、こつりと靴音が響く。スーツに身を包んだ二人の男達は、ある部屋の扉の前で足を止めた。

小太りな男が、もう一人にアイコンタクトを送ってから屈みこんだ。メスのような形をした小さい道具を取り出し鍵穴に差し込む。

「Sarritap、Pernisox、Ottarim」

魔導書に描かれた魔法陣を見つめ、魔術の言葉を呟いた。男の目に映っていた景色がフィールドアウトし、流れている無数の電子の像に代わる。それを巨視的に眺め、濃度から材質を分類、形状を判断する。十一のシリンダーに、それを覆う内筒、頭の中にCGみたいに鍵の立体像を浮かべた。構造解析、完了。

「時間がかかるようなら扉ごと壊すが？」

しびれを切らした菅原が、スーツの内ポケットに手を入れながら言う。

「お前の気の短さはよく知っているが、出来ればそれは勘弁してくれ。すぐに終わる」

シリンダーの配置さえ分かれば、鍵を開けることなど、番号の書かれたジグソーパズルを並べる程に容易い。鍵穴に掛けていたL字形の道具を引くと、扉からカチリと音が鳴った。

「では、おつれするでしょうか。我々の救世主を……」

ゆっくりとドアノブを回し、音がしないように部屋に足を踏み入れる。扉の横には、『永田』という表札がつけられていた。

0005：交えぬ正義

意識が覚醒していく。時計のアラームに強制されない、気持ちのいい目覚めだ。いつもよりも硬めのベッドだったのが良かったのだろうか。

意識が覚醒していく。なんで俺は硬いベッドに横になっているのか。若干の不安を覚えつつも目を開けた。

てかてか光沢を放つ灰色のPタイルが敷き詰められた床。重い質感を持つ、ペンキ塗りの白い壁。同じく白い天井には縦型の蛍光灯。目の前に広がる景色は、明らかに自分の部屋と異なっていた。

慌てて上体を起こし、勢いよく頭をぶつけた。理解に苦しみながら声を殺して呻く。額をぶつけたのは、二段ベッドの底板だった。

たんこぶになっっていないか手で擦って確かめながら、部屋の中にある小物に目を移した。流し台とガスコンロが並んだ簡素なキッチン付近には、ポットとコーヒーマーカー。中央に置かれたテーブルには複数の雑誌が無造作に置かれており、両脇にソファアが設置されている。人が住み込むには足りないものが多い。どこかの施設の休憩室だろうか。

続いて自分の体に向けた。黒いカジュアルシャツとジーンズ。昨晩はオフィオモルフォスの騒動で疲れており、上着だけ脱いでそのまま寝てしまった。その時のままの格好だ。ポケットの中を探すと、幸い携帯電話と財布が入っていた。

「おはよう、遅いお目覚めだな」

ベッドの上から男の声が聞こえた。スーツ姿の男がベッドにかけられていた梯子を降りてくる。黒い長髪と憎たらしい笑い方に見覚えがあった。

中華料理店での一件を思い出し、慌てて飛び起きた。再び頭をぶ

つけて呟いた。

「す、菅原樹！　なんでお前がここにいるんだ？！」

「なかなか面白い質問だな。『お前が』を『俺は』に置き換えて聞き直してみるといいんじゃないか」

「……ここはどこだ？」

確かに彼の言うとおりである。言われた通りにするのが癪だったので、ニュアンスはそのままに言葉を変えてみた。

「それは僕達の代表が教えてくれる。呼んでくるから、しばらくここで待ってる」

菅原はその心境を汲み取ったのか、ニヤニヤ笑いながら部屋を出て行った。余計に気に障った。

部屋は静まり返っている。あの男がいたということは、ここはエアセントニスに関係した建物なのだろうか。

今のうちに少しでも情報を集めておいた方が良さそうだ。改めて室内を見回してみる。ベッドから降りて歩いていき、換気用の窓を覗いてみた。この建物はビルのように、家の屋根が並んでいるのを見下ろしている。仮に窓枠をくぐれたところで逃げ出せそうにない。

携帯電話を開く。ディスプレイに表示された時刻は、十時過ぎたところだった。アンテナ二本だが、電波が届いている。警察にかけるか迷い、結局アドレス帳から阿部警備の事務所を探して電話をかけた。無常にもコール音が続く。いつもならこの時間は勤務時間のはずだが、愛さんのお見舞いに行っているのかもしれない。六回目のコール音。

ドアのノックされる音が聞こえた。素早く携帯電話を閉じ、ポケットに仕舞った。

「おはよう。一応、洋風の朝食を用意してきたが、和食の方が良かったかな？」

スーツに身を包んだ男が尋ねながら部屋に入ってきた。肩幅が広く、がっちりした体格をしている。身長は二メートル近くありそれで、扉をくぐる際に腰を折っていた。菅原ともう一人の男がすぐ後ろに立って控えていることから、彼の言っていた代表がこの男だということが分かった。

「どっちもいらない。あんたが代表か？　ここはどこだ？」

握手しただけでも指が折られそうだなあ、なんて内心びくびくしながらも、強気に会話を始めた。

「確かに、私がエアセントニス代表の赤元だ。……先に謝っておく。手荒な真似をして、すまなかった。こうでもしないと阿部警備の隙をつくことができなかった」

赤元は自己紹介を終えると、ただちに頭を下げてきた。それでも頭の位置が俺よりも上にあるあたり、二メートルを超えているかもしれない。

「君がここにいる理由だが、昨晚に拉致させてもらったからだ。ここは我々の所有する建物で、ベースと呼んでいる。高妻市外だが、さほど離れていない」

簡単に現在地が明かされたこともそうだが、何より、屈強そうな男に下手に出られたことに驚いた。とりあえず取って食われることは無さそうなので、警戒心が少し薄れた。

「阿部警備で我々の話は聞いたかな？」

赤元の質問に応じて記憶を辿ってみる。エアケントニスの名前が出てくること自体が稀だった気がするが、怪物の存在を知りながらそれを擁護する狂った連中、と菅原に会った後で山下さんが言っていたのを思い出す。

「いや、狂った奴らってことくらい」

そつけなく答えた。敵意をむき出しにした反応があると思っていたが意外にも、菅原は吹き出していたし、あとの二人は悲しそうな顔をしていた。

「彼らとは目指すものが違うからな、そのような評価を受けても仕方がない。寂しいことではあるが……。エアケントニスは魔術師シモンを始祖、ウアレンティノスを教師とする、グノーシス主義の分派だ」

グノーシスといえば、古代キリスト教の異端思想である。西方だけに止まらず、こちらの東方でも広がっていて、例えばマニ教はグノーシスの流れを汲むと言われている。

「誤解されたままというのも、お互いに宜しくないだろう。教義をお教えしようと思うのだが、よろしいかな？」

「ああ、はい、どうぞ」

伝わってくる熱意に負け、頷かざるを得なかった。同じ組織でも、赤元は人の話を聞かない菅原とは大違いである。自身の思想に敬意を抱いているようだし、菅原を通して想像していた宗教団体の雰囲気

気とはだいぶかけ離れていた。

「全ての原初にはアイオーンと呼ばれる、見ることも知ることも適わない者しか存在していなかった。男性格であるプロパトールと女性格であるエンノイアを先頭に、三十のアイオーン達がプレーローマと呼ばれる空間に暮らしていた」

見ることも知ることも適わないのに、なんで存在を知っているのかなんて質問をするだけ野暮だろう。大人しく相槌を打って話を聞く。

「プロパトールは長男であるヌースにしか認識できないので、父の言葉はヌースの口を通すことで子供達に伝えられていた。しかしある日、一番末っ子の神格であるソフィアが父の愛を欲してしまった。姿を見たいという探求に焦がれ苦悩し、プレーローマ中を脅かしかねなかった。結局彼女は諭され、その時抱いていた『思い』を外界に放出することになる」

決して開けてはいけないと言われていながらも開けてしまい、世界に厄災を振り撒いたパンドラの箱の話に似ていると思う。もっとも、ソフィアの場合は未遂であるが。

「放出された『思い』はアカモートと呼ばれる存在、そして物質と心魂と霊を生んだ。彼は物質と心魂から世界を。いつか完全な存在になってほしいと望み、種として霊を加えて人間を作った。種が熟した時、人々は心魂を脱ぎ捨て叡智的な霊となり、プレーローマに帰還して真の安定をもたらす。……と、ここまでがエアケントニスに伝わる世界創生の史話だ。君達が神の使いと呼んでいるあの荘厳な姿の者達は、プレーローマからの使者である天使であると我々は考えている。地上に存在している本来の目的を忘れ、欲望に耽って

いる人間達に戒告を与えるために彼らは降臨したのだ。我々は天使達の活動を支え、人々に目的を思い出させてプレーローマに導くことを目指して活動を行っている」

話は終わったようだ。赤元は口を閉じて、私の反応を待っていた。

怪物の認識自体は、山下さんの言っていた『神の使い』の説に近いと思う。ただし、阿部警備はそれらを排除して対抗しようとしているのに対して、エアセントニスの人々は同調して助けることを目的にしている。下地にあるものが違うだけで、ここまで目的に差ができてしまうのか。

「どういう集団なのかは分かった。人の思想にどうこう言うつもりはないから、素直に聞いておく。でも、俺が連れてこられた理由が分からないんだけど……」

「その謙虚さに応じて、単刀直入に話そう。——君の魔術が必要だ」

赤元の言葉を聞き、自然と口が半開きになった。当然だろう、自分でもよく分かっていない魔術を必要としているなんて、訳の分からないことを言っているのだから。

「オフィオモルフオスとの戦闘を拝見させてもらった。阿部警備の代表は『消滅』だと言っていたが、我々の意見は違う。君の魔術は『回帰』だ。世界に対して使えば、心魂と物質を分離させ還元する人に対して使えば、ソフィアの抱いた『思い』まで立ち返らせ、目的を見失った者達ですらもプレーローマに送り救済することができる」

赤元は真剣な眼差しをしており、冗談で言っている様子でもない。そんなのはあくまで想像であって、証拠が無ければ信じることは

できない。口まで出かかったが、それは山下さんの説でも同様だと気付いた。返事に窮する。

「——だから言っただろう、狂った連中だと」

廊下の壁の向こうから男の声がした。聞きなれた声だが、こんな場所で聞こえるはずがないと不思議に思う。

赤元が目をぎらつかせて部屋を出ていく。私も彼に続いて扉をくぐった。

廊下では、先に部屋を出た菅原と小太りな男が対峙していた。彼らの体を向けている先に視線を向ける。一方はセーターにチノパン姿、白髪交じりの、人の良さそうなおじさん。もう一方は阿部警備のロゴが入った灰色の作業着を着た女の子。見間違えようがなく、山下さんと愛さんだった。

「阿部警備……。どうしてここが分かった？」

赤元と話している間に一言も発していなかった小太りな男が口を開いた。

「なに、こんなこともあるのかと、彼には小型の発信機を渡しておいたんだ」

さらりと山下さんが爆弾発言を漏らした。そんな恐ろしいものを受け取った記憶はない。給与すらもらったことがないのに。……いや、ひょっとして、あの魔法陣の描かれたカードの中に仕込まれていたのだろうか。さすが山下さん。結果的には助かったが、抜け目ない。

「菅原、永田君を連れて行け。発信機とやらを捨てるのを忘れないようにな」

赤元が胸ポケットから小さな手帳を取り出しながら言った。年季の入った黒い皮で装丁されており、めくれたページから魔法陣が覗いていた。阿部警備の人達は手の甲やカードに魔法陣を描いているが、こういった魔導書がエアケントニスの魔術スタイルなのだろうか。

「はいはい。ドンパチやるんでしょう、二人だけでいいんですか？」

菅原が赤元に向かって話しかけながら、やる気無さそうにこちらに向かってくる。

「相手はたかだか、ブロッカーとブロッカー崩れた。本当のアタッカーがこういうものを教えてやる」

菅原に腕を捕まれた。振り払おうとしたが、彼のもう一方の手の中にあるものを見て動けなくなった。黒光りする重厚な金属製のスライド。菅原の右手には自動拳銃が握られている。

「そうだ、大人しくしていた方がいい。客人だろうが、手足を撃ち抜くくらいは躊躇なくするからな」

菅原は口の端を歪めて、綺麗に揃った白い歯を覗かせていた。

「永田君、すぐに後を追うから心配しないでね」

阿部警備の二人がいらない方へ引つ張られていく私に対して、山下さんが優しい声をかけてくれた。

「こうして君達と戦うのも久しぶりだね。もつとも、あの頃とはお互い面子も違っけれど」

永田の姿が見えなくなると、山下は目つきを鋭くして赤元に話しかけた。

「前任のブロッカーとサポーターは、一足先にプレーローマに帰っていった。我々の目的が達せられれば、また顔を合わせることもできるさ」

赤元の真剣な顔から、言葉の内容を本当に信じていることは一目で分かる。栗原がやれやれと首を振った。

「体は大丈夫かい。待機していても良かったんだよ？」

「絶対調よ。あの化け物に向けていた憎しみをどうしてやるうか考えていた真っ最中だから、連戦は歓迎するわ」

心配する山下の言葉に対して、栗原は相手から目を逸らさずに答えた。

「おお偉大なる神よ、大鍵の力ある言葉を振るい霊達を従える権限を我に」

赤元が魔導書を顔の前で開きながら、詠唱を始める。

「アドネイ、エロヒム、アリエル、エホヴァ、タグラ、メーソン」

天井に並んでいる蛍光灯が点滅し始めた。さらに辺りからカタカタと小さな音が聞こえてくる。揺れているのは、彼の胸につけられたタイピン。

「——かくあれかし」

空気の裂ける音に続き、大きな炸裂音。阿部警備の二人のはるか後方の壁が爆発した。

「何、アレ——？」

栗原がゆつくりと後ろを振り向き、信じられないといった表情を浮かべた。何かが通り過ぎていった感覚はあったが、速すぎて、彼女にはそれが何であるか確認することが出来なかった。壁は砕け落ち、外の光が覗いている。

「コイルガンだ。あの男、赤元の魔術は磁場を生成すること。トーラス状の磁場を発射方向と垂直に何重にも生み出し、強磁性体の弾丸——先程の場合ならネクタイピンを引き込んで加速させ、射出する」

「訂正してもらおう。磁場ではなく、プレーローマによる引力だ」

赤元の反論を無視して、山下が栗原の耳元に口を寄せる。栗原はあからさまに嫌そうな顔をした。

「顔が近い。それと加齢臭」

「少し我慢してくれ。——こう狭いと、射線をもったあちらの攻撃に分がある。往なしながら広い部屋を探そう」

栗原が頷いて、彼らから一番近い位置にあった扉に駆け寄ろうとした。

「かくあれかし」

廊下に置きっぱなしにされていた朝食のトレイから、スプーンが射出される。皿状の部分を栗原に向け、風を切って飛ぶ。

詠唱が省略されている分、先程よりもスピードは遅い。山下がエネルギーを相殺しながら、スプーンを掴んで止めた。

「さすがに、そう思惑通りにはいかせてくれないかあ……」

山下が呟きながら、スプーンを後方に放り投げる。

「エネルギーの相殺か。その奇術で、私の魔術を受けきれるかな」

赤元が後方にちらりと視線を送る。小太りの男、山崎が頷き、ポケットから取り出した瓶を空けて粉を振りまいた。粉は重力を無視して空中に漂い、魔導書を見つめている赤元の前に集まっていく。

「あれは砂鉄か——。まずい、インヘリタンス奏鳴詠唱?!」

山下が叫ぶ。その視線の先では、円と多角形が組み合わさった模様が宙に描かれていた。

空中に弱い磁場を生み出し、砂鉄によって情報量の多い魔法陣を描く。手持ちに小さな魔法陣しかなくても強力な魔術を扱える技法、つまりは魔術の重ねかけ、インヘリタンス奏鳴詠唱。

「我は汝とその眷属を雷鳴の杖で打つ。深淵の底に落とすまで!」

阿部警備の二人の両脇の壁にヒビが入った。建物を歪めながら廊下の中央まで迫り出し、決して触れるはずのない二つの壁が互いに押し潰しあう。

壁が動きを止めた。そこには天井も床も残っていない。もはや廊下は形が変わっていた。

赤元と山崎の位置から、阿部警備の二人の姿を捉えることはできない。やがて赤元が呟いた。

「殺してしまったか。プレーローマに送ってやれず、申し訳ないことをしてしまった……」

「いえ、生体反応を二つ確認、共に生存しています。男は右腕に軽い怪我をしたようです。……女の一次視覚野の活性を確認、魔術の使用。五メートル前方です」

合わさった壁をじっと見つめていた山崎が口を開いた。

「おお偉大なる神よ、大鍵の力ある言葉を振るい霊達を従える権限を我に」

赤元が詠唱を行いながら腰を屈め、廊下に置かれたトレイからフオークをつまみ出した。

天井付近にできた瓦礫の隙間から、栗原が飛び出した。着地と同時に、何も無い空中を狙ってアッパーを放つ。拳打の衝撃を魔術によって転移させる、彼女の得意技である。

「アドネイ、エロヒム、アリエル、エホヴァ、タグラ、メーソン」

しかし赤元は詠唱しながら身を翻し、転移した衝撃をあっけなく避けた。拳を振り切っていた栗原が悔しそくに奥歯を噛む。

「かくあれかし」

フォークが赤元の手の中から消える。次の瞬間には、同じく瓦礫の間から飛び出した山下の目の前で静止していた。

いや、今度は止まりきっていなかった。見えない壁が薄くなっていくように、だんだんと距離が狭まっていく。やがて間隔はゼロになり、マイナスになり、山下の右肩にフォークが食い込んだ。エネルギー源の枯渇、スタックオーバーフロー。フォークが完全に止まったときには、櫛状の部分が見えなくなるまで突き刺さっていた。肩を押さえて後ずさる山下に、栗原が心配そうに声をかける。

「大丈夫？」

「ああ、指も動くし問題ない。それにしても、こちらの動きが読まれているみたいだね。未来予知——ではないか、情報が荒すぎる。心を読んでいるのか？」

山下は後衛の男に視線を向けていた。

「相変わらずの洞察力だな。地方に留まらせておくのが惜しい。……お前も永田君と一緒にエアセントニスに来ないか？」

赤元が腕を広げて、歓迎するというジェスチャーをしながら言った。

「無理無理。僕はクリスマスでも正月でもお祝いをしている、典型的な無宗派の日本人だから」

「それは残念だ。……我々のブロッカーである山崎は、電子の動きを捉える魔術をもっている。脳の活性している部分を脳地図に当てはめれば、お前の読みどおり、ある程度考えていることを知ること

ができる」

赤元の紹介を受けて、山崎が軽く頭を下げた。

「さて、もう一つ教えておこうか。ブロッカーのスタックオーバーフロアがもたらすのは、ユニットの全滅だ」

話しながら赤元は、朝食の載ったトレイに手を伸ばしていた。つまみ出されたバターナイフを見て、山下が苦笑いを浮かべる。

「——なんて顔してるのよ。マジックシフト！」

突然、栗原が大声を上げて走り出した。山下も間をおいて加わり、赤元目掛けて阿部警備の二人が廊下を疾走する。

「我は汝を呪い、汝の祈り、喜び、居場所、あらゆる権利を剥奪し、深淵に幽閉する。来る最後の審判まで。たぎる地獄の業火、永遠の炎よ」

山下が行っているのは、左手の魔術の詠唱。対象の脳内でエネルギーを相殺し、シナプス間での情報の伝達を止めて一切の動きを封じる大魔術。しかし山下が赤元の魔術を知っていたように、赤元もまた山下の魔術をよく理解している。

「一次視覚野の活性——、魔術の使用。あの男の前方、半径二メートル程の範囲です！」

山崎が心を読み、使用しようとしている魔術の範囲を教える。赤元は伝えられた場所から冷静に歩いて離れ、山下の顔にバターナイ

フを向けた。

「女の一次視覚野にも活性を確認。四メートル前方！」

再び発せられた山崎の言葉を受け、赤元はさらに足を進める。見れば、栗原が走りながら拳を構えていた。

「無駄だ、お前らの魔術は通用しない」

両名の魔術の範囲外に移動し、赤元が栗原に向けて腕を伸ばした。延長に生じる磁場の渦。

「——かくあれかし！」

磁化したバターナイフが指の間から射出される。幾重にも重なられた磁場の円環に引きずり込まれ、栗原の顔を目掛けて急激に加速していく。

しかしバターナイフは不自然に空中で静止した。弾ける音が聞こえ、赤元が振り向く。どういう訳か、先程まで彼の立っていた床が抉れていた。

「なにっ?!」

されるはずのなかったブロック。既にスタックオーバーフローしていることから、魔術の特性から判断しても山下ではない。理解できない。赤元が初めて動揺を見せた。

バターナイフが真下に落ちて金属音を立てる。

栗原が引いていた拳を開放し、宙にボディーブローを放つ。赤元の後ろに立っていた山崎が腹を押さえて倒れこんだ。

「ブロッカー崩れで悪かったね。火力不足は自覚しているわよ」

栗原は構えを解きながら、倒れた男を見下ろしている。

「――束縛せよ」

山下の詠唱が完了した。赤元が悔しげな表情を浮かべたまま固まった。

華麗に決まったのは、マジックシフト。一時的にアタッカーがブロッカーとして行動して敵を攪乱する、彼らならではの作戦である。

「君達の使う魔術は、確かにどれも強力なものばかりだった。だが個々の欠点を補うのが、作戦だ。経験がそのまま差に出たようだね」

山下は息をついてから、左手だけで不自由そうに携帯電話をかけ始めた。

0006：とあるエピソード

菅原に付き添われ、ビルの階段を降りていく。ペースを落とすと、すぐさま武骨な金属の筒で背中を小突かれる。方向は逆なのに、まるで処刑台にでも向かっているような心境だ。

突き当たりの壁に書かれた数字は5から減っていき、とうとう1になった。下階は無く、タイムオーバー。山下さん達の手を借りないで、なんとかして自身で解決できないだろうかと考えていたが、何も方法は思いつかなかった。特別な力があれば世界を変えられると思っていたが、魔術を手にしても結局自分の問題ですら対処できないでいる。

軋み、へし曲がつていく、不安を煽る音が轟いた。廊下の壁一面に並んだ窓枠全てが震えている。階段を降りてくる途中に爆音や破壊音を聞いていなければ、地震が起きているのではないかと思いつ込んでいたと思う。それにしても、今回の音は特別大きかった。

「代表が暴れているみたいだな。——ほれ、発信機とやらを出せ」

菅原が喋りながら、私の背中を小突いてきた。足を止めて振り返ると、銃口を胸に向けられていた。とりあえず、何も入っていない胸ポケットに手を入れ、考える時間を稼いだ。

彼は発信機がどこについているのか知らない。ここはとぼけて携帯か何かを差し出した方がいいのだろうか。ポケットに手を入れると、指先に財布の人工皮の触感があつた。

赤いライオンや人間鳥と遭遇したときの、やり切れない思いが蘇る。魔術を手にした私は、奴らに一方的になぶられていたあの頃とは違う。それなのに、まだ助けてもらうことを前提に行動しているなんて悔し過ぎるではないか。『相当に強力な魔術』。山下さんの

評価を思い出し、少しだけ自信がわいた。ポケットから抜いた財布を開いて、カードを取り出した。

「それか？ よし、こっちに――」

菅原がこちらに手を伸ばしてきた。もう一方の手に握られた銃は、しっかりと引き金に指がかかっている。

手渡す瞬間、カードをひっくり返して表に向けた。小さな魔法陣が目には焼きつく。

消滅だか回帰だか知らないが、光の縁をもった小さな鏡が、銃のスライドと垂直に交わって現れた。鏡は一瞬で霧散し、切り離された銃身が落ちた。

菅原が憎しみのこもった声で汚い言葉を漏らす。もう引き返すことはできない。俺はもう一度鏡を生み出そうと、魔法陣に視線を戻した。

視界の上端を黒い影が走った。天井すれすれまで飛び上がったのは、スライドの短くなった銃。今まで自分のことを脅かしていた凶器に目を奪われた。

次の瞬間、今度は横から影が襲い掛かってきた。力の抜けていた脇腹に、革靴のつま先が食い込む。銃を咄にして菅原が放ったのは、腰のねじりを開放して打ち出した回し蹴り。

「かはっ?!」

蹴られた場所を押さえて屈みこんだ。絶えず込み上げてくる酸っぱい液体を口から垂れ流す。あまりの痛みに呼吸を忘れ、何度もむせた。せめて腹に何も入れていなくてよかった。

「君は僕が手を出さないとも思っているようだけれど、それは違

う。プレーローマ？ 完全な存在？ そんなのどうでもいいんだよ。奴らには過程が一致しているから、付き合っただけさ」

顔を上げると、菅原が魔導書を開いて不敵に笑っている姿が見えた。

「人が滅び行くのは、知恵や知識のせいではない。押し付けがましく積み重ねられてきた理念や道德のせいだ。だから僕が、人間共を自然のルールに落とし込んでやる。この魔術を使ってな！ —— 汝強大な力をもつ皇子、土星の星の名を冠する者よ」

詠唱が始まった。あの自己陶醉した大声は、中華料理店の一件を思い出させる。魔術の詠唱が完了したら、店にいた人達のように私も狂ってしまうのだろうか。

このまま黙って、宣告を聞き続けるつもりはない。長たらく喋ってくれていたお陰で、だいぶ脇腹の痛みは引いていた。足に力を込め、腰を浮かす。

「——心が満ちる日が来たらんことを」

私が行動を起こそうとする前に、菅原が詠唱が完了する前に、廊下の先から男の声が聞こえてきた。それと同時に菅原の声が止まる。見れば、彼は手の甲で執拗に目を擦っている。

「ちっ、クレヨンで塗りつぶしたみたいに視界が埋まっていやがる。……視覚情報の改変、それがお前の魔術か、阿部警備のサポーター！」

菅原が勢いよく振り返った先にいたのは、青木さんだった。

「はい。傍受と改変です」

足を進めながら、いつものおっとりした様子で答え、こちらに向かつてきた。阿部警備の制服である、灰色の作業着姿をしている。手の甲に魔法陣の描かれた白い手袋をはめているが、武器は何も持っていないかった。

「応戦したのを見ていましたよ。僕らのことを信じて待っていてほしかったですが、個人的な意見だと、ナイスガッツだったと思います」

横を通り過ぎる際に、青木さんが声をかけてくれた。気持ちが悪くなった気がした。

菅原が両拳を胸の前に上げ右足を引き、半身に構える。青木さんも歩きながら拳を構え、間合いに入るや否や攻撃に移った。

私は今この時まで、サポーター同士が対峙したら地味な戦いになるだろうな、と思っていた。ちまちまと相手の精神を削り合う戦いになると。しかし、よくよく考えてみればすぐに分かることだ。魔術での決まり手に欠ける以上、彼らの戦いが一番汗臭く、血生臭い。

青木さんの放った上段突きを、菅原は重心をそのままに上体をずらして避ける。続く連打も体を反らして避け、その反動を利用して前蹴りから順突きに繋げた素早い連撃で反撃を行った。

上腕で蹴りを受けるが、拳を防ぎきれず顎に受ける青木さん。足元がよろついたものの、すぐに構えなおした。

視覚が狭まっているらしいのに、菅原は全く後れを取っていない。それどころか青木さんの方が不利に見えた。

「いや、驚きました。視界の八割は見えなくなっているはずなんです……」

「これだけ欠如していたら、近接戦においては無いものと同義だ」

菅原は喋りながら、拳を返し手を開いて、来いというジェスチャーをしていた。青木さんが応じて、再び間合いを詰めて上段に拳打を放つ。

「しかし、この身に染み付いた拳法の技術と経験があれば、音と風圧の情報だけでも十分に反応できる」

菅原は言葉を続ける。青木さんの拳を順手で払い、腕のしなりを利用してそのまま突き出した。拳が頬を擦る。

青木さんが苦々しい顔をして、上段の守りを固めた。

「——小賢しい魔術師め、くたばれ」

とどめの台詞を吐きながら、菅原が腰の捻りを開放する。ガードを潜り抜け、鳩尾を狙った正拳突き。

青木さんの敗北を覚悟し、思わず強く目を閉じてしまった。しかし覚悟していた打撃音は聞こえてこない。恐る恐る目を開くと、菅原の拳は的外れな方向に突き出されていた。

さすがに経験にないことを直感で行動することはできず、菅原が動きを止める。すかさず放たれた青木さんの蹴りが、菅原の腹部に食い込んだ。

「ぐっ?! お前——!」

「お言葉に甘えて小賢しく、視覚と聴覚を左右反対にしてみました。言い直しましょうか、僕の魔術は知覚情報の傍受と改変です」

腹を押さえて奥歯を噛み締めている菅原に対して、青木さんが平然と答えた。

話の流れから、てつきり改変できるのは視覚だけだと思っていた。菅原も同様だったようで、目を血走らせて憎しみを露わにしている。すべての感覚を奪われても戦うことのできる格闘家は、——いや、生物なんているはずがない。青木さんの魔術は、近接戦での劣勢を補って、お釣りの出るほど菅原を上回っている。

「応用すれば、こんな風に幻覚を生み出すこともできますよ。——全ての知恵と知識の習得者であり指導者よ、我は崇め、祈り、汝の名を賛美する」

間髪いれずに青木さんが詠唱を始めた。青木さんの詠唱の方が菅原よりも早いことは、中華料理店の件で実証済みである。これなら戦況を覆せる。ほっとして息を吐いた。

「最も恐ろしく最も慈悲深い汝の恩寵で心が満ちる日が来たらんことを」——ここに力を」

青木さんが詠唱を終えた。しかし同時に菅原も余裕の表情で唇の端を歪めて、短い詠唱を行っていた。

「これは……？」

先にたじろいだのは青木さんだった。額に冷や汗を浮かべ、手袋に描かれた魔法陣を凝視している。

知覚情報を乱されているはずの菅原が、的確に青木さんの方を振り向いた。

「脳の前頭前皮質の活動を低下させ、人間をしがらみから解き放つ『道徳からの開放』は、僕の魔術の一面でしかない。本来の役目はインターセプター。深層意識とのアクセスを妨げる『魔術の封印』だ」

菅原の魔術を使われると、魔法陣を見たり詠唱を行っても、心の奥底に沈む思念や願望を引きずり出すことができなくなってしまう。したがって奇跡の粒子との共振は起こらず、魔術を使うことはできない。絶対的と思われていた優位が覆され、振り出しに戻されてしまった。

今度は菅原から間合いを詰めて攻撃を始めた。連打からの下段蹴り、上段と中段を混ぜた突き。バランスよく攻撃を振り、手堅く攻めている。

これがあの男の戦い方なのだろう。魔術が使えないなら、結局接近戦が結果に直結する。頼りになるのは、彼の言っていた純粋な技術と経験。つまり青木さんはこの戦闘で菅原に勝つことはできない。指先を擦ってカードが手の中にあることを確かめ、ゆっくりと立ち上がった。

ただしそれは、一対一の戦闘での話。私の動き方によっては勝算が見えてくるはずだ。

あの間に割って入っていったところで、喧嘩も格闘技も経験したことのない私には足を引っ張るしかできないだろう。ならば用いる手段は、魔術しかない。

実行までに時間をかけてしまうと、菅原の魔術によって封じられてしまう。本職よりも早く唱える自信は無いので詠唱は行えない。あちらに気付かれる前に、小さい範囲で手早く使う必要がある。拳を交えている二人の周囲を見回し、範囲と位置を決めた。

思考をクリアにして、魔術を使う際に思念が浮かんでくる場所に意識を傾ける。持ち直したカードを、顔の前に掲げながら返した。魔法陣が深層から思念を引きずり起こし、奇跡の粒子と共振を生じさせる。

鋼鉄も、竜の尾ですらも断絶する、光の鏡の生成。

魔術の効果が現れる前に、菅原はとつさに反応して後方に跳んでいた。拳は青木さんに向けながら、目の端でこちらの動きを捉えている。銃のスライドのように四肢を切られるのを恐れてのことだろう。詠唱なしで使ったというのに、とんでもない反射神経だ。

しかし私は初めから、直接当てることなんて狙っていなかった。天井に沿って生じていた小さな鏡が消滅した。飛び退いた直後の菅原目がけて蛍光灯が落下する。

「畜生め……」

菅原が悔しそうに呟く。既に青木さんは菅原の鳩尾を狙って、引いた拳を突き出していた。

近づいてくる車のエンジン音に誘われ、窓の外に視線を移した。ブロック塀に囲まれたビルの敷地内に、数台の白いワンボックスが乗り込んでくる。ドアには真面目そうな字体の黒い文字で『阿部警備保障』と書かれていた。

車は玄関すれすれまで頭から突っ込み、ブレーキ音を鳴らして迅速に停まった。すぐさまドアが開くのと同時に、車一台につき五人の作業着姿の男達が降りてくる。皆一様に黒のアタッシュケースを手にし、ごつい顔に厳しい表情を浮かべていた。

「あれって、他の事務所の人達ですか？」

青木さんの方を振り向いて尋ねた。彼は片膝をつき、気を失い倒れていた菅原の体を起こそうとしていた。

「本部ですね。山下さんが連絡してくれたみたいです」

青木さんが返事をしながら、菅原の腕を肩に担いで立ち上がる。恨めしい顔が左右に揺れた。

本部といえば、地方で怪物退治をしている事務所を統轄する、阿部警備の大本である。オフィオモルフオスのときですら手伝いに来てくれなかったというのに、それだけ今回の件は重大だったということだろうか。

考えを巡らせていると、男達が小走りをして近くまでやって来た。二人足を止め、残りは私達の前を通り過ぎていく。

「お疲れ様です。気を失っていますが、一応魔術師用のストレイトジャケットでふんじばっておいて下さい」

青木さんが肩から菅原を下ろして本部の社員に渡した。彼らは慣れた手つきでアタッシュケースから道具を取り出しながら、写真と照合していた。

「分かりました。ご苦労様です、後は我々にお任せください。――十一時四十七分、過激派魔術師の一派エアケントニスの幹部、菅原樹の確保」

男の一人が無線に向かって話しかけながら、菅原の後ろ手に手錠をかける。しかしそれで終わりではなく彼らは、映画で獄中の凶悪

犯罪人につけられているような大げさな品々を次々に取り付け始めた。

少しだけショックを受け、横たわる菅原から視線を外した。先ほど通り過ぎていった残りの社員が階段に向かい、踊り場に姿を消すすると入れ違いに、山下さんと愛さんが一階に降りてきた。

「本部が来てくれたし、もう大丈夫だよ。怪我はないかい？」

山下さんがこちらに気付き、軽く手を振りながら歩み寄ってきた。二人とも服が汚れ、擦り傷を負っている。尋ねてきた山下さんにおいては、セーターの肩の部分が赤黒く染まっていた。申し訳ない気持ちで一杯になる。

「山下さんよりは無事だと思います」

返事をする、恥ずかしそうに苦笑いをしていた。

本部の男達に拘束され、エアケント二スの三人がワンボックスの中に連れて行かれる。それを高妻事務所の三人と共に見送っていた。魔法陣を描けないように手錠と指枷、魔法陣が見えないように目隠し、詠唱を行えないように猿ぐつわという様相。オーバーすぎる気がするが、魔術師はこれくらいしないと捕らえることができないのだろっ。

——私の前を通り過ぎる時に菅原が口の端を歪めたように感じたが、さほど気に留めなかった。

無機質な効果音の笑い声。薄い壁の向こうからテレビの音が聞こえている。

私はカーテンを引き、電気を消し、真っ暗な部屋のベッドの上でうずくまっていた。

エアケント二スの面々を阿部警備の本部に受け渡した後、肩を怪我した山下さんに代わり青木さんに車で送ってもらって自宅のマンションに戻ってきた。

彼は気付いていなかったと思う。いや、気付くはずがなかった。当人ですらも、こうして自問自答を繰り返していて、ようやくその変化に気付けたのだから。

腹の虫が鳴っているが、台所に立つ気力も、部屋の外に出る気力もわかない。

胸の奥が喪失感で占められている。親か、友人か、恋人か、はたまた金か。今まで自分を支えていてくれた、何か大切なものを失った気がする。

苦しい部活。辛いアルバイト。面倒くさい勉強。煩わしい人付き合い。何故こんな苦労をしてまで、私は生きることを続けてきたのだろう。これからも続けなければならないのだろう。

「——我は汝に啓示を与えるもの」

なんとなく手の中で遊ばせていた、魔法陣の描かれたカードを表に向ける。光の縁をもった長方形の鏡が部屋の中央に浮かんた。

ベッドから起き上がり、鏡面に映っている灰色の森に向かって足を踏み出す。歩きながら部屋の中を見渡してみた。テレビ、ゲーム、漫画、小説、パソコン——、暇つぶしの為の道具が目につく。私はこの部屋で有意義な時間を過ごせたとと言えるだろうか。明確な目的も持たず、時間をつぶすくらいなら、初めからこうした方が正しかったのではないだろうか。

赤元によれば私の魔術は、目的を見失った人間でもブレイローマに送り救済することができるといふ。この鏡を通り抜ければ私も救

済されるだろうか。エアケント二スの考え方に共感したわけではないが、自分の生涯に意味を見出せたような気がして笑みがこぼれた。鏡の手前で止まり、正面に向けて腕を突き出す。感触はなく、そこに何も無いみたいに、鏡の向こうに手が突き抜けた。鏡面の向こうに見える自分の腕は灰色に染まっていた。目を閉じて、再び足を進め始める。

光が鏡の頂点に片寄り四散した。そして部屋には誰もいなくなつた。

0101：第二の環

雲ひとつ無く澄んだ空。広大な面積を持つ森。見渡す限り、地平線で分かれた青と緑が続く。森の中では一億以上の多様な生態系が息づいており、気の遠くなるような回数で出生と捕食が繰り返されている。

木々の間にぼつりと存在するレンガ造りの家屋。その家を中心とした一帯だけは生物の気配が感じられない。隠し階段を降りると地下室に辿りつく。壁、床、天井は金属で覆われており、地上のひなびた雰囲気とは異なつた冷たい様相をしている。

地下室では一人の女が椅子に腰掛けていた。彼女は真剣な眼差しで、壁に並べられたモニターを眺めている。モニターの一つには、黒い画面を横断する細い緑の線が表示されている。線が僅かにパルスのように上下し、女が眉をひそめた。

クチザムの密度に微弱なノイズが見られた。『あちら』から『こちら』への転移が生じたと判断して問題ないだろう。別の計器からの情報と合わせると、質量は七十キログラム程と予測される。緊張が走った。

大質量の転移は、逆方向なら昔から幾例も確認されていたが、あちらからの転移は最近まで一切なかった。水が下に流れ、暖かいものが冷たいものに熱を受け渡すように、不可逆な現象なのだから当然のことだ。にもかかわらず、エントロピーの減少はここ数日で二例も確認されてしまった。境界が曖昧になっているのかもしれない。恐れていたことが現実になりつつある。

「サミアゾグオヤホウ」

地上から声が聞こえた。どうせ契約に関することだろう。世界の

存続に関わる大事件が起きつつあるというのに、のん気なものだ。とはいえ、私はこうして計測結果を見ることしかできないし、土地を使わせてもらっている以上彼らの頼みを無下にもできない。

「今行き——、ツタモツトイテ！」

声を張り上げながら階段を駆け上がり、客の応対に向かった。

既にほとんどが忘却の彼方へ落ちていった、幼少の記憶。両親の顔。中学で出会った友人達。高校の修学旅行。村田と共に受ける大学の講義。

まどろみの中、流れる走馬灯。ようやく自分が死に向かっていることを実感する。

淡々とした日常が一変した、ライオンの化け物と遭遇した交差点。再び面接で出会うことになった、山下さんと愛さん。勇気を振り絞って人間鳥を引き付けた。犬の化け物の退治から魔術の勉強が始まった。頻繁に現れる神の使い。その中でも格が違った、オフィオモルフオスと呼ばれるドラゴン。エアセント二スに拉致され、阿部警備の三人が助けに来てくれた。

最近の記憶の回想も終わりに近づく。魔術で生み出した鏡の中に飛び込み、そして私の生涯の記録は終わった。後にはひたすら闇が続いている。

……終わった、はずだ。遙か前方から差し込んでくる光。その眩しさに、思わず手をかざした。

身の毛のよだつ、大きな高周波音。

闇が千切れて霧散する。まるで電気が流れたように、頭の中から爪先までの感覚が一気に戻る。目を見開き、体を跳ね起こして立ち

上がった。

猿とも鳥ともとれない聞いたことのない鳴き声を残して、羽の生えた生物が飛び去っていった。

見上げた木漏れ日の空から、葉々が舞い落ちている。湿った土の匂いが肺を満たす。見渡せば、濡れて光る腐葉土。苔むした大木。私は、某滞在記や公共放送の教育番組の中でしかお目にかからないような原生林の中にいた。

自分で巡らせた思考に、既視感を覚える。そういえば鏡の中に飛び込んだ後にも、この光景を目にしていた。

振り返り、背後に立つ大木を見上げる。だんだんと意識がはつきりして、昨日のことを思い出してきた。昨晩は、それ以上考えることが億劫になり、この木に寄りかかって野宿したのだった。

再び木の幹に寄りかかって座り、考察を再開する。

私は自分に魔術を使って、人生の幕を閉じたつもりだった。しかし今尚こうして脳を回転させて考え事を続けている以上、肉体が死んだとは思えない。そこで二つの可能性を打ち立てた。一つは私がまだ死んでいない可能性。もう一つは死後の世界とやらが存在する可能性、である。

間の行程無くして、自分の部屋から見知らぬ森に場所を移したの
は疑いようのない事実だ。現実離れた現象が起こっている時点で、
天国や地獄といった死後の世界の線が有力ではないだろうか。確か
ダンテは神曲の中で、自殺者は地獄のだいぶ下層にある第七圏で木
にされると記していた。彼の言葉を信じるなら、自殺と木の関連性
からしてここは地獄の可能性が高い。もっとも、和やかな景色のせ
いで実感はわからないのだが。

トンデモ世界説を肯定するなら、他にも赤元の言っていたことが
真実で、ここはプレーローマだという可能性もある。

ぎゅるぎゅると、お腹が緊張感の無い音を鳴らした。そういえば

エアケント二スのせいで、昨日から何も食べていなかった。肉体を失っても腹は減るのかと、げんなりさせられる。生物がいて植物があるということは、食料や水もあるはずだ。だらりと立ち上がり、森の中を彷徨い始めた。

柔らかい地面を踏みしめて歩く。頭上に赤く熟れた果実が見えるが、木に登る体力はない。諦めて歩く。角の生えた哺乳類が遠くで耳を立てているのが見えるが、捕まえる体力はない。諦めて歩く。草むらから幾つか葉をむしってみたが、どれが食べられるのか分からない。諦めて歩く。

視界が狭まり、意識がぼんやりしている。ふと何かにつまづいた。体勢を立て直すことができず、前のめりに倒れこんだ。

上体を起こして一帯を眺める。足を引っかけたのは、湿った地面に残された大きな窪みだった。先端に五つの小さな窪みを持ち、中央でくびれた、足跡みたいな形をしている。こんな足のサイズの人間がいたら、もはや生物の枠を超越している。大きさから身長を概算し、風景とシルエットを重ねてみる。森を突き抜けた頭を想像して笑った。

立ち上がらずに、地面の上で転がった。動く気力がわかない。このまま餓死したら、今度はどこに行くのだろう。現世に戻ったりしたら、無限ループに陥るんじゃないだろうか。腹が減っているせいで、阿呆な考えしか浮かばなかった。

人間の声が聞こえた気がした。最後の気力を振り絞り、声の聞こえた方向に向かって這う。低木を掻き分け顔を突き出した。森が開け、差し込んだ眩しい光に目を焼かれた。

目が順応し、景色が見えてきた。舗装されておらず、土手に草花が生えた道。一階建ての土壁の家。数世紀さかのぼったような、昔

ながらの村だった。

草を踏み分ける足音が聞こえ、視線を移した。警戒心をあらわにした三人の男達が近づいてくる。皆個性無く、目の粗い薄い黄色の布地をした、半袖のシャツと長ズボンを身に着けている。短い髪は黒く、よく日に焼けた茶色の肌をしており、頭身のバランスからも東洋人のようだった。

先頭にいた男が威嚇するように手の平をこちらに向け、話しかけてきた。

「アモエ、ツタヨヌカルウィソノコダ」

「え、なんですか？」

聞き直したが、男達はさらに険しい顔になっただけで、繰り返してくれなかった。

「ここはどこですか？ やっぱり地獄なんでしょうか」

やはり言葉が通じているようには思えない。男達は眉間にシワを寄せて顔を見合わせ、言葉を交わし始めた。

「ツオイアニズウタガボトカ。クキエテルルミソヤロコトニエツネサ？」

会話の間に出てくる単語一つすら聞き取れない。日本語ではないようだし、英語でもないと思う。天国や地獄で使われている言語だろうか。バベルの塔の影響はこんな所にまで及んでいたのか。死んでも言葉を勉強しなければなくなるのかと思うと、気が重くなった。

話がまとまったようで、先頭の男が何やら喋りながら、さらに距離を詰めてきた。やはり手の平をこちらに向けている。どうやら彼らの文化では、これが脅しに相当するようだ。手の平を相手に向けないように両手を広げて無抵抗をアピールすると、選択は正解だったようで、穏やかに腕を後ろで組まされ、手首を縄で縛られ拘束された。

前後に立つ男達に従い、村の中を歩く。足を止める道行く人。道の両脇に並ぶ畑では、作業を止め見上げる人。皆不安そうな表情をして私達を見守っている。一際大きい建物の前に差し掛かったとき、背中を押され、中に入るように促された。

てつきり村の外観から、内装は自然物で構築されていると思っていたのだが、この建物には思考を乱された。青いバケツ、薄型テレビ、パチンコ屋の看板。場違いに見えるものが並んでいる。製造を行える環境が整っているには見えないのだが、どうやって作っているのか不思議に思う。

建物の一番奥、扉のついている部屋に通された。窓がなく薄暗い。部屋の中央に置かれた机の上にある、器に入った仄かな火によって辛うじて部屋の中を見渡すことができた。壁にはずらりと本棚が並び、全てが古そうな本で埋まっている。目が慣れ、中央の机に肘をつき椅子に腰掛けている男の人相が見えてきた。

「ルミソヤナツ、セツナニアチミアニスウタガボトカラユオヅチオク」

私に縄をかけた、先頭の男がその人物に話しかけた。態度から判断すると、私のことを相談しているように見える。ガタイのいい体格をしており、焼けて乾いた顔に人懐っこい笑みを浮かべたおじさ

ん。彼が村の有識者なのだろう。

おじさんは恥ずかしいくらいに私の顔を注視してきた。他の人間が見せる嫌そうな目ではなく、瞳を輝かせて興味深そうにしている。彼は私の顔や手に触ったり、服に手を伸ばし指をすり合わせて材質を確かめていた。

「ナスオルコツ。サヂアチムアギトテラエラムオクタキ、ナヅオサカタヒエスオナクラエツネツニノニアケソナリタエ」

おじさんが満足そうな表情をして返事をした。すると男達は緊張が解けたようで、縄を持つ手を緩めた。何やら警戒されていた誤解を解くことができたらしい。

おじさんが私の方に向き直り、口を開いて言葉を発した。

「——俺の名を言ってみろ！」

「……え？」

言葉が通じないはずの相手の口から、あまりに状況に対して浮いた言葉が発せられた気がする。ぽかんと口を開けて、彼の顔を見つめた。

「うむ、何か間違っていたのだろうか。資料の中では、こうして初対面の挨拶をしていたのだが」

おじさんの話している言葉は、話し方がぎこちなく発音がところどころおかしいが、日本語に聞こえる。増してぽかんと口を開けて、彼の顔を見つめた。

「君のところの言葉を話せているかな？ 通じてる？」

「は、はい！」

やはり日本語を喋っていたようだ。慌てて頷いた。

「やはり日本人だったようだな。私の名前はルミソヤだ。十瑠魅甞夜十とでも呼んでくれ。君の名前は？」

「カズマです。えっと、ルミソヤさん？　なんであなたは日本語を話せるんですか？」

ルミソヤさんは無言で背後を指差した。棚に並んだ本の背表紙をよくよく見てみると、見慣れた日本語が並んでいた。

「この村の周辺には、学者にも説明できないようなものがよく落ちていて、皆が私のところに持ってくるんだ。こうして喋っているのも、それらのお陰というわけだ」

言語学者が石版や写本から古代文字を解析するように、この本棚に並んでいる本から日本語を習得したらしい。本のタイトルを追っていくと、専門書や文学は見当たらず、漫画や雑誌といった俗っぽい本ばかりであることが分かった。どうりで言葉のチョイスに違和感を覚えたわけだ。発音は、漫画の登場人物の口の開け方から推測したと教えてくれた。

「ここは地獄ですか？　それともプレーローマですか？」

「地獄というのは、死んだ後の世界のことかな。それなら質問の答えは「ノー」だ。私も君も生きているし、ここはアフウシの村と呼ばれている。プレーローマというのは、聞いたことがない言葉だな」

てつきりここは地獄だと思い込んでいたので、否定されて混乱した。赤元の話していた言葉自体エアケントニスが当てはめたものである可能性が高く、まだここがプレーローマという説は否定しきれ

ていない。アフウシ村の所在は保留にすることにした。

「言語は覚えたが、こうして当人と話するのは初めてのことだ。カズマ君は何故この村に来たのかな？」

「目的も何も、どうしてここにいいのかすら分からないんです」

ここがどこかも分からない。どうして来たのかも分からない。どうやって来たのかも分からない。情報も足りなければ、するべきことも想像できない。ルミソヤさんの質問に対しては、肩をすくめるしかなかった。

「——訳ありのようだな。とりあえず、すぐには戻らないということとでいいのだろうか。よかつたら、しばらくここで生活してみないか？　ぜひ日本とやらの話を直接聞かせて欲しいと思うのだが」

ルミソヤさんはそう言って、握手を求めるように手を差し出した。文化を真似してくれているのか、元々村の文化なのかは分からないが、手の平を見せることを嫌がっているこの村の人間からすれば、これが信頼の表現方法になっているのかもしれない。私は迷わず、彼の手を握った。

塩気の薄いパンを食べさせてもらった後、ルミソヤさんと警備の男二人に、村の中を歩いて案内してもらったことになった。改めて建物に注目してみるが、雨風を防ぐ機能しか存在しておらず、電気、水道、下水といったあらゆるインフラが整っていない。ルミソヤさんによれば、こうした家屋が村の中に三十軒ほどあり、百人近くの村民が住んでいるそうだ。隣の村までだいぶ距離があるため、村とこの区切りが日本よりも強く、外とはあまり関わりをもっていない。

男が木の鍬を使って畑を耕している現場に通りがかった。食料は、村の面積の大半を占める畑から生産される作物でまかなわれているらしい。耕している男の横では、見慣れないバネみたいな形をした道具が地面の上を転がっていた。

「君に見せるのは恥ずかしい限りだが、日本の技術を真似てみたんだ。一気に効率を上げることができて、村の皆にも好評だよ」

ルミソヤさんが説明してくれた。螺旋状の刃で土を砕いて掻き混ぜる、耕耘機のような機能を備えているようだ。しかしよくよく見てみると、器具の後ろを歩いている操縦者らしき女性は手を触れていない。

「まさか魔術……?!」

思わず声を漏らしたが、すぐに違うと考えるに至った。エネルギーの無駄が多いので、わざわざ農業に魔術を使うとは思えない。それに彼女は魔法陣を使っていないし、詠唱も行っていない。

「そう、魔術だ。日本では、忍術や仙術と呼ばれる魔術が使われているそうだね？」

漫画から知識を得ているなら、誤解されても仕方が無いと思う。苦笑いを返した。結局あれが私の中の定義と同じ魔術なのかどうか分からないまま、散策を続けることになった。

ルミソヤさんとニンジャの話で盛り上がりながら、村の中を歩く手から水流を生み出して農作物を洗う光景。手から火花を飛ばして組み木に着火する光景。魔術の定義を改めざるを得ないほどに、ここでは魔術が生活の中に溶け込んでいるようだった。

ルミソヤさん達が村人に連れられ家の中に姿を消し、私は一人道端に残された。拘束されていない今でも、道行く人達は私から距離をおき、疎ましそうな目で追っている。しばらくここで生活することになりそうなのに、心が挫けかけた。

「アモエ、ノヒンツタツナチカラケ？」

足元から声が聞こえた。視線を落とすと、五歳くらいの女の子がすぐ側に立っていた。返事をしようとしたが、ここの言語が分からないことに気付き言葉に詰まる。

「アンネチククハンナ」

会話が通じていないことは気にしていないようで、子供は私の服の裾を引っ張っている。子供の相手は苦手なんだよなと途方に暮れていると、女の子は走ってきた親らしき大人に連れて行かれた。喚き声はすぐに遠くなった。

どこの国でも、子供は無邪気で親は振り回されるものらしい。少しでも和み、少しだけここで暮らしていけそうな気がした。

仕事が一段落したので、日が沈みかかりオレンジ色に染まった村の中をぶらぶらと歩いていた。仕事といっても私は村の人みたいに器用に魔術を使い分けられるわけではないので、ルミソヤさんの部屋にある漫画の翻訳を行っている。昔の漫画を楽しめ、アフウシの言語を覚えられ、食べ物も貰える一石三鳥の作業である。

既に村に居ついでから一週間が経過していた。一日の体感時間は変わらず、およそ六時間ごとに三回の食事をとる生活のリズムも同じで、とても生活しやすかった。

村人達が組み木を立てているのを横目で眺めながら歩く。こちらに気付いたように見えたので頭を下げたが、彼らは何事も無かったかのように作業に戻った。一週間経っても、まだ人々との関係はぎこちない。

この村で魔術を使ってみて気付いたことがある。この村は奇跡の粒子の濃度が非常に高い。容易に奇跡の粒子が共振するので、村人は魔法陣や詠唱なしに魔術を使うことができる。さらには脳の浅いところで共振が生じているようで、思考する内容によって複数の種類の魔術を使うことができる。もはや魔術とは体系が異なるので、魔法とでも呼んだ方がいいのかもしれない。

頭薬をどこに擦っても点火できる黄燐マッチが、側薬と擦らなければ点火できない安全マッチに取って代わったように、魔法は便利だが大きな危険を伴う。私も使ってみようとしたが、指を火傷して諦めた。ルミソヤさんによれば子供の頃からの訓練が必要らしい。

村の入り口付近に差し掛かったところ、人だかりができており、何やら騒がしかった。

「何かあつたんですか？」

集まっている村人の中にルミソヤさんの姿を見つけ、駆け寄り声をかけた。

「リオネモが遊びに出かけたまま帰ってこないから、ロリコンどもが心配しているんだ」

ロリコンという単語を、『子供を慈しむ人』から転じて『親や近所の人』という意味に勘違いしているらしい。後で教えてあげなければと思った。それを踏まえてルミソヤさんの話を日本語に再変換

すると、どうやらリオネモが遊びに出かけたまま帰っていないため、親や近所の人が心配しているらしい。リオネモは私が村での生活を始めた際に、真っ先に話しかけてきてくれた女の子である。

ルミソヤさんの手ほどきのお陰で、村の言語の簡単な読み書き程度ならできるようになった。人だかりに近づき、辛うじて単語から会話の内容を聞き取る。それによれば、最後に目撃されたのは昼頃で、神の森に入っていた可能性が高いとのことだった。話は堂々巡りしていて、それきり進んでいないようだ。

「こうして話している間にも、探しに行けばいいのに……」

「あの山には、天の柱『ポリュペモス』が住んでいる。神の地に踏み込みでもしたら無事に帰れる保障はないし、容易に助けに行けないんだ」

この村の人々は、神を行動原理にしている。時間を作っては神を崇め、神が伝えたという言葉を実に守り、神の思想を拠り所にする。神の意思に逆らうことは身の破滅をもたらすと、本気で信じている。今日の晩に催される祭りだって、神を宥めるとかいう目的があったはずだ。

神なんていない。神を称した過去の残酷な出来事が現在では愚行と判断されているように、少なくとも人の命よりも尊いものではない。——自分の考えを村人達に知って欲しいが、満足に話せない言葉で伝えられるとは思えない。歯痒く思う。しかし今は、時間を費やすべき対象が違う。記憶を頼りに、言葉を組み立てた。

「サミキアゲロウ」

村の言葉で、「俺が行きます」という意味だ。村人達の間から驚きの声が上がった。

「しかし、ポリュペモスの祟りを受けるぞ？」

ルミソヤさんを始め、村の人は、おかしい物を見るような目で私のことを見ている。それだけ神聖な地に足を踏み入れることは恐れ多いことなのだろう。

私は神の森に背を向け、親指で指差した。

「大丈夫ですよ。俺はあそこから来たんですから」

0102：木々を覆う星空

腐葉土を踏みしめ、木々の間を進んでいく。こうして森の中に入るのは、アフウシの村にやってきた日以来である。以前私が寄りかかって寝ていた木が見えてきた。あの時は腹が減っていたこともあり、長い時間歩いたように感じていたが、直線距離にしてみると大したことはなかった。

獣道を通って山へ足を踏み入れた。葉々の合間から日の暮れてきた空が覗く。既に視界が悪くなりつつある。完全に暗くなる前に搜索を終えて帰りたいと思った。『日が暮れる』というのは日本での生活に例えたのではなく、実際この村からは同じように太陽と月を見ることができる。これによって異星説が否定された訳だが、戸惑いも少なく生活できている理由の一つになっているのかもしれない。

緩い斜面を登っていく。村人は誰も足を踏み入れないと言うが、ところどころ踏み固まって木々が生えていない箇所があり、お陰でだいぶ歩きやすかった。

「リオネモ？」

声を張り上げ少女の名前を呼ぶが、葉々の擦れる音しか返ってこない。

リオネモは皆が私のことを避けていた中、真っ先に話しかけてきてくれた子供だった。ルミソヤさんによれば、神の言葉の中に余所者は害をもたらす云々というものがあるせいらしい。彼女は好奇心が人一倍強いので、信心が薄くならざるを得なかったのだろう。

神を信じるのは勝手だと思う。しかし今の状況はどうだ。誰も山の中に入り助けに行くことができないければ、結局神を信じないものは淘汰されていくことになる。ダーウィンもびっくりの進化論。怖

い世界だと思った。

異変を感じて足を止めた。化け物のせいで敏感になってしまったようだ。風に運ばれた土の匂いに混じった、生々しい鉄臭さが鼻につく。生命の終わりを告げる、血の臭い。頭に浮かぶ最悪の光景を、無理やり奥底に沈めようと試みながら走った。

急に足が回らなくなり、大きく前のめりになった。もう一方の足を前に出そうとするが間に合わない。私は地面にできていた大きな窪みにつまづき、頭から倒れこんでいた。

木々の上から届く鳥の鳴き声が、私のことを嘲笑っているかのよう聞こえる。恥ずかしく思いながら、無言で起き上がった。

立ち上がる際に地面についた手に、ぬめつとした感触が残っていた。手の平を見ると、全体がべつとりと赤く染まっていた。痛みは無く、怪我をしたようには見えない。地面に視線を移すと、血溜まりが点々と続いていた。

発生元に向かって歩き出す。一步。二歩。心臓と呼吸の音がやけにはつきり聞こえた。

低木の手前で血痕は途切れていた。奥を覗き、胸を撫で下ろした。流した主はその陰に横たわっている、頭に角の生えた短毛の哺乳類――鹿のような生物。『ような』と思ったのは、肉食動物のように妙に痩せたシルエットをしているからだ。しかしすぐにそれが勘違いであることに気付いた。腹があるはずの部分が、骨も肉も根こそぎ無くなっている。引き裂かれた腹部から腸管が飛び出し地面を這っている。嗅ぎ付けた羽虫が耳障りな音を立てて飛んでいるが、血がまだ乾いていないことから考えると、死んでからあまり時間が経っていないようだった。

散在している血を、改めて眺め回した。血痕は一方に血滴の突起が見られ、勢いよく噴き付けられたように見える。架空の像が鹿の腹を引き千切り、振り回している様子が頭に浮かぶ。続いて、地面

につけられたたくさんの窪みに視線を移す。逃げ回る鹿を追い回す架空の像。

リオネモの命に関わり、一刻の猶予も許されない。山頂に向かって走る。ポケットに魔術のカードが入っていることを確かめた。使わなければならない状況を覚悟する。

大木の横を通り過ぎたが、違和感を感じて足を止めた。即座に振り返る。巨大な幹だと思っていたが、高くなるほど径が太くなっているそれは違う。顔を上げて空を仰いだ。

森から頭が突き抜けており、顔は見えない。こんな現実離れたものを想像した記憶がある。もはや、生物の枠を超越しているだなんて理由で否定することはできなかった。巨人――、何と、この言葉がしっくりくることだろう。

肋骨が浮き出るほどに痩せ身で、手足の長いシルエットは昆虫を思わせる。髪に限らず体毛は生えていない。皮膚は生気を感じさせない土のような色をしており、表面がひび割れるほどに乾燥している。衣類は身につけておらず、性器が丸出しになっていた。

地響きを立てて太い脚が折り曲がる。巨人がこちらに気付いたように身を屈めている。顔の中央に一つだけしかない巨大な目玉がぎよろりとこちらに向いた。

ルミソヤさんの言っていた、天の柱『ポリュペモス』とはこのことだろう。空に向かって伸ばされた腕は、まるで天を支える大黒柱。天の柱とはよく言ったものだ。

腕が振り下ろされる。私の身長の数以上の身長の上に倍という、とんでもない高さからの位置エネルギーを変換して速度を増す。目一杯に広げられた手の平が迫ってくる。

懸命に地面を蹴り、体を前に放った。今まで私がいた場所の地面を、長い指がシヨベルカーみたいに根こそぎすくう。跳ね飛ばされた土が木々に当たり、葉が舞い散る。

全力で走って、巨人の股の下を潜り抜ける。足を止めて、後ろを振り返る。ポケットからカードを取り出し、即座に表返した。

「我は汝に啓示を与えるものッ！」

巨人の腕に食い込むようにして光の鏡が浮かぶ。光が四散して消滅するのと同時に、腕から血が飛び散った。

「あんたに用事はないんだ、……アナヒズオイナツナイ、レアケ！」

言葉が通じるかは分からないが、この場所から去れと叫ぶ。巨人は食い入るように自分の血を見つめていた。

巨大な目玉がぐるんと回転する。私の存在を思い出したみたいに、巨人がこちらを振り向いた。力を込めた腕は傷口が塞がり、血が止まっていた。いくら鋼でも断ち切れる鏡を生み出せようと、いかにせんスケールが違いすぎる。

長い足を振り上げ、踏み下ろしてきた。大きな足跡が刻まれるのを背に、再び股の下を通って駆け抜ける。振り返って魔術を使おうとしたが、横から力を受けてバランスを崩した。木々と地面が線を描いて流れる。急にかかった遠心力で頭がぐわんぐわんした。

足をばたばたさせて、地面についていないことが判明した。腕が胴体にくっついたまま動かない。見れば、岩のような指がからみついていていた。背後に回ったことで安心していた。自身の周囲全体を力バーできるほどの長い腕に捕らわれていた。

再び遠心力を受けて頭が揺れる。やっと止まったと思えば、巨人の顔が目の前にあった。

ねちやりと音を立てて、薄汚い歯が並んだ口が開く。生暖かく酸っぱい臭いをした息が漂ってきた。脳裏に浮かぶ半月形に欠けていた鹿の腹が、眼前の歯型と一致した。

「冗談じゃねえ——」

ポリュペモスは、手にしたものを何でも口に入れる赤ん坊みたいに、私に頭からかぶり付こうとしている。姿形が人に似ているからなんて、同族意識を持って加減するのは危険だ。日本で遭遇した化け物達と同じで、相手は私のことを敵もしくは餌くらいにしか考えていないのだから。

必死に体をねじり、カードを持った手を指の合間から外に出した。呼吸を整え、一点に意識を集中させる。あの村での生活で、少しは魔術の腕も上げたつもりだ。

カードを表に向けた。正面に、光の縁をもった鏡が浮かぶ。消滅しないように認識を続けたまま、新たに意識を集中させる。五面、十面。様々な方向に向けて鏡を生み出す。

「火から土を、粗雑なるものから精妙なるものを分離せよ！」

カードを持った腕を巨人に向けて伸ばした。それと同時に鏡がその場で回転し、側面の向きを揃えた。一斉に巨人目がけて飛びかかる。

これだけたくさんの鏡を用いても、巨人のスケールから見れば小さな怪我しか与えられないだろう。小さくも致命傷を与えるなら、狙う場所の一つしかない目玉だ。

とつさに顔の前にかざされた手の隙間を縫い、鏡の群れが急襲する。眼球の外側を覆う強膜が引き裂かれ、無色の液体が飛び散った。私を拘束していた指の力が弱まった。開かれた手から滑り落ちて地面の上に着地する。巨人はふらふらしながら、目を押さえて呻いていた。

無理をして仕留める必要はない。背中を向けて、一目散に走って

逃げ出した。

目が見えないはずのポリュペモスがこちらを振り向いた。腐葉土を踏みしめて鳴るシャクシャクという足音のせいだと気付いたが、今更遅い。構わず全力で地面を蹴って走る。

巨人が追いかけてくる。手足の振りは遅いが、馬鹿みたいに長いストロークであつという間に距離を詰めてくる。

咄嗟の思いつきで、スラロームみたいに木を左右に避けながら走り始めた。巨人は木々にぶつかり、思うように進めていない。徐々に間隔が開き、なんとか無事に逃げ切ることができた。

とうとう日が沈み、辺りはぼんやりとしか見えなくなってしまう。これではまともに搜索することができない。リオネモも入れ違いで村に帰っているかもしれないし、一度村に戻ろうと身を翻した。村の方へ向かって歩いていると、高周波音が聞こえることに気付いた。ポリュペモスが私をおびき寄せようとしている可能性もある。慎重に音が発せられている場所に向かう。近づくにつれて、それが人の泣き声だと判断できるようになった。

森が開けた先にあつた小さな丘の上に、古くて大きな木が一本だけ生えていた。幹の地面近くが左右二つに分かれて、大きなうろができている。中を覗き込み、ほっとして息を吐いた。うろの中では女の子が膝を抱えてうずくまっていた。

「ラデ？」

リオネモがこちらに気付き、私が誰か尋ねてきた。縮めた体を震わせ、異常なまでに脅えている。

「カズマヤド。テラモナチノチホナルメ、チキネアクモイミカ」

自分の名前を教え、村の人が心配していることと、迎えに来た旨を伝える。彼女の表情がいくらか和らいだ。

一人で山に入り木の実を拾って遊んでいたが、例の巨人がこの辺りに居ついてしまい、ここから出られなくなってしまうらしい。ポリュペモスの伝承は聞いていたが、村の行事の準備をしていて遊んでくれなかった大人に対して反抗してみたくなって山に入ってしまったとのことだ。もう少しで取り返しのつかないことになるところだった。

目を潰したから巨人はもう現れない、大丈夫だと話して手を差し出した。私のことを信じてくれと伝えたかったのだが、伝わっただろうか。少女は少し躊躇ったが、しっかりと手を握ってくれた。小さな手を引き、うろの外へ連れ出す。

辺りはすっかり暗くなってしまうていた。葉々の合間から差し込む月の光が、わずかに地面を照らしている。道に迷わないで村まで送り届けられるだろうか。夜が明けてから降りる方が懸命そうだが、衰弱しているリオネモを早く家に送ってあげたいという思いもある。一人悩みこんでいると、後ろから服の裾を引かれた。リオネモの方へ向き直る。少女は私の顔を凝視していた。いや、目に映っているのは私ではなく、その奥だろうか。暗くて表情はよく読めないが、尋常ではない感じが伝わってくる。私も彼女の見つめる先を振り向いた。

月明かりで照らされているのは、一帯に生えた高い木々。夜空に浮かんでいるのは、掴めそうなくらい近く見える星々。何もおかしいものは見えない。

「ア、ア、アア……」

リオネモが声を漏らす。星々の光が一斉に、少女に向けられた。

乱立する幹のように突き立つ足々。こちらに向けられた七つの大きな目玉。私達を囲って立つ七体の巨人。――空を支える柱は、一本きりではなかった。

私は少女を後ろに隠し、苦笑いを浮かべることしかできなかった。

あちらさんは同期させて頭を振り、口端に垂れた涎を撒き散らし、興奮している。何も考えずに泣きながら走り出したい気分だが、リオネモが後ろで震えているのを感じて押しとどめた。つい先ほど、彼女を早く家に帰してあげたいと決心したばかりではないか。覚悟を決めた。

「……星煌く天は我が顔、海は我が胸、大地は我が足」

詠唱をしながら、必死に打開案を考える。同時に生み出せる鏡の枚数は十枚。詠唱を行えば二十枚。三枚ずつ鏡を飛ばして、全ての巨人の目を同時に決めるのはどうだろう。

「風が充たすは我が耳、輝く光を遠矢に射る太陽は我が目なり」

いや、駄目だ。巨人達は聴覚にも優れているようである。最初のポリュペモスのように目を潰すだけでは足止めにならないので、一体一体確実に仕留める必要がある。となれば用意するのは、巨人の首でも断ち切れるだけの巨大な鏡。

「――我は汝に啓示を与えるもの」

カードを表に返し、月明かりに照らされた魔法陣を目に焼き付ける。光を放ち、宙に大きな鏡が現れた。カードを持った腕を伸ばして巨人に向ける。鏡が音も無く動き出した。

光の縁が残像を描き、宙を疾走する。しかし到達するすんでのと

ところで、ポリュペモスは敏捷な動きで屈んで避けた。鏡を引き返させようとするが間に合わない。他の巨人達が一斉に襲いかかってくる。

鏡の中から、先端から光を放つ黒い紐が飛び出した。紐が生き物のようにのたうち回り、避けた巨人の背中に触れる。瞬間的に周囲の空気がイオン化し、派手な光を放った。バチバチという、熱せられた空気の炸裂音が響く。火球に包まれた巨人が吹き飛ばされた。

巨人は膝を抱えるように縮こまったまま、ぴくりとも動かなかった。筋肉が収縮したまま凝固しているのだろう。眼球は派手に破裂し、眼窩が大きな窪みを形成している。さらに体表は黒く炭化しており、原形が想像できない悲惨な状態だった。

先ほどまでの威勢はどこに行ったのか、巨人達は足を止め顔を見合わせて困惑している。とはいえ私も困惑していた。あれは、電柱の上に張り巡らされて日本中に電気を送っている送電線だ。

鏡が発していた光の縁が頂点に集まり四散した。切断された電線が落下しながら暴れ、先端が地面を叩いて、枯れ草に火をつける。

巨人達は炎を見ると、一目散に逃げ出していった。

湿った土壌のこともあり、火はすぐに消えた。

「オーイ！」

複数の人の声が聞こえてきた。木々の合間に小さな光が浮かんでいる。だんだんと光が大きくなり、松明をもった村人達が現れた。リオネモの母親とルミソヤさんの姿も確認できる。

炭と化したポリュペモス、続いて地面に転がっている電線に視線を向ける。何故これが現れたのかは分からないが、とりあえず助かったようだ。どっと疲労が押し寄せた。

村に戻った後、私はルミソヤさんの家で治療を受けていた。とっても怪我はかすり傷くらいなので、薬草の絞り汁をつけたただけなのだが。リオネモは村中の大人にこっそりと絞られてから帰っていた。

「知つての通り、外部の者は村に害を及ぼすという言い伝えがあり、カズマ君には辛い思いをさせてしまつていたと思う。君は村の外の出身だ。しかし危険を顧みず我々の仲間を助けてくれた。もう外部の者だなんて誰も思つていない。これから村の仲間として歓迎されるだろう」

ルミソヤさんはそう言つて、私の背中を押した。

ルミソヤさんの家を出たところで、村の中央にある空き地で火が上がっているのが見えた。ポリュペモスの件もあり、心配になつて駆けつける。しかし燃えているのは、キャンプファイヤーのように高く組み上げられた木だった。そういえば、今日はルタミヒとかいう祭りが計画されていた。村人達が松明を手に、組み木の周りを踊りながら回っている。

ポリュペモスは火を見た途端に、蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。多分野生動物のように火が苦手なのだろう。私が思うに、昔の村人は火で巨人を追い払えることを知っており、村に近づけさせないために、こうして定期的に焚き火を行っていた。しかしいつしか巨人の姿すら見たことのない村人が増えて神格とみなすようになり、本来の目的を忘れて儀式化してしまつていたのかもしれない。

急に手をつかまれ、正氣に戻った。手を引っ張っているのは、笑顔を浮かべたりリオネモの母親だった。ずんずんと組み木の方へ連れて行かれる。火炙りの儀式にでもかけられるのかと心配になつた

が、今まで見たことの無い優しい表情をして迎えてくれている村人達を見て、ほっとした。村人の一人から松明を渡される。

「オタギラウ」

次々に掛けられる感謝の言葉を、心から嬉しいと思った。夜が明けるまで、村人に踊りを教わりながら組み木の周りを回った。

そして半年の月日が流れた。

0103：神を殺した男、悪魔と呼ばれる女

私はルミソヤさんと共に、相変わらず薄暗い彼の部屋にいた。机の中央にある松ヤニの蝋燭が仄かに私達の作業範囲を照らしている。私はいつものように日本語の漫画をアフウシ村の言語に訳し、粗い紙に書き写している。ルミソヤさんは珍しく、活字の本に見入っていた。背表紙のタイトルから判断すると啓蒙書か哲学書のようなのだ。

「珍しいですね、ルミソヤさんが漫画や雑誌以外に興味を持つなんて」

「いろいろと考えることがあつてな」

私とルミソヤさんが交わしているのはアフウシの言葉である。この半年で、日本語に近いレベルの読み書きができるようになった。自分で自分の語学の才能に驚いている。しかし英語は5年も6年も勉強していながら、全然覚えられなかった。覚えないと生活できないという、必要に迫られることは必要なのかもしれない。

「私が日本の言葉を解読したいと思ったきっかけは、この写真だった」

読んでいた本を机の上に置き、ルミソヤさんが真面目な顔をして話を始めた。ペンを置いて指差されたページを覗き込む。それは寺の写真らしく、古い仏像に向かって手を合わせる人達が写っていた。

「言語も文化も違うのに、この国も我々と同じように神に祝福され、崇めている。多少御姿は違うが、信仰の対象は同じなのだろう。神の偉大さを改めて知り嬉しく思った。——それから先は君の知っている通りだ。私は漫画や雑誌を通して日本語を覚えた」

ルミソヤさんが語りだしたのは、日本語を学ぼうと思い立った出来事だった。何故今その話を始めるのだろうか。不思議に思いながら話の続きを待つ。

「しかし日本語を読めるようになるにつれ、彼らは我々と違っていることに気付いた。彼らは神との接し方がおかしい。普段はまるでいないものとして生活している。神事を行うにしても、常に人間を中心に据えている。彼らの神はどれだけ寛大なのかと驚いた。そしてさらに勉強を続け、違うのは神ではなく、心だと気付かされた」

知った文化がキリスト圏やイスラム圏だったら、まだギャップが少なかったのかもしれない。寺と神社が同じ敷地にあったり、外国の宗教のお祝い事を行事に行っている国は衝撃が大きいかもしれないと思った。

「そんな時にカズマ君が村にやってきた。君は、便利で素晴らしい技術、効率的な考え方、様々な新しいことを教えてくれた。君の知識は証明できる範囲だけでも常に正しかった。そんな君が、村の伝承では神が世界を創ったと言うが、隕石の衝突と生物の進化で説明できると言う。神の地に足を踏み入れると祟りがあると言われていたが、君は無事リオネモを連れ帰ってきてくれた。作物を捧げる風習は無駄だと言い、祭りを月に一度行うよりも常に村の周りに松明を灯しておいた方が効果的だと言った。密かに疑問に思っていたことが、君の話を聞いている内に、より具体的な形へ変わっていった……私は君の言うことなら、どんなことでも信じることができる。だからこそこの問いに答えて欲しいんだ」

ルミソヤさんは一度言葉を切った。そして覚悟を決めたように、腹から言葉を搾り出した。

「この世界に……神はいないのか？」

「はい、神はいません」

リオネモがポリュペモスの山で迷子になってから、ずっと教えたかったことが伝わり嬉しかった。しかし私の心とは対照的に、ルミソヤさんの顔色はみるみる悪くなっていった。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫——、いや、大丈夫ではないかもしれない。すまないが一人にさせてくれないか？」

今まで自分達を縛っていたものが否定されるということとは、そんなに衝撃的なものなのだろうか。私には想像できない感情なので分からなかった。

ルミソヤさんの家を出て、村の中央にある広場に向かった。見張りや親に見守られて、子供達が黄色い声を上げてはしゃいでいる。彼らがしているのは、クトギノオとかいう遊びだ。始めに、ノイと呼ばれる役を一人選出する。ノイは他の子を追いかけ、魔法を用いて動きを封じる。そしてノイに体のどこかを触られた子は新しいノイになってしまう。ノイは交代する場合と増えていく場合があるが、今やっているのは交代するタイプのクトギノオのようだ。土手に座り、公園で子供を見守る父親みたいな気分で眺めていた。

「カズマも遊ぼう！」

急に名前を呼ばれて驚いた。子供達の中にいたリオネモが私を見

つけ、駆け寄ってきた。

「いいけど、俺は魔法を使えないから、足引っ張ってつまらないと思うよ」

この村での子供の遊びは、魔法を上手に使えるようになる目的のものが多く、私にはハードルが高い。

「大人のクセにだっせー！」

「私が教えてあげるよ」

「前教えてもらった、鬼ごっこしようよ」

他の子供達も集まってきた、好き放題言い始めた。折角のお誘いなので参加しようと思い、立ち上がる。周りで見ていた大人達が、手加減してあげなさいと言って笑っていた。

突然地響きが鳴った。音のした方を振り返ると、いつの間にか人が仰向けに倒れていた。顔に見覚えがある。たまに村にやってくる行商人だ。折れた肋骨で肺を痛めたようで、口から血を吐いている。

「空だ、空から降ってきた！」

偶然その瞬間を見ていたらしい見張りの男が、空を見上げて大きな声を上げた。白い雲が浮かんでいる以外に、空には何も無い。

「大丈夫ですか？ 何があつたんです？」

只ならぬ雰囲気を感じ、子供達に家に戻れと伝えて行商人の横へ駆け寄った。

「あ、『悪魔』だ。悪魔にやられた……」

「悪魔だって?! こんなへんぴなところに――」

男がその言葉を搾り出すように発すると、広場は騒然となった。

私だけ悪魔の示すところが分からずに棒立ちしている。

痙攣する瞳が私の方に向けられた。

「逃げろ、あいつが探しているのは……」

男の全身の力が抜け、首がかたりと傾いた。全てを喋ることが出来ずに息絶えてしまった。無念があつたろうに、顔は死後弛緩で安らかな表情へと変わっていた。

行商人の上に影がかかった。見上げた空には、人型のシルエットが浮かんでいた。赤味がかった膜の張られた紅の翼が、大きく空気を捉えてはためいている。

「悪魔だ……」

同じく上空を見ていた村人がぼつりと呟いた。

「何なんですか、その悪魔っていうのは？」

誰もが青ざめた顔をしており、尋常ではない様子が伝わってくる。抑えきることができず、呟いた男に尋ねた。

「その身の半分に竜の血を引く、世界最強の生物だ。滅ぼした都市の数は計り知れないという」

私の国では、染色体の数が違うやら遺伝子が似ていないやらで、

人はチンパンジーやゴリラとですら子供を作ることができないと言われていた。しかしルミソヤさんの話では、ここでは稀に獣との間に子を有することがあるらしい。獣の血が濃いほど魔法を扱う力も増すと言われ、何十世代も前に獣とつがった祖先を持つと噂される村人は、強力な魔法を使い見張りに抜擢されていた。半分ということは、最も血の濃い一世代目。しかも竜といえ、日本の伝承同様に強大な力を持つ幻獣だ。多くの都市を滅ぼしたという逸話もあながち嘘とは思えない。

再び翼をはためかせ、とうとう悪魔が空き地に降り立った。ふわりと揺れる、腰まで伸びた長い赤毛の髪。うねる赤い鱗の尾。痩せ身だが背は私より高い。めくれたマントの隙間から、鱗の生えた赤い皮のチューブトップとスカートが見えた。顔がゆっくりと上がる。すっとした鼻筋をもつ顔立ち、澄んだ金色の瞳をしている。性別は女。歳は二十歳前後くらいだろうか。

女は周りを見渡して何かを探していたようだったが、私と視線を交わした途端に口端を上げた。鋭い犬歯が露になる。

「ハッ、アハハハハ……。やっと、やっと——見つけたッ！」

踏み出す一步一步を味わうように歩いてくる。その全身で表現された喜びには狂気が伴われていた。思わず私は彼女が進んだ分だけ後ろに下がっていた。

「止まれ！ 手の平を地面につけて、うつ伏せになれ！」

見張りの村人達が女を囲み、両手の平を向けて威嚇する。

「邪魔しないでよ。その男を渡してくれれば、他に手は出さないから」

女は笑みを止め冷淡に言い放った後、鋭い金色の視線で一瞥した。屈強な見張りの人達も腰が引けていた。

眼前の女はどうも初対面の気がしなかった。足の運び方、首の傾け方、何気ない仕草が、脳裏に浮かんでいる像と被っている。にわかには信じがたいが、ただの偶然とは思えない。そして確信へ導くのは、綺麗に切断された尾の先だ。

「そうはいかない。カズマ君はかつて村の為に体を張ってくれた。今度は私達の番だ、彼に手は出させない！」

見張りの男達はそうだと口々に叫び、手からバーナーのように火を噴き出した。四方から浴びせられ、女の全身がオレンジ色の炎で包まれる。

「――何が悪魔だ、大したことなかったな」

見張りの一人が魔法を中断して言った。他の者達も火炎放射を止めて、腕を下ろす。

何故人間の姿をしているのか、何故ここにいるのかは分からない。しかしあの女がオフィオモルフオスだとしたら、この程度の炎でどうこうできるはずがない。完全に気を抜いている村人達に向けて叫ぶ。

「駄目だ、みんな逃げてくれ！」

炎の中に、指を立て腕を伸ばす影が見えた。女の周囲に風が渦巻く。炎が火の粉になって掻き消えた。

「温い。温い。温い温い温い温いッ！ あたしを焼きたいなら太陽でも持ってこい――」

女が真横の空へ向けて人差し指を突き立てた。皆が不思議に思いながら指の先を見つめる。指された先には、ポリュペモスの住む山がある。

指の先からほとばしる光が放たれたと思った瞬間、激しい空圧が押し寄せた。肌が痛みを訴えるほどの熱気を帯びており、思わず手をかざす。耳をつんざく轟音。地震を疑う大きさの地響き。

静寂が戻る。ひどい耳鳴りが続いている。恐る恐る顔を擦り、怪我がないことを確認した。村人達も心ここにあらずといった様子だが無事のような。先ほど起きた天変地異が魔法だと判断できるまでには時間がかかった。

村人達の中から恐怖の声が上がった。皆の視線の先を追う。女に指差されていた山の上、三分の一が消滅していた。

「もう一度言っておくよ。その男を渡せ。さもなければ、今度は村ごと燃やし尽くす」

女は勝ち誇った顔をしてそう言って、人差し指を立てた腕を地面に向けた。

「そ、そんなことは――」

「止めなさい」

見張りの村人の言葉を遮って現れたのは、ルミソヤさんだった。彼は女と私を交互に見てから言った。

「村を存続させる為には仕方が無い。悪魔の言うとおり、大人しく差し出そう」

「ですが……」

村人達が戸惑っている。村に来てから、最も私のことをかばってきてくれたのはルミソヤさんだった。その彼が何の行動も起こさずに切り捨てようとしている。私も見捨てられた気がして少なからずショックを受けていた。

「君達にも私にも、この村には守るべき家族がいる。悪魔と戦うということは、彼らを危険に晒すことになるんだ。しかしカズマ君にはいない。一人の犠牲で多くの人間が助かるのなら、迷う必要はないだろう？　だいたい半年程度の付き合いではないか、自分達の命をかけるなんて馬鹿馬鹿しい。……なに、この世に神がいらないというのなら、何もやましいことはない」

権力を持つ男の言葉に、村人達が頷く。彼らが悪魔に屈せず私のことをかばってくれたのは嬉しかった。一回村の人間を救おうとただで、ここまで尽くしてくれるのはどこかおかしいと思っていたが、どうやら神に見られていることを意識しているという背景があったようだ。ルミソヤさんの神を否定したのは私だ。自分で自分の首を絞めていたことに気がついた。

ルミソヤさんの言うことは正しい。人は誰も、自分と自分に関わる世界が可愛い。本心では誰もが彼の言ったことを思っていたはずだ。しかし納得いかない。したいことをするだけなら家畜でもできる。そこには信念が存在しておらず、人間としての尊厳が欠けている。私の信念を対比に出そうとしたが、頭が痛んで止めた。

どこかで感じたことのある理不尽さだと思っていたが、ようやく気付いた。菅原樹の魔術、『道徳からの開放』だ。私は神を否定することで、自分を律し押し殺すルミソヤさんをも否定していたのか。しかし神がいたことによって危険に晒される人間がいることも確かだ。

非難がましい視線を向ける村人達に背を向けて走る。私がしたこ

とは正しかったのか。何が良いことで、何が悪いことなのか分からない。

村の前に広がる草原の真ん中で足を止めた。空を飛んで追ってきた竜の女が、翼をたたんで地面に降り立つ。

「へえ、みつともなく逃げ回ると思って追ってきたのに、期待はズレだったなあ」

「お前が馬鹿みたいに威力の大きな魔法を使うから、余計な被害が及ばないように場所を変えたただけだ」

「自分を売った村に配慮なんかするかねえ。……まああんたには、ちよつとだけ同情してあげるよ」

同情というのは口だけで、ひょうきんに眉を動かした。

「なんであたしが、こんなにもあんたに執着しているのか理由は分かってる？」

「お前はあの時、日本の製鉄所で戦ったドラゴンなんだな？」

自分を殺した者への敵討ち。どこかで見た仕草。綺麗に切り落とされた尻尾。すべてを合わせて考えて、思い当たったのはそれだった。

「そう。この自慢の尻尾を切り落としてくれた落とし前はつけさせてもらつよ！」

女は言い終えると、左右の翼を勢いよく開いた。威嚇だろうか、体が大きく見えて足がすくんだ。

戦いは避けられそうにない。かといって真面目に戦ったところで、あの魔法を使われたら手も足も出すことができない。卑怯かもしれないが、先手必勝に賭けることにした。

「我は汝に啓示を与えるもの！」

カードを素早く取り出し、表に返して描かれた魔法陣を目に焼き付ける。空いている手の指先に、光の縁を持った鏡が現れた。女に向かって腕を振る。鏡が急激に加速して宙を滑る。竜の女は行動する素振りを見せていない。

女との距離が残り30cmほどになった瞬間、鏡が碎けて消滅した。まだ鏡の認識は続いていたので、消えるはずがない。奇跡の粒子の共振が阻害されているのだろうか？

「楽には逝かせない……。手足を千切られ苦しんで、全身の火傷で苦しんで、息をできずに苦しんで、最後の最後に自分の無力さを味わいながら死になッ！」

片手で指を鳴らしながら歩いてくる。口端を上げ、とびきりの笑顔浮かべていた。今度はかばってくれる人はいない。

どうすれば攻撃を当てられるだろう。――死角から攻撃する。速攻で阻害する時間を与えない。阻害できないほどの枚数の鏡で攻撃する。思い浮かんだ案を全て採用した。

カードを再び表に向けた。正面に、光の縁をもった鏡が浮かぶ。消滅しないように認識を続けたまま、新たに意識を集中させる。五面、十面。様々な方向に向けて鏡を生み出す。

「火から土を、粗雑なるものから精妙なるものを分離せよ！」

詠唱を終えたのと同時に鏡がその場で回転し、側面の向きを揃えた。一斉に女目がけて飛びかかる。想定していた通りの完璧な魔術。しかし敵のスペックははるかに想定を超えていた。手足を動かす予備動作すら認知することができない。不敵な笑みを浮かべた女の姿は掻き消え、すべての鏡が空を切った。

肺の空気が全て吐き出された。視線を落とすと、切れた尾が腹部を薙いで食い込んでいた。重力から開放されたみたいに跳ね飛ばされたと思えば、すぐに背中に激痛が走り、うつ伏せに倒れた。体が腐葉土に沈み込む。村の近くの草原にいたはずだが、いつの間にか森の中にいた。木の幹にしこたま背中をぶつけたらしく、苦痛で呼吸が出来なかった。

「まだあたしに勝てるつもりでいるようだから、いいことを教えてあげるよ。どういう訳か、あんたと戦ったあの場所では人の姿を保てなくて、魔法も使えなかった。つまりあの時あんた達が苦戦していたのは、全力の1%も発揮できていなかったあたしってこと」

女が指を立ててこちらに向けてきた。村で目撃した、山を挟むほどの炎が脳裏をかすめる。

放たれる炎。熱風が押し寄せる。死んでいるかもしれない身だが、死を覚悟した。

鼻の粘膜が刺激される焦げ臭さが漂う。瞑っていた目を開いた。炭になった木々が蒸気を上げ、地面は焼き焦げ抉れ、周囲は惨状となっている。しかし私の体は無事だし、座っている場所も元のままだった。

私と竜の女との間、目の前にいつの間にか人が立っていた。位置的に、私を助けてくれたらしい。フードのついた麻のマントを被っており、背を向けられていることもあって顔は見えない。シルエッ

トは小柄だった。

「しつこいなあ、またあんた？　今日は私用で来ただけで、村に手を出してないよ」

「こちらも今日は私用よ。でも、私も彼に用事があるから、結局いつものように邪魔をすることになるのかしら」

発せられた声は女性のものだった。感情の起伏の少ない声。

「あんたもこの男を？　どっちにしろあたしの獲物だから渡さないけどね」

竜の女は返事をしながら右腕を突き出した。半ばまで曲げた指先に五つの火の弾が浮かび上がる。放たれた五つの炎が、フードを被った女目がけて弧を描いて飛んでいく。

「あなたが用件を済ませたら私の用件を済ませられないし、私が用件を済ませば多分あなたは用件を済ませられない。……勝手に貰っていくしかないよね」

フードの女もマントの隙間から左腕を出して伸ばした。細くて華奢な腕は綺麗な白い肌をしていた。こちらは指先に五つの水の球が浮かび上がる。放たれた五つの水流が弧を描く。火と水がぶつかり、熱い水滴を四方にばらまいて相殺した。

「さすが四柱の魔法使いの一人なだけあるね。——これならどう？」

竜の女が口角を歪め、大きく足を振り上げてから踏み鳴らした。彼女を中心に、焦げた地面にひびが入り、広がっていく。割れた地面から熱気が噴き出した。

フードの女が宙で指を走らせると、正面に水色の光の線が現れた。円を基調とした模様が描かれていく。

「広やかにみなぎり渡る大気よ、冷気をたつぷりと吹き入れよ。水気を含んだ霧の棚よ、漂い来たって辺りを巡れ。水よ、したたり、ざわめき、雲よ、捲き起れ、——虚妄の炎の戯れは一条の稲妻の光に」

言い終えた瞬間、周囲の気温が一気に下がった。いつの間にか晴れていた空も雲行きが悪くなり暗くなっている。

一歩足を動かすと、しゃくしゃくと音がした。霜だ。地面が凍りついている。フードの女を中心に、地面のひび割れが閉じていく。静けさが戻った。

気候を変える魔法を使い、竜の女とやり合えていることから、かなりの腕の魔法使いであることが分かる。助けてもらったのはありがたいが、私に何の用があるのだろうか。それに気になるのは、光で描かれた魔法陣と詠唱だ。彼女が使ったのは魔術ではないのか。

「仇敵に宿敵、最高にテンションが上がるよ。久しぶりに全力を出してもいいかな、いいよね！消えるなら今のうちだよッ！」
「一人では退かないわ」

淡々と答え、魔法使いの女が両手でフードを脱いだ。上品で落ち着いた顔立ち。黒髪を後ろでまとめたハーフアップ。声のイメージと無理なく一致する。

彼女の周囲に水色の光を放つ魔法陣が浮かんた。魔術をかじっただけの私でも、とてつもない情報量を持った魔術を使おうとしていることが分かる。

「ああそう。それなら塵も残さず消えて」

冷たく言い放ち、竜の女は腰を落とした。腕を地面に付き立てた彼女の姿が歪んでいく。

「……クオツネルガ紅蓮桜花!!」

押し出された空気が熱気を帯びた風となって吹き寄せる。炭になった木や草が崩れ落ちて散り散りになった。女の周りの大気が光を発している。可視化する熱量、プラズマ。千度を超える融点を持つはずの土が赤熱し溶け始める。地面が沈み込んでいく様は、まるでメルトダウンでも起こしているかのようだ。

「馬鹿力ならぬ馬鹿魔力、か。あればかりは対抗策が無いのよね。
——悪魔さん、ごめんなさい。一人では退かないけど、二人で退かせてもらうわ」

さらに彼女は時々刻々と模様を変えていく魔法陣を展開し、見たことがない詠唱方式を使い始めた。とつくに私の理解の範疇は超えていた。

「瞬間に向かって私は呼びかける。時間よ止まれ、お前は美しい」

悪魔に負けを宣言する、あまりに有名な一言。竜の女を囲って、地面から五本の氷の柱が突き上げる。瞬間的に、発せられていた熱気と光が消滅した。凝結した水蒸気がきらきらと輝いている。絶対零度——分子の振動を含むあらゆる運動が停止する。まるで空間の凍結。三十秒間世界が止まった。

「さあ逃げましょう」

私に向かってかけられた声は、日本語だった。

0104：扉で隔てた世界

私は再びフードを被った女の後について、森の中を歩いていた。オフィオモルフオスの襲撃に、ルミソヤさんに見捨てられたこと、目の前を歩いている魔法使い。一日で色々ありすぎて頭はパンク寸前、体は鉄の血でも流れているのかというくらい重い。それでも気合を入れる意味合いもこめて口を開いた。

「放ってきましたけど、あの子は大丈夫なんですか？」

あの子とは、魔術をもろにくらって空間ごと凍結されていた悪魔のことである。内心大丈夫でないことを願っているが、かわいそうな気もする。

「あの化け物があれくらいでくたばるわけじゃない。今頃かんに怒って私達のことを探してるわ」

さも面白いことを話すかのように、女はけらけらと笑っていた。聞き間違えというわけではなく、彼女は普通に日本語を使っている。トラウマになっていたようで、再び悪魔と遭遇する現場を想像して背筋がぞつとした。目の前の大魔法使いにここまで言わせるとは、彼女が桁外れの強さを持つていることを再認識せざるを得ない。

黙々と獣道を歩く。広葉樹に囲まれた景色が続くこと数時間、さつきから延々と歩いているのは同じ道で、全然進めていないのではないかと思いはじめている。時間は着々と進んでいるようで、日が落ちかけ視界が悪くなっていた。

「これから、どこに連れて行かれるのか教えて貰えるんでしょうか

？」

駄目元で、なるべく下手に出て尋ねてみる。魔法使いに捕まった人間は蛙にされるか、肥やされてから釜茹でにされると相場が決まっている。いや、それは鬼婆だっただろうか。

「私の家——っていうか、何でそんなに脅えているのよ。私が人を喰う鬼にでも見える？　あと、そんなにかしこまらないでよ」

「はあ……」

ピンポイントな返事に驚き、気の抜けた返事をした。脅えているのは仕方がない。悪魔を往なした人間に身柄を拘束され、ライオンに捕らえられた後にハイエナに搔っ攫われたガゼルみたいな気持ちでいるのだから。

さらに森の中を歩いていると湖が姿を現し、ほとりに小さな家があるのが見えてきた。アフウシ村で一般的な土壁とは違う、古い木造の建物だ。三角屋根になっており、壁には格子窓まで設けられている。

女は家の前まで行くと、フードを下ろして振り返った。卵型の輪郭に大きな目。悪魔と対峙している時は気付かなかったが、かわい顔をしていた。落ち着いた雰囲気、私よりも少し年上に見せる。彼女は扉を開いて、中に入るように促していた。

「こういう時は——いらっしやい、だっけ？」

「ああ。お邪魔します」

先導されて家の中を歩く。外から見たとおり狭く、リビング兼キ

ツチン、寝室、トイレの三つしか部屋がないので、案内されるまでもなかった。

部屋の中を見渡してみて、ほとんど食器や家具が無いことに気付いた。見当たるのは、同じサイズの本がびっしり埋まった本棚。それから、格子窓から差し込んだ光が微かに碁盤目を作っている、何も載せられていない机。人が住んでいるにしては、あまりに生活感がなかった。

「あまり家に帰らないのか？」

「ん、ばれた？ もう少し上で生活した方がいいのかな」

女が喋りながら、つかつかとリビングを横切る。言っている意味が分からずに目で追った。

女は足を止め、本棚に手をかけて横にずらした。隠されていた壁があらわになる。現れたのは、木造の建物に不似合いな、鈍い光沢を放つ金属製の扉だった。女が扉横の小さな端末に並んだ九つのボタンを、ピッピッと電子音を鳴らして弾く。扉がモーター音を響かせて開いた。

ツツこみたいことが多すぎて逆に何も言えない。黙って女の後を追いつ、地下に向かって階段を降りていく。

再び鉄の自動扉を通る。その先にあったのは、金属の壁面で囲まれた部屋だった。蛍光灯。部屋の半分を占める、見たことのない計器。小さなスペースに収められたシャワーやキッチン。明らかにオーバーテクノロジーだ。何に使うか分からないものもあり、日本よりも高度な技術力かもしれないと思った。

女がモニターのたくさん並んだ壁の前の椅子に座った。私も促されて向かい側の椅子に座る。

「自己紹介がまだだったわね。私はアクツオハミアヂ・チヒロ。ア

クツオハミアチは無理やり名乗らされている名前だから、チヒロでいいわ。君は？」

アクツオハミアチ——日本語にするなら凄い魔法使い、といった意味だが、『フォン』みたいにドイツの貴族がつけたような称号だろうか。そういえば彼女は私に用があるとか言っていたくせに、一度も名前で呼んでいなかったことに気付いた。

「永田和真だけど、名前も知らないのに連れて来たのか？」

「名前が分かっていたいれば、もっと早く見つけられたんだろうけど。私は君がこつちの世界に来てから、ずっと探していたの」

私がアフウシの村に来てから半年は経った。徒歩圏内にいながら探すのにどれだけかかっていたんだろ。思ったことが顔に出ていたようで、片手間で、と付け加えられた。

「なんで俺のことを探していたんだ？」

「んー、後でいくらでも質問に答えてあげるから、とりあえず魔術を使ってみて」

やはり悪魔との戦闘で使っていたのは魔術らしい。疑問だらけになりつつも、言われた通りにするためにカードを取り出した。

「我は汝に啓示を与えるもの」

カードを表に返し、魔法陣を目に焼き付けて鏡を生み出す。思ったよりも小さく不安定なものになってしまった。今にも消えそうに、光の縁が揺らいでいる。チヒロは椅子から立ち上がり、鏡の中に映っている平らな地面を眺めていた。

「なるほどね。消していいわよ」

チヒロが再び椅子に腰掛けた。

「ここ最近の異変の原因はこれか。よくまあ、こんな『観測者』泣かせの魔術を使えたものね」

何が分かったのか知らないが、満足してくれたようだ。認識を止めて鏡を消した。

「……あんたは一体何者なんだ？　なんで日本語を話したり、魔術を使えるんだ？」

魔法が主体なはずのアフウシ村で魔術を使い、私が村に来たことを知っており、日本語を話し、文化レベルから乖離した生活を送っている女。私がここにいることと大いに関係しているようにしか思えない。

「私は大宇宙と小宇宙を繋ぐ扉の番人であり、観測者よ」

答えは難解な言葉で返ってきた。

「小宇宙っていうと、日本のことだよな？　大宇宙は確か……」

魔術用語に馴染みは無いが、確か面接の時に山下さんが口にしていた。いつの間にかだいぶ古くなっていた記憶を辿る。久しぶりに阿部警備の面々のことを思い出した気がする。

「——ええと、まだ根本的なことを理解できていないみたいね。君

「はここがどこだと思っているの？」

痺れを切らしたチヒロが口を挟んできた。

「地獄か、プレーローマ……？」

「なんでクエスチョンマークがついているのよ。それに地獄って！
一步で帰れる場所にいて、いつでも帰れたのに、自分がどこにいるかも知らないで半年も生活していたの？ それはまた、アハハ、
お腹が痛い……」

何がツボに入ったのか、チヒロは腹を抱えて笑っている。何で笑われているのか分からないので、少しイラッとした。

「それに、プレーローマ？ 何それ、何それ」

「何でもないから、さっさと正解を教えてください」

恥ずかしさで顔が熱くなったのを感じる。再びエアケントニスの連中に会うことがあったら、横面を思い切り殴ってやろうと決めた。

「ここは日本——を含めた君の住んでいた世界と隣り合っている世界。魔術の心得がある人間なら、大宇宙と呼ぶ場所よ」

「日本と隣り合った世界？ それだと、世界が二つも存在することになっておかしいだろ」

日本の隣は韓国か中国だ。それとも量子力学という重ね合わせみたいなものだろうか。彼女の言っていることが理解できない。

「おかしいも何も、存在しているのよ。君のいた世界とは異なる五次元座標を持つ世界、並行世界と言えれば分かりやすいかしら。多分他にも並行世界はたくさん存在しているんだろうけど、天文学的な

確率の偶然で、その中の二つが互いに影響を及ぼしあったの。だから二つの世界」

「……何となく分かったような、騙されているような。話を戻すとチヒロは二つの世界を繋ぐ扉を管理しているっていうことか？」

「そうそう、あの門のことね。他にも、ここにある装置を使って物質の行き来の監視をしているわ。だから両方の言葉を喋れて、魔術を使えて当然ってわけ」

彼女に指差された先には、ドーナツを立てたような奇妙な装置があった。下から太いコードが何本も伸びており、両脇のけったいな制御機器やタンクに繋がっている。門と言っていたので玄関にあるような扉を想像していたが、内外を隔てるどころか中央の大きな穴から向こう側の壁が見えている。

「元々この場所とはびきり奇跡の粒子——クチザムの濃度が高いから、頻繁に五次元間に揺らぎが生じて小宇宙と繋がっていたの。でも、それだと不可逆性により大宇宙から小宇宙への一方向にしか移動ができない。だからこういう装置を使って磁場で揺らぎを固定し、通過物にエネルギーを与えることで五次元間を行き来するの」

折角してもらった説明はよく分からないが、小宇宙と大宇宙を自由に行き来できるらしい。そこまで考えて、ようやく自分がここに連れてこられた理由が分かった。

「この穴を通れば元の世界に帰れるのか？」

「もちろん。今は電源が入っていないから無理だけど、稼働させてから通れば一步で日本に到着よ」

死んでいないことが判明し、さらに元の世界に帰れる方法まで分かった。これは嬉しい——ことなのだろうか。そういえば村で生活

している中で、元の生活に戻りたいと思ったことは一度もなかった。

「ん？　じゃあどうして俺は大宇宙に来たんだ。小宇宙から大宇宙への移動は普通は起こらないんだろ？」

大宇宙から小宇宙へ移動することは自然にあるらしい。阿部警備が退治していた化け物はその経路でやってきたのだろう。しかし私の場合、小宇宙から大宇宙への移動だ。この門を潜り抜けた記憶も無く、説明がつかない。

「ええ、机の上のコーヒーが勝手に温まってくくらいにおかしい事よ。でも最近その可逆性の崩れた移動が観測されていて、おかしいと思っていたの。そして今さっき、君の魔術を見て確信したわ。和真君、君が原因だったのね」

チヒロは興奮した様子で私を指差していた。この二人の間の温度差も不可逆なのだろうか。

「全然分からないんだけど、俺は飲み物を温められるっていう話？」「違う違う。君の魔術は例外中の例外ってこと。側面が隣の世界と繋がっているから、門なんかを介さなくても、自分で行き来ができるの！」

チヒロの言葉を思い出す。『一步で帰れる場所にいて、いつでも帰れたのに、自分がどこにいるかも知らないで半年も生活していた』。チヒロの笑っていた理由がようやく分かった。

「お騒がせしました。とりあえず、一旦帰るわ」

椅子から立ち上がり、頭を下げた。チヒロがいなければずっとアフウシ村で暮らしていたかもしれない。いや、あそこは追い出されたから、大宇宙のどこか違う場所か。

「ちょっと待って。君、誰かから魔術を受けているでしょう」

チヒロも立ち上がり、私の眉間に指を押し当ててきた。

「夢を司る記憶のシナプスが遮断されてる。えげつないことをする人がいるものね。心当たりは？」

「記憶の封印、あいつか……」

移送されていく際に口の端を歪めていた菅原樹の顔が浮かんだ。青木さんを手伝ったあの一瞬で魔術をかけられていたのかもしれない。

「はい、魔法をぶつけて打ち消しておいたわ」

そう言っただけでチヒロは指を離した。心なしかすっきりした気がする。再び頭を下げて彼女にお礼を言った。

「どういたしまして。一旦というか、もうこっちは来ないようにね。今度来たら凍らせてオイクオツ湾に捨てるわよ」

チヒロは怖い笑顔を浮かべて手を振っている。観測者の立場として、気ままに世界を行き来されるのは許せないのだろう。

日本に帰る覚悟を決めた。彼女に背中を向け、ポケットからカードを取り出して詠唱を始める。

「星煌く天は我が顔、海は我が胸、大地は我が足、風が充たすは我

が耳、輝く光を遠矢に射る太陽は我が目なり。我は汝に啓示を与えるもの」

カードを表に返して、魔法陣を目に焼き付ける。宙に鏡が現れた。完全に詠唱を行ったにもかかわらずサイズは小さく、さらに面が揺らいでいる。本当にくぐって大丈夫なのだろうか。そうこう考えているうちに光が縁に偏り四散した。

背後から糾弾するオーラを感じる。気まずい思いをしながらチヒ口の方を振り返った。

「ええと、魔法陣を見せてもらえる？」

促されてカードを手渡した。彼女は魔法陣を見た途端に眉間にシワを寄せていた。

「何、このお粗末な魔法陣は。魔術すらろくに使えないの？」

「まあ、うん。教えてもらう前に、ここに来たから。……でも魔術を使えなくても、その扉を通れば帰れるんだろ？」

ドーナツみたいな機械を指差して言った。

「異分子をそんな状態で放置していたら、観測者の名が泣くわ。決めた、しばらくは魔術の指導に当てる」

チヒ口は大きなため息と共に、とんでもないことを口にした。魔術を教えてもらえるのは素直にありがたいが、大魔法使いが先生とというのは未熟者にとって荷が重過ぎる気がする。まあ、どちらにせよ帰るには魔術を使いこなすか、彼女に門を開いてもらうしかない。反対する権利はなかった。

「といっても、君達のところの魔術とは形式が違うから、あんまり上手く教えられる自信はないんだけどね」

「形式？　そういえば、模様が変わっていく魔法陣を使っていたよな」

悪魔との戦闘でチヒロが使っていたのは、時々刻々と模様がかわる水色の光を放つ魔法陣だった。阿部警備の面々で、そのような魔術形式を使っている人間は一人もいなかった。

「君が使っているのは、詠唱前にコンパイルを済ませたアヘッドオブタイム。そのカードや魔導書みたいに魔法陣は一定の形を保っているわ。安定しているけど、情報量に限界があるの。対して私が使っているのは、詠唱中にコンパイルを行うジャストインタイム。魔法で魔法陣の形を変えるから、より多くの情報量を詰め込むことができるの」

魔法と魔術のコンポジットということだろうか。かくして私はチヒロに魔術を教えるもらうことになったのだった。

翌日から早速魔術の練習が始まった。湖の前でチヒロと向き合っている。彼女はやる気満々で、身振り手振りで説明をしてくれていた。

「何で分からないのよ。こうすればそこがこうでしょう？　後はここをこうして、ここはこう。そしたら、ズバーッと」

「すまん、何を言っているのか全然分からない」

確かに、魔術は見て分かるものではないので、説明しづらい面がある。私も人に教えると言われても出来る気がしない。しかし彼女の説明はそれ以前の問題で分からない。

「今、失礼なことを思ったでしょう。仕方がないわね、面倒だけど口で伝える努力をするわ。——君の場合、奇跡の粒子の振動がインパルス入力になっているから、ラグで誤差が大きくなるのよ。魔法陣の切り替えは認識フレームレートに合わせる必要があるから、視覚の時間分解能0.001秒ごとのステップ入力で解決するわ。ただし応答性の影響があるから即応性を重視して補償して。それと周波数を可視光の405から790THzに抑える為に……」

チヒロの発した音が右の耳から左の耳へと抜けている。一分も聞かないうちに、脳のブレーカーが落ちた。

「すまん、何を言っているのか全然分からない」

「私こそ何で分からないのか分からないわよ。トロール級の馬鹿なの？」

チヒロは手の平を上に向けて降参のジェスチャーをしていた。馬鹿にされても、不思議と頭にこなかった。何故なら分かっただけだからだ。この目の前の女、天才と呼ばれる部類の人間らしい。

魔術の前に、お互いを理解する努力は昼まで続いた。

昼食を摂ることになり、チヒロはパンに野菜を挟んだ手間のかからない調理を始めた。キッチンにヤ。ザキ印のビニール袋が捨てられているのは見なかったことにしておく。私は湖畔にテーブルと椅子を運び出していた。

羽音が聞こえ、葉々に囲まれた空を見上げた。一面薄水色の背景に、翼の生えた大きな影が浮かんでいる。――悪魔との遭遇に酷似している。脳が警鐘を鳴らしているが、体は震えているばかりで動いてくれなかった。

私の前に男が降り立った。手足が長くすらっとした体形をしている。背中には、宝石のような光沢を放つ緑色の翼。肩まで届く、色素の抜けた灰色の髪は、後方にたなびく羽飾りで彩られていた。

黒色の瞳と目が合った。眉一つ動かさず動じておらず、こなれた感じの印象を受けた。

「――こんにちは」

男が微笑んで挨拶をしてきた。発しているのはアフウシの言語だ、頭を切り替える。

「こんにちは」

男はゆったりした服を纏い、胸当てと脛当ての金属を身に着けている。こちらの世界の軍人のような立場の人間だろうか。鎧には蛇かトカゲみたいな紋章が刻まれていた。

「アクツオハミアチはいらしゃいますか？」

聞き慣れない言葉だったが、昨日チヒロが口に使っていたのを思い出した。彼女の客のようだ。

「中にいると思うけど」

家の方を振り返りながら答える。丁度扉が開き、チヒロが昼食を持って外に出てきたところだった。

「あら、珍しい客ね。元気にしてた？」

チヒロは私達のところに歩き寄ってくると、パンの載った皿を机の上に並べながら男に話しかけた。

「ええ、お陰さまで。……とうとう弟子を取られたんですか？」

男の目はこちらに向いている。とうとう、なんて言うということ
は、今まで弟子を取ったことはなかったのだろ。自分が特別駄目
な生徒だと思っていたので、少しだけほっとした。

「弟子とは違うわ。何だろう、アレ、そうアレ、旦那よ」

「そうでしたか。おめでとございます」

チヒロは意味の分からないことを言い始めた。男も男で、素直に
納得している。

「誰が——」

否定しようと口を開いたが、言い終える前に袖を引っ張られ、家
の陰に連れて行かれた。

「いなくなるあんたはいいでしょうが、弟子を取ったって分かると
魔法使いは色々と後が面倒くさいのよ」

チヒロは遠い目をしている。夫婦の仲を偽ってでは、どのみち
後々面倒くさいことになりそうだと思うのだが、お世話になってい
る立場なので黙って彼女の言うとおりに演じることにした。

「ラワケラムウの騎士団長を勤めております、ルクアです。以後お見知りおきを」

「よろしく願います」

男と挨拶を交わした。王都ラワケラムウといえば、アフウシ村でも名の知れていた大都市だ。その騎士団長となれば、相当なお偉いさんではないのか。何故こんな辺鄙な場所にいるのか不思議に思った。

「それでアクツオハミアチ、早速ですが任務です」
「だろっね」

チヒロは諦めたようにため息をついていた。

手早く昼食を済ませて建物の中に入った。三人でテーブルを囲み、任務とやらの話を始めた。

「王都の外れで、民間人がアンフィスバエナに襲われるという事件がありました」

「久しく聞く名前ね。でも、あれはこの辺の生き物じゃあないですよっ?」

早速置いてけぼりである。とりあえず真摯な顔をして頷いてみた。

「いえ、ラワケラムウの南西にあるボギ砂漠に生息しています。どうやら個体数が増えすぎて、人の住処にまで生息圏を広げているよ

うなのです。王からは、ボギ砂漠のアンフィスバエナの数を調整し、可能なら爆増した原因を突き止めるように指令が出ています」

「居候にドラゴンを任せますか……。ますます遠慮がなくなってきたわね」

チヒロが苦笑いを浮かべている。ルクアはそれを申し訳無さそうな顔をして見ていたが、言いくそくに、ゆつくりと口を開いた。

「——何故そんな悪条件を呑んでまで、この土地にこだわるのですか。余計なお世話かもしれませんが、あなたほどの魔法使いであればどの国でも歓迎されると思います」

「あなたみたいな立場の人がそんなこと言っていることが知れたら問題になるわよ」

チヒロは責める様子ではなく、冗談のように軽い感じに返した。ルクアも表情を和らげる。

「そうですね、聞かなかったことにして頂けると助かります」

「はいはい」

この家には世界を繋ぐ扉があるので、観測者は土地を移ることはできない。話を聞く限り、どうやらチヒロはこの場所を使わせてもらうことと引き換えに、ラウケラムウの王に従っているようだった。

詳細を詰めるための話が終わり、ルクアが席を立った。チヒロと私も立ち上がる。

「当日は私も一緒にさせていただきますので、よろしくお願い致します」

「それは心強いけど、騎士団長様が街を空けて大丈夫なの？」

「ご心配なく、優秀な部下を残しておりますので」

『優秀な部下』に心当たりがあるようで、チヒロは納得した様子で頷いていた。

「分かったわ。よろしく」

「準備が整い次第、車で伺います。では失礼して、早速報告に――」

ルクアは言いかけてから、思い出したように私の方を振り向いた。

「旦那さんはどうされますか？ 共に向かうようであれば、手配を行います」

誰も言葉を発せず、気まずい空気が漂った。二人の顔を見比べ、聞かれているのは私だと気付いた。

「俺も行った方がいいのか？」

行っても足手まといにしかねない気がするので、チヒロに尋ねる。

「留守番中に悪魔さんが来たらよろしく伝えておいてね」
「行かせて下さい」

選択肢は無かったようだ。

0105：見えない脅威

ガラガラと一定のリズムで鳴り続ける音。私は板を張り合わせた壁で囲まれた空間に座っていた。隣にはチヒロの姿もある。

突然尻に直接伝わってきた衝撃に、思わず声を上げそうになった。私達はボギ砂漠へ向けて車で移動している。車といっても電気やガソリンで動いているわけではなく、魔法で駆動している。乗客は長椅子の座席に腰掛けており、馬車のように運転手と壁で隔離される。乗った当初は、究極のエコ自動車だと騒いで喜び、対照的に嫌そうにしているチヒロを見て不思議に思っていた。しかし時折襲う衝撃を始めとした、お世辞にも快適とは言い難い乗り心地に閉口した。

「ここまで車体を作れる能力があるのなら、タイヤくらい作ればいいのに」

粗悪なものでも構わないからゴムで覆えば、木の車輪で走るより、よっぽど快適な乗り心地になると思う。

「大宇宙は魔法が大いに発達した一方で、科学技術は小宇宙よりまだいぶ遅れているのよ。小宇宙だって、まともな工業用のゴムができたのなんて、つい150年くらい前じゃ——」

再び地面を通して伝わってきた衝撃で、チヒロが言葉を切る。

「今日はルクアさんも来るんだよね？」

「あいつなら、飛んで一足先に行くって言ってたわ。それはそれは快適な旅路でしょうよ」

恨みのこもった肩を震わしている。さすがに大魔法使いでも空を飛ぶことはできないらしい。

しばらく無言で車に揺られていたが、チヒロが再び口を開いた。

「目的地に着くのは昼頃になりそうだけど、魔術の特訓でもする？」
「車の中は、さすがに勘弁して欲しいな……」

サスペンションなんて概念のない車体は、上下左右に激しく揺れている。魔法陣を見ただけでも酔いそうだ。

「ひ弱ねえ。まあ、ここで変わり果てた朝食を見せられても困るし、いいんだけど。ならせめて、暇つぶしくらいにはなってくれる？」
「話をするくらいならな。でも、大した経験してないから、チヒロの冒険譚を聞く方が面白いと思うんだけど」

昨日のルクアとの会話から垣間見れるだけでも、かなりの数の任務をこなしてきたらしい。あの強力な魔術を活かして各地で活躍してきたのだろう。

「私の任務の話なんて、どれも順調すぎて起承結で終わるわよ」

誇張ではないのが分かってしまうので、返答に詰まる。天才はこれだから困る。

「つまらなくても聞いてあげるから、どうして魔術を使うようになったのか話してみなさいよ。小宇宙じゃあ、クチザムの扱いを知っている人間も珍しいでしょう」

目的地に着くまでの間、阿部警備の皆との出会いや、エアケント

二スとの戦闘、大宇宙に来てからの話をしていた。チヒロは宣言どおり、つまらなそうな顔をしつつも相槌を打ちながら聞いていてくれた。

車が止まったようで、揺れが収まり静かになった。前の小窓から運転手が顔を出し、着いた旨を伝えてきた。チヒロが開いた扉から勢いよく乾燥した熱気が押し寄せてくる。彼女の後に続いて車を降りた。

まず目に映ったのは、延々と続く黄色い地平線だった。地面は乾いた砂で覆われ、草がまだらに生えている。波打つ模様は、石庭の白砂のように人がわざわざ手を加えているのではないかと思ってしまうほど整然としていた。こちらの世界ならそれもありえるかもしれないと、隣の人間を見て思ったりする。

ここが王都ラワケラムウの南西、ボギ砂漠。

「どうした？」

チヒロは車を降りてから、ずっと難しい顔をして辺りを見渡していた。ルクアを探しているのだろうかと思いつつも、尋ねた。

「なんかこの辺り、魔法臭くない？」

「別に何の匂いも——というか、魔法って匂いがあるのか？」

砂漠のものらしい甘ったるいような匂いは漂っている気がするが、魔法の匂い（？）は分からなかった。

「クチザムのざわめいている感じが、五感に例えるなら匂いに近いのよ。魔法が使われている気配というか……。多分、気のせい。こ

めんね、とりあえず村に行ってルクアと落ち合いましょう」

チヒロが歩き出した。天才の言うことは、全く分らない。冷たい視線を背中に浴びせながら、後をついていった。

灼熱の砂漠の中を進んでいく。チヒロの用意していた黒い布をすっぽり被っているが、それでも体がじりじりと焼かれていく。魔法で涼しくしてくれと頼んだが、小宇宙での怠惰な生活についてぐちぐち言われる羽目になった。

点々と生えていた草も見えなくなり、景色は見渡す限り砂になった。平坦だった地面には砂丘が増え、より歩きにくくなっている。目印になるようなものは太陽くらいしかなく、曇りの日には確実に道に迷うと思う。

しばらく歩いてみると、再び草の生えた一帯に辿り着いた。水辺を囲んで、窓のない土壁の家が並んでいる。オアシスのようだ。歩き疲れていたので、ほっとして気が抜けた。

数匹の羊を連れた村人と入れ違い、村に足を踏み入れた。結局、アンフィスバエナを見ることなく村に着いてしまった。本当にここに大量の竜が生息しているのだろうか。

村の中を歩く。小さい村なので余所者が珍しいのだろう、村人達は私達のことを目で追っていた。すぐに、背中に緑色の翼を生やした男を見かけた。東京駅にいても一目で分かるくらい、よく目立つ。

「ご無沙汰しております。本日はよろしく願います」

ルクアも私達に気付き、手の甲を見せた。

とりあえず情報を交換することになった。空から来たルクアも、

アンフィスバエナの姿を見ることができなかったらしい。竜なんていないんじゃないかという空気が漂う中、村人に聞き込みを行うことになった。

最初のターゲットは、家の軒先でブラシの手入れをしていた女性である。チヒロに肘でつつかれ、何故か私が尋ねることになった。魔術の指導料として、大人しく従っておく。

「こんにちは。少しお尋ねしたいんですが、こちらでアンフィスバエナをよく見るスポットってありますか？」

「よく見るスポットですか……。そもそも滅多に姿を現しませんからねえ」

一応いることは、いるようだ。次のターゲットは、馬につけるような鞍を作っていた男性である。

「アンフィスバエナって知ってます？」

「ああ、もちろん。昔は砂漠のあちこちにいたが、最近はめっきり数が減ったな」

むしろ生息数は減少しているらしい。その後も聞き込みを続けたが、有力な情報は得られなかった。

池のほとりで休憩しながら、今後の方針について再び話し合った。砂辺に複数の窪みがあるように見えたが、見直すとやっぱり無かった。

「本当に増えすぎて生息圏を広げてるの？　生き残っているのかすら怪しい気がしてきたわよ」

苛立った様子で腕を組んでいたチヒロが口を開いた。

「おかしいですね。報告が間違っていたのでしょうか」

ルクアも任務の確認をしに、王都に戻ろうかと漏らす。最後に、村を出て周辺を探索することになった。

オアシスを離れ、殺風景な砂漠を進む。何気なく振り向き、地平線を眺めた。自分が空気に溶け込んで広がっていくような、どこかで経験したことのある感覚がある。チヒロの言っていた魔法の匂いとかいうやつだろうか。

「ぼおっとしていて、迷子になっても知らないわよ。夜になると一気に気温が落ちて危ないんだから」

呆れた顔をしたチヒロが声をかけてきた。手を合わせてゴメンのジェスチャーをすると、ルクアが微笑ましい表情を浮かべた。

チヒロの背後に、何かが見えた。一面黄色に染まった地面に、塗り忘れられたように黒い点が映えている。よく見ると、脈打つように微かな伸縮を繰り返す物体が砂の中から覗いていた。

「まあ、立ち止まってる。いい加減、置いていくわよ」

「待って、何かがそこにいるんだ！」

黒い物体に走り寄り、屈む。遠くからは円盤状に見えていたが、地面を掘るにつれてラグビーボールみたいな形状が露わになった。

柔らかくてざらざらした皮の表面には、短い産毛のようなものが間隔をあけて生えている。地面から掘り起こされたのは、大きな芋虫だった。

「これがアンフィスバエナか？」

手足も尻尾もなく、どう見ても昆虫だ。しかし一応尋ねてみた。

「どこをどう見れば、それがドラゴンに見えるのよ」

幼虫をちらりと一瞥してからチヒロが答える。

「でも珍しいわね、ア・バオ・ア・クウーの幼虫よ。高い魔術抵抗を持っているから、成虫の甲殻は鎧に使われるわ」

ア・バオ・ア・クウーと呼ばれた幼虫を両手で持って抱き上げた。必死に体をよじって抵抗している。ぷりぷりした体。不似合いな小さすぎる頭。思わず抱きしめたくなる感情を抱いたこれが、萌えとかいうものなのではないかと思う。

「見てみるよ、なかなか可愛い顔をしてるぞ」

私が一歩近づくと、チヒロは一歩下がった。

「——ほら、このビーズみたいな目とか」

諦めずに二歩近づくと、三歩下がった。

「——ほらほら！」

それでも諦めずに走り寄ると、背中を向けて全力で逃げ出した。虫嫌いだったようだ。

「珍しいらしいし、持ち帰っちゃだめかな？」

「私を脅す素材にしようって？ いい度胸しているじゃない」

足を止めると、ようやくチヒロが戻ってきた。

「アンフィスバエナを釣る餌にできるかもしれませんね」

ルクアが真顔でとんでもないことを言い始める。チヒロも便乗して激しく頷いていた。

私は一人で砂漠の中を歩いている。小便をしたくなり、一時的に二人から離れた。いや、一人と一匹か。決着がつかずに保留扱いになったア・バオ・ア・クウーを胸に抱えている。

これだけ離れば、用を足しても大丈夫だろう。大人しくなっていた幼虫を地面に放した。虫は勢いよく頭を振って、場所を確かめているようだった。真似て周囲を見回す。やはりどこかで経験したことのある違和感がある。

砂漠に水遣りをしてから視線を下ろすと、あれだけ動き回っていた幼虫が固まって空を凝視していた。猫が宙を見つめるのは、幽霊が見えているからだなんてオカルト話もある。案外、ここに砂漠で亡くなった人の霊が浮かんでいるのかもしれない。

冗談半分で考えた一説によって、目の前の空間に張り巡らされた存在が揺らぐ。再び世界に境界が刻まれる。

——そして私は、目の前に立つ異分子を認識した。

大きさは馬程度。絹糸のような細い緑色の毛がびっしり生えた体。短い尾は地面と平行に伸び、スプリンターのように痩せた手足は四

本とも地面に接している。

首近くまで裂けた口には、びっしりと生え揃った牙が覗いていた。赤色の瞳に、不気味な縦長い瞳孔が浮かんでいる。オフィオモルフオスを想起させるその容姿は、間違いなくドラゴン。アンフィスバエナだ。

振られた尻尾の先に、アンキロサウルスのようにハンマーみたいなものがついていた。動きが止まり、ようやくそれが何か理解する。矢尻型をした竜の頭。こちらは小ぶりで、目が無かった。

「うお?!」

急に現れたので、驚いて後ずさりする。アンフィスバエナはじつと赤い瞳をこちらに向けていた。

竜が首をかしげながら、一步步近づいてきた。慌ててポケットからカードを取り出す。

「火から土を、粗雑なるものから精妙なるものを分離せよ!」

カードを表に返し、魔法陣を目に焼き付ける。宙に十の光が瞬き、一瞬で鏡が現れた。まずは一安心、先日は疲労のせいで使えなかったようだ

アンフィスバエナが地面を蹴って、跳ねるように側方に駆け出す。進行方向に先取りして鏡を撃ち出す。が、竜は予想以上に速度を上げており、四本指の足型がついた地面を穿った。手を振りながら撃ち出した最後の鏡も頭を下げて避けられた。

アンフィスバエナが姿に似合わないフットワークで私の横に飛び込み、頭を横に向けて口を開く。尖った牙が左右から迫る。全一瞬の出来事だったが、幸運にも反応でき、膝と腰を落として屈んだ。ねっとりした臭い液体が頬に垂れる。

「――我は汝に啓示を与える……」

勢いよく口を閉じた竜を、頭の下から見上げる。首がから空きだ。鏡を生み出そうと、カードに視線を移そうとした。

「……もの？」

気配を感じて背後を振り向く。口を開いた小さな頭がこちらに向けられていた。尻尾の先につけられた第二の顔。口から紫色の気体が噴出した。

気体は私の前で拡散せずに、元来た方向に押し返された。一緒にアンフィスバエナも仰向けに吹き飛ぶ。

「気をつけてください、あの尾から吐き出されているのは猛毒の霧です」

「ルクアさん！」

声のした方に立っていたのは、ルクアだった。助けてくれたらしい。至近距離で目に焼きついたあの気体が猛毒だと分かり、背筋が凍った。

「間に合ってよかったです。用を足すのには遅かったので、様子を見に来ました」

アンフィスバエナが飛び起き、甲高い声を上げて突進してきた。ルクアは黙って懷から小さな剣を取り出し、逆手に構えて姿勢を低くする。

ルクアの姿が消えたのと同時に、強風が吹き寄せた。反射的に手をかざしたが、すぐに風は収まった。

気付けば、アンフィスバエナがいたはずの場所にルクアがいる。竜はどこに行ったのだろうか。辺りを見回して探すと、離れた地面で倒れていた。胸部から鮮やかな赤色の血が流れ出している。多分彼が竜以上の超高速で走り寄り、あの剣で斬りつけたのだろう。

「すごい……。魔法ってあんなこともできるんだ」

「あれは魔法じゃなくて、ルクアが血を引くウィツイロポトリがもともと持っている身体的な力よ」

声のした方を向くと、チヒロが立っていた。

「もつとも、音速に近いスピードから体を守るために、魔法で風を纏っているんだけどね」

竜の体力は大したもの、アンフィスバエナがなんとか体を起こす。既に傷口が塞がり血が止まっていた。ルクアが再び冷静に短剣を構える。一人と一匹の間の実力差は大きい、次で終わるだろう。

超高速の移動は、相手の攻撃を避けるだけに止まらない。攻撃を確実に当てることができるし、攻撃のエネルギーは速度の二乗に比例する。攻撃は最大の防御とはよく言ったものだ。

「そろそろ出てこられてはどうでしょうか？」

ルクアが辺りを見渡しながら言った。誰に話しかけているのかと不思議に思ったが、砂丘の陰から大勢の村人達が現れた。

村人の一人がアンフィスバエナに歩き寄り、首に腕を回した。竜が応じるように目を閉じ、口先で彼女の頭に触れる。体を上下させてあらぶっていた竜が一瞬で大人しくなっていた。

「ずいぶん大掛かりな演技をしていてくれないじゃない。お陰で人生の内五指に入る恥ずかしい思いをする羽目になったわ……」

チヒロが村人に近寄りながら話しかけた。女性は口をきつく閉じ、気丈な目をして見つめている。

「なんで村の人達がいるんだ？ それに演技って？」

二人も村人達も深刻な表情をしており、私だけ理解できていないようだった。

「私達はまんまと騙されていたの。入れ替わり立ち代り知覚阻害の魔法をかけられながら、竜の蔓延る砂漠を査察していたのよ」

知覚阻害――、視覚情報を改変する阿部警備の青木さんの魔術のような魔法だろうか。それを私達三人は村人からかけられ、アンフイスバエナが砂漠中にいるのにもかかわらず、いることを認識できなかった。村人に聞き込みも行ったが、そもそも全員が共犯なのだから正しい情報を得られる訳がない。砂漠に着いたのと同時に魔法の匂いがすると言っていた、あの時から村人の工作は始まっていたのだろう。

「でも、何で急に見えるようになったんだ？」

「魔法自体は弱いものだったから、何かきっかけが必要だったの。私達はある人が一人相撲しているのを見て気付いたけど、あんなの場合は元々似たようなことを経験していたし、その薄汚い虫のお陰でクチザムが免震作用を受けたからみたいね」

似たようなことは、魔術を学ばずかけになったた化け物を認識

した時のことだろうか。確かに言われてみれば、感じていた違和感
はあの時のものに似ていた。

改めてチヒロが村人の女性に話しかけた。

「アンフィスバエナの部隊を作って、王都でクーデターでも起こす
つもりだったの？」

「クーデターなんて、とんでもないです。私達はただ放っておいて
欲しかっただけなんですから——」

想定していなかった返答だったらしく、チヒロとルクアが顔を見
合わせた。

0106：疾走アクアライン

真つ暗な闇に映える、赤、白、黄、様々な色の光。海岸線に広がる夜景を望む。大宇宙の神秘的で豪快な綺麗さとはまた異なった、冷淡で繊細な綺麗さだ。ここは海上海中を通つて神奈川と千葉を結ぶ高速道路、東京湾アクアライン連絡道。

深夜で車がないことをいいことに、道路の中央へと歩み進む。私の足音に続いて、ネチャネチャとアスファルトを踏み鳴らす音が無数に聞こえている。振り向くと、三十二匹のアンフィスバエナと目が合った。手綱と鞍がつけられ、一匹に一人ずつ村人が乗っている。さらに後方には、緑の翼を生やした人型の獣まで飛んでいる。この世界にはあまりに似つかわしくない光景。できることなら、映画のワンシーンだと思つてしまいたい。

走り出すための準備が済んだようだ。腕を引つ張つて補助してもらい、村長の駆るアンフィスバエナになんとか飛び乗った。触れた部分から冷たさが伝わってきて、不思議な感じがする。しかし呼吸に合わせて腹が膨らんでおり、生き物に乗っていることを実感できた。

チヒロの乗った竜が近くに寄ってきた。彼女はたかだか三十秒で竜に乗る方法を学び、今も一人で手綱を握っている。

私達の乗る二匹の竜が先頭に立つ。これから始まるのは、二十キロメートルの行程の大名行列ならぬドラゴン行列。

こんな形でこちらに戻ってくるとは、予想だにしていなかった。時間は七時間ほどさかのぼる。

村人達の企みが判明し、私達は話し合うために村に戻った。今は村長の家にお邪魔している。机をはさんで座っているのは、村長と、

真つ先にアンフィスバエナに駆けつけた村長の娘、守備隊長の男である。だいぶ暗くなっていたので、村長が机の上に火を灯した。

「では改めて、なぜ我々にアンフィスバエナを見せないようにしていたのか教えていただけますか？」

ルクアが口を開いた。砂漠では、彼らは王都に反旗を翻すつもりだったのではなく、逆に放っておいて欲しかったと言っていた。真意を確かめる必要がある。

「では、私の口から話しましょう」

顔を見合わせアイコンタクトを送ってから、村長の娘が話を始めた。年齢は三十台半ばくらいだろうか。質素な感じの美人さんだ。

「どこから話せばいいでしょうか……。ああ、アンフィスバエナは元々、オスオブ半島にあるナカマルカ砂漠の生き物だったというのはご存知でしょうか」

「いえ、それは初耳です」

「私は一度本で目にしたことがあったわ。道理で、ボギ砂漠にアンフィスバエナがいると聞いて不思議に思ってたわけね……」

ルクアとチヒロが答える。私は場違いな気がして、机の隅で小さくなって口を閉じていた。

「ここにいるアンフィスバエナは全て、王都がボギ砂漠で繁殖させたものです。南の防御力が地形的に薄いので、ドラゴンを放つことで補おうと考えていたようです。この村は彼らを飼育するために作られました」

今となつては、村の人間以外の頭からは、そんなことは忘れられてしまったと付け加えた。

「最初のうちこそ嫌な仕事を押し付けられたと思つていたようですが、住民の考え方は徐々に変わつていきます。ドラゴン達と接しているうちに第二の娘、息子のように思えてきて、それは手塩にかけて可愛がり、役割を立派に果たしてきました。もちろん彼らの子孫である私達も同じ気持ちです」

部屋のあちこちに見える、ブラシや鞍、桶はアンフィスバエナのためのものなのだろう。人間の使うものと並んでいるあたりに愛情が見て取れる。

「しかしご存知の通り、アンフィスバエナの数には段々と増えていきますが、村人の数は減り始め、管理が行きとどかなくなつて事件を起こしてしまいました。それでも、全てのアンフィスバエナの所在場所を確認し、砂漠から出そうになった子は村に戻すように注意を払っていたんですよ？ それに――」

「今何匹いるの？」

チヒロが素早く口を挟んだ。娘はまだ言い訳を喋りたそうにしていたが、言葉を切つて答えた。

「三十二匹です」
「うへえ」

砂漠の面積に対して個体数が少ないように感じるが、足が速いのでその分、一匹一匹の縄張りが広いのだろう。チヒロとルクアの反応からして、相当多いようだ。

「その後、数を調整するように指示を受けた人間がこの村にやって来るといふ噂を耳にしました。その為、知覚阻害の魔法を用い、村全体で口裏を合わせること、アンフィスバエナはいないということにしようとしたんです。自分の都合で増やしておいて、自分の都合で減らそうなんて間違っています。私達はアンフィスバエナを守っていくつもりです」

話が終わったようだ。娘は木のカップに入った水を口に運んでいる。

「そんなこと言っても、被害が出ている以上なんとかしなくちゃいけないでしょ」

「人間には都心部に移ってもらい、アンフィスバエナの住処を広げてもらふ旨を記した請願書を提出するつもりです」

チヒロの問いに対して村長が答える。

「移る人間の気持ち云々を抜きにしても、今後も生息域は広がる可能性があるんだから解決策にはならないと思うけど……」

「私もそう思います。請願書の内容が実現される可能性も低いでしょうね」

チヒロとルクアが思いを述べた。私も彼と同意見だ。今まで忘れていた政策の産物を、今更人間よりも優遇するとは思えない。

「じゃあどうすればいいと言っんですか。あの子達の手数を減らすつもりなら、私達はあなた達と対峙することも辞しません」

あなた達という言葉の中に王都も含まれていることは、机の反対側に座っている彼らにも分かっているだろう。

「そう生き急がなくてもいいじゃない。こんなのはどう？　今回はあなたが折れて数を減らして、今後それ以上に数が増えないように生殖を制限するとか」

「そういう弱者や少数が被害を受ける考え方がおかしいと思います。生まれる命を人の手で制限するというのも、神に背く行為でありおこがましいですし」

また神か。村長の娘の言葉から、ルミソヤさんのことを思い出した。しかし理由を並べて神を否定しても、あの時の二の舞になつてしまい解決策にはならないだろう。神についてどうこう口にするとは思えなかった。

体感時間で二時間は議論が平行している。村に来てからずっと黙っていたが、とうとう耐え切れなくなり口を挟んだ。

「元々違う場所の生き物なんですよね。本来の居場所に返したらどうなんですか？」

「それもそうよね。あなたが達的にはどうなの？　離れたくないとか言い出すなら、議論を止めた方がいいと思うけど」

チヒロが尋ねながら、さりげなく釘を刺す。あちらも武力の衝突は避けたいと考えているはずだから、ノーと言わざるを得ないだろう。ひよっとしてこの女は、その提案を思いついていながら、誰かにトスを上げてもらうのを待っていたのだろうか。

「見くびらないで下さい、私達もそれを考えました。しかし、ナカマルカ砂漠との間には海峡があります」

村長の娘が机の上に大きな皮の巻物を広げた。フラクタルみたいな複雑な曲線が描かれており、アフウシの言葉で地名が書き込まれている。地図のようだ。王都ラワケラムウの南西、ボギ砂漠はすぐに見つかった。さらに、彼女に指差された先にナカマルカ砂漠の文字がある。確かに大きな海峡を挟んでおり、直線距離で行くのは難しそうだった。

「連れてくる時はどうしたんですか？」

「陸地を通ってきたようです。最初は数匹の幼体だけだったので」

娘が海岸線に沿って指を動かす。距離は倍近く長くなるが、行けないこともなさそうだ。

「迂回するとしても、王都を通らなければならないので、それだけの数のアンフィスバエナを連れて行くのは無理でしょうね。さらに王都を迂回しても、隣国との国境付近を通過しなければならない。余計な緊張を生まないためにも、それは絶対に避けなければなりません」

ルクアが冷静に呟く。さすが一国を守る騎士団長らしい意見だ。

「海峡を通ればいいんでしょう。私が海を凍らせるわ」

チヒロが海峡を通った直線に沿って指を動かした。こちらまさすが唯我独尊、自信過剰な意見だ。

「確かにそれなら——いや、アンフィスバエナは乾燥帯の冷血動物なので移動速度が大幅に低下するでしょうし、あそこは強い暖流がある不凍港ですから無謀でしょう」

「私は出来ると思うんだけど、あんたがそこまで言うなら、そんなんでしょねえ……」

さすがのチヒロも、ルクアの意見には閉口した。

こちらの世界では、全てのアンフィスバエナを積載できるような船は用意できないだろう。飛行機なんて尚更だ。こんな距離では橋も作ることはいかない。

地図を眺めていて、ふと疑問に思うことがあった。オスオブ半島の形、湾の窪み方がどこかで見たことのある地形に似ている。地図を凝視していたチヒロに耳打ちする。

「小宇宙と大宇宙の地形は一致しているのか？」

「だいたい同じよ。平行世界といっても、世界の始まり方は同じだったはずだから」

そう、王都周辺は南関東の地形と対応しているのだ。

「それなら、俺の魔術で小宇宙を通らせればいいんじゃないか？」

あっちの世界なら、ボギ砂漠からナカマルカ砂漠まで一気に橋が通っているはずだ」

「確かに新しいアイディアだけど、自分一人ですらまともに送れないでしょうが」

耳が痛い。しかしすぐに、小宇宙での魔術師見習いの経験を思い出した。

「お前が協力してくれたら、マルチスレッド協奏詠唱でいけると思う」

「協奏詠唱、ね。私の魔力を足せば少しはマシになるか。……分かった、やりましょう」

予想以上にすんなり意見が通ってしまった。チヒロが皆に話そうと息を吸ったので、思わず引き止めた。

「自分で提案しておいてなんだけど、平行世界のことって大宇宙の人間に知られても大丈夫なのか？ お前一応、観測者なんだろう？」
「何で？ 別に問題ないじゃない。それぞれの世界の住民の生活を守る方がよっぽど重要よ」

さも不思議そうに答えている。思っていた反応と全く異なっていたので笑ってしまった。

「お前のこと、頭が固い人間だと思ってたよ」

「土地に縛られてこんなことしているんだもの、間違っていないわ」

チヒロも苦笑いを浮かべている。目に付きにくく、車の走行量が減る深夜に決行することになった。

一旦解散した後も、私は一人で地図を眺めていた。ここは小宇宙という川崎の辺りで、ナカマルカ砂漠は千葉県南西の辺りである。これなら都合よくアクアラインが通っている。道は広いし、交通量は少ないし、アンフィスバエナ速度なら高速道の車にも見劣りしない。ジグソーパズルのピースのように、条件が怖いくらいピンポイントにクリアされていた。

「発案者がそんな不安そうな顔を見せるんじゃないわよ」

家の入り口を潜ってチヒロがやって来た。わざとらしい笑顔を見せてやったところ、鼻で笑われた。

「竜と騎手が集まったわ。始めましょう」

村長の家から出ると、既にアンフィスバエナに乗った村人達が池のほとりに集まっていた。

「アクツオハミアヂ、この作戦は本当に大丈夫なんですかい。世界が二つあるなんて、何度聞いても信じられんです」

守備隊長がチヒロに話しかけた。近くにいた村人達も大きく頷いている。ルクアや村人達に私達のことを簡単に説明したが、まだ半信半疑という人が多いようだ。

「そのもう一つの世界に、こんなことわざがあるわ。百聞は一見にしかず、ってね。腰を抜かさない程度に気合入れてついて来なさい」

そんな説得の仕方があるか、と思うが、村人は納得しているようだった。私はルクアを見つけたので話しかけに行った。

「遅くなつてしまいましたけど、昼間は助けてくれてありがとうございます」

「どういたしまして。あなたのことを不思議な雰囲気纏った方だと思っていました、違う世界の方だったんですね。それにしてもアクツオハミアヂの夫というのは本当だと思っていたので、そちらの方が驚きましたよ」

「本当ですか？ てっきりバレバレだと思ってたんですが……」

改めて思い起こしても、夫婦というよりただの主人と雑用係の関係だった気がする。ともかく、小宇宙に行くにあたって気にしていたことを伝えておくことにした。

「悪魔から聞いた話によると、獣の血が濃いと人間の姿を保てないみたいなんで、一応気にしておいて下さい」

「そうですか……。悪魔と違って私はクォーターなので、影響は多少違うと思いますが、分かりました」

ルクアとの会話を終わると、チヒロが話しかけてきた。

「マルチスレッド協奏詠唱を始めようと思うんだけど、準備はいい？」
「いつでも大丈夫だ」

魔法陣の描かれたカードをポケットから取り出した。村人達とルクアが不思議そうに眺めている。

「会得すべし、一を十とせよ。二は去らしむべし」

チヒロが宙に光の魔法陣を展開して詠唱を始めた。ジャストインタイムをかじった今なら、その凄さが分かる。耳をすませて裏返したカードに集中した。

「ただちに三を作れ。しからば汝、富むべし。四は手放せ。五と六により、七と八とを作れ。これ魔女の勤めなり。それにて成就疑いなし」

莫大な魔力が流れ込んでいる、気がする。深部に意識を傾ける必要がなく、高揚が始まった。

「九は一にして、十は無。——これぞ魔女の九々」
「——我は汝に啓示を与えるもの！」

チヒロの詠唱が終わった。カードを表に返し、魔法陣を目に焼き付ける。宙に現れた白い光の点が、四つの辺を形成しながら急速に広がる。一人で生み出すのとは比べ物にならないような巨大な鏡が地面と垂直に現れた。

碎けないように意識を向けながら、鏡に向かって歩く。鏡面には幅の広い片側二車線の道路が映っている。見えているのに触れた感覚が無い、気味の悪い思いをしながら通り抜けた。

「久しぶりの小宇宙だけど、感想は？」

現在地を確認しようと思ひ辺りを見渡していると、鏡の向こうからチヒロの声がした。

「何も変わってないな。……フライングだけど、ただいま」

万が一車と遭遇した時のことも考え、道路交通法に従って二列になって左車線を走る。すれ違ったとしても、大半の人間には認識することができないだろうが。ルクアはウィツイロポチトリの姿でしんがりを努めてくれていた。

「どうです、爽快でしょう？」

前でアンフィスバエナを御している村長が話しかけてきた。緊張ですっかり、乗り心地を確かめるのを忘れていた。心地よい間隔の揺れや、うごめいている筋肉を除けば、風を切って走る様はバイクに乗っているようだ。

「さすが速いですね。気を抜いたら振り落とされそうです」

「はは、気をつけてくださいね。まだ全速力の半分くらいのスピードですよ」

ようやくスリルを楽しめるようになってきた頃、進行方向にトンネルが見えた。村人から驚きの声が上がっている。トンネル自体見るのが初めてだろうし、それが海の中に潜っているのだから尚更だろう。

先頭を走っていた私の乗る竜が、ナトリウムランプの照らすトンネル内に突入した。

「真夜中だというのに、随分と明るいですね。四柱クラスの魔力の持ち主が管理しているんでしょうか」

「いや、こつちの世界に魔法は無いんですよ。これは電気って言うて、あつちでいう……雷みたいなものです」

「ほう、雷ですか。上級の魔法使いでないと扱えないと聞いています」

魔法が無いというのに魔法から離れてくれない。私の言語能力では説明しきれないことを悟った。

「毒ガスのような臭いがしますが……」

「排気ガスですね。説明する時に話していた、『車』の呼気みたいなものです。直接の被害があるわけじゃないんで、大丈夫ですよ」

言われてみれば、微かに胸が重くなるような臭いがしていた。解説しながら、常に空気の綺麗なところにいる大宇宙の人間にはきついかもしれないと思った。

「何の話？ 私も混ぜなさいよ」

チヒロの駆るアンフィスバエナが幅寄せし、並走を始めた。初めての乗竜とは思えないくらい自在に走らせている。

「乗りこなしてるな」

「ほとんど馬に乗るときと同じ要領よ」

そもそも馬に乗ったことがないので分からないが、そんなものなのだろうか。

「こんなところを阿部警備に見られたら、腰を抜かすほど驚くだろ
うな」

「もう見つかつてるわよ。あそこの本部にも、私の家にあるような
クチザムの計測器があるはずだもの」

「は？ 聞いてないぞ」

「そりゃ、話してないからねえ。知ったところで、先を急ぐ以外の
選択肢は無いでしょう。遭遇しなければ良し、遭遇したところで私
が全部蹴散らしてあげるわ」

どのみち引き返すという選択肢はない。やり込められたと思いな
がら走り続けた。

トンネルを抜け、再び橋の上に出た。行程の半分は越えただろう。
あとはオスオブ半島にあたる千葉県に上陸したところで、再び協奏
詠唱で出入り口を作って、全てのアンフィスバエナを大宇宙に戻す
だけだ。

進行方向に、道を塞ぐように横付けされたワンボックスカーが見

えた。このままではぶつかってしまふ。村長が止まるように大きな声で号令を出し、皆一斉に手綱を引いた。

白い車体の側面には、黒い文字で『阿部警備保障』と書かれていた。走り出してから車と会っていないので、目撃情報があったとは考えにくい。チヒロが言っていたようにクチザムの計測器のせいで見つかったのだろう。何事もなく終われば良かったが、こうなったら仕方がない。戦闘が始まってもいいように気合を入れた。

運転席と助手席のドアが開き、二人の男が降りてきた。二人とも髪をもつさり内側に巻いた、俗に言うキノコヘアをしている。体格も顔立ちもよく似ており、双子に見えた。

0107：モーセの双剣

慎重に腰を上げて、アンフィスバエナから降りてアスファルトの上に立った。同じく降りてきたチヒロと共に前に進み出る。

「兄ちゃん兄ちゃん、僕目がおかしくなったみたいや。人間が化け物に乗っ取るように見えるもん」

「阿呆、ほんまに乗っこんねん」

兄と呼ばれた男が、弟と思われるもう一方をスナップの効かせた手の甲ではたく。二人とも、Ｔシャツにジャケットを羽織ったラフな格好をしている。どちらも私達と同じくらいの年齢に見えた。

「なあ、あんたら神の使いかなんか？ あー、そもそも日本語通じとるんか？」

「俺は日本人だ。彼女も言葉が分かる」

日本語で返事をしてやると、二人は余計に怪訝な顔をした。

「なら、なんで化け物引き連れてツーリングしてんねん。さてはエアケントニスか？」

化け物のことを天使と呼び、歩み寄る姿勢を見せているエアケントニスの連中ならやりかねないと思う。しかし彼らと同じカテゴリーに分類されるのは心外だ。

「あんな奴らと一緒にすんな。俺は永田和真。普通の大学生だ」
「私は永田千尋。普通の観測者よ」

チヒロも私の自己紹介に続いた。こんな時まで夫婦ネタを引きずって苗字を合わせなくてもいいと思う。というか、普通の観測者とは何なのか一瞬考えてしまった。

「そっか。まあ、普通の学生は化け物に乗らんけどな。俺達のは――、どこまで説明すればええんかな。うちのことなんて知らんやろ」

兄が車の側面に書かれた『阿部警備保障』の文字を親指で指しながら喋る。突っ込みどころ満載なはずのチヒロのことは、見事にスルーされていた。

「いや、知ってるよ。面妖な脅威を滅ぼすことが生業、だったっけ？ 安倍晴明の『あべ』とかいう噂のある」

「なら話は早いわ。俺は阿部警備保障、川崎事務所の酒井ろ……す」

「同じく、僕は酒井れむ……や」

兄、弟の順で自己紹介をしてくれた。しかし威勢よく話し始めるのだが、二人とも名前を口にするにつれ尻つぼみになっていき、聞き取れなくなった。双子なので苗字で呼ぶわけにもいかず、折角名乗ってもらったのにお前と呼ぶのも失礼だと思う。仕方がないので聞きなおすことにした。

「悪い、酒井何だっけ？」

「六無琉洲と零無洲！^{ロムルス}^{レムス}そこは察して、二度も言わせんな！」

怒られてしまった。名前を聞いて歯切れが悪かった理由も分かり、申し訳ない気持ちになった。

「ここって日本よね。外国の名前をつけるのが流行っているの？」

知ってか知らずか、チヒロが追い討ちをかける。

「流行っているのとは違うかな。あれはドキュ——じゃなくてキラネームと言って、我が子に人と違う名前をつけたいという親心が生み出した、新しい日本の風物詩だ」

「真面目に説明すんな！ 悪かったな！ いっそDQNネームって言えや！」

アンフィスバエナを通させてもらう交渉をするつもりだったのに、すっかり逆上させてしまった。

「もう一度聞くけど、なんで化け物を引き連れてんねん」

「事情があつて、このドラゴンを全て橋の向こう側に送り届けたいんだ。街に害を為すつもりはないから、見逃して欲しい。なんなら、車で併走して確かめてくれても構わない」

六無琉洲と零無洲は顔を見合わせた。相談を始めるのかと思いきや、馬鹿にするように鼻で笑った。

「それは無理や。こちらは川崎周辺の管轄なんやけどな、この橋を通してしまうと対岸の袖ヶ浦の連中にえらく責められんねん」

「その人達になんとか説明するから……」

「無駄よ。こいつら、戦いが好きそうな顔してるもの。そうやって交渉したところで、何かと理由をつけて攻撃してくるわ」

食い下がって何とか交渉しようとしたところ、チヒロが口を挟んできた。

「よく分かつとるやないか」

六無琉洲が二本指を立てて左腕を上げる。胸ポケットから魔法陣の描かれたカードをつまみ出した。

「ルクア、アイスタリイ！」

チヒロがラウケラムウの言語で声を張り上げた。アンフィスバエナの群れの向こうから、猛スピードで影が飛び出してくる。

緑色の翼を羽ばたかせ、ルクアが私とチヒロの間に舞い降りた。巻き起こった風が吹き抜ける。

二メートルを超える巨躯は、青と緑の羽で覆われている。体の各部は、赤や黄や青の鮮やかな布や羽飾りで飾られ、頭部の羽飾りの間からは、鱗が生えたトカゲの顔が覗いている。人間の姿をした時の、大人しく優しそうな雰囲気とは異なった、怖そうで貫禄のある姿をしていた。

「えらいごつついのが出てきよったな。それもお前らの仲間か？」

「ああ」

「そんな悪そうな顔をしたやつは、どう見ても害を為す存在にしか見えん。全部排除させてもらうとするわ。……キュー・アール・ダブル」

六無琉洲が詠唱を始めた。チヒロの言うとおり、戦闘は避けられないようだ。

どんな魔術を使うか見当もつかないので、不用意に攻撃できない。私の魔術は攻撃力は申し分ないと思うのだが、カウンタータイプの魔術が使われたら、とてもまずいことになる。

動けない私に代わって、ルクアが地面を蹴った。飛び立ったかと思えば、羽ばたいて宙で反転した。まるで空を蹴ったようだ。地と空を使ったトリッキーな動きで突進する。あれではどこから攻撃が

出てくるか分からない。

しかし六無琉洲は落ち着いて、詠唱を続けながら拳を振り被った。

「エヌ・エヌ・ワイ・エイチ」

振られた鉤爪が、突き出された六無琉洲の拳に触れようとした瞬間、何か見えない力が働きルクアの体が弾かれた。強風が吹き抜け、私は思わず顔の前に手をかざした。

風が起こったということは、衝撃波だろうか。魔術にパンチという動作を組み込んでいるあたり、愛さんの十八番である、アッパーの衝撃を魔術によって転移させる魔術に似ている。

飛ばされたルクアが空中で体勢を立て直し、アスファルトの上に着地した。弾かれただけで、怪我はないようだ。

「うねれ、水の精ウンディーネ」

チヒロが走り出しながら、短い詠唱を行う。みるみる手の中に水が集まり、凝結して氷の槍になった。柄は身長ほどもあり、メインの短刀の横には二つの円弧状の刃が枝のようにつけられている。コルセスカとかいう西洋の槍だ。

六無琉洲はどちらかというところブロッカー寄りの魔術を使うようだ。恐らく零無洲がアタッカーであり、一人ではチヒロの攻撃を防げない。

零無洲の前に立つと、チヒロは腰を落とし、柄を長く持つて槍を引いた。零無洲がカードを目の前にかざす。

「ワイ・エイチ・ダブル・エイチ」

氷の槍が突き出される。甲高い金属音が橋の上に響き、氷の破片

が舞った。

「ちっ、外れか……」

私と同じことを考えていたようで、チヒロが舌打ちする。零無洲は無傷だった。盾で防がれてもしたかのように、槍の軌道がずらされていった。

こちらは山下さんの魔術に似ているが、威力を相殺するのではなく弾いていたので違う原理だと思う。

「キュー・アール・ダブル」

体勢を崩されたチヒロに向かって、六無琉洲が殴りかかる。こちらがアタッカーだったらしい。

「火から土を、粗雑なるものから精妙なるものを分離せよ！」

魔術の詳細は分からないが、跳ね返されることは無さそうだ。カードを表に返し、魔法陣を目に焼き付ける。宙に現れた十個の鏡を、拳を振り被っている六無琉洲に向けて同時に撃ち出した。

零無洲が六無琉洲の襟を後ろから引つ張る。一直線に向かっていった鏡は六無琉洲のいた場所を横切り、宙を切つて海の彼方へ消えていった。

「世話の焼ける兄ちゃんやな。キューエスエムエルワイティー」

零無洲がポケットからもう一枚のカードを取り出し、詠唱を始めた。

「すまん、油断した。キューエスエムエー」

六無琉洲も詠唱を重ねる。協奏詠唱だろうか。それとも別々の魔術を使っているのだろうか。

チヒロが肩幅に足を開く。氷の槍を片手で持ち、体重を後ろ足にかけ、腕をきりきりと引いて斜めに構える。

「ウンディーネは音を立てて流れ寄れ！」

全身のバネを開放し、六無琉洲に向けて槍を投擲した。手から離れた槍が、後方に幾重にも蒸気のリングを纏い、急加速する。

「ビー・アール！」

拳を突き出しながら六無琉洲が詠唱が終えた。目の前の空間の一部が歪む。全方向に向けて空気が弾けた。氷の槍も、一帯のアスファルトも粉々に砕ける。協奏詠唱による六無琉洲の大規模な魔術だったようだ。

チヒロが腹部をつかみ、苦痛の声を漏らしている。

「大丈夫か？」

「破片が当たっただけよ」

ルクアが地面を蹴り、再び攻撃を仕掛ける。

「キュー・アール・ダブル・エヌ・エヌ・ワイ・エイチ」

「ワイ・エイチ・ダブル・エイチ」

今度は単体の詠唱だった。ルクアが何者かに背中を押されたように六無琉洲の前に突き出され、六無琉洲がパンチと共にルクアを弾き飛ばした。

ルクアの巨体が回転しながら宙を舞い、壁を突き破って橋から落ちていった。間を空けて水音が鳴った。

「あいつなら飛べるし大丈夫よ。それよりあいつら、しょっぱい魔術でずいぶんと苦しめてくれるじゃない？」

チヒロが顔を寄せて、双子に聞こえないように話しかけてきた。彼らの使う魔術自体の火力は低い。しかしコンビネーションが抜群だ。各人の詠唱と協奏詠唱を混ぜてくるので、どちらから攻撃されるか分からず対応することができない。対照的に、魔術に頼っている私達のでこぼこ具合がはっきりしてしまっていた。

「せめてあいつらの魔術が分かれば、少しはまともな戦いになると思っただけだな……」

苦戦している原因の一つに、未だに彼らの魔術の詳細が分かっていないことも挙げられる。相手の立ち回りを予想できないので、作戦の立てようがない。

「ホントね？ それならリバーズエンジニアリングをしてあげるわ。適当に攻撃してあいつらに魔術を使わせて」

「リバーズ、何だそれ？」

「詠唱と魔法陣を解析して、相手がどんな種類の魔術を使っているのか特定する技術よ」

私の魔法陣は、青木さんが描いてくれたものだ。使用者だけのルールに則っているのではなく、誰の魔法陣にも共通したルールがあるのだとすれば、それを読み取ることによって範囲や対象、エネルギー源を推定できると思う。

「でも、そんな無茶な」

口で言うだけなら簡単だが、人の魔法陣ほど読み辛いものはないし、詠唱だって理解するには相手を超える幅広い知識が必要である。魔法陣のプロと言われていた青木さんですらしていなかったのだから、難しさは想像を超えていると思う。

「普通なら読み取り防止のためにパッキングしてあるけど、問題ないわ。私だもの」

しかし目の前の彼女も想像を超える天才だった。任せてみよう。ルクアはまだ上がってこない。魔術師見習いの私には荷が重いが、二人を相手にしなければならぬ。

「我は汝に啓示を与えるもの！」

狙うのは霊無洲の横、周辺を照らしている街灯。鏡が支柱を斜めに切断した。

「ワイ・エイチ・ダブル・エイチ」

零無洲が冷静にカードを目の前にかざして詠唱する。倒れ掛かった街灯が弾かれ、零無洲から逸れてアスファルトの上を転がった。ガラスが散乱する。

「……詠唱形式は『モーセの剣』、知識の扉」

チヒロは双子の様子を真剣な眼差しで見つめ、ぶつぶつ呟いている。

「キュー・アール・ダブル・エヌ・エヌ・ワイ・エイチ！」

六無琉洲が拳を振り被って襲い掛かってくる。地面を蹴って、横に身を投げた。私がいた場所のアスファルトが砕ける。

「同じくモーセの剣、輝ける右腕」

素早く立ち上がって次の攻撃に備える。頬をぬぐうと、破片で切れたように血がついていた。

「おまたせ、さすが私！」

テンションが高くなったチヒロが大きな声を出した。

「兄の魔術は空気の圧縮。アスファルトを巻き込んで圧縮したり、急速に戻るうとする力で攻撃を弾いたりしていたのよ。それに、弟は透過膜ね。物質が空間を出入りする際に、サイズによる制限を加えて攻撃を防いでいるわ」

本当に解読してしまった。それも短時間で。この女は、どれだけ人間離れしていくのだろう。

「へえ、驚いた。研究所の連中よりよっぽど優秀やないか。せやけど、それが分かったところで――」

六無琉洲が拳を握って走り出した。私は前に進み出ながら詠唱を行った。

「火から土を、粗雑なるものから精妙なるものを分離せよ！」

宙に浮かぶ十の鏡。今度は六無琉洲に向けて時間差で撃ち出す。六無琉洲は一つ一つの鏡を避けながら大きく後退して、舌打ちをした。

「零無洲は、質量のない俺の魔術を防げない。それに攻撃できるのは六無琉洲だけだから、六無琉洲の足を止めていけば『ほとんど』反撃されずに戦える」

「ぎりぎり合格点ね。『キューエスエム』から始まる詠唱は協奏詠唱だから、そっちにも気を払っていれば『まったく』反撃されずに戦えるわ」

私が誇らしげに宣告すると、チヒロが付け加えた。小夜詠唱で二
本目の槍を作っている。

「零無洲、アレをやる！ めっちゃド派手なのをな！——ゼット
アールワイキューワイ、ビール、ケーダブルイーワイエスダブルワイ」

六無琉洲が片腕を突き出し、詠唱を始める。今までのものとは違い、やけに情報量が多かった。

「これは……」

「エスエムエス、ビール、エスアールワイエーエス」

零無洲も詠唱を重ねる。またもや、協奏詠唱なのか別々の魔術なのか分からない。

とはいえ先ほど発覚したように、六無琉洲から離れてさえいれば攻撃を受ける心配はない。落ち着いて状況を見極めようとした。

「まずい、そこから離れなさい！」

「え？」

チヒロが私に向かって叫んだ。ぽかんとした顔をして返事をする。

「ビーデーイーエイチ、ビーアール、ゼット・ビー・イー・ゼット・エイチ！」

口の端を歪めた六無琉洲の顔が目には焼きつく。握られた手からオレンジ色の炎が噴き出している。揺らめきながら視界を覆っていく火の動きが、スローモーションに感じた。

耳をつんざく爆音。橋を覆う熱気。一瞬にして、アスファルトを半球状に抉る大きな傷跡が残された。

「ちょ、和真君?! そんな——」

チヒロが爆心地を見つめて呆然としている。そんな彼女の背中を、自分の葬式を見守ってでもいるかのような不思議な気持ちで眺めていた。

「ネサミムソモツナン」

何度もすみませんと、ルクアにお礼を言っただけで自分の足で立った。爆発に巻き込まれるギリギリのところで、ルクアが助けてくれた。

チヒロが声に反応してこちらを振り向いた。彼女の取り乱した顔を初めて見た。

「まったく、あんたは——」

「ゼットアールワイキューワイ、ビーアール、ケーダブルイーワイ エスダブルワイ」

チヒロの言葉を遮って、六無琉洲が再び詠唱を始めた。
どうしていいか分からず、とりあえず走り出す。チヒロが併走する。

「なんなんだ、あの爆発は？」

「透過膜で分子量の大きな分子を追い出して空間の水素濃度を上げてから、空気の圧縮で発火させたのよ。空間の爆弾つてところかしら。この辺り全てを対象にされたら、防ぎようがないわね」

「そんな？！ だいたいお前、阿部警備と会ったら私が蹴散らすとか言つてたのに、なんで今日はそんなに控えめなんだよ？」

「悪かったわね、クチザムの濃度が予想以上に少ないのよ。魔法と魔術の併用に慣れているから、魔術だけっていうのが苦手なの」

言葉を聞き終えた瞬間に足を止めた。チヒロも止まり、不思議そうな顔をしている。

「——我は汝に啓示を与えるもの。これでいいか？」

鏡をチヒロの上に展開した。大宇宙から、濃い奇跡の粒子が流れ込んでくる。

「その手があったのね、ありがとう。さてと、約束を果たすことにしましょうか」

チヒロが双子と向き合った。

「広やかにみなぎり渡る大気よ、冷気をたっぷりと吹き入れよ。水気を含んだ霧の棚よ、漂い来たって辺りを巡れ。水よ、したたり、ざわめき、雲よ、捲き起れ」

チヒロが詠唱を始める。水色の光を放つ魔法陣がいくつも宙に浮かぶ。

海水の水位がぐんぐん上がっていく。ついに橋の高さを越えて、両脇に水の壁を作り出した。壁の向こうに海草やゴミが浮かんでいるのが見え、かなり不気味である。

「なんや、これ?!」

「零無洲、お前の透過膜で防ぐんや!」

兄の言葉に反応し、零無洲が慌ててカードを目の前にかざす。

「無駄よ。車のバッテリー程度のエネルギーで、これだけの水の位置エネルギーを打ち消すなんて不可能なもの」

詠唱途中に口を挟んでいる。さすが天才だ。

「——虚妄の炎の戯れは一条の稲妻の光に」

海水を塞ぎ止めていた力がふっと消え、水の壁が合わさり呑み込んでいく。不思議なことに私やアンフィスバエナの方には水が流れてこなかった。

橋の上の水が全てはけた。進行方向には、横転したワンボックスカーが一台しか残っていなかった。

チヒロと協奏詠唱を行い、帰りの鏡を生み出した。小宇宙側で待機し、乗っている村人にお疲れ、と声をかけながら通過したアンフィスバエナを数える。

——三十二匹。無事全匹送り届けることができた。空が明るくな

りかけており、時間的に危ないところだった。

鏡の向こうは、既にナカマルカ砂漠の中だった。海岸まで黄色い砂が続いてる。

村人達が乗っていたアンフィスバエナの鞍と手綱を外していく。私も乗せてもらったお礼の意味もこめて、村長の作業を手伝った。村人達の真似をして、ぎこちなく竜の首を撫でる。滑らかな手触りで気持ちいい。

「ラノヤサ……」

村人達が口々にさよなら、と口にする。別れであることを理解しているのかは分からないが、アンフィスバエナ達は背中を押されても彼らの前から離れようとしなかった。

「ラノヤサ！」

村人が口調を強くする。アンフィスバエナ達は何度も振り返りながら走り去っていった。

誰も言葉を発しようしない。一定のリズムを刻んでいた波の音に、しゃくりあげる音が混ざった。つられるように次々に村人達が泣き出す。

本当にこれで良かったのだろうか。ボギ砂漠で人間と竜が幸せに暮らし続けることができる選択肢もあったのではないだろうか。神を否定したあの時のように、文化の違いを理解できずにまた失敗したのではないだろうか。

「あんたは、よくやったわ」

チヒロに肩を叩かれた。思っていたことが顔に出ていたようだ。

「私だけじゃ、小宇宙を使おうなんてアイディアは絶対出てこなかったわ。あんたは、よくやってくれた」

認めてくれたことが素直に嬉しかった。

「……ありがとう」

「さ、帰りましようか。ええと、この後は——」

チヒロは照れ隠しをするように、さつと背中を向けた。そして海の向こうを見つめたまま固まった。私もその行動の意味するところに気付き、固まった。

「そういえば、帰りのことまで考えてなかったな。足がないから、またアクアラインを通るわけにもいかないし、どうしようか」

「……訂正するわ。やっぱ、ただの馬鹿ね」

アンフィスバエナの件を解決してから一週間が経った。私とチヒロは、彼女の家の地下室にいた。

アンフィスバエナをナカマルカ砂漠に送ってから、三日間かけてボギ砂漠まで戻ってきた。残りの四日間は魔術の指導を受け、とうとう帰宅の許可を得ることができた。あの一件で彼女とスムーズにコミュニケーションをとれるようになり、最初の頃のぐだぐだな講習が嘘のように魔術を使いこなせるようになった。

「ありがとう。お世話になりました」

彼女に出会っていないければ、小宇宙に帰ることはなかったと思う。

言葉で伝えきれない分を補うように、深く頭を下げた。

「お世話しました。感謝しているなら、もう私の手を煩わせないでね。もう一度言うけれど、今度こっちに来たら、凍らせてオイクオツ湾に捨てるわよ」

「我は汝に啓示を与えるもの」

チヒロに背を向けた。カードを表に返し、自分で書き直した魔法陣を目に焼き付ける。数週間前とは比べ物にならない、揺らぎが少なく安定した鏡が現れた。

「——ずっとこっちの世界にいたら駄目かな」

顔だけ振り向いて尋ねる。

「わがままを言わない。君は偶然こっちの世界に来てしまったけれど、本来なら存在を知ることなく一生を終えなければならないの。君の居場所はあっちの世界なんだから」

彼女の言つとおりだ。諦めて前を向き、鏡を見た。

「……そうそう、これくらいなら持ち帰ってもいいわよ」

後ろから何かが差し出された。視線を移すと、ボギ砂漠の村から届いた手紙だった。

しばらく前に届いたもので、その時はチヒロが読んでいたのを横から覗いた。主に村の近況や今後の方針、チヒロに対する侘びの言葉が書かれていたが、私にも感謝の言葉が述べられており心が温まった。興味が無いふりをしていたが、ばれていたようだ。

「——ありがとう」

ポケットに大切に仕舞いこんだ。足を踏み出し、鏡面に体を埋める。そして大宇宙を去った。

0108：誰が為の力

大宇宙のチヒロの家同様に、様々な装置が置かれていた地下室を後にした。彼女が用意してくれていた服を着て、今は下宿先に帰るため電車で揺られている。

時刻は夜の七時。帰宅ラッシュで電車内は混雑しており、座席に座ることができなかった。カーブにさしかかり車体が揺れるたびに、周りの人と体が接触する。他人の耳毛がはつきりと見えるほどに、人と人との距離が近い。にもかかわらず、乗客達は周りに自分達以外の人間がいないかのように、思い思いに過ごしている。黄色い声を上げる女子高生の集団。携帯ゲーム機に熱中している学生。熟睡して隣の乗客の肩に寄りかかっているサラリーマン。とても近くにいるように見えて、繋がりはとても薄い。距離の取り方が親密さと比例していて、視界に入った全ての人に声をかけていた、村での生活との違いに戸惑った。

争いの無い世界、すべての生物が幸せに暮らすことのできる世界へと導くこと。それは半年前まで私が抱いていた夢だ。しかしその生物は干渉を守り、他人の幸せと不幸せに関わらないことが美德だと感じているようだ。世界が目指すべき夢ではなく、私だけの独りよがりな夢だったのかもしれない。

私が変わったのはこんな世界だっただろうか。今、あの時の思いを熱く語ることはできそうにないと思った。

下宿先のマンションに着いた。部屋が明け渡されている覚悟もしていたが、永田という表札は残っていた。ボロボロになった財布から鍵を取り出し、鍵穴に差し込んで回す。カチリと音がした。

玄関の中へ足を踏み入れる。懐かしいような馴染みのないような

臭いが迎えてくれた。暗くて中の様子が分からない。ドアの横にスイッチがあつたのを思い出し、押すと、まだ電気が通っていたように電灯がついた。薄っすら白く見えるほど床に埃が積もっている。半年以上あけていたのだから仕方がない。一段落ついたら大掃除しようと思った。

靴箱から取り出したスリッパを履いて廊下を通り、部屋の中に入る。家具の配置は変わっていないと思う。冷蔵庫の上で指を走らせると、摘めるほどの埃がついた。

しばらく心落ち着ける場所を求めるのは無理なようだ。せめて今日中に、寝る場所だけは確保したい。ベッドに近づき布団を剥がすと、黒く丸い物体が中央に乗っかっているのが見えた。

「なんでこんなところにいるんだ？」

布団がなくなったことで機嫌を悪くしたのか、その見覚えのある芋虫は体をよじっていた。ボギ砂漠で捕まえたが、アンフィスバエナと遭遇したことすっかり忘れてしまっていたア・バオ・ア・クウーだ。あの時より少し大きく見えるが、側面の模様から判断して同じ個体だと思う。

布団をかけてやると、大人しくなった。

「……なんでこんなところにいるんだ？」

自分に言い聞かせるように繰り返す。他の化け物と同じように、何らかの拍子に大宇宙から小宇宙へ送られてしまった可能性は大きい。しかし何故私の部屋にいるのだろう。

カーテンを開けると、窓の下半分が割れているのが見えた。進入経路は分かった。嗅いだことのある私の匂いを辿って部屋に入ってきたのかもしれない。

「ベッドに潜り込むとは、ちゃっかりした奴だな。もうこっちの世界に迷い込むんじゃないぞ。――我は汝に啓示を与えるもの」

カードに描かれた魔法陣を目に焼きつけ、壁の前に鏡を生み出した。布団をめぐって芋虫の背中を掴み、鏡の向こうへさつと放り投げた。

二つの意味でため息をつく。何日間この部屋にいたのか、シーツの上は糞で散々たる状況になっていた。

翌日、部屋の掃除は潔く諦めて学校に行くことにした。

教師と学生は、久しぶりの参加者を気にする様子もなく、淡々と授業を進めている。ここでも不干渉。すっかり授業は置いてけぼりにされており、留年を覚悟した。

「ひよつとして、永田か？」

授業が終わり一人残って板書を写していると、後ろから声をかけられた。聞き覚えがあり懐かしい声だ。

振り向くと、村田がだらしなく口をあけて私のことを見つめていた。

「おう、村田。久しぶり」

「――お前一体、どこに行ってたんだよ？ てっきり学校辞めたもんだと思ってたよ。家にも帰っていないみたいだったし」

隣の席に座った村田は、興奮した様子だった。

「色々と事情があつて、遠くに行ってたんだ」

「何だそれ。本当に心配したんだからな?!」

正直に大宇宙のことを話しても信じてもらえないだろうし、下手に化け物のことを伝えて認識できるようになってもらっても困る。

「ごめん。もういなくなることはないから、大丈夫だ」

チヒロにも止められているし、もう大宇宙へ行くことはない。久しぶりに思い出話に花を咲かせた。

授業が終わった後、今日だけは村田の遊びの誘いを断り、阿部警備の高妻事務所に行くことにした。長い間さぼってしまった謝罪をしなければならぬ。

記憶を辿り自転車を走らせると、壁面の塗装が剥がれコンクリートが露出した、相変わらず古ぼけたビルが見えた。

狭い階段を上り、突き当たりのドアをノックする。アルミの扉が大きな音を立てた。

ワンテンポ遅れてから、「はい」とドアの向こうからやる気の無さそうな男の声がした。初めてここを訪れた時と全く同じ対応で、思わず頬が緩んでしまう。ドアの隙間からよっきりと覗いた青木さんの顔も、半年前と全然変わっていなかった。

「こんにちは」

こちらから挨拶する。青木さんは顔を覗かせたまま、口をぱくぱくさせていた。

「……ええと、まさか永田君?」

部屋の中から、ドタバタと走る音や何かが倒れる音が聞こえてきた。聞いたことのある声も聞こえてくる。

「永田君だつて?!」

「ちよつと青木さん、冗談がきついつて!」

正気に戻った青木さんに促され、部屋の中へ足を踏み入れる。二人の社員が、倒れた机と椅子を直していた。

「本当に永田君だ」

顔を上げたのは、白髪交じりの頭をして、目尻の垂れた優しいような表情のおじさん。厚手のセーターを着ている。山下さんだ。

「どこに行つてたのよ?」

刺々しく尋ねてきたのは、釣り目のきつそうな顔立ちをした女性。黒のワンピースコートを羽織った、愛さんだ。

「遠いような近いような場所に行つてました」

「何だいそれは」

村田と同じような反応を返された。メンタル的なことだと思ったのか、三人はそれ以上深くつつこんでこなかった。

「急にいなくなつてしまつて申し訳ありませんでした」

「いや、構わないよ。そもそもアルバイトではなくて、自衛の為の勉強という名目だったしね。明日からまた来れるのかい?」

「……来てもいいんですか?」

即座に許されたことに拍子抜けして、即座に再開の言葉が出たことに驚いた。

「当たり前だろう。君はとっくの昔から、高妻事務所の仲間の一人なんだからね」

青木さんと愛さんが頷く。少しだけ目頭が熱くなった。

金属の擦れる音。アルミの扉が再び開いていた。

「うーす、騒がしいっすね」

片手を上げて挨拶をしながら、男が事務所に入ってきた。冬だというのに短パン姿で、寒そうにマフラーに顎を埋めている。年齢は私と同じくらい。目が大きく、跳ねさせた短い茶髪をした爽やかそうな青年だった。

「工藤君、グッドタイミング」

「はい？」

山下さんが親指を立てると、工藤と呼ばれた男がこちらを見て首を傾げた。他の三人とは既に知り合いのようだった。

「彼は、君の先輩の工藤君。オフィオモルフオスとの戦闘で怪我をして入院していたんだけど、半年くらい前に退院して、また働いてくれているんだ」

山下さんが説明してくれた。以前何度か耳にした、愛さんが竜の攻撃を受け損ねた際に、身を挺してかばったという人のような。勝手に硬派な先輩を想像していたが、実際は親しみやすそうな人だった。

た。

「永田和真です」

「工藤洋平だ、よろしく。タメらしいし、気さくに接してくれ」

差し出された手を握った。工藤が痛くない程度にしっかりと握り返してくる。握手が特別な意味を持っていた大宇宙のことを思い出した。

「話は聞いてたよ。俺のいない間に、ずいぶん活躍してくれていたみたいだな。まあ、俺が復活したからには、君の出る幕はないけど！」

工藤がおどけてみせると、事務所が笑いに包まれた。

バイトが再開したのは、小宇宙に帰ってきてから二日後のことだった。

山下さんの運転する会社の白いセダンに乗り、化け物が現れたという場所へ向かっている。後部座席に工藤と愛さんに挟まれて座っており、窮屈だった。

「どこに行くんですか？」

とりあえず車に乗せられ、後から詳細を聞かされるという、このやり取りも久しぶりだ。

「公園だ。男が化け物に襲われて、瀕死の重症を負った」

後部座席に座っている三人が息を呑む。先に行動しようとする阿部警備にとって、怪我を負わせた化け物がターゲットというのは珍しいケースだと思う。

「なんでも男は強姦の常習犯で、通りかかった女子高生に襲い掛かるうとしていたところを化け物に攻撃されたらしい」

「……どっちが化け物か分からないわね」

愛さんがぼつりと呟いた。

「女子高生は助かったんですね。それなら化け物は悪くないんじゃない……」

「助けたら襲ったことがチャラになるとか、そういう算数で解決できるような問題じゃないよ。化け物の思考は短絡的で危険だ。殺される人間が現れる前に、我々がやつつけておかないと」

山下さんの言っていることは最もだと思う。しかし納得することができない。阿部警備の方針ですら疑問に思い始めた。

争いの無い世界、すべての生物が幸せに暮らすことのできる世界。あの頃は、世界の区切りが自分のいるこの空間だけだった。しかし大宇宙での生活を経験した今、世界の区切りをどこに設定するのか悩んでいる。自分が存在している、この世界の生物さえ生を謳歌できれば、それでいいのだろうか。

駅前の駐車場に車を止め、歩いて公園に向かう。何度か訪れたことがあるが、芝生の上で遊ぶ家族連れや散歩をしているお年寄りが多い、和やかな場所だったと思う。

公園が見えた。記憶と違い、辺りには全く人の気配がなかった。

木々の幹に巻かれた黄色いテープが公園中を囲って張られている。

「人払いはできているようだけど、一応青木君は公園に人が近づかないように巡回してくれる？」

「はい」

青木さんはいい返事をして、公園の周りの道に沿って歩き出した。

「残りは二チームに分かれようか。永田君と僕、栗原君と工藤君の組み合わせでいいかな。何かあったらすぐに携帯で連絡すること」

「はい」

「分かりました。俺らは右から回りますね」

愛さんと工藤が返事をして、歩き去っていった。冗談を言い合いながらボディタッチを交わしており、とても親しそうに見える。付き合っているのかもしれない。

「それじゃあ、僕らも行こうか」

山下さんの声を受け、私達も歩き出した。

芝生の上を、雀がさえずりながら跳ね回っている。人がいないこと以外は、おかしいことはないように見えた。周囲に気を配りながら歩いていると、山下さんが話しかけてきた。

「車の中での話についてだけどさ、永田君は納得できていないみたいだったけど、大丈夫かい？」

女子高生を助けた事実がある化け物を殺さなければならないという、阿部警備の仕事についてだろう。彼らは人を傷つけた化け物に止まらず、さらには何もしていない化け物すらも対象にする。ま

さにアンフィスバエナがそうだ。説得を試みても、酒井兄弟は全く話を聞いてくれなかった。

「山下さんの言っていることが、こちらの人間にとって賢い選択だというのは分かります。でも大宇宙のことまで考えたとき、ただ迷い込んできたのかもしれない獣を、こちらの一方的な都合で殺していることになりますよね。何か納得できません」

歩きながら会話を交わす。

「僕も何度か真剣に考えたことがあるんだけどさ、もし大宇宙から来る神の使いが人間の姿をしていたら、阿部警備はどうしていたんだろうね？」

「歩み寄ろうとしたんじゃないですか？」

もしものことを話しても仕方がない。山下さんははぐらかす気満々で話しているように感じたので、あまり考えずに返事をした。

「コミュニケーションをとれず、凶暴な性格をしていたら？ 人と同等の権利を与えることなんてできるかい？ 阿部警備は今と同じ状況になっていたんじゃないかな」

口をへの字にして堅く閉じていると、山下さんは言葉を続けた。

「ごめんごめん、いじわるな質問だったよね。けど僕は、被害者になる人間の命と、獣同様の化け物の命を同じ天秤に載せることなんてできない」

その言葉には、固い決意がこもっていた。

私だって、山下さんと同じ立場ならそうしたと思う。しかし大宇

宙の生活を知ってしまった以上、どう行動したらいいのか悩んでいる。

ふと人生の大先輩に、それとなく自分の身の振り方について聞いてみようと思った。

「山下さんは、化け物とコミュニケーションをとれるようになって、元の世界に帰すことができたかどうか？ 阿部警備の状況は変わると思えますか？」

「そうだね。……あんまり変わらないんじゃないかな」

返ってきたのは、あまりに冷たい回答だった。

「説得して送り返せたとしても、僕だけじゃ日本中をカバーするとはできないよね。結局、今の方法でしか対応できないんじゃないかな。日本だけでも、日々十数匹の化け物が現れているというからね」

球状のコンクリートの建物が見えた。三角形と逆三角形の模様が描かれた入り口が二つ並んでいる。トイレのようだ。

「ちょっとお手洗いに寄ってきてもいいかな。歳をとると近くなつて困るよねえ」

山下さんはそう言い残して、小走りで行ってしまった。俯いてトイレの前で待つ。

（あんまり変わらないんじゃないかな）

山下さんの言葉を思い出す。魔術を手にする前は、もしも力を手にすることができたなら、世界を変えることができると信じていた。

しかし特別な力——魔術を使えるようになって、世界を渡り歩く能力を手に入れても、世界の仕組みは何一つ変わらない。

じゃり、と地面が擦れた音がした。工藤と愛さんが一周して来たのかと思い、顔を上げる。しかし目の前に広がっていたのは、どこか幻想じみた光景だった。

一頭の白い馬。薄暗い林の中で、穢れない純白が一際浮いている。よくよく見ると、馬とは違う。尻の後ろで揺れているのはハタキのような尻尾ではなく、緩やかに弧を描く太い尾で、先が黒かった。さらに顎から首にかけて、ヒゲのような縮れた長い毛が垂れている。特徴的なのは、額の中央にそびえ立った長い角だ。ネジのように螺旋を描いている。先に立ちたくないと思わせるほど、先端が鋭かった。ターゲットのようだ。

馬の化け物が顔を上げ、曇りのない青い瞳を私に向けてきた。角をこちらに向け、地面を搔く。

「ルケツタメ！」

大宇宙の言語で、止まるように言った。走り出そうとした化け物が足を止める。言葉が通じているようだった。

「コヌラカワガボトカ？」

立て続けに、言葉が分かるのか尋ねた。化け物は顔を上下させ、頷いたように見える。ルクアのように獣の血を引いた人間かもしれない。

「大丈夫か?!」

横から声が聞こえた。工藤と愛さんが駆け寄ってくる。

「出やがったな、化け物め。後は俺達がなんとかする、下がってろ」

二人がヒップバッグからダイナマイトを取り出した。工藤もダイナマイトを使った、愛さんに似た戦い方をするらしい。

落ち着いたように見えた馬の化け物が、再び上体揺らしながら地面を掻き始めた。

「何のつもりだ？」

背中から工藤の冷たい声がかけられた。

世界の仕組みは変えられなくても、手が届く範囲くらいは助けてあげたい。私は二人の前に立っていた。

「待ってくれ、俺がやるよ」

ポケットからカードを取り出し、顔の前にかざした。走り出そうとしている化け物の動きを逐一確認する。

「星煌く天は我が顔、海は我が胸、大地は我が足、風が充たすは我が耳、輝く光を遠矢に射る太陽は我が目なり」

目の焦点をカードに合わせ、自分で書き換えた魔法陣を目に焼き付けた。

「我は汝に啓示を与えるものッ！」

巨大な光の立方体が現れ、馬の化け物を覆った。縁からは光が放たれ、面には大宇宙の平原が映っている。

鏡の箱から意識を外す。立方体が収縮していき、あっという間に光の点になって消滅した。

青木さんと協奏詠唱をしてオフィオモルフォスを送り返したあの時と同じ状況だ。多分馬の化け物も大宇宙に転送されただろう。

「やるじゃないか。あれが、噂の消滅の魔術か！」

「ああ、うん」

工藤が歩き寄り、肩を叩いてきた。大宇宙に戻しているだけで、消しているのではないのだが、ばれたら反感を受けそうだ。消滅の魔術でないことは黙っておくことにした。

「——見ない間に随分と腕を上げたんだね」

いつの間にか山下さんがお手洗いから戻ってきていた。

「これなら試用期間も必要ないかな。永田君、君を正式にバイトとして雇わせてくれ」

今の宇宙と小宇宙の関係を少しでも改善したい。大きく領いた。

小宇宙に帰ってきてから、一週間が経った。私は率先してアタックカーとして戦闘に参加し、神の使いを大宇宙に送り返していた。

今日は高妻事務所には、私と工藤と愛さんの三人しかない。山下さんと青木さんは一瞬だけ顔を出してから本部へ行ってしまった。

「復帰してから、社員並に参加してるらしいな」

「そうだっけ。時間が空いているから……」

雑誌をめくりながら工藤が話しかけてきた。学生部で確認したところ留年が確定していたので、学校の授業よりも優先してバイトに行っている。日に二回出勤したこともあった。

机の上に置いてあった、社用の携帯電話が鳴った。ディスプレイには北関東のセキュリティセンターの名前が表示されている。すぐに筐体を掴み、通話ボタンを押した。

「――神の使いが出た」

工藤の運転する車で現場へ向かった。青木さんがいないので、人目につかない場所で一瞬で終わらせなければならぬ。その点、今回化け物が出た場所は廃工場なので、好都合だった。

工場の前に車を止め、三人で歩き出した。途中、工藤が厳粛な顔をして話しかけてきた。

「お前って、本当に化け物に止めを刺しているのか？ 前に店長と阿部警備の方針の話していたとき不服そうにしていたし、遠方に送っただけなんじゃないのか？」

「ちよつと洋平、いきなり何言い出すのよ！ ごめんね永田君、こいつ嫉妬してるの」

かばってくれているらしい、愛さんの声はほとんど聞こえていなかった。恐れていたことが現実になり、冷や汗がにじんできた。

「お前は黙ってる。川崎周辺で、化け物に乗ったお前を見たっていう目撃情報だつてある」

「それは初耳。でも何で洋平が川崎の話を知ってるの？」

「だから黙ってるって。あそこの社員と友達だから、話が入ってるんだ」

ひょっとしてその友達と言うのは、酒井兄弟なのだろうか。とにかく、アンフィスバエナの件が伝わっているようだ。

「お前は、本当は化け物共の仲間で、阿部警備にはスパイに来ているんじゃないのか？ それともバイトを休んでいた半年の間に、永田の体に乗っ取ったのか？」

「冗談がきついぜと、笑いながら否定したいのだが、声が出てこない。まずい状況だった。」

「よ、洋平、落ち着いてよ。永田君が純粹な人間だったらどうするつもりなのよ？」

「証明なら簡単にできる。否定するつもりなら、俺が化け物を殺すのを黙って見てればいいんだ」

「永田君も何か言つてよ！ それくらいだったら、できるよね。ねえ？！」

工場の中に足を踏み入れる。中には黒い塊が横たわっていた。可愛い小さな顔をした芋虫。よりによってア・バオ・ア・クウーだった。

0109：尻尾の先っぱ代行

私は工藤と愛さんと共に、大きな平屋建ての廃工場にいた。電気は通っていないが、壁のトタンが剥がれ落ちており、光が差し込んでいたため明るい。工作機械やクレーンなどは撤去されており、ガラスや壁材の破片や、ゴミが一面に散らばっている。

今回のターゲットは、よりによってア・バオ・ア・クウだった。建物の中央にいる黒い幼虫は、両手で抱えないと持ち上げられないくらいに、また一段と大きくなっている。

工藤がダイナマイトを手にし、幼虫に向かって歩き出した。唇を強く噛み、その後について歩く。

「お前がシロだというなら、こいつが殺されるところを黙って見てろ」

工藤はこちらを振り返ってそう言うと、ジッポーで導火線をあぶり、火をつけた。ア・バオ・ア・クウも異変を感じたのか、こちらに背中を向け、忙しく伸縮を繰り返して前進を始める。スピードが遅く逃げられていないところに、心が揺り動かされる。

導火線は火花を散らして短くなっている。この無防備な神の使いは、魔術を使わなくてもダイナマイトの火力だけで死んでしまうだろう。

化け物が殺されるところを、手を出さずに見守っていれば私の生活は守られる。夢を語るのを諦めることになる代わりに、学校で村田とくだらない話で盛り上がり、バイト先で山下さんや愛さん達と充実した時間を過ごすことができる。手を出してしまえば、工藤と愛さんに止まらず、きつと阿部警備を敵に回すことになる。私が守るべきものは平穏な生活、それとも夢だろうか。自分にとって一番大切なものは。譲れない信念は何だろう。

頭の中に無数の思考が押し寄せる。工藤の手から離れたダイナマイトを、何日間も見続けていた気がした。

弧を描きながら放られたそれは、間に現れた光の鏡の中に吸い込まれていった。

「――ほら、やっぱり裏切り者じゃないか！」

まるで鬼の首を取ったように工藤が叫び、私の方を向いてカードを構えた。

「永田君、あんた……」

愛さんも後ずさって私から離れ、魔法陣の描かれたアームカバーをはめる。

平穏な生活は、山下さんに化け物のことを聞いたあの時に諦めたはずだ。このまま私は、自分の信じた通りに走り抜きたい。

「裏切り者か。阿部警備の立場からすれば、そうなるんだろうな。工藤の言ってた通り、化け物は全部元の世界に送り返してた。――こんな風に」

カードに焦点を合わせ、魔法陣を目に焼き付けた。

「我は汝に啓示を与えるもの」

ア・バオ・ア・クウーを囲って鏡の立方体が現れる。すぐに収縮して消滅し、幼虫は大宇宙へと送られた。

「元の世界？ お前は大宇宙の人間なのか？」

「生まれはこつちだけど、こういう立場を選んじまった以上、多分大宇宙の人間みたいなもんなんじゃないか」

二人がそれぞれヒップバッグからダイナマイトを取り出し、導火線に火をつけた。化け物と同等の扱いをしてくれるらしい。私も覚悟を決めた。

工藤がダイナマイトを放り投げた。この場所で魔術を使ってダイナマイトを大宇宙へ送ったら、ア・バオ・ア・クウーが巻き込まれて、私の決意が無駄になってしまう。地面を蹴って駆け出した。全力で走って着弾点から離れる。

魔術は使っていないようだ。ダイナマイトはごく一般的な物理現象に則って爆発し、爆音と共に、背後から熱気と風が押し寄せてきた。

「我が声を聞け、彼に従いて街を往け」

愛さんが火のついたダイナマイトを片手に、詠唱を始める。いつも化け物に向けられていた鋭い目が私に向けられていた。魔術を習う決心をさせてくれた彼女には、今もとても感謝している。

彼女の魔術は力の転移。ダイナマイトの爆発のエネルギーを移動させ、まるで見えない爆弾を使つたみたいに敵の前で炸裂させる。

「我が聖域から絶滅せよ、——執行！」

「我は汝に啓示を与えるもの！」

転移する衝撃を防ぐことは出来ない。火花を散らしている導火線の先を、小さな鏡で切り落とした。

愛さんが突如出現した刃に驚き、手を引っ込めながら後退した。鏡が光の点になって消える。火の消えたダイナマイトも地面に落ち

た。

「へえ。なかなか汎用性の高そうな魔術だな」

工藤が呟きながら、二本目のダイナマイトを投げつけてきた。身を投げ出して愛さんをかばったと聞き、実際に会う前から彼のことを密かに尊敬していた。

「攻城兵よ来たれ、メテイスラー！」

カードを掲げて詠唱をしている。実際に見たことはないが、工藤の魔術は、二物体間の引力や斥力を強くすることらしい。

最初と同じように、放られたダイナマイトから全力で走って逃げた。後ろを振り返って位置を確認すると、落体運動に入っていたダイナマイトが、くつと力を受けて軌道を変えていた。底部を向けて私の方に飛んでくる。

地面を横に蹴って走る方向を変える。しかし再び軌道を変えて追尾してきた。私とダイナマイトの間の引力を増加させているようだ。投擲時よりもさらに加速しており、詠唱していたら間に合わない。

導火線が燃え尽き、火薬に火が入る。

瞬間、ダイナマイトは消え失せていた。足を止めて冷や汗を拭う。
インタープリター
小夜詠唱でなんとか大宇宙に送った。

振り向くと、工藤は既に次のダイナマイトを手に使っていた。導火線が短く、まさに火が入ろうとしている。引力を使った超高速の投擲を警戒した。

「要塞は自壊する、コマホン」

しかしダイナマイトは、彼の手から離れることはなかった。

横から誰かに押されたように感じる。振り向いても当然人はいない。踏ん張るが、耐えられずに体が傾いていく。

とうとう足が地面から離れた。あのダイナマイトは攻撃用ではなく、エネルギー源だ。建物との間の引力を強くされたい。体を丸めて腕を組み、せめて頭を守る。

「がつ」

勢いよく壁に背を打ちつけた。肺の空気が強制的に押し出される。息を吸い込むことができなくなり、苦しくて胸を押さえつけた。

愛さんが拳を構えて走り出す。拳打の衝撃を魔術によって転移させる、彼女の十八番を繰り返すつもりだろう。今の体の状態でも受けきれそうになかった。

浅い深呼吸を繰り返して、何とか詠唱分だけの酸素を取り込む。

「火から土を、粗雑なるものから精妙なるものを分離せよ」

魔法陣を目に焼きつけ、上空に複数の鏡を作り出した。大魔法使いから指導を受け、生み出すことができるようになった鏡の数は以前の比ではない。その数、五十。廃工場の天井を覆い、無数の光が煌いている。

「嘘っ、前はそんな魔術使えなかったじゃない?！」

「——これ、あらゆるものの中で最強の力なり!」

一枚一枚を操る集中力はないが、群として扱えば問題ない。一斉に降下の指示を出した。

防御不能な刃の雨が降り注ぐ。細切れになった元同僚を見るのは忍びない、当たる寸前で消滅させるつもりだ。愛さんが顔を腕でか

ばい、目を閉じた。

「要塞は自壊する、コマホン」

工藤が詠唱していた。愛さんの体が宙に浮き、猛スピードで廃工場の壁に向かって引き寄せられた。五十枚の鏡が誰もいない地面を穿つ。

「無茶すんじゃねえよ！」

「ありがと、助かった」

私の時とは違い、斥力でブレーキをかけたのだろう。壁に当たる寸前でぴたりと止まり、愛さんが着地した。

「予想していたよりも強い。無傷で倒すのは難しいみたいだな」

片手で二本のダイナマイトを持ち、導火線をあぶりながら、工藤が言った。先ほどのまでの余裕を漂わせた雰囲気とは違っていた。

「洋平、もしかしてまた——」

愛さんが歩み寄ろうとする。彼女の手が肩に触れる前に、工藤の持っていた一本目のダイナマイトに火が入った。

「異なるものの愛を、ターフアーツ——」

もう一本のダイナマイトを所持したまま、爆発のエネルギーを加速度に変えて工藤が真っ直ぐ突っ込んできた。私か、背後の壁との間に引力を発生させているようだ。

あちらは捨て身のつもりで攻撃してきている。鏡の刃を向けても

速度を殺すことはできず、無駄に二つの命を散らすだけだ。障害物に巻き込んで動きを止めようとしても、近くに物がないので駄目。一番使いたくない手法に頼ることにした。

「くそつ、我は汝に啓示を与えるもの！」

私の正面で、光が正方形を形どる。一瞬で面が張られ、大きな鏡が現れた。チヒロと約束したことを守り、二度と人間は鏡を通さないつもりだった。

「な——」

工藤が口を開きながら鏡に飛び込んだ。声が途中で途切れる。

「洋平?!」

愛さんが沈痛の叫びをあげて駆け寄ってくる。

罵声を背中に浴びながら、私は工藤を追って鏡に飛び込んだ。通過しながら、彼女が追ってこれないように鏡を発散させた。

第一歩が踏みしめたのは、草原だった。現在地を確認しようと、辺りを見渡す。てっぺんの決れた山が見えることから、アフウシ村の周辺のようだ。

見通しのよい開けた場所で助かった。工藤の姿を探す。すぐに追いかけたので、近くにいますはずだ。

五分ほど歩き回ったが工藤の姿は見つからず、嫌な予感がしてきた。そういえば、アンフィスバエナを送った時は、鏡の前後に立つ

ていてもチヒロと会話することができた。今回は声が途切れており、あの時と様子が違ったように感じる。

地面が揺れ、背後から大きな音がした。工藤かと思い、さっと振り返る。

「見伊つけた!!」

その声に対しては、条件反射に「逃げろ」という項目が与えられていた。

最大まで開かれた翼は身長よりも大きい。赤い鱗の生えた複数の骨の間には、枝状に血管が走った膜が張られている。本能的に恐怖と威圧感が脊髄に叩き込まれた。

澄んだ金色の瞳をした、赤毛の髪の女。うねる尾は以前よりも伸びた気がする。

ゆっくり周囲に目を走らせ、誰もいないことを確認すると、口角を上げた。

「今日は一人みたいだね？ 今度は逃がさないよ」

たまたま来ることになった数分間で遭遇するとは、相当運が悪い。悪魔は腕を組み、満足そうに尾を振っていた。

カードを取り出して構えた。抵抗など無意味だと言いたいのだろう、悪魔はぴくりとも動かず、不敵に笑っている。

カードの裏面を眺める。

よくよく考えてみると、以前は村や自身を守る形で魔術を振るったが、今その必要はあるのだろうか。カードをポケットに仕舞い、棒立ちになった。

オフィオモルフォスは急に小宇宙にやって来て、状況が分からず

苦しんでいたはずだ。大宇宙に来てしまい、アフウシ村の人々に助けを求めた私のように。そんな彼女を先に攻撃したのは私達、阿部警備だ。それに一方的に戦いを挑んで尾を切ったのは私なのだから恨まれるのは当然だろう。彼女が以前私に行った襲撃と何ら変わりはない。

悪魔は不思議そうな表情をして私の行動を見張っていた。

「お前がどういう気持ちで、小宇宙で暴れていたのか気持ちが分かった。攻撃したり、大切な尻尾を傷つけて本当にごめん」

彼女に対して頭を下げた。沈黙が続き、空気が凍ったように感じた。

「……は？ 訳分からないこと言ってないで、攻撃してきなよ。ほらッ！」

悪魔が腕を振り上げる。空気を巻き込みながら螺旋状の炎の槍が形作られ、私の顔の横を通り過ぎていった。着弾したようで、背後から熱気が押し寄せてきた。

そつえば、こちらの世界では頭を下げるのが謝罪の意味になるのか分らない。手の平を合わせて謝る気持ちを表現しようとした。

「な、なな、どういっつもり？！ よりによって、あたしになんて冗談でしょ？」

先ほどにも増して、悪魔が慌てている。よく分らないが、このジェスチャーは大宇宙では土下座に近い効果があるのかもしれない。攻撃手段の象徴である手の平を合わせることは、服従ひいては恐縮の意になると考えれば納得できる。

「本気だ。本当に申し訳ないと思っているし、俺のしたことを償わせて欲しい」

一層、強く手を合わせて頭を下げた。

「——分かった、分かったから。頼むから止めて！」

悪魔はイメージに似合わない、歳相応の表情をしていた。言われたとおりに姿勢を正して返事を待つ。

「……子分にだったら、してあげてもいいよ。それで妥協して」

世界最強の生物に子分が必要なのだろうか。そもそも子分になることが償いになるのだろうか。よく分からないが、考えた末に頷いた。

「分かった。これからよろしく」

「勘違いするなよ。切られた尻尾の分の働きをしてもらうだけだからな」

工藤は小宇宙のどこかにいるはずだ。こちらの世界にいれば、会う機会もあるかもしれない。チヒロとの約束を破るのは気が引けたが、尻尾の先の代わりとして悪魔と共に行動することにした。

0110：世界最強の生き方

針葉樹の生い茂る急勾配の山。その中腹にある崖に空いた洞窟が、悪魔の家だった。入り口は屈まないと入れなくらいに狭かったが、しばらく進むと急に広くなった。天井が高く、部屋の大きさも十畳くらいある。中はひんやりしていて、夏は過ごしやすそうだった。

地面に生えた天然の尖った岩に、服や照明具が引っ掛けてあった。また寝床らしき巻かれた布が、抜け殻みたいに地面に転がっている。他には日用品も、机も椅子も無く、チヒロの家にも増して生活感がなかった。

「物が少ないな。寝る時だけしか帰ってこないのか？」

「そんなこともないけど、だいたい現地調達できるから」

悪魔は答えて、いつも座っているであろう丸い岩に腰を下ろした。体を壁に向けている。私は尖った岩に腰掛けるわけにもいかず、彼女の方を向いて地面に腰を下ろした。

翼は中ほどで二段に折り畳まれ、だいぶコンパクトになっていた。手足は力があるようには見えないほどに細く長い。竜の姿をしている時もあったが、均整のとれた体をしている。翼や尾があることに何の疑念も抱かないし、逆にあちらが正統派のようにすら見える。

「——子分、喉が渴いた」

悪魔は黙り込んで爪をいじっていたが、思い出したように私の方を見てぽつりと呟いた。

ここに来るまでに水場は見かけなかったし、この部屋に道具もない。初仕事から難易度が高かった。

「水を汲む桶も、お湯を沸かす鍋も無いだろ。それに俺の名前は永田和真だ」

「そう、ナガタクンだ。覚えてる。あたしの尻尾が切り落とされたあの時、おじさんが名前を呼んでた」

戦いの光景を思い出しているのだろう、悪魔は目をギラギラさせている。それ以上考え続けさせたら自分の身が危ない気がした。

「お前の名前はなんていうんだ？」

『^{ムカア}悪魔』が名前というわけではないだろう。話を逸らしつつ尋ねてみる。

「ない」

悪魔が唇を尖らせ、投げやりに答えた。

「ナイ？」

「いや、名前がないの。うちって放任主義だったから」

名前をつけないというのは、放任主義とか育児放棄とか、そういうレベルではない気がする。まるで望まれないでこの世に生を受けたような。彼女が竜とのハーフであることを思い出し、察して追求するのは止めた。

「悪魔でもドラゴンでも、好きなように呼べば？」

「でも悪魔って通り名みたいなものだし、ドラゴンに至っては親の種族名だろ」

「言われてみればそうだよねえ。じゃあ、あんたがつけて。最初の

仕事は、やっぱりそれにするわ」

尻尾の先っぽが行うような仕事には思えないが、水を汲むよりは楽そうなので大人しく考え込んだ。大宇宙で流行している名前なんて分からない。幾つか候補を挙げて、当人に選んでもらうことにしよう。

まず私が一番しっくりくるのは、小宇宙での呼び方だ。エアケントニスがつけたというのが、少々癪ではあるが。

「オフィオモルフオス」

「長い。言いにくい。名前っぽくない」

即答された。しかもかなり不評だ。早速、案は尽きた。

「グート」

「可愛くない」

世界最強の生物に似つかない意外な要求が増えた。オフィオモルフオスから女の子っぽい名前を抜き出してみる。オフィは次点か。モルフ——は可愛さという点で微妙だ。

「——フィオ」

思い浮かんだ名前を口に出してみた。可憐でありながら、強さも併せ持っていそうな感じ。何となく彼女の見た目にしっくりくる気がする。

「フィオっていいのはどうだ？」

「フィオ、か……。いいな。うん、それにする」

あっけなく最初の仕事を果たすことに成功した。……こんなことで償いになっているのだろうか。琴線に触れたようには見えず、壁を見つめている彼女の姿を眺めながら、そんなことを思った。

話が終わってしまい、間に沈黙が流れる。フィオは顔を合わせようとしないので、余計に気まずい。

「お前っていつも、一日中こんな薄暗いところでじっとしているのか？」

沈黙を破って話しかけるが、返事はなかった。

「……なあ？」

小宇宙での戦いの記憶から気をそらすことに成功していたが、また急に機嫌が悪くなったように見える。

「……フィオ。『お前』じゃなくて、フィオ」

「あ、ああ。フィオ」

名前で呼ばれなかったことが不満だっただけのようだ。顔から読み取りにくいだが、なんだかんだで気に入ってくれたようで何よりだ。

「外に出ると、ややこしい連中に会うから。出かけるのは、お腹が減ったりイライラした時くらいかな」

ややこしい連中というのは何のグループを指しているのか考え込んでいると、フィオが喋りながら立ち上がった。

「ついて来な。子分になった祝いに、美味しいものを食べさせてあげる」

私は竜の姿になったフィオの背に乗り、空を飛んでいた。歩いていたら日が暮れると言って、嫌々ながら乗せてくれた。

飛行機も含めて飛ぶのは初めての経験だが、速い。羽ばたく度に木々がびゅんびゅんと過ぎ去っていく。そして、寒い。羽ばたく度にぐんぐんと体温が奪われていく。

首の付け根当たりに跨っているのだが、でこぼこした鱗が痛かった。それに羽ばたいた瞬間には、尻の肉を鱗の間に挟まれないかと冷や冷やする。口に出すつもりはないが、正直なところ乗り心地はあまりよくなかった。

どこに連れていかれるのだろうか。高級なものをたくさん食べていそうな彼女が推す美味しいものに、少し期待している自分がいた。

広大な森が途切れ、草原の中に集落が見えた。木造の家が固まって建っており、規模は小さい。周りは丸太を立てた頑丈な柵で囲まれており、入り口には大きな木の門が設けられている。カンカンと音が鳴り響いていた。

竜が体を起こして羽ばたくと、失速した。村から少し離れた場所で地面に降り立つ。顎で促され私が飛び降りると、人の姿に戻った。騒々しい音はまだ鳴っている。村の入り口に近づき、ようやく何の音だか分かった。発生元は、物見台に設置された鐘。外敵が来たことを村中に知らせる警報だ。

「悪魔が来たぞ——ッ!!」

「早く家に戻るんだ! 門をかけるのを忘れるな!」

物見台の上で、男達が必死に声を張り上げている。その声に急ぎ

立てられるように、女子供が家の中に逃げ込み固く扉を閉ざしている。門が開き、その前に槍で武装した男達が並んだ。

「ずいぶんと特別な歓迎を受けてるけど、何かしたのか？」

「ううん、いつものこと。嫌になっちゃうよねえ」

最も年配に見える男が前に進み出る。品位のある人に見えるが、厳しい表情をしていた。村人達は彼を中心に武器を構えている。村長のような立場の人だろう。

「十三日と二時間。ずいぶんと早い再訪ですな」

村長はちらりと私を見て不思議そうな顔をしたが、すぐにフィオの方に向き直った。

「まあね。元気にしてた？」

「あと百年放っておいて下されば、少しは村の活気も戻ったやもしれません」

「遠まわしに、二度と来るなって言いたいわけ？」

互いに棘のある笑顔を浮かべている。後ろに立っている男達も、今にも爆発しそうなほどに額に血管を浮かべている。今まで感覚が麻痺していたのか、急に嫌な予感がしてきた。フィオは何もしなかったなんて言っていたが、何もしないでこんな歓迎を受けるはずがない。

「いえいえ、滅相もない。それで今日は何の用ですか？」

「食べ物で二人分用意して。前に作らせたアレでいいや」

フィオの言葉に反応して、村長が眉をひそめる。男達も槍を構え

なおす。

「牛一頭を使った料理を二人前も。……牛一頭を飼育するのに、どれだけの労力と資源、資金がかかっているかご存知ですか？ それにこの村の現状も？」

「知る必要は無いんじゃない？ 私は消費する側の人間なんだから唇を嚙んで耐えていた男達がとうとう進み出た。」

「今年是不作で、俺達も食料には苦労しているんだ。それなのに、タダで食わせろって？ 世界最強だか何だか知らないが、調子に乗りすぎているんじゃないのか？！」

「これから本格的に寒くなるのに、食べ物を取られたら死んじまう！」

フィオは必死に訴えかける彼らの姿を、冷ややかな目をして眺めていた。

「ああ、そう。また地図から村を一つ減らすつもりなんだ。人はどこにでもいるから、あたしは別にどうでもいいんだけど」

村人達は我慢の限界を超えたようだった。怒りを通り越して、口をぱくぱくさせている。男のうちの一人が村長に進言する。

「こんな化け物と話し合いなんて無理です！ 指示をお願いします！」

「仕方あるまい、許可する」

村長が言葉を発した瞬間に、男達が一斉にフィオに向かって槍を投げつけた。憎悪を込められて放たれたそれらは、足止めが目的で

はない。急所を狙って殺すことを目的に投げられている。さらに彼らは空いた手の平を向け、魔法を唱えて雷や炎を浴びせかけた。

フィオに当たった槍が、肌に弾かれて落ちた。筋肉に覆われていない箇所ですら、刃物が当たっても傷一つついていない。魔術にいたっては当人に届かず掻き消えた。攻撃が終わるまで、フィオは直立不動だった。村側が保有している全攻撃は彼女を傷つける域に達しておらず、全然戦いになっていない。

フィオが手を胸の前上げると、手の平の上に火球が現れた。ほとんど揺らがず、静かに燃えている。さすがに手加減するつもりのようにだった。

火球付近の景色が歪んでいる。ただの炎にしては温度が異常だ。見たままの火の塊ではない。

「止め……」

駆け寄ろうとしたが、既に火球はフィオの手を離れていた。目で追える速度で村人達の顔の間を通り、あぜ道を進んで村の中央に着弾する。

火球が弾け、視界が紅に染まった。

体を反った男達が空高く吹き飛ばされる。木の家が一瞬で屋根と壁に分離し、木材に瓦解する。たった一発で村が炎に包まれた。

一呼吸遅れて、村中から悲鳴が上がった。

立ち位置的にフィオを介していたせいか、私の方には不自然に強風しか吹いてこなかった。フィオが守備隊のいなくなった門を悠々とくぐり、村の中に足を踏み入れる。燃え盛る炎の中に姿を消した。

「痛い、痛いよ——」

「ママ——」

「誰か、手を貸して!!」

倒れる柱。舞い上がる火の粉。生き残った村人達が怪我人に肩を貸して村から逃げ出していく。額から血を流す人。火傷の足を引きずる人。体中が煤だらけの人。まるで地獄のような光景だった。

私は門の前で一人、呆然として立ち尽くしていた。

「たまには村を潰して立場を分からせてやらないと、ああいう連中が現れるみたいね。近頃甘やかしすぎたかなあ」

炎の中から声が聞こえた。燃え盛っている火に人の影が浮かぶ。

「ご飯にしょつか。ごめんね、穀類は全部燃えちゃったから、今日はこれしか無いや」

フィオが片足を掴んで、牛を引きずってくる。今死んだばかりのようで、首から鮮血を噴き出していた。

フィオはまるで川で魚を釣ってきたみたいに得意顔をしており、全く悪びれていない。私はぞつとして背筋が冷たくなった。

どうやって戻ってきたのかよく覚えていない。気付けば、私達は洞窟のある崖の前で焚き火を囲んでいた。

気持ちが悪入っていても、お腹はいい匂いに反応している。串に刺された肉が薪の周りに立てられ、炙られていた。

「顔色悪いけど、大丈夫？ 肉が足りないんじゃない？」

幸せそうな顔をして肉を頬張っているフィオが話しかけてくる。

「ずっとこんな生活を続けてきたのか？」

「そうだよ。早く食べないと冷めるよ」

正義とか悪とか、そういう信念的なこと以前に、彼女は考え方が違っているようだった。名前を聞いた際に、放任主義で育ったと言っていた。彼女に生き方を教えてくれた人は今まで誰もいなかったのかもしれない。

「人を傷つけたり、殺すことを何とも思わないのか？」

「怪我をしたら痛そうだと思う」

フィオが肉から口を離し、苦笑いしながら答えた。ふざけて答えているようには見えない。

「そうじゃなくて、悪いことだとかは……」

「何で？ 動物だって同族や他の種族を食べるじゃない」

フィオは自然界から見て学んだことを実践している。人は自分達の平穏を守ろうとする中で、道徳や神といった規則や考え方を身につけていったと思うが、彼女の場合は他者に脅かされることがないので、そういう考え方をする必要がなかったのだろう。

自然界のルールが絶対だとするなら、彼女の考え方は正しい気もする。しかし感情が介入する人間の世界は、それで割り切れないものがあると思う。

「なんか違うんだよねあ……」

「何？」

力を持っているからこそ、弱い者達のことを考えなければならな

いのではないだろうか。漠然とだが、アフウシ村で失敗してしまった神に代わる考え方が見えた気がした。

「それだけの力を持っているんだから、獣とか災害から人を守って、その対価として食べ物を貰えばいいんじゃないか？」

小宇宙で言うボディーガードみたいなもの、もしくはヤクザのシヨバ代みたいなものだろうか。

「そんな回りくどいことをしなくても、絶対に勝てるんだから、力で押さえつけた方が確実じゃない」

「食べ物とか金ってというのは、人の幸せを奪って得るものじゃないと思うんだ。皆が幸せでいられる方法があるなら、そっちを選んだ方が良いと思う」

「……尻尾の代わりのクセに、五月蠅い奴だなあ」

フィオが肉を下ろし、ガラガラした金色の瞳を向けてくる。焚き火の炎が強まり、火の粉が散っている。殺されそうになった時の恐怖が蘇り、改めて味方ではないことを実感した。冷や汗が背中を流れる。

「一週間だけでもいいから、やってみないか？ 話は俺がつけるから」

私の座っている位置はフィオの間合いの中だ。これ以上機嫌を悪くさせたら、次の瞬間には心臓を抉られていることだってあり得る。とんでもなく怖いが、平気なふりをして声を喉から絞り出した。

フィオの手が動く。体がびくつと反応した。

「……勝手にしな」

フィオは食べかけの肉を置き、翼をはためかせて飛び上がった。
風圧で焚き火が消える。

洞窟へ戻っていく後姿を見ながら、私はほっと息をついて額の汗を拭った。

0111：無為の報酬

翌日、私達は早速集落を訪ねて交渉を始めた。ある村ではフィオの姿を見た村人が全員逃げ出し、ある村では話を始める前から火の雨が降ってきた。話し合う段階まで持ち込むことが出来ても、過去のことを持ち出して譲りてはくれなかった。

朝早く洞窟を出たのに、既に日が沈みかかっている。フィオは腹が減っているせいもあってか、いらいらしているようで、今にも襲いださないか冷や冷やさせられた。

竜の姿になったフィオの背に乗り、空から集落を探す。今は海岸線に沿って飛んでいる。

ポケットから紙とペンを取り出し、新たにバツ印を加えた。フィオは思っていたよりも深く人々の心と生活を傷つけていたようだった。今更彼らと共存してもらおうなんて、考え方が甘かっただろうか。

「あそこはどうか？」

船着場を備えた港町を見つけて指差した。町中で明かりが灯っており、活気がありそうに見える。

竜が頷き、失速して町の前で着地した。私が背中から飛び降りるのと同時に、フィオが人の姿に戻る。断られ続けていたお陰で、この連携だけは慣れた。

「あそこは駄目だ。無駄に人が多いから、襲つても時間がかかって割に合わない」

「襲うんじゃないくて、交渉するんだからな。人が多いなら、何かしら仕事もあるだろ」

フィオをたしなめ、町へ向かう。襲われたことがなかった為か、門は設置されておらず警備も薄いので、スムーズに入ることができた。

すれ違った町人に尋ねて、ビジネスの話なら商工会議所を尋ねれば良いと教えてもらった。

教えられた場所に向かう。大通りに面した一等地にあつたのは、石造りの大きな建物だった。煌々と灯りがついており、多くの商人や漁師が出入りして議論を交わしていた。

これだけ大規模な施設なら、仕事も期待できそうだ。扉へ向かう足取りが軽くなる。

建物の中に入り、空いている窓口に向かった。暇そうに客を眺めていたおばさんが気づき、姿勢を正して声をかけてくる。

「こんばんわ。見ない顔ね、初めての人？」

「はい。仕事の斡旋をお願いしたいのですが」

自分とフィオのことを紹介し、ボディーガードの交渉を始めた。世界最強の名前はこの町でも知れ渡っていたようで興味は持ってもらえたが、具体的な仕事を探す内に係の女性の眉間に皺が寄り始めた。

「うーん、世界最強の力を借りれるっていうのは面白いビジネスだとは思うんだけど、この町だって警備隊を抱えているから、下級の獣くらい自分達で退治できるしねえ」

そう上級の獣がばんばんと出ているようなら、ここに町は存在していない。

「見ての通り港町だから、ここにいる船長達に聞いてみれば航海の護衛くらいなら見つかると思うけど……」

船に乗っていたら、共生することの良さを伝える前に一週間の期限が過ぎてしまいそうな気がする。もう少し粘ってみることにした。

「それもありかと思っっていますが、できれば近辺でお願いしたいです。ずっと悩まされてきたこととかないんですか。無茶なことでもいいんで」

「無茶なこと、ね。だって、いくらあなたでも、ティアマトが相手じゃどうしようもないでしょう?」

聞きなれない獣の名前が出てきた。係の女性に断って、フィオと密談を始めた。

「ティアマトって言ってたけど、フィオは知ってるか?」

「話でしか聞いたことはないけど、馬鹿でかい海竜だ。一口で島を呑みこむっていう噂もある」

頭を竜にした大きなジンベエザメを想像してみる。私は敵いそうにないことが分かった。

「なんとかなりそうか?」

「身体能力はあっちに分がありそうだけど、魔法ありなら勝てるかな」

話がついたので、係の女性の方に向き直った。

「話を聞かせてもらえますか?」

「いいわよ。この港町は、百年くらい前に初代の町長さんが誘致し

て作っただけ、その時から頻繁に嵐が起きるようになったの。これは何かある、ってことで占ってもらったら、何でもこの場所は元々海の生き物の繁殖場所だったらしくてね。海の神の怒りに触れたみたいで、代弁者であるティアマトが嵐を起こしているっていうことが分かったの」

狙った場所に嵐を起こすというのは、大魔法使いレベルの魔法だ。ティアマトは体の大きさだけではない強敵に思えてきた。

「困ってしまった町長は、占い師のお告げを受けて、町の外れにある洞窟に祠を建てて自分の娘を捧げたの。それから嘘みたいに嵐が止んだらしいわ。それから毎年ここでは、町の娘をティアマトに差し出しているの」

百年前から毎年生贄を出してきたということは、既に百人以上の女性が不本意に命を散らしているということだ。たとえボディーガードの仕事と関係なくとも、私達の手で終止符を打たなければならぬと思うた。

「ティアマトを倒せば、嵐も起きなくなっただけ風習を辞めさせることができるかもしれないということですね？」

「ええ、上には私から話を通しておくわ。まず同意してくれるでしょう」

仕事を引き受けるか相談しようと思い、横を振り向く。フィオは頷いてゴーサインを出していた。

「——分かりました、お引き受けします。それで、ティアマトはどこにいるんですか？」

海竜というからには、いるのは海の中だろうか。さすがにフィオでも、水中での戦闘は不可能だろう。どうやって地上の戦いに持ち込むか考えなら尋ねてみた。

「分からないわ」

「分からない？」

思わず口を開いたフィオと声が被った。

「一年に一度、生贄を受け取りに洞窟に来るのは分かっているんだけど、それ以外の時はどこにいるのか誰も知らないの」

「一年に一回ですか……。会つのは難しそうですね」

会えるのは年に一回。いる場所も分からない。戦闘が始まる前の段階から困難な気がしてきた。

「そんなことはないわ。だって一年に一度の日っていうのは、明日のことだもの」

「ええ?!」

再びフィオと声が被る。三百六十五分の一の偶然。この町を選んだことも含めれば、もっと低い確率かもしれない。まるで運命というものに手繰り寄せられているような気がした。

明日に備えて、洞窟に帰らず町で宿泊することになった。係の女性に紹介してもらったのは、停泊中の漁師が泊まるという宿だった。木造の二階建ての建物で、結構な築年数が経っていると思うが、手入れが行き届いていて中は綺麗である。

まだ夜は始まったばかりだというのに、フィオは夕飯を食べたり部屋に籠っている。一人で夜の町を散策しようと思い、宿の出口に向かった。

「よう。嬢ちゃんは一緒じゃないのかい」

後ろから声をかけられ、振り向いた。扉の横で、宿の主人と漁師の男が壁に寄りかかって立っている。月を肴に酒を煽っていたようだ。

「相方は、根つからのインドア派なんで」

「そうかい。ぱつと見、活発な子に見えたけどな。それはそうとお前さん達、ティアマトを倒そうだなんて企んでいるんだって？」

どういう経路で伝わったのか分からないが、情報の回りが早い。夜の散歩は諦め、会話に参加することにした。

「ええ、まあ。止めた方がいいって思ってますか？」

男の口調から、否定的な立場の人間だと思った。ティアマトは海の神の代弁者だと言われているので、それを倒そうだなんて、町民の多くは恐れ多く感じているかもしれない。

「いや、俺は大歓迎だよ。あの風習には何度も苦い思いをさせられてきたからな」

「そうそう。協力できることがあれば何でも言ってくれよ」

二人の男はそう答えて、豪快に笑っていた。後ろめたかった気分が晴れた。早速ティアマトについての情報を集める。

「ありがとうございます。早速なんですけど、ティアマトってどんな姿をしているんですか？」

「山みたいに、でっかい頭をした竜らしいな」

「いやいや、俺の聞いた話だと空まで届く長い体をしているらしいぞ」

見事に話がばらばらだ。それに、二人とも語尾に『らしい』をつけている。

「直接見たことはないんですか？」

「ま、まあ、そういうことになるか。伝承では、昔はよく姿を見せていたらしいんだがな。最近の話なら、夜中に大きな影を見たっていう奴——から話を聞いたっていう男と話したぜ」

「——本当にいるんですか？」

そう尋ねた時の私はジト目をしていたと思う。

「いるんだって！ 洞窟は鍵をかけることができるんだが、生贄に捧げられた娘は一晩で姿を消すんだ。その後には服だけが残っているらしい」

漁師達に挨拶をして、部屋に戻った。フィオはまだ起きており、背もたれを前にして椅子に座り、器用に左右に揺らしていた。彼女と向かい合ってベッドに腰掛け、聞いた話を伝えた。

「どう思う？ ティアマトは本当にいるのかな」

「生贄って、要するに食料でしょ？ 牛の方が美味しいのに、わざわざ人間を要求する理由が分からないなあ。女の肉はまだマシだとは

聞くけど……」

妙に説得力があるが、なぜ牛肉が人肉より美味しいと知っているのだろう。凄惨な過去の話が出てきそうで聞けなかった。

「食料だけとは限らないだろ。例えば、お嫁さんにするとか……」
「なっ」

フィオが小さく声を漏らして椅子から落ちた。顔を赤くしている。

「ティアマトは雌しかない。さすがに同性愛が無いとまでは言い切れないけどって——何を言わせるかッ！」

立ち上がり様にローキックを放ってきた。偶然足を上げていたので避けられたが、触れていないのに衝撃でベッドが揺れた。

「ボケていないし、怖いから突っ込みは止める！」

この二日間で、フィオは色恋沙汰や下ネタにひどく弱いということが分かった。もっとも、自分の命に関わるので活用できる機会は少ないと思うが。

翌朝商工会議所に向かうと、三人の町人が抱き合って泣いている現場に出くわした。沈んだ顔をしている女の子が今回の生贄らしい両親と別れの挨拶を交わしていた。

三人のことを涙ぐんで見守っている係の女性を見つけ、話しかける。

「おはようございます。なんで生贄の子が用意されているんですか？ ティアマトなら僕らが倒しますけど……」

「生贄を捧げるのは怠るなというのが、町から提示された条件だったわ。期待はしているけど、信用はできていないって感じかしら」

もし私達がティアマトに負けても、生贄を用意しておいて嵐を防ごうという魂胆だろう。たくさん船が停泊するこの町では、嵐が来れば大事故に繋がる。町人の気持ちも分かる。この女の子をティアマトに差し出したいくないという思いを強めながら、しぶしぶ頷いた。

「お別れの挨拶はよろしいでしょうか。——それでは、私が先導します」

係の女性が歩き出す。娘の後について私達も歩き出した。

私達は町を出てから、真っ直ぐ海へと向かっていた。やがて着いたのは、海岸にある岩場だった。海側は険しい崖になっている。誰も口を開かず、砕けた波の音が一定の調子で聞こえていた。

係の女性が崖を回り込むように歩き始める。その先には、人が一人通るのがやっとな幅の階段が設けられていた。四人で崖を降りていく。波が激しく打ち寄せており、飛沫が飛んでくる。落ちたら、無傷で戻ってくるのは難しそうだった。

階段が途切れ、錆びた鉄の扉が現れた。

係の女性が鍵を開け、扉を開く。中に広がっていたのは、海と陸の調和が表現された小さな空間だった。海蝕によって切り出したように段状になっている床や壁。地面の半分は水に浸かり、微かに波打つ水面が白く輝いている。部屋中央では、壁から差し込んだ光

に、人間の姿をした像が照らし出されていた。祠に人間が祀られているのはおかしいので、海の神を模しているのかもしれない。ともかく、あまりの綺麗さに息を呑んだ。

「神の代弁者が出てもおかしくない、神聖な感じがする場所だな。フィオはティアマトの気配と違って分かるのか？」

「多少鼻は利く。まあここは、獣臭いっていうより、胡散臭いね」

係の女性が私達を中に残し、洞窟の外へ出た。心配そうにしている生贄の娘を落ち着けようと、私は彼女の肩に手を乗せた。

「では、よろしくお願いしますね。明日また鍵を開けに来ます」

引きずる音を立てて鉄の扉が閉まる。縁に沿って差し込んでいた外界からの白い光が途切れた。しばらくしてから、外でガチリと音がした。鍵が掛けられたようだ。

どれだけ時間が流れただろう。洞窟の中の光景は変わらず、時刻が分らない。

私は生贄の娘の話を聞きながら元氣付けていた。彼女の名前はモジツエで、年はまだ十六歳。同年代の町人の中から、くじ引きで選ばれたらしい。その間、フィオは黙って水面を睨みつけていた。

「外界から遮断されているのに、ティアマトはどうやって現れるんだろうな」

漁師の話だと、洞窟には生贄の服だけが残るという。島を呑み込むような巨体で、どうやって洞窟の中から当人だけを奪い去るのか。

ティアマトが鼻先の触手を伸ばすという、乏しい想像しか浮かばなかった。

「これが答えなのかは分からないけどね。……見てみな」

フィオが水面を指差す。指の先、水の中に白い道が見えた。

昼間は全体的に明るかったので分からなかったが、月光で岩が照らされて現れたらしい。人が一人通れるだけの大きさがありそうだった。

「行ってみるか」

私は上着とズボンを脱ぎ捨てた。水の中に足を入れる。冬の海は寒いどころか痛い。腹まで水に浸かっただけで、歯ががちがちと音を立てていた。

「どうする？ モジツエは残っていた方がいいと思うけど」

「いえ、私も行きます」

フィオがマントを、モジツエが上着を脱ぎ終わるのを待つて、水の中に潜った。光の道を道標にして泳ぐ。息が続かないことを心配していたが、すぐに水面が見えた。

水から顔を出す。出たところも、岩の壁で囲まれた洞窟だった。

岩場上がり、ついて来た二人を引き上げた。

「ここは？」

「さあ。ただ、終点はまだ先みたいだ」

フィオの質問に答える。暗闇に目が慣れ、細長い道が続いているのが見えた。天井から差し込んだ月明かりによって足元が微かに照

らされている。

私達は寒さに耐えながら洞窟の中を歩き続けた。

進行方向に、人工的な火の明かりが見えた。危ないのは分かっているが、気持ちが急いで駆け足になる。洞窟を抜けた先にあったのは、数軒の家しかない集落だった。

「いらっしやい。あら、今年は三人も生贄が用意されていたの？」

「しかも一人は男じゃない。サライの町はどうしちゃったのかしら」

焚き火の前で、十人ほどの人間が待ち構えていた。十台から五十台くらいまでと幅広い年齢層だが、全員が女性だ。

「生贄のことを知っているのか？ それより、何でこんなところに村が……」

「村の名前は無いわ。ここは生贄が第二の人生を過ごす場所よ」

焚き火の前で体を温めながら、集落の女達と話をした。

ここは位置的には町の近くらしい。しかし深く入り込んだ入り江になっていて海からは見えず、崖の下にあるので滅多に地上からも見えない。

この村には、生贄になった女性達が住んでいる。今まで生贄になった女性はティアマトに食べられたり嫁がされたりしていたわけではなく、この村での生活を始めていたのだ。

気になるのは、祠から続いている手の込んだ仕掛けの避難経路についてだが、最も年配の女性が生贄にされた時からあったそうだった。

「生きていたんだったら、ずっとここにいらなくても町に帰ればよか

「つたんじゃないのか？」

「私達は嵐を防ぐために生贄にされたのだから、帰ったら町中を不安にさせてしまうでしょう。だから町の人から見つからないように、身を寄せ合って生活していたの。幸いこの辺りは海産物も豊富で生活には困らなかつたしね」

家族や恋人同士がすぐ近くにいながら別々に生活していたなんて虚しすぎる。一步で小宇宙へ帰れたのに、半年もの間こちらで暮らしていた私のようだ。いや、当人が自覚していた分、きつともっと辛かつたに違いない。

「じゃあティアマトも、生贄を捧げないと嵐が来るというのも、全部嘘だつたのか」

「昔は本当にいたのかもしれないけど、今はそうね、形だけになっているわ。……納得できたら、こっちからも聞いていい？　なんで三人も生贄がいるの？」

そういえばフィオと自分の自己紹介をしていなかった。たいそう不思議に思わせてしまっていただろう。

「本当の子は彼女だけだ。俺達は町の人とティアマトを倒す約束をして、ついて来たんだ」

「町を挙げてティアマトを？　それってつまり……」

「ああ。ティアマトは倒せなかつたけど、もう嵐のことを気にする人はいなくなるだろ。みんなで帰ろう」

女達は私の言葉を聞いて呆然としていたが、すぐに顔に笑みが浮かんだ。

「ありがとう。まさかこんな日が来るなんてね。……ところであな

た、寒くないの？」

女の視線の先を追うと、自分のパンツが見えた。そういえばパンツ一丁だった。

町に帰る途中で洞窟に取りに戻ろうと思ったが、鍵がかかっている無理だと気付いた。生贄を差し出した翌日に洞窟内に残されていた服とは、単に脱ぎ捨てられた服だったのだろう。

町人の間で広まった噂によって、ティアマトの存在は確固なものにされていった。そのせいで百年もの間、確かめようとする人間が現れなかったのだろう。やるせない思いがした。

その日は村に泊まり、翌朝モジツエと女達を連れて町に帰った

モジツエを連れて商工会議所に向かうと、大勢の町人が扉の前に集まっていた。その中に係の女性と昨日見た夫婦が立っているのを見つけた。

「話は聞いたわ。まさかティアマトがいなかったなんてねえ」

係の女性が私達に気付き、声をかけてきた。モジツエは家族に走り寄り、抱き合って涙している。

「何はともあれ、本当にありがとう。あなた達が町に来ていなければ、親子を引き裂くだけの虚しい習慣が延々と続けられていたと考えると、恐ろしいわ。お礼は食料だけでいいって言っていたけど、町の人から是非あげてくれてお金も貰ったから、入れさせてもらうわね」

町人が私達に歩き寄り、次々に声をかけてきた。昨日話をした宿

の主人や漁師の姿もある。フィオは呆けており、されるがままに肩を叩かれていた。

「……何もしていないのに、何で？」

フィオがぼつりと呟いた。係の女性が怪訝な顔をしてから、優しく話しかける。

「何もしてない？ そんなことないわ。町の大きな問題を一つ解決してくれたじゃない」

「だってあたしは、ただ歩き回ってただけで、全然力も使ってない！」

「いいから、黙ってもらっとけ」

声を荒げているフィオの肩を引いて下がらせた。

「お前はこう思っているのか分からないけど、これが『皆が幸せでいられる方法』なんだ」

「すんなり手に入りすぎて、あたしには意味が分からないよ……」

声に驚き大人しくしていた町人達が、再びフィオを揉みくちやにする。

「……でも、悪くはないな」

彼女の口から小さく発せられた声を聞き逃さなかった。

商工会議所の前に集まった集団を、建物の陰に隠れた一人の女が

眺めていた。全身をマントで覆っており、顔の横の隙間から銀色の髪を覗かせている。その両隣には鉄の板を組み合わせた、小宇宙の西洋風な鎧が二体控えていた。

「噂を聞いた時は冗談だと思ったけど、本当に人と行動しているなんてね。これなら立ち入る隙ができるかも——」

女は口端を歪ませて笑い、その場を立ち去った。

フィオはサライの町で受け入れられ、話を聞いた商人や漁師から次々に仕事が増え込んでいった。そして世界最強のボディガードの噂は国中に広がり、やがてフィオが傷つけた村からも相談が来るようになった。

そして私がフィオの尻尾の先の代わりとして行動するようになってから、三ヶ月が経過した。

0112：鋼の襲撃者

数々の脅威を解決してきた功績を買われ、サライの町で事務所を開くことができた。といつても、お金はないので、青果を扱う店の二階部分を借りている。

私達は明日の開店に向けて準備をしていた。感慨深く思いながら受付機の椅子に深く腰掛けてみる。

「よく似合ってるよ。法外な金利をふっかける店の主人みたい」

事務用品の入った箱を運んでいたフィオが言葉をこぼした。

「悪そうな顔をしているってことか？」

椅子から立ち上がり、なるべく目に入れないようにしていた荷物
の山を眺める。店を構えたお祝いとして、以前お世話になった商工
会議所の女性から大量に貰ったお古の事務用品だ。

「あたしが運んでおくから、そこで偉そうに座っていていいよ」

「男のプライド的に、猫の手くらいの働きはしたい」

喋っている間にも、フィオが箱を四つ抱えて部屋の奥に運んでい
く。私も（気持ちの上で）彼女に負けないように、自分でも持てそ
うな箱を選んで運んだ。

荷物を置き、ふと束ねられた紙が詰められている箱を見つけた。
ラウケラムウの文字がびつしりと並んだ、お礼の手紙。フィオと何
でも屋を始めてから、お客さんから貰ったものだ。一枚一枚に目を
通しながら当時の状況を思い出す。

「随分いろんな獣と戦ったり、いざこざに介入してきたんだな」

何気なく仕事を引き受けているが、こうして残された物を見ると、多くの人々の生活を守ってきたことを実感する。

「どれも大したことはなかったけどね」

戻ってきたフィオが向かい側で腰をかがめ、手紙を一瞥して言った。

「——それだ、それ。一応形だけ付き添っているけど、どれもこれも俺がいなくてもフィオだけで解決できただろ」

むしろ足手まといになっていた気がする。私がいると報酬の取り分も減るわけだし、そろそろ尻尾の代行を解約したいと思っているのではないかと思い聞いてみた。

「そんなことない。カズマが教えてくれたからこそ、こういう生き方をしていられるんだから。それに……色々と、ごく稀に助かる」

「最後にちらつと本音が出たな」

フィオは私の活躍した例を挙げようとしたていたが、考えた末に諦めた。分かっているけど軽くショックを受けた。

「俺には獣の血が流れていないし、魔法もろくに使えないからな、頼りにされなくても仕方ないと思ってる。でも一緒に行動するからには、もっと力になってあげたいんだけどなあ……」

半分——は無理でも、数パーセント——いや、マイナスにならな

いくらの働きはしたい。

「力、か……。あたしの魔力をあげようか？」

「魔力つて、あげたり貰ったりできるものなのか？」

私の解釈では、魔力は奇跡の粒子を震わせるアクチュエータみたいなものだと思っている。魔力が高ければ、より奇跡の粒子を振動させることができ、より広く強く世界に影響を与えることができる。しかしあげたり貰ったりできるものだというのは知らなかった。チヒロは魔法に匂いがあると書いていたし、魔法というものがよく分からなくなっていく。

「効率が悪いから、少ししかあげられないけど。……前にも夜襲してきたバカに、あまりにも弱くて不憫だったから魔力を与えてやった」

「どれくらい強くなれるんだ？」

「その襲撃者は四柱になったらしいね」

「はあ?!」

フィオはしれつと言ったが、四柱といえば、世界最強の四人の魔法使いに与えられる称号だ。

力は欲しいと思うが、いきなり四柱クラスの魔力を与えられるのはさすがに怖い。子供レベルの魔法すら使いこなせていない私では、まさに過ぎたるは及ばざるが如しの状況に陥りそうだ。

「……遠慮しておく」

「そう。覚悟ができたらいつでも言いなよ」

しかしフィオの言う『少し』の魔力で最強になってしまうなら、彼女自身は四柱からどれだけかけ離れた位置にいるのだろう。足手

まといになっていたのが当然な気がしてきた。

荷物を運び終わり、昼食をとるため事務所を出た。財布の中身を確認する。事務所完成記念に奮発するくらいの金はあるそうだ。先頭を歩いている彼女に久しぶりに好物を食べさせてあげたい。

「——カズマが子分になってから、あの申し出の返事をずっと考えてた」

事務所の前の道に出ると、フィオが話を始めた。あの申し出とは何のことだろう。小宇宙でしたことを償わせてほしいと頼んだことだろうか。

「まだ返事は出せない。でも今は、まじめに考えてやってもいいと思うてる」

「そうか……」

フィオは何故か視線を合わせようとしなかった。何を言いたかったのかよく分からないが、尋ねにくい雰囲気だったので話を合わせた。

町の様子がいつもと違うことに気づき、辺りを見渡した。いつもより道行く人の流れが速い。耳を澄ませば、叫び声や物音が聞こえてくる。

「何かあつたんですか？」

事務所の前を通りかかった男に話しかけた。以前仕事で関わった、知っている顔だった。

「またトロールが出たらしいんだ。あんたらのところで何とかしてくれないか？」

「トロールですか……。それくらいなら、守備隊がささつと倒してくれますよ。何かあったら僕達も出ますから安心してください」

男はよろしくと言って、早歩きで去っていった。

トロールは毛むくじらの巨人の姿をした獣で、月に一度くらいの頻度で食料を求めて山から降りてくる。図体は大きいが悪いので、獣の中では比較的簡単に対処できる部類に入る。私達の出る幕はないだろう。

「どいた、どいてくれ！」

事務所の前の道路を通り、男が担架で運ばれてきた。あらぬ方向に曲がった腕には、守備隊の所属であることを示すワッペンが縫い付けられていた。

「……その何かが、あつたらしいな」

担架を見送りながら、フィオが言葉をもらした。

この町の守備隊は優秀で、トロール相手に怪我をしたことなんてなかった。いつもと様子が違うようだ。

「俺達も行くのか」

私はフィオと共に、騒ぎが起きている町の西の方に向かって走り出した。

人の流れに逆らい、町の外れに出る。トロールの居場所は一目で分かった。長い毛に覆われた五メートルほどの巨躯。左右非対称の腫れた顔に、みずばらしい小さな二つの目がついている。町から少し離れた場所で、十数人の守備隊員と対峙していた。

三人の隊員が手の平を向け合い、協力して巨大な炎の槍を作り出す。すかさず、後ろで控えていた二人が操作し、トロールに向けて投擲した。守備隊ならではの、息の合ったコンビネーション。しかし腹に当たった炎の槍が掻き消えた。魔法が効いていないようだ。トロールがゆっくりとした動作で腕を振り上げる。守備隊員は即座に反応し、自分達の上空に氷の盾を生み出した。

トロールの腕が突き出される。拳が盾を突き破り、隊員達を殴りつけた。下敷きになった二人の隊員が地面に埋まっていた。盾は物理的に破壊されたというより、拳に触れた瞬間に消滅していた。

「――あの鎧のせいだ。とんでもない耐魔能力を持ってる」

フィオが、トロールの纏っている鎧を指差した。トロールの拳と腹部、頭はシンプルな銀色の金属で覆われていた。魔法を防ぐ鎧。ア・バオ・ア・クウの甲殻は高い魔術抵抗を持っている為、鎧に使われているとチヒロから聞いたことがある。

「どうする？ 十八番の火の魔法も通じないんだろ」

「耐魔の鎧は厄介だけど、トロールごときじゃあ宝の持ち腐れだね。どうとでもなるよ」

フィオがトロールに向かって走り出す。気付いたトロールの下で、守備隊の隊員達が撤退を始めた。

トロールが腕を引く。フィオは臆さず、一直線に走り寄った。

「一つ――、魔法なんて使わなくても近接戦で勝てる」

突き出された大きな拳を、フィオが横から小突いて弾く。伸びた腕の上に飛び乗って走り、背中に回り込みながら鎧の首元をつかんだ。フィオが振りかぶった直後、トロールの巨体が一回転して、あおむけになって地面に叩きつけられた。

凄まじい勢いだったが、トロールの頑丈さはそれを上回っていた。フィオに向かって毛深く太い腕を伸ばす。

「二つ――、顔がから空き」

フィオは伸ばされた手を避けて、倒れているトロールの顔の上に飛び乗った。人差し指を、醜い鼻に向ける。指の先から赤い光が放たれる。瞬間的にトロールの顔が焼け焦げて散り、それだけで止まらずに一帯が炎に包まれた。

熱風が押し寄せてくる。私は顔の前に手をかざし、後ずさった。

「こんな風にね」

燃え盛る炎の中から声が聞こえ、フィオが歩いて出てきた。

「変なトロールだったな……」

火の中で崩れ落ちていく体を眺めながら、私は呟いた。

「大変だ！ 別の方角から来た二体のトロールが、町の中まで入ってきた！」

守備隊の隊員が叫びながら駆け寄ってきた。

今回のトロールはいつもと様子が違う。トロールは道具を使わな

いいし、群れをなしたり作戦も立てない。何者かが裏で糸を引いているようだ。ともあれ被害が広がる前に、さつさと残りのトロールも始末しなければならぬと思った。

「フィオは右から回ってくれ。俺は左から行く」

「いいけど、カズマ一人で倒せるの？」

町を指差して指示を出すと、怪訝な顔をされた。

「さつき倒し方を教えてもらったし、尻尾分の活躍はしてみるよ。早く助けに来てくれないと、やられるかもしれないからな！ 頼んだぞ！」

私の言葉を聞き、フィオは苦笑いを浮かべて頷いた。

サライの町の外周を左回りに走る。どうやってトロールを見つけようか方法を考えていたが、その必要はすぐになくなった。家の屋根の上に、兜をつけた毛むくじらの頭が見えた。路地を通って駆け付ける。

トロールは市場の屋台に顔を突っ込んで箱ごと食い漁っていた。

私の存在に気付きながらも、依然食べ続けている。

フィオが教えてくれた倒し方は二つあったが、私の体で近接戦は無理がある。隙を作り、魔法で顔を狙うのが唯一の対抗策。

「火から土を、粗雑なるものから精妙なるものを分離せよ！」

魔法陣の描かれたカードを目の前にかざし、詠唱を行う。光の縁をもった十枚の鏡が周囲に浮かんた。伸ばした腕をトロールに向け

て、鏡に指示を出す。鏡は宙を走り、一点に集中して上腕に襲いかかった。大宇宙と小宇宙の狭間という刃で、強引に断ち切る。

切断された腕が屋台の前を転がった。上腕の断面から真っ赤な血が噴き出す。トロールがこちらを向いた。痛覚がないのか無表情のままだったが、怒っているように感じた。

「星煌く天は我が顔、海は我が胸、大地は我が足、風が充たすは我が耳、輝く光を遠矢に射る太陽は我が目なり」

再びカードを構えて詠唱を始める。トロールはようやく屋台から顔を離し、こちらに向かって走ってきた。

「——我は汝に啓示を与えるもの」

しかし遅い。食べ物に執着していたので、隙だらけで助かった。光の縁をもった立方体が、忽然と宙に現れる。鏡の箱はトロールの顔を呑み込むように浮かんでいた。

立方体が消え、トロールの顔から中身が零れ落ちる。巨体が膝をつき、前屈みに倒れこんだ。

辺りには血の水たまりがいくつもできて、鉄の臭いが立ち込めていた。相手は害獣だからといっても、気持ちのいいものではない。吐き気を覚えた。

「——へえ。口を出すだけなのかと思ってたけど、結構やるじゃない」

背後から女の声が聞こえた。声のした方を振り向くと、黒いマントで全身を覆った人間がいた。

「誰だ?!」

私が叫ぶと、女はすつとフードを下ろした。色白の顔と、銀髪のショートヘアーが露わになる。体型はやや小柄。年齢は私よりも少し年下で、フィオと同じくらいに見える。

「はじめまして、カズマ君。私はアクツオハミアチ・ウィツタク。俗に『鉄柱』と呼ばれているわ」

女は小柄な胸に手を当てて自己紹介を始めた。鉄柱といえば、氷柱・木柱・石柱を合わせて四柱とか呼ばれている、チヒロも名前を連ねている最強の魔法使いの称号だ。

「何で大魔法使いがこんなところに……？」

「貴方に用があつてね。一緒に来てもらえる？」

フィオに用事ならともかく、魔法もろくに使えない男に仕事は頼まないだろう。怪しく思い、相手から分からないようにポケットの中のカードを手繰り寄せた。

「連れと合流してからでもいいか？」

「駄目よ。悪魔が来る前に済ませたいの」

ウィツタクは口の端を歪ませて笑った。

敵意。危険。頭の中でサイレンが鳴る。カードを顔の前に掲げて構えた。

「私のことを四柱と知りながら、戦う気？ 別に構わないけど。あなたには悪魔を捕まえるための餌になってもらうわ」

「させるか、——我は汝に啓示を与えるもの！」

相手の狙いはフィオだった。捕まえると言っているからには、賞金稼ぎだろうか。フィオが暴れている時に示された王都からの高額の賞金は、今も有効だ。

カードを表に返し、魔法陣を目に焼き付ける。光の縁をもった鏡が正面に現れた。鏡は縁をウィツタクに向け、滑るように宙を走る。いくら四柱でも、物質の結合を無視して切断する私の魔術は、物理的に避けない限り防ぐことはできないはずだ。

ウィツタクがマントの中から手を出した。次の瞬間にはどこから現れたのか、彼女の前に銀色の鎧が立っていた。鉄の板が組み合わされたシンプルな西洋風の甲冑。反対側のプレートが見えているので、中に人は入っていない。背中に大きな両刃の剣を担いでいた。

鏡が加速し、鎧の胸を切断する。光が弱まり四散した。いや、鎧を傷つけることができずに、鏡はかき消されていた。トロールが身に着けていたのと同じ、耐魔の鎧。

「……もしかして、トロールをけしかけたのはお前なのか？」

「ご名答。貴方と悪魔を分断するためにね」

裏で糸を引いている人間がいるとは思っていたが、それが四柱だとは思いつかなかった。しかも賞金目当てで町に獣を放ったなんて、怒りとともに恐怖を覚える。

「狂ってる……」

私の呟きを聞いても、ウィツタクは無反応だった。彼女の代弁でもするかのように、ぎしつと金属音を立てて、鎧の顔がこちらを向いた。

魔法で操作しているようだ。鎧の顔部分はフルフェイスになっていて、そもそも中身がない。フィオがしていたように、金属で覆われていない部分を狙っても無意味だろう。対抗できる手段がない。

敵わないという結論に至るやいなや、私は背中を向けて走り出した。逃げるなんて格好悪いが、フィオと合流してしまえば、分断しようとしていたウィツタクの作戦は破綻する。

「――逃がさないわ」

いつの間にか進行方向に三体の鎧が立っていた。私を囲んだ鎧達は、ぎしぎし音を立てて輪を狭めてくる。

逃げ場すら失い、完全に手詰まりになった。唇をかんで、悪あがきをしようと拳を構えた。

眼窩から拳を引き抜き、皺が刻まれた薄いピンク色の組織を引っ張り出した。トロールの巨軀が体を震わせ、あお向けに倒れた。

「見つけるまでに時間がかかったな……」

やられる前に駆けつけろと言っていた男はまだ無事だろうか、フィオは気をもんだ。

地面を蹴って駆け出す。手から離れた脳みそが、道路に落ちて潰れた。

町の中を走っていると、すぐに三匹目のトロールの死体を見つけた。立方体の形に挟られた魔法の痕からして、和真がやったことが分かる。しかし辺りに当人の姿はなかった。

血の臭いに混じり、いつか嗅いだことのある匂いが漂っている。彼女は胸騒ぎを感じていた。

死体の近くに紙切れが落ちている。吹き飛ばされないように、上端を折れた刃物でとめてある。書かれていた文章に目を通し、フィ

才は奥歯を噛みしめた。

0113：すれ違った盟約

私はサライの町から内陸側に歩いたところにある森の中にいた。腕を後ろに回し、あぐらをかいて地面の上に腰を下ろしている。両腕は鉄の輪で拘束されていた。

「なんでそんなに悪魔にこだわるんだ？ 賞金か？」

ウィツタクは隣で切り株に座り、フィオの到着を待っていた。足を組み、手の平の上に顎を載せて、かなりリラックスした様子だ。マントからはみ出た腕は、肘から指先まで精巧な鎧に覆われていた。彼女が得意とするのは、金属を自由に変形させたり移動させる魔法らしい。森の中には彼女が作り出したと思われる銀色の棒が、まるで墓標のように乱立していた。

「賞金？ 大人しく協力してくれれば、そんなものの全部あげるわ」

「なら何で……」

ウィツタクは躊躇っていたが、覚悟したように口を開く。

「悪魔が力に物言わせて、辺りの集落でやりたい放題やっているのは知っているでしょう？ あいつは私の村を襲い、私の家族を殺したわ」

行動を共にした初日、フィオはさも当然のように自分に逆らった村に火を放った。ウィツタクの話も十分あり得ると思う。しかし私は彼女に関しては、報いのような面もあると思った。

「でも、あんたはただの村人じゃない。四柱の一員として互いに命

を懸けて戦った結果なら、恨むのはお門違いじゃないのか？」

「——私は元々、魔法もろくに扱えない落ちこぼれだったわ。互いに命を懸ける？ あいつは命を脅かされることはないもの。あれは一方的な虐殺だったわ」

言葉を失った。昔は魔法を扱えなかったとはどういうことだろう。魔力の量は、生まれでだいたい決まってしまうという。どうやってこの十年、二十年で力を増したのだろうか。

ウィツタクは私の顔を見て疑問を察したようで、言葉を続けた。

「直後に家族の仇を討とうと夜襲をかけたんだけど、あっけなく返り討ちにされたわ。そしてあるうことか、あいつは憐れんで私に魔力をよこしたのよ？ 嫌味なんて可愛らしいものじゃない。絶対に届かないと確信して、足元でもがいているのを見て笑っている。そんな奴なのよ、あいつは」

夜襲してきたバカに、あまりにも弱くて不憫だったから魔力を与えてやった。今朝のフィオの言葉を思い出した。

「お門違いとか言っで、ごめん……」

「敵に謝るなんて、変な人。別に気にしてないわ。——貴方こそ、なんで悪魔なんかと行動しているのよ？」

今度はウィツタクが尋ねてきた。視線は森の奥に向けており、表面的にだけ聞いているようだった。

突っ込んだことを答えてもらっておいて、自分だけ教えないというのは敵であっても気が引ける。どう答えたらいいか頭の中を整理しながら、口を開いた。

「最初はいいつの力になって、贖罪するつもりだった。でも人離れ

した生活を目の当たりにして、人の生き方を教えてあげないといけないと思ったんだ」

「それが、あの町でしていた何でも屋ってわけ？」

ここ最近の活動のことまで知っているようだ。トロールをけしかけたタイミングといい、ずっと見てきたのかもしれない。

「ああ。真っ向から人と関わって、あいつも変わったたる？」

「そうみたいね」

ウィツタクが素直に認めたので、拍子抜けしてしまった。

「今のあいつなら、あんたの家族を手にかけてしまったことを心から後悔できると思う。……見逃してやることはできないか？ 話を
する機会なら俺が用意する」

ウィツタクは俯いて考え込んでいたが、しばらくして口を開いた。

「分からない。なんで貴方は悪魔をかばうの……？」

小枝や葉を掻き分ける音が聞こえる。顔を上げた彼女の視線の先には、肩を怒らせるフィオの姿があった。

「やってくれたねえ」

フィオはちらりと私がいることを確認し、ウィツタクに向き直って足を止めた。地獄の底から聞こえてくるような深い声で呟く。しばらく見なかった、ぎらぎらした目をしていた。

「こんなにあたしを怒らせて、無傷で帰れると思う？」

空気が張り詰めている。ウィツタクが切り株から腰を上げた。ウィツタクは戦いを放棄する提案を拒否しなかった。淡い希望を抱いて声を張り上げる。

「ウィツタク！」

「——この男の命が惜しければ、そこに立ったまま指一本動かさないことね」

しかし彼女の口から零れたのは、戦闘の合図となる言葉だった。手の中から細い刀身の剣が伸び、私の首筋に当てられた。

どすん、どすん、どすん。断続的に地面が揺れる。たくさんの鳥が鳴きながら飛び去っていった。

異質が近づいてくる方向に視線を向ける。太陽の光を反射し白く輝く金属の皮膚。森の奥から現れたのは、自然色に不似合いな銀色の巨人だった。顔や関節の隙間から中を覗くことができるが、案の定中身は入っていない。ウィツタクが町で扱っていた鎧と違い、兜には牛のような弧を描いた角の装飾が施されていた。

巨大な鎧が体を軋ませ、腕を引く。握られた拳は人間の身長ほどの大きさがあつた。

フィオは動くそぶりを見せない。柄にもなく、ウィツタクに言われたことを守るつもりのようなのだ。

加速した大きな鋼の拳が、フィオを真正面から殴りつけた。ガキン、と一際大きな金属音が森の中に響いた。

「っ……?!」

衝撃的な光景に、思わず声が漏れる。

ここから彼女の様子を見ることはできない。しかしあんな重量の

ものが激突して無事なはずがない。

「止める、フィオ！ こっちは自分で何とかするから！」

動く力が残っていることを期待して、必死に叫んだ。喉元に刃先が近づき、ウィツタクから黙れと無言のメッセージが伝えられた。

「……弱っちいくせに、何とかできるわけないじゃない」

鎧が引いている拳の向こうから、声が聞こえた。無傷のフィオの姿が露わになる。

「この化け物……！」

彼女の姿を確認し、ウィツタクがぎりつと奥歯を噛んだ。鋼に覆われた手を突き出し、鎧に指示を出す。

鋼の巨人が背中に担いでいた大剣を抜いた。これも通常の鎧が装備していたものとはスケールが違い、木くらいの大きさがある。上段に構えられた剣先は、葉々の天井を突き抜けていた。

大剣が振り下ろされる。高さや遠心力を味方にした剣筋は、まるで雷が落ちているように見えた。

「馬鹿、避ける！」

避けようとしないういおに向かって、再び叫ぶ。

とても斬撃とは思えない爆音が鳴り響く。衝撃で地面が砕け、土が巻き上がった。

巻き上げられた土石や葉が地面の上に降り、森に静寂が戻る。フィオは肩で剣を受け止めていた。地面を陥没させた両足が威力を物

語っている。彼女の口端から細く血が流れた。

「馬鹿はどっちよ。三か月も一緒にいて、まだあたしの強さが分からないの」

手の甲で血をぬぐっている。

「どうしてよ……。人も獣も、全てを敵に回していた貴方がどうして……。どうしてそこまで、この男にこだわるのよ?!」

ウィツタクが取り乱して叫ぶ。反応するように、鎧が再び大剣を振り上げた。

頑丈なフィオでも、あの攻撃を何度も受けたらやばいと思う。一緒に叫んだ。

「そうだ、人をかばうような柄じゃなかっただろ!」

「お前まで一緒になって言うか。……。別にこだわってなんかいない。あたしと添い遂げたいなんて世迷言を言ってくるような奴だから、正気に戻る前に死なれると後味が悪いだけだ」

フィオが私のことを指差して言った。

言っていることが理解できない。アテゴチオシを小宇宙語に訳せば、添い遂げたいという意味になる。訳し間違えたのではないようだ。

「え?」

「はあ?」

「……え?」

最初の疑問符は私。続いて気の抜けた様子のウィツタク。最後は

何故かフィオだった。その場にいた全員がクエスチョンマークを頭の上に浮かべていた。

「え、ってなんだ！ 私に求婚してきたら？！」

ウィツタクの存在を無視して、フィオが突然怒り出した。

「いや、してないけど……」

「したね！ 手を合わせて、本気だとか何とか言って！」

彼女と行動するようになった日のことを思い出す。手の平を合わせて謝りながら、本気で申し訳ないと思っていると言った。

「確かに手の平を合わせて謝った。でも、求婚をした覚えはないぞ」
「往生際が悪い。だから、手を合わせるっていうのが求婚だろ？！」

血の気が引いていくのを感じる。そういえばあの時、フィオは不自然に慌てていた。

「すまん。こっちの文化に疎くて、ジェスチャーの意味を間違えていたみたいだ。深い謝罪の意味をもってると思ってた」
「なっ……」

私は本当のことを告げることにより、彼女が怒り出すと思っていた。しかしフィオは顔を赤くして、泣き出しそうな表情をしていた。

「……ははっ」

話についていけず、ぽかんとしていたウィツタクが急に笑い出した。

「悪魔の貴方が、人並みに恋を夢見ていたなんて?! あはは、これは傑作ね!」

「違う! あたしはただ――」

鋼の巨人が剣を大きく振り回し、勢いをつけて薙ぐ。剣先がわき腹に食い込み、フィオは吹き飛ばされた。木の幹に背中を打ち付け、苦しそうに息を吐き出していた。

「それも一方的な勘違いだなんて! あはっ、最高に笑えるわ!」

ウィツタクが笑いながら鎧に指示を出す。フィオはそれでも反撃しようとしなかった。

幹竹割り。蹴り。突き。顎をかち上げる斬撃。一方的に攻撃を受け、目に見える傷が増えていく。

腕を動かし、がちやりと手錠を鳴らした。

耐魔の機能を持たせた金属には、四柱であっても魔法を通すことはできないはずだ。あの鎧はメツキのように表面だけ魔術抵抗を高め、内部から魔法を使って動かしているのだと思う。私につけられている手錠はウィツタクが変形させて作ったものなので、通常の金属である可能性が高い。魔術で切断することができはずだ。しかし後ろ手に拘束されていて、魔法陣のカードを取り出すことができなかった。

彼女がかばってくれているというのに、私は見ているだけで何もできないのだろうか。

静かに目を閉じ、クチザムの感知を試みる。大宇宙に馴染んだ今なら、質量を扱わない程度のものであれば魔法を使うことができそうだ。チヒロに少しだけ教えてもらっていてよかった。もっともあ

の時は才能が無いと言われ、アヘッドオブタイムに専念することになったのだが。

目を開くと、眼前に光の魔法陣が浮かんでいた。

「我は、汝に啓示を与えるもの」

魔術と魔法のコンポジット、ジャストインタイムもどき。手錠が二つに割れ、崩れ落ちた。

体を反り、ウィツタクの振った剣を避けた。脇目も振らずに、鎧とフィオの元へ駆け出した。

鎧が腕を引き、大きな体のしなりを利用して剣を高速で突き出す。剣先が直立したフィオの顔に迫る。

「我は汝に啓示を与えるもの！」

フィオと鎧の間に立ち、詠唱を繰り返した。目の前に鏡が展開する。迫った剣先は鏡面に吸い込まれ、反対側にいる私達には届かなかった。

私はア・バオ・ア・クウーを普通に大宇宙に送り返せたことを思い出していた。魔術抵抗が高くて、光の縁に触れさせなければ魔術は通用する。

「カズマ……」

フィオの呟く声が聞こえる。人質が自由になったというのに、未だに彼女は動くそぶりを見せなかった。

「好きとか愛とか、そういうのは正直分らない。でも、一緒にいたいっていうのは違いない。俺はお前を隣で支えてあげていたいと

思ってる」

啖呵を切るつもりだったが、気付けばこっ恥ずかしい言葉が口から飛び出していた。鏡面から視線を離せない。

背後から大きな衝撃音が聞こえた。振り向くがフィオの姿が無い。影が私の上空を舞っていた。

フィオが鋼の巨人の肩に飛び乗った。穴や角に手をかけて、器用に頭の先端まであつという間に駆け上がる。拳を振りかぶり、真下に向かって突き出す。

兜や足や胴が一齐に曲がり、へし折れた。座屈したようだ。支配から解放された金属の残骸が次々に地面に降り注いだ。

「図に乗るな。違うって何度も言ってる」

着地したフィオは、いつもの彼女に戻っていた。可哀そうな人を見るような目をしてこちらに向かってくる。

ウィツタクの笑みが止んだ。しかしすぐに何かを思い出したようで、口元だけで笑った。

「まあいいわ。私が町で戦わずに待ち伏せたのは何でだと思っ？」

ウィツタクが言葉を終えると、森中に突き刺さっていた棒が、するりと地面から抜けた。チヒロも扱っていた、メインの短刀の横に二つの円弧状の刃が枝のようについたコルセスカに似た槍。

それぞれが意志を持っているかのように木々を避けながら宙を飛び、森中から集まってくる。刃を向け、地面を除いた全方向から私達を囲った。人が通る隙間もなく、とんでもない数だった。

「ただの槍じゃないわ。ア・バオ・ア・クウーの甲殻から作られた、耐魔の槍よ」

槍の内の一本が飛び出してきた。フィオが瞬時に反応し、手で叩いて弾き落とす。

二本目の槍。私が魔術を使って光の立方体で囲い、小宇宙に送って制御下から外す。

三本目が死角から迫る。四本目と五本目が同時に突き出される。一本目が旋回しながら舞い上がる。

フィオの反射神経のお陰で何とか対処できているが、数が多すぎる。ウィツタクは全て同時に放とうとせず、私達の苦戦している姿を見て楽しんでいるようだった。

「離れてろ。――紅蓮桜花クオツネルガ!!」

喋るやいなや、フィオは腰を落として腕を地面に付き立てた。

この名乗りと格好は強く記憶に残っている。景色が歪み、土が溶けるほどの高熱を発生させた魔法だ。言われた通りに、拾った槍を振り回して隙間を作り、慌てて逃げ出した。

押し出された空気が熱気を帯びた風となって吹き出す。炭になった木や草が崩れ落ちて散り散りになった。周囲の大气がプラズマ化して光を発している。土は赤熱し溶け始めている。

大魔法使いを軽く超える規模の魔法。しかし耐魔の槍が相手では効かないのではないだろうか。

「魔法は効かな――」

冷笑を浮かべるウィツタクの横で槍が落ちた。再び魔法を通わせる素振りを見せるが、槍はぴくりとも動かなかった。

「えっ、どうして……?!」

「紅蓮桜花はただ熱を発生させる魔法じゃない。膨大な魔力に物を

言わせて空間を呑み込み、一帯の魔法を全て上書きする魔法だ」

次々に落ちる槍の間を縫って、フィオが地面を駆ける。ウィツタクは腕を引き、手の平から剣先を生み出していた。残りのパーツを作り出しながら、フィオを斬りつける。

フィオは上体だけずらして紙一重のところでは避け、振り終えた腕に手をかけた。腕は一瞬でねじ切られていた。

ウィツタクが腕を押さえている。断面から零れているのは血ではなく、鉄の破片だった。鎧と同じ鋼の腕がフィオの手の中に収まっている。

腕が砕け、中から無数の刃が飛び出した。フィオが手で顔を覆って後退する。

「覚えてる？ 貴方が村を襲ってきたときに受けた怪我よ」

ウィツタクが言い終えると、フィオを囲って地面から五本の鉄の柱が突き上げた。

「四柱だけに許されるこの秘術を受けても、その姿を保っていられるかしら？」

柱に囲まれた五角柱の空間が赤く染まる。中にいるフィオの体が宙に浮かんだ。

「小癪ッ……」

フィオが喋り辛そうにゆっくりと口を開く。四肢が引つ張られるように伸びていった。手の指がわなわなと動いている。

ウィツタクが得意とするのは、金属を自由に変形させたり移動さ

せる魔法だ。人体の、特に血液中に含まれる鉄分などを操ることも可能なはず。鎧と同じように自分の制御下に——いや、体を中から引き裂いて破壊するつもりだ。

鎧や槍と違い防ぎようがない。止めるには、魔法を使っている当人を倒すしかないのだろうか。考えている間にも、千切れるような嫌な音が聞こえていた。

目を走らせ、赤い空間を囲んでいる五本の鉄の柱に注目した。とても怪しい。

「火から土を、粗雑なるものから精妙なるものを分離せよ——」

カードをかざして詠唱し、現れた十枚の鏡を一斉に放つ。

柱の内の一本が根元から切断され、大きな音を立てて倒れた。一辺を失った赤い空間は範囲が狭まり、色も薄くなった。

すぐさま体の向きを変え、次の柱を狙う。詠唱を始めようとしたところで、もう必要無いことを悟った。

フィオが無理やり、血管の浮き上がった手足を曲げている。人体から聞こえてくるのが不思議な音が鳴っている。重そうな足を前に進め、赤い空間から這い出した。

「これが秘術？ 全然ッ、効かないね！」

相当怒っているのか、はたまたまだ魔法の影響を受けているのか、フィオは額に血管を浮かべて言い放った。

一瞬で間合いを詰め、ウィツタクが剣を生み出す前にみぞおちに拳を突き入れた。

「私は絶対に、貴方を、許さな……い……」

ウィツタクは最後の力を振り絞って喋ると、外套をはためかせて

倒れた。

フィオは彼女に背中を向けて歩き去ろうとした。怒りの割にあっさりとした別れだったので、思わず呼び止める。

「いいのか？」

「ん。来たら、また相手をしてやる」

フィオなら魔力を奪ったり、無力化することができるのではないかと思ったが、当人にその気は全く無いようだった。

「……何度でも言っけど、違うから！」

宣言通り、町に戻るまで何度もその言葉を繰り返したのだった。

0114：怨恨の炎

事務所のドアを後ろ手に閉じ、下の階にある果物屋に向かう。店番をしていた主人が私に気づき、接客スマイルを浮かべた。

「いらつしゃい」

「こんにちは。これ、滞納していた分と今月の家賃です。待ってもらえて本当に助かりました」

肩掛け鞆から家賃の入った袋を取り出して渡した。主人はその場で袋から硬貨を出し、手の平に乗せて数えている。

「おう、確かに」

「ついでにツニロください。二つ」

ツニロというのは、甘酸っぱい林檎に似た果物だ。実は『似た』というか本物の林檎で、品種改良される前の野生種なのかもしれない。主人に追加の硬貨を渡し、かごの中から痛んでいないものを選ぶ。

「毎度。最近羽振りがいいみたいだな、家賃を上げてもいいか？」

二つ選んだところで、主人が話しかけてきた。

苦笑いを浮かべて振り返る。主人が目にも光を宿し、期待した表情をしているのが滑稽に映る。羽振りが良ければ家賃を滞納したりしない。

「どこ情報ですか、それは。見ての通り明日の生活すらままならない状況ですよ」

「やっぱそうだよなあ、見ての通り。……悪いな、噂を聞いたものだから」

主人が笑い、果物を一つおまけして袋の中に入れてくれた。何でも屋が儲かるなんて、しょうもない噂を流す人もいたものだ。

果物屋を後にし、二階の事務所へ戻る。受付机に腰かけ、留守番をしていたフィオが顔を上げた。

「いいものを持ってるね。おやつ？」

「今日の昼飯だ」

目を輝かせていた彼女の顔が、眉を寄せ口を半開きにした絶望の表情に変わった。そんな顔をされても、無い袖は振れない。

「朝食はパンと水だけだった」

「野草もな」

学生をしていた頃は朝飯を抜くこともしょっちゅうだった。人間、二食だけでなんとかなる。食べる機会があるだけマシというものだ。……なんて思っても、腹を空かせた竜の前で口に出す愚行はしない。

「昨日の夜は、汁気を吸った米だけだった」

「リゾットな。ご馳走だったろ」

以前依頼を受けた遊牧民と偶然町中で遭遇し、山羊の乳を分けてもらえたお陰で贅沢な食事を摂ることができた。それでもフィオは肉が入っていないことが気に食わないようで、終始不機嫌そうにしていたが。

「——もう限界、隣村を襲ってくる！」

立ち上がろうとしたフィオの肩を押し、椅子に戻す。ジョークだったようで、すんなり座ってくれた。

「仕方がないだろ、資金難なんだから。またでかい仕事が入ればいいんだけどなあ」

最近めっきり仕事が減った。依頼があつた場合でも、以前のような額の報酬を提示すると拒否されるようになった。デフレに突入でもしたのかと思つたが、結局理由は分からなかった。

事務所の扉が開いた。慌ててフィオと交代して椅子に座る。入ってきたのは、ぼさぼさの髪をして無精髭を生やした、ごろつきに見える男だった。

「こんにちは」

「……悪魔がやっている何でも屋っていうのは、このことか？」

挨拶は一方通行だった。男が机に片手をつき、威圧的に話しかけてくる。

お客様は神様です、と心の中で唱え、大人な対応を試みる。

「そうですよ。仕事の依頼ですか？」

男は私から視線を移し、フィオの顔をじろじろと眺めていた。しばらく沈黙が続いていたが、表情を緩めて無言で頷いた。

「ああ。報酬はこれだけ出せる」

どすると、机の上に大きな皮の袋が置かれた。緩んだ紐の間から

金色の硬貨が覗いている。数えなくても、数年は働かなくても食っていける金額だということが分かった。

「い、依頼の内容は、なんなん何でひょうかー？」

大金を前にして、びびりの本性が露わになってしまった。見れば、フィオも袋を見ないように視線を移し、そわそわしている。

「俺は金の鉱山の開発をしているんだが、この辺りはだいたい採り尽くしてしまつてな。今までタブーとされて開発されていなかった山に手を出すことになったんだ」

店員の拳動を気にせず、男は受付机の前の椅子に座って話を始めた。

「しかしいざ調査を進めてみると、上位の獣が山を守っていて、そう簡単に手を出せないことが分かった。どうもタブーができたのも、奴がいたかららしい。お前らには、獣を追い払うなり殺すなりして安全に山を開発できるようにしてほしい」

小宇宙の神話や物語がそうだったように、宝と美女には獣が付き物だ。今回の依頼は、長年金を守護してきた獣の退治らしい。報酬が高い理由が分かった気がした。

「上位の獣、ですか。種族は分かります？」

「獣の中の獣、ドラゴン。さらにその中でも頂点に君臨する、竜の中の竜、ワイバーンだ」

ワイバーン。その名を聞いた途端、フィオが尾を揺らして反応したのを私は見逃さなかった。

「相談するので、少々お待ちください……」

男に断りを入れ、フィオを連れて隣の部屋に向かう。場所を移しても彼女が言いずらそうにしているので、それとなく尋ねてみた。

「ワイバーンなんて、そう国に何匹もいる獣じゃないよな。もしかして知り合いだったりするのかな？」

「親父よ。あいつが言ってるのは、ミサゴダサ山のことだと思う」

名前に反応したことから、近しい関係ではないかと思っていたが、まさか親族とは予想外だった。こういう仕事をしている以上、いつかこんな日が来るのではないかと思っていたが、よりによって高額報酬が提示された時になるとは運が悪い。

「……追い払うくらいならできるかもしれない」

私の沈黙を違う意味に受け取ったのか、フィオが焦った様子で口を開いた。

「いや、親子で戦うことなんてない。今回の依頼は残念だけど断ろう。大金が出てきた時点で、おかしいと思ってたんだ」

「ごめん……」

謝られる理由はない。優しく頭の上に手を乗せ、男の待っている部屋に戻った。

大金の入った皮の袋を返し、頭を下げた。

「そういう訳で、今回の依頼は引き受けることができません。お力

になれず大変申し訳ありません」

「……ああそうかい。人が大金をもつのは我慢ならないってわけか？」

男は袋を仕舞って椅子から立ち上がると、去り際にそう言い捨てた。ボタンと大きな音を立てて扉が閉まった。

男が最後に喋っていった言葉が気になる。彼とは初対面だが、あちらは私達の話はどこかで聞いていたようだった。どうやらそのことで見解の相違があったようだ。

最近の依頼の減り具合といい、嫌な予感がする。果物屋の主人が言っていた噂のことを確かめてみようと思った

「ずいぶん、みみっちいことをしてくれていたみたいね」

噂の正体が判明し、フィオは怒りの表情を浮かべた。

主人から聞いたのは、私達が依頼人から法外な金を巻き上げて儲けているという噂話だった。さらに情報の出所を探った結果、噂を吹き込んで回っているのは姿恰好から、ウィツタクと思われる人物であることが判明した。以前の戦闘で絶対に許さないと言っていたが、このような形で報復されるとは思ってもみなかった。

「みみっちいといっても、噂は怖い。対象が有名だったら尚更な」

ウィツタクの噂話は、町中どころか国中に知れ渡っているらしい。どうりで仕事の依頼が減ったわけだ。それに気になるのは、噂が広まる途中で尾ひれがついて、私達がサライの町を裏で牛耳っているとか、交易の調子が悪いのは私達のせいだとか、とんでもない設定

を聞いた人もいるということだ。

「これ以上、何も起きなければいいんだけどな……」

仕事が減ったことは既に痛手だが、悪い噂はさらに不幸を引き起こしかねない。

事務所に戻る前に、少しでもフィオの気を紛らわせようと、懇意にしている酒屋に向かった。

「――悪魔のやってる何でも屋――けど――」

店の前に立つたが、中から私達の話題が聞こえた気がしたので、扉の前で足を止めた。

「儲かっているらしいな」

「前は食料だけあればいい、みたいなことを言っていたくせに、調子のいい奴らだぜ」

陰口をたたいているようだ。そつと扉を開いて覗くと、二人の男がテーブルに向かって酒をあおっていた。

「それなら、余った分を俺達に回してくれたって良さそうなものだけどな」

「町の人間のことなんて、気にも留めてもないのさ。そうそう、今の不景気だって、あいつらが元凶らしいじゃねえか」

「確かに、あいつらがこの町に来てから、何もかも上手くいかなかった気がするな」

人に恨まれるのは苦手だが、現実と違うことで恨まれることはもっと辛い。音がしないようにそつと扉を閉じた。

「あいつら、好き勝手なことを言って——」

「いや、いいんだ。止めてくれ」

殴り込みに行こうとしたフィオの肩を掴む。力は彼女の方が強いはずだが、大人しく引き下がってくれた。

「——だいたい、あいつらどういう関係なんだ？ 奴隷と主人か？」

「馬鹿かお前。男と女の関係なんて決まってるだろ」

「ちよつ、まじかよ。男の方は逆玉の輿——みたいなもんじゃねえか。……いや、あの様子だと尻に敷かれてんのか」

「お前、ほんと見る目が無いよな。ベッドの中では男がリードしていると、俺は見たね」

興味半分で聞き続けてはならず、さつさと立ち去るべきだった。

免疫のないフィオは顔を赤くして肩を震わせている。ただでさえもウィツタクの一件から微妙な空気が流れているというのに、私達の関係はさらに悪化しそうだった。

「こんなの、おかしいだろ……」

去り際に呟かれたフィオの言葉に、私は返事をする事ができなかった。

二日後、私達は久しぶりの仕事を終えて町を歩いていた。噂は依然として流行中だが、私達のことを信じて仕事を回してくれる人達もいる。この調子で仕事を続ければ、噂を鵜呑みにしている人々もいつか分かってくれると思う。今日は心が温かった。

「うお?!」

急に肩に痛みが走り、視界が揺れた。正面から歩いてきた男がぶつかったようだ。

こちらに気づいた途端に歩き寄ってきたようだった。明らかにわざとだ。

「——町を出ていけ」

男はそう言い捨てて、謝りもせずに歩き去る。

「もう一度言ってみろ!」

「止める!」

男の背中に飛びかかるうとしたフィオの肩を掴む。今度は力がこもっていて止めることができず、引きずられながら説得した。

人は誰しも、他人が自分よりも良い状態になることを疎ましく思う感情、妬みを持っている。それは、はかどらない仕事や苦しい生活に後押しされ、他人を悪へと昇華する。悪を非難し、自分と同じ場所までひきずり下ろすことが善と見間違える。

彼らと同じ場所に立っていることを証明すれば納得してくれるのだろうか。いや、悪の言うことなんて信じてもらえないだろうし、こちらは悪くないのに要求に従わなければならないのも釈然としない。結局私達は、いつも通りに行動することしかできないのだった。

事務所へ向かう道には、いつもよりも多くの町人がいた。ある者は隣人と話しながら小走りしていて、ある者は空を見上げている。不思議に思い、彼らの視線の先を追うと、空に吸い込まれていく黒

い煙が見えた。

「……どうしたの？」

嫌な予感がする。フィオが喋ったのを無視し、事務所への道を全力で走った。

二階建ての家屋が燃えている。轟々と煙と炎を吐き出しており、消し止めるのは大変そうだった。町には木造の建物が多く、事務所まで火が移らないか心配だ。風が強くないことがせめてもの救いだっ

った。
通りにあるはずの事務所を探す。道は野次馬でごった返していた。見つかった宿屋の右側、靴屋の左側。震える指で指差し数えなおす。焼けた果物の匂いがやけに鼻についた。

「そんな……」

自分の声とは思えない弱々しい声が喉から漏れた。
宿屋と靴屋の間。果物の入った木箱が並ぶ一階の店舗。見間違えようがない。火に包まれているのは、事務所だった。

事務所がある二階の窓から炎が上がっている。手作りの看板も、お気に入りだった受付机も、お古の事務用品も、お礼の手紙も、全て燃えて空へ上っていく。

人はあまりに絶望を感じすぎると、悲しむことが出来なくなってしまうらしい。急に冷静になり、頭が冴えてきた。

そもそも、なぜ火事が発生したのだろう。私達は出かけていたのだ、二階は火元ではない。主人の性格からして、一階の厨房とも考えにくい。

先程肩をぶつけてきた男が脳裏に浮かぶ。まだ全然状況を把握で

きていないし、証拠はない。しかしこんな状況になったら、噂を鵜呑みにしている人間が犯人だと思わざるを得ないではないか。

フィオが鋭い目つきで野次馬達を見回し、大きな声で叫んだ。

「あたしは今まで、やりたい放題やって不便なく暮らしてきた。それでもカズマの言うことも一理あるかと思って、人間の生活に合わせるでやったんだ。それなのに――、それなのに、この仕打ちはいくらなんでもひどい！」

フィオも犯人がこの町の人間だと思い当たってしまったらしい。証拠もなく思い込むのはおかしいことだと分かっている。しかし、どうしてもない怒りには、ぶつける先が必要だ。私達の中で何かが崩れている。これがウィツタクの思惑だったのだろうか。

居合わせた町の人々は、ある人は話が分からずに疑問符を浮かべ、ある人は申し訳なさそうに顔を伏せていた。

「これがあんたらの答えなら、あたしにも考えがある――！」

目をぎらぎらと光らせたフィオが、翼を横に広げた。飛び上がるうと地面を蹴る。

「止め――」

このまま彼女を行かせれば、きっとこの町はいつぞやの村のように、跡形もなく燃え尽きてしまうだろう。頭に浮かぶのは、自業自得という四文字。私達の本当の姿を見ようとせず、一方的に恨み妬んでいたのだから、そんな結末も仕方がないのではないだろうか。

空に手を伸ばし、浮かび上がっていくフィオの尻尾を掴もうとする。思考を巡らせたため、手を出すのが一瞬遅れてしまった。赤い

尾が手の中をすり抜けていった。

私達はサライの町を後にし、フィオの居所だった洞窟へと戻っていた。真つ暗な空間の中央で、蠟燭の火が淡い光を放っている。

私は寝ることができず、膝を抱えて地面に腰を下ろしていた。眠りにつく度に、脳裏に赤い炎が浮かんで目覚めてしまう。冷や汗と手の震えが止まらない。

「――起きてるか？」

部屋の隅で、背中をこちらに向けて横になっているフィオに声をかけてみる。彼女は尻尾を揺らして返事をした。

「尻尾、もう治ったみたいだな」

均整のとれている、赤い鱗に覆われた尾を見つめる。私が魔術で切ってしまった尾は、切れ目だった場所が少し不恰好になっているものの、すっかり先っぽまで再生していた。

地面に手をつき、重い腰を上げて立ち上がった。フィオに背中を向け、洞窟の出口へと向かう。彼女は何も言葉を発しなかった。

和真がフィオの前から立ち去った頃、森の中にある湖畔に建つ木造の家屋では、時代の変わり目になるかもしれない出来事がひっそりと起きていた。

チヒロが二つの木のカップにお茶を注ぎ、同じ部屋にある机に運ぶ。机にはルクアが腰かけていた。背もたれに当たっていた翼をず

らしている。

「粗茶だけど、どうぞ」

チヒロがカップをルクアの前に差し出し、自分も椅子に座った。

「粗茶、ですか？ それなりの質のものに見えますが……」

「ああ、気にしないで。あっちの世界の挨拶みたいなもんだから」

「そうでしたか、おかしな挨拶ですね。……最近姿を見ませんでしたか、どうかされましたか？」

ルクアはカップを口に運んだが、飲む前に口を開いた。彼はここ数日、毎日チヒロの家を訪れていた。

「どうも、和真がまたこっちの世界に来たらしくてね。あちこちら探していたのよ」

チヒロがカップから口を離してため息をつく。

「カズマさんが？ あなたに会いに来ないなんて水臭いですね」

「まあ、今度会ったら水に沈めるって言ってたから、仕方ない気もするんだけど」

二人は引きつった笑顔を浮かべて顔を見合わせた。

「そういうことだから、もし会う機会があれば、無理やりにでもここに引きずってきて」

「分かりました」

会話が止まる。ルクアがお茶を口に含み、カップを机の上に戻し

た。

「で、何の用？ 任務の話ではなさそうだし、世間話をしに来た訳でもないんでしょう？」

「はい、では単刀直入にお話しします。例の件ですが……」

ルクアが前傾になり、真剣な様子で話しかける。

「とうとう始めるのね。——前にも話したけど、私は無理よ。あなたを助けてあげたい気持ちはあるけど、私の私情以上にここは大切な場所だから」

チヒロが首を振ると、ルクアは姿勢を戻した。

「そうですか……。残念です」

「次会う時は敵同士かしら。お手柔らかに頼むわね」

ルクアが頷き、席を立った。家を後にした彼の瞳には、普段の誠実な姿に似つかわしくない荒い炎が宿っていた。

0115：暴虐の終わり

私はフィオのもとから逃げるように立ち去り、行くあてもなくふらふらと歩き続けていた。

一晚経って、改めて町での立ち振る舞いを思い起こしてみたが、やはり私達は悪くなかったと思う。間接的にはウィツタクの恨みを買ったフィオにも責任があるのかもしれないが、直接的には根も葉もない噂を信じて妬んできた町人達に非がある。事務所に火を放った犯人は彼ら以外に思いつかず、フィオが暴虐の限りを尽くしたのも仕方がなかった。

だったら、私はなぜ彼女のもとを去ったのだろう。嫌いになったわけではない。行動を責めたわけではない。だったら立ち去る必要はなかったのではないだろうか。

体は洞窟と反対の方向に進んでいる。

理屈では納得できても、感情はごまかせない。手の中をすり抜けていった、フィオの赤い尾が脳裏に浮かぶ。私は止められなかった自分に苛立ちを覚えていた。

草原の丘を越えると、高い塀に囲まれた巨大な町が見えた。高台になった中央には石造りの城がそびえ、周囲の斜面を多くの家が囲んでいる。大宇宙に来てから尋ねたどの町よりも一回りも二回りも大きい。塀は石のブロックを積み重ねて建てられており、家の屋根よりも高かった。塀の対角線上には、これまた大きな二つの金属製の門が設けられている。

様々な格好をして様々な荷物を持った人々が門を通って中に入っていく。その中の、偶然前を通りかかった気立てのよさそうな中年の女性に話しかけた。

「すみません、ここってなんていう町なんですか？」

「へ？ 王都ラワケラムウを知らないなんて、お上りさんかい」

おばさんは物珍しそうな目を向けてきた。ラワケラムウといえば、確かルクアが騎士団長を勤めている場所だったと思う。

「ここはラワケラムウ。ここいら一帯の町や村を治めている、オナキマニム王国の王がいる町だよ」

おばさんは私が黙っていることを勘違いしたのか、足を止めて説明してくれた。私はお礼を言って、人々の列に混ざった。

町の中に入っていた彼女に続いて、しらっと通ろうとしたところ、門の脇に立っていた男達が慌てて駆けつけてきた。門番のようで、ウィツタクが扱っていたものと同じ金属板を組み合わせた鎧を身に着けている。

「待て、通行証はどうした？」

言われてみれば、おばさんをはじめ町に入っていく人々は、文字の書かれた木の板を提示していた。持っていないと素直に答えると、案の定通ることはできないと言われた。

「分かりました。じゃあ、ここにルクアさんと呼んでもらうことでできますか？」

ここを去っても行くあてもないので、ルクアに会っておきたいと思った。

「お前みたいな田舎者に会う時間なんて、貰えるわけがないだろう。さあ、村に帰った帰った」

門番は警戒心をあらわにして、槍の柄を乱暴に押しつけてきた。私は足が絡み、尻餅について転んだ。門を通っていく人々が不思議そうに横目で眺めていく。

「——なんかあつたんすか？」

軽い感じのする男の声が聞こえ、私と門番が振り向いた。人々の列の中から一人が抜け出して歩み寄ってくる。

男はトカゲのような模様が描かれた、見覚えのある鎧を身に着けていた。白い髪は肩まで伸びており、また中性的な顔立ちをしていて、声を聞かなければ女だと思ったかもしれない。垂れた前髪を掻き分け、額の中央に一本の尖った角が生えていた。

「又ト様……」

門番が驚いた様子で声を漏らした。彼よりも立場が上のようだ。又トが門番を流し見て、私に視線を移す。そして顔を見た瞬間、彼は息をのんだ。

「あれ、ひょっとしてあなたは、あの妙な町で会った——?!」

会ったことがあるらしい。角を生やした人間なんて忘れようがないと思うのだが、記憶を辿っても思い出せなかった。

「僕ですよ、元の場所に戻してもらった。ええと、分からないかな。あの時はユニコーンの姿をしていたんですけど」

「ああ」

小宇宙の公園で会った、馬の化け物のようだ。言葉が通じたよう

に感じていたが、やはり獣の血を引いた人間だったらしい。魔術を使って大宇宙に送っていて、本当によかったと思う。

「いやあ、あの時は本当に助かりました。ありがとうございました」

又トは頬を掻きながら礼を言うと、門番の方を向いた。

「彼の通行証は後で手配をしておくんで、通してあげて下さい。命の恩人なんすよ」

「あなたがそうおっしゃるなら……」

門番はしぶしぶ門の横の定位置まで戻っていった。又トの後に続き、門を通って町の中へ入る。

「すみません。出稼ぎに来る田舎者のせいで治安が悪くなって、最近は通行証が無い者は通せない決まりになってるんですよ」

正面に続く石畳の大通りは、坂の上の城まで続いている。道はよく手入れされているし、両脇の家々も綺麗で感心させられた。

泊まる当てがないことを伝えると、又トは宿の手配までしてくれた。大通りから少し外れたところにある、歴史のありそうな建物だ。又トは窓枠を揺らして、歪んで開かなくなっている窓を開こうとしていた。

「知り合いがやってる店なんですけどね、こんな風に建物自体は古いんだけど、飯は美味しいんすよ」

ようやく窓が開け放たれる。気持ちのいい風が部屋の中に入ってきた。

「改めて自己紹介させて下さい。ラワケラムウの副騎士団長を務めている、ヌトです」

「カズマです。宿まで手配してもらって、本当にありがとうございます」

自己紹介を交わして、この優男が騎士団のナンバー2とは内心驚いた。どうりで門番がへこへこしていたわけだ。

「いやいや、命の恩人に対してこの程度のことしかできなくて申し訳ないっす。必要なものがあつたら何でも言ってくださいね」

門番には無碍にされたが、彼ならルクアと話す機会を設けてくれるだろうか。早速お願いしてみることにした。

「お言葉に甘えてちょっと聞きたいんですが、副騎士団長ということとはルクアさんを知ってますか？」

「知ってるも何も、上司っすよ。命の恩人のことは彼にも話してあつたんで、今度紹介しますね」

窓の外から吹奏楽器の高い音が聞こえてきた。ヌトが慌てて窓枠から上体を乗り出す。

「あれは何をしてるんですか？」

塀の向こうで兵士の軍団が隊列を組んでいる。ヌトの表情が険しくなった。

「もう少ししっかりお礼を言いたかったんですが、それどころではなくなってしまったみたいっすね。すみません、ちよっくら席を外

します」

又トが外へ駆け出していった。私は一人部屋に残され、首を傾げていた。

一度目の羽ばたきで体が宙に浮かび、二度目の羽ばたきで森を抜けた。フィオは人の姿のまま空を飛んでいた。絶えず首を振って地表の構造物に視線を走らせている。

「弱っちいくせに、どこをほっつき歩いてるのよ……」

昨晚彼女は、尻尾の先っぱの代行を辞めると言った和真を黙って送り出した。切れていた尻尾は元に戻り、戦闘能力も以前のレベルまで戻ったのだから、もう子分は必要ないはずだった。しかし元の生活に戻ろうとしたが、村を襲う気にもなれず調子が戻らない。隣から口煩く指示が出されないことに喪失感を感じ、気付けば和真の姿を探していた。

眼下に、堀に囲まれた都市が見えてきた。空高くからでもはつきりと存在を確認できる、王都ラワケラムウ。食料の確保には不向きで敬遠していたので、かなり久しぶりの訪問になる。

翼をたたみ、地面に降り立った。

全身から魔力を放出し、都市全体に魔法を走らせる。膨大な魔力に物言わせた、超大規模な探知。目を閉じ、街行く人々の魔力を解析する。

「いたッ——」

大きなりをしながら子供より魔力の少ない男。すぐに判明し、

フィオは口の端を歪ませる。以前にも、こうして彼の姿を探していたことがあったなど、彼女は懐かしく感じていた。

町の入口に向かったところ、門の前で兵士達が陣形を組んでいるのが見えた。三百人近くいるだろうか、なんとも仰々しい。何か事件でもあったのかと思ったが、すぐに目的は自分であると気付いた。しばらく馴れ合っていたので、彼女は刃を向けられる立場であることをすっかり忘れていた。

先頭には指揮官と思しき二人が立っている。一人は見たことがない翼の生えた男、もう一人は件の鉄の大魔法使いだった。

「先日は、ずいぶん『みみっちい』ことをしてくれたみたいね」

フィオがウィツタクに話しかける。

「確かに、『みみっちい』かったわね。あれくらいじゃ、私の受けた苦しみは少しも返せていないわ」

二人は口元だけ引きつらせて不気味に笑いあった。

「——すぐに立ち去りなさい」

翼の生えた男、ルクアが口を開く。フィオが笑みをやめて、彼の方を振り向いた。

「別に町を壊しに来たわけじゃないんだから、通してくれる？」

断られることは察しているものの、フィオは一応交渉を試みた。彼女が声を発すると、兵士達の腰が引けた。

「それは無理な相談です。貴方が十年前にしたことを忘れたとは言

わせません」

尻の青いときの記憶なんてろくに残っていないが、この町でも何か仕出かしていたらしい。フィオは首を傾げた。

「そうですか、忘れましたか。……それなら私がお教えしましょう。十年前、鉄壁の要塞と言われていたこの都市は、たった一人——それも、たかだか十歳の少女の手で攻略されました」

男は額に青筋を浮かべていたが、冷静を装って言葉を続けた。

「町に貯蓄されていた食料の半分と引き換えに、都市は存続するこ
とができましたが、先代の騎士団長——私の父と兵士の半分がその
戦いで殺されました。……その少女というのは、あなたのことです、
悪魔^{ムカデ}」

「そんなこともあったつけ。だったら、今回は素通りさせてくれな
い？」

フィオにとってその言葉は、人々と共に生活したことからきた親
切心のつもりだったが、ルクアは怒りを通り越して眩暈を起こして
いた。

「……貴方が再び王都を攻めてきた時の為に、私達は対処方法を考
えました」

ルクアが短剣を正面に構え、腰を落とす。鮮やかな緑色の翼が目
一杯広げられた。

「私を倒す方法？　へえ……」

たいした魔力も持たない人間が、たった一人で世界最強の生物をどうこうしようとしている。ただのハツタリにも見えず、フィオは興味を持った。

ルクアが地面を蹴って飛び出す。前方に空気の層を生み出し、空気を抵抗を低減。ウィツイロポチトリの力を最大限に発揮し、高速で羽ばたき急加速。音速に近いスピードで突進する。

フィオの目には全て映っていた。余裕をもって回避するだけの身体能力もある。しかし彼女はあえて避けなかった。短剣の切っ先が額を撃つ。

雪でも降っているかのように、輝く塵が舞い散っていた。砕けた短剣の刀身だ。

「——やるね。少しだけ痛かった」

フィオが口を開いた。彼女の額から、細く赤い筋が流れた。

「対策は、失敗だ。大人しく道をあけるか、あたしの炎で燃えろ」

フィオは人差し指を立てて、ルクアに向けた。指先に魔力を集める。しかし魔力を込めても抜けていき、さらに魔力を込めた。まるで穴の開いた鍋に水を入れているような違和感がある。

ようやく指先に灯った炎は、ただの気の緩みで掻き消えた。

「……何をした？」

これは、彼の言っていた対処方法とやらのせいなのか。フィオはルクアを睨んだ。

「魔力の封印です。あの短剣の切っ先には、ア・バオ・ア・クウーの欠片が埋め込まれていました。魔法医学によれば、魔力は頭の中で生成され、眉間から放出されているといえます。あなたに撃ち込んだ欠片は、一生魔法の使用を阻害し続けるでしょう」

フィオが舌を鳴らし、傷口から欠片を掻き出そうとする。しかし後の祭りだった。元々小さい傷であり、竜の治癒能力のせいもあって傷口は完全に閉じている。

「よし、行くぞ！」

「覚悟しろ！」

「待ちなさい！ まだ——」

悪魔を世界最強たらしめている魔法は封じられた。先頭にいた兵士達が剣を構えて走り出した。ルクアが止めようとするが、兵士達は彼の言葉を無視して向かっていく。

「くそっ！」

フィオは唇を噛んだ。向かってくる兵士に手の平を向けるが、『いつものように』炎は出てこない。焦り、町ごと燃やすつもりで魔力を込めた。

熱気をともった赤い光が草原を走る。兵士が炎に包まれ、悲鳴を上げた。フィオの手から噴き出したのは、炎だった。

「は、はっ——！ 何が魔力の封印よッ！ やりづらくなっただけじゃない！」

呆然として足を止めた兵士に人差し指を向ける。指先から光が放たれ、一帯の地面ごと弾け飛んだ。

「アクツオハミアチ、どういふことでしょうか?！」

ルクアは兵士を下がらせながら、戦闘が始まってから微動だにしないウィツタクに尋ねた。

「あまりにも魔力が莫大で、封じ切れなかったみたいね。それでも見たところ、四柱レベルまで落ちいてると思うわ」

言い終えると、ウィツタクは黒いマントの間から手を差し出した。瞬間、三体の鎧が形作られ、彼女の周りに現れた。

鎧達が背中に差されていた剣を抜き、上段に構えてフィオに襲いかかる。

「懲りずにまた、鎧、鎧、鎧! くだらないツ!！」

フィオが地面を蹴る。一步で間合いに入り、鎧が反応する前に拳で側頭部を打ち抜いた。吹き飛ばされた鎧が、残りの二体の鎧を巻き込んで転がっていく。

「力はそのまま、と」

ウィツタクは、もつれ合った鎧を横目で追いながら冷静に分析していた。

「魔力は四柱レベル、力は竜レベル。ようやく人間が対抗できる領域に到達したといったところでしょうか」

ルクアが新しい短剣を背中から取り出し、腰を落として構えた。ウィツタクも両腕をマントの外に出す。兵士達も警戒しながらじり

じりと前に出る。

魔法の威力が激減したことは、当人が一番よく分かっている。フィオは迷った末、このまま大人数を相手にするのは無謀だと判断した。

「あんたの名前は？」

「ラウケラムウの騎士団長、ルクアと申します」

「ルクア——、覚えた。今度会うときは、戻った力で町ごと滅ぼしてあげる」

フィオが翼を広げて羽ばたく。強風が巻き起こり、兵士達が顔の前に手をかざした。

「逃げるつもり？　せつかくここまで来たんだから、最期まで続けましょうよ」

ウィツタクが飛び上がったフィオに歩み寄る。その肩をルクアがつかんだ。

「深追いは禁物です。退きましょう」

「でも……」

「いくら魔力が半減したといっても、悪魔の戦闘能力は尋常ではありません。こちらの主力全員であたらなければ凄惨な被害にあうでしょう。あなたの悪魔に対する執念は分かっているつもりですが、ここは私に免じて退いてください」

ウィツタクは黙って考え込んでいたが、悔しそうに背中を向けた。既にフィオの姿は雲に隠れて見えなくなっていた。

「すみません、遅れました」

兵士の間から間の抜けた声が上がった。ヌトが二人の元へ小走りでやってくる。

「遅いですよ。王都が危機にさらされていたというのに、どこで何をしていたんですか？　ア・バオ・ア・クウーの欠片が無ければどうなっていたことか」

ルクアがため息をついて迎える。

「それが、さつき偶然命の恩人と再開して、町の案内をしていたんですよ。ほら、騎士団長には話したでしょ」

ヌトが喋っていると、ウィツタクが彼を睨んで立ち去っていった。背中を見送り、ルクアが再びため息をついた。

「ええー。僕、なんかまずいことしました？」

「後で話します。撤収の指示を」

私はヌトから紹介された宿を拠点に、しばらく王都で生活することになった。国の都ということで、皆行き届いた生活をしているのかと思ったが、裕福な暮らしをしているのは国政に関わる一部の人間だけのようだった。城に近い斜面上部には高級な家屋が立ち並んでいるが、下部では薄汚い小屋が町を囲っている。貧しい人々の住宅街は高い壁によって覆われており、町の外から見えないようになっているので、臭いものに蓋をしているかのように感じた。実際、満足に光も届かず、常にかびの臭いが充満している。兵士が下りてくることは稀で、衛生も治安も悪い。

王は世襲らしい。せめて目の届く王都くらいは隅までしっかり管理しろと思うのだが、彼は斜面上部の地域ばかりを優遇し、まるで逆のことをしている。貧しい人々に尽くしても見返りがないが、富んだ人々に尽くせば献金が入るからだろうとヌトは言っているが、そういう問題なのだろうか。

町を歩いていても、王や斜面上部の人間達の悪い評判ばかりを聞く。また上だけ衛生設備を整え始めたとか、集めた金で豪華な生活を送っているとかだ。突拍子もないものも少なくない。私はというと、サライの町のことを思い出して嫌な気分になっていた。憤怒、憎悪、非難、嫉妬。人の集まるところには、いつもこれらが付きまといっている。

宿で休んでいると、ノックの音が聞こえた。開けた扉の前にいたのは、ルクアとヌトだった。尋ねてきた側にも関わらず、ルクアは私以上に驚いていた。

「ルクアさん、お久しぶりです」

「はい、アンフィスバエナの一件以来ですね。まったく、驚きました。副騎士団長の恩人に礼をしようと思って来たのですが、あなたでしたか」

そういえば王都に来た日、紹介してもらった約束をしたきり忘れていた。

「ありや、知り合いだったんすか？」

ヌトは私達の顔を見比べて、呆けた声を出していた。

私達の知り合ったきつかけをヌトに話しつつ、近況の話をした。チヒロが私を探していると聞き、背筋が冷たくなった。

「ところで、カズマさんに大切なお話があります」

ルクアは窓を閉め、廊下を確認してから扉を閉じると、厳粛な面持ちをして話しかけてきた。ヌトが慌てて口を挟む。

「彼もあの計画に？」

「彼は四柱に匹敵する力を持っています。仲間になってくれるのであれば、これ以上頼もしいことはありません」

四柱に匹敵する力を？ 私が？ ルクアはジョークを言っている様子ではなかった。ずいぶんと高く買ってもらっているようだが、実際のところは魔法もろくに使えないヘツポコ魔術師である。申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

ヌトが黙ったので、ルクアが改めて切り出した。

「あなたは、この国をどう思いますか？」

0116：革命の狼煙

ルクアとヌトは、城の中を早足で歩いていた。壁の内外から剣戟音や爆音が絶えず聞こえている。

「この、国賊め！」

突如横の扉から一人の兵士が飛び出し、ルクアに向けて剣を振り下ろそうとした。鎧には獅子に似たマンティコアの紋章が刻まれている。

剣が兵士の手を離れ、音を立てて石の床の上に転がる。ルクアと並んで歩いていたはずのヌトが、兵士の横に立っていた。ヌトの持つ長剣は、鎧に覆われていない脇を突き刺し心臓を抉っていた。

ヌトは剣を引き抜いて兵士を転がし、ちらりと窓の外に視線を向けた。炎の弾を放つ騎士団兵士の姿。盾と剣を手に突撃していく防衛隊兵士の姿。同じ国の兵士達が刃を交えている。

「さすが団長の部下っすね。防衛隊と親衛隊の両方を相手にしているのに、優勢に戦ってますよ」

二人は再び並んで歩き始めた。

「質はこちらが上かもしれませんが、量ならこちらの方が上手です。戦いが長引けば長引くだけ、革命軍が不利になるでしょう。だからこそ、私達が一刻も早く王の首を取らなければなりません」

言い終えるのと同時に、二人は荘厳な扉の前で足を止めた。石造りの二枚の戸には神話をモチーフにした装飾が施されている。

「無事に辿り着けましたね。この謁見の間を抜ければ、もう王の間
つす」

「いえ、問題はこれ中です……」

ルクアが右の戸、ヌトが左の戸に手をかけて押す。ゆっくり扉が
開き、換気されていない室内特有のカビ臭い空気が吹き出してきた。
戸から手を離し、二人が中に踏み込む。左右の壁にはアーチ型の
大きな窓が複数設けられており、部屋の中はとても明るい。壁、天
井、柱、いたる場所には装飾が施されている。姿や格好の違う神々
は全て金や銀で彩色されており、豪華さは扉の比ではない。床にも
磨きこまれた大理石が埋め込まれている。

部屋の中央にあったはずの机や椅子は撤去されていた。改めて眺
めて、こんなに広い部屋だったのかと無駄に感心させられる。

正面の扉をくぐる事ができれば、目的は達する。ルクアは正面
に顔を向け、眼を鋭くした。

城からずいぶん離れているが、ここまで剣戟と魔法の音が聞こえ
てくる。和真は宿の中から城の様子を眺めていた。町の人々も皆家
から出て、その光景を心配そうに見守っている。ア・バオ・ア・ク
ウーも状況が分かっているのか、興奮した様子でベッドの上で暴れ
回っていた。

あの騒乱の中で、ルクア達は戦っているのだろうか。

話は三日ほど前に遡る。あの日再会したルクアは、今日の計画の
ことを私に伝えてきた。

質問の意図を掴みかね、思わず尋ね返すと、ルクアは言い直した。

「この国の王は、正しい政治をしていると思いますか？」

国はともかく、この町はヒエラルキーが酷い。国政に関わる一部の人間だけが日の当たる場所で裕福な暮らしをしており、他は高い壁によってろくに光も当たらない薄汚い小屋で貧しい暮らしを強いられている。当然町の中でも評判は最悪で、清らかな政治をしているとは言い難い。

「町の様子を見る限り、正しいとは思えません。こんなにやりた放題されているのに、町民は反抗しないんですか？」

不満を持っている町民の方が圧倒的に多数派である。武力で訴えろとか、税金を払わないとか、やり方はいくらでもある気がする。

「王の権力や血筋を恐れているというのがありますが、きっと彼らはいつか救済される日が来ると信じて耐えているのでしょうか」

「は？ 行動しなければ助かるはずがないじゃないですか」

互いに監視と威嚇を続けなければ、権力をもった人間を調子に乗らせるだけだ。何もしなくても上手くいく？ 聖人君子しかない世界でもあるまいし、救われるはずがない。ルクアが何を言っているのか理解できなかった。

「そういえば、あなたは違う世界の人間でしたね。それなら話は早い。救済というのは、この世界の神の教えの中にある一節です。神を信じていれば、苦しみや憎しみのない世界に行くことができる」

小宇宙の文化にも馴染んできたつもりだったが、そのような思想は知らなかった。

馬鹿げた話だと言おうとしたが、ルミソヤさんのことを思い出して止めた。いくら馬鹿げた話に見えても、当人達にとっては心の支えになっているかもしれないのだ。

そこでふと気づいた。ルクアの言い方は、まるで自分が彼らと違う立場であると言っているかのようなだった。

「ルクアさんは、その救済を信じていないんですか？」

「あなたの言った言葉の通りですよ。そう、行動しなければ何も変わらない。……もっとも、国民も救済なんて無いということには気づき始めています。きっかけさえあつたなら、行動に移すことができたのでしょうか」

ようやくルクア達が行おうとしていることに気づけた。井戸端会議の要領で何気なく聞いていたが、これは大変な状況なのではないだろうか。気を引き締めて言葉の続きを待つ。

「このまま世襲の国王が政治を続ければ、この国は取り返しのないほどに腐ってしまうでしょう。——しかし、そんなことはさせない。私達が革命を起こし、武力で王権を奪います」

ルクアは毅然たる口調で言い放ち、拳を握りしめた。吸い込まれそうな漆黒の力強い瞳に魅せられる。

思った通りだった。今まさに私の目の前で、小宇宙であれば歴史の教科書に載るレベルの事件が起きようとしている。

「私『達』、ですか？」

「はい。又トも、騎士団の皆も志を同じくしています」

ルクアが振り向くと、又トが頷いた。

国きつての軍団に、国きつての戦士が二人。もはや勝敗は決して

いる気がする。

「騎士団長と副騎士団長がいるなら、僕は必要ないんじゃない……」

「あちらの軍勢は防衛隊と親衛隊、それに四柱の二人です。前者は騎士団が抑えてくれるでしょうが、後者は正直、対抗するには戦力が不足しています」

四柱――、ウィツタクとチヒロだろう。どちらもフィオと互角に戦えるほどの猛者だ。確かに彼女達が国王の側につくなら、勝敗は分らない。私のような猫の手もとい竜尾の切れ端の力を借りたいという気持ちも分かる。

ルクアとヌトにはいつもお世話になっているし、手伝いたい気持ちもある。しかし私には、革命の成否以前に気にかかっていることがあった。

「ルクアさんは、神がいらないと考えているんですか？」

「はい。私だけではありません、今回の作戦に賛同してくれているメンバーは皆信仰を捨てています」

ルクアは迷うことなく頷いた。

この世界の人間にとって神は心の支えだと思っているので、彼の返答には驚いた。ルクアは自己を確立しているように見える。ルミソヤさんのような神がいなくなった途端に自分を見失ってしまう人ばかりではないのだろうか。

「仮にルクアさん達が王権を奪っても、神の血筋のことを気にして指導者と認めない人達が出てくるんじゃないでしょうか」

代々列島治めてきた指導者達には神の血が流れているという。オナキマニム王国の王が世襲になっっているのも、そのような宗教的な

背景がある。その点についてはルクア達は条件を満たしていない。

「確かに神を盲信する一部の人々は、そのように考えるかもしれないね」

「その人達のことはどうするんですか？」

私が気になっているのは、人々の妬みとの接し方、そして神に対する対応だ。

「もちろん同調してくれるように努力します。そうですね、神のいないことを説得すれば、分かってくれるのではないでしょうか。王権の転覆したことが、何よりの証明になるでしょう」

騎士団の中ではそれで上手くいったのだろう。ルクアは希望にあふれた言葉で語ってくれた。対して私は沈んだ。

全ての国民に気を回すことができる、いい指導者になりそうだというのは分かる。不満を漏らしている多くの町民を味方につけることができるだろう。しかし神がないことを証明しては解決しないこともある。私には仮にルクアが指導者になったとしても、人々を幸せにできる気がしなかった。

「ごめんなさい。僕は——まだ協力できません」

「そうですね……」

アフウシ村では、神は彼らにとって生のための規律であり、道標であり、目的だった。もはや人格の基幹部分を構成している。神を盲信する大人達がリオネモの搜索をしようとしなかったように、そのままでいいはずはない。しかし私がルミソヤさんにしたように、科学を振りかざして神を否定し、心の拠りどころを奪うだけ——反理想主義を唱えるだけでは悪影響だ。心を支えられるだけの柱、代

わる思想が必要なからだから。

サライの町では、人々は自分達の前に立った人間に、憤怒、憎悪、非難、嫉妬を抱いた。従来 of 王のように神の後盾が無いルクアは、またいつかルクアのような人に首を狙われる。彼らを納得させられるような身の振り方が必要だ。

「——ところで、そのベッドの上のものはなんですか？」

しばらく沈黙が続いていたが、思い出したようにルクアが尋ねてきた。ベッドの上にはもそもそ動くシートが乗っている。

「アンフィスバエナの一件の時に拾ったア・バオ・ア・クウです」
「ああ、あの時の。でも、なぜここに？」

ルクアの疑問はもつともである。持ち帰るのを忘れてボギ砂漠に置いてきたはずなのだから。

「何度か逃がしているんですが、その度に僕のところに戻ってくるんで、結局飼うことにしました」

このア・バオ・ア・クウは二度も小宇宙に紛れ込み、その度私が大宇宙に送り返した過去がある。さらにこちらの世界でも、ある日宿のベッドの上を再び占拠していたのだった。よほど私のことがお気に召したらしいが、ここまで熱烈にストーキングされると、よほどきつい体臭でもしているのではないかと心配になる。

ア・バオ・ア・クウはまた一段と大きくなり、体色も茶色に変わっていた。

「この件のことは……」

帰り際、申し訳なさそうにルクアが口を開いた。

「分かっています。誰にも話しません」

「よろしく願います」

ルクアの顔には不安の色が浮かんでいるように見えた。戦況は厳しいのだろうか。

「参加しない僕がこんなことを言うのも変かもしれませんが、――死なないで下さい」

「もちろんです。死んでは、国を変えることもできませんからね」

私は場違いな台詞で声をかけることしかできなかった。ルクアは訝しむこともなく、目を細めて笑ってくれた。

舞台は再び、謁見の間。ルクアとヌトの視線の先、正面の扉の前には二つの影があった。

「交わした言葉の通り、本当に敵同士になってしまったのですね――」

「まあ、あの時から避けられるとは思っていなかったけど」

ルクアが声をかけると、女は苦笑いを浮かべた。二人の行く手に立ち塞がっていたのは、チヒロとウィツタクだった。

「一応、国王の言葉を伝えるわね。――投稿しろ。今なら紛い物の首謀者を罰して、何も無かったことにしてやれる、だって。裏切り

者を元の鞘に戻してでも、この国には騎士団の力が必要なんですよ」

忠信を誓っているはずの王の言葉を、まるで近所のおじさんの伝言でもしているかのようにいい加減に伝えたと、チヒロはやれやれと首を振った。

ヌトはニヤニヤ笑いながら、ルクアの顔を窺った。

「だそうですよ、どうします？」

「始めから決まっています。この場を押し通り、王の命をもらうだけです」

ルクアが垂れ下げていた短剣を振り上げ、正面の扉に向けた。

「いいね。四柱二人を前にして、どこまでその威勢を張り続けられるか」

今まで興味が無さそうにしていたウィツタクが、口の端を歪ませて笑った。

「まあ、これも従うとは思っていなかったけど。……それなら、あなた達はここで私達に取り押さえられ、騎士団諸共しょっぱかれることになるわ。首謀者二人の極刑は免れないでしょう」

チヒロが部屋の中央へ歩き出す。彼女の周りには、水色の光を放つ三つの魔法陣が浮かんでいた。

「ヌト、あなたはウィツタクを」

「合点ですよ」

白い髪がなびく。ヌトが腰に差していた長剣を抜き、ウィツタクめがけて駆け出した。薙がれた一閃が首を捉える。しかし止められた剣先が高々と金属音を響かせた。ウィツタクの手の平から生えた両刃の刃先で長剣は受けられていた。

ルクアが腰を落とし、短剣の切っ先をチヒロに向けて構える。チヒロは足を止めた。

「亜音速の剣撃——。早々に決着をつけたいなら、それしかないわよね」

チヒロも手の平を正面に向けて魔法の構えをとった。

ルクアが大理石の床を蹴って飛び出す。猛スピードで羽を動かして急加速。纏った風で空気の壁を削り突進。

ルクアは突き出していた短剣を引いた。逆方向に羽ばたき急ブレーキをかける。わずかコンマ秒の攻撃。

「こっちょ」

ルクアの耳に、部屋の壁で反響したチヒロの声が届いた。慌てて短剣を構えなおして振り返る。チヒロはルクアの後ろに立っていた。

ルクアは焦っていた。速度という優位に立てる要素があるからこそ、四柱とでも対等に戦うことができたはずだった。しかしチヒロが自身と同等の速度で移動できるとなると、限りなく勝率は低い。辺りには小さな氷の破片が舞い落ちていた。

とんと床を蹴って、地面と水平に体を浮かせる。膝をかかえバネをためると、間をおかずに宙を蹴って飛び出した。

離床の力を全て初速に乗せた、先程のものよりさらに速い攻撃。宙を駆けながら、ルクアは違和感を覚えていた。距離感か。速度

か。抵抗か。それら全てだろうか。何かがいつもと違う。

案の定、手ごたえはなかった。減速した後、背後を警戒し、空中で反転して着地する。

チヒロはまるで何事もなかったように、最初の位置に棒立ちしていた。

「団長、氷柱の秘術っす！」

ヌトが叫んだ。ウィツタクの剣がその口に向けて振られ、ヌトは即座に飛び退いた。

「一杯一杯の勝負を演じてあげているつもりだったけれど、よそ見をできる余裕を与えてしまったみたいね。今度はまじめにやるわ」

ウィツタクがマントの前をはだける。白銀の光の放射と共に、彼女を囲んで五体の鎧が現れた。

苦々しい表情をしているヌトの頬を、一筋の血が流れ落ちていた。

ルクアはヌトが苦戦している様子を横目で一瞥した。

「氷柱の秘術……、空間の凍結ですか」

「あまり余所で使ったことはないはずだけど、よく御存じで」

ルクアが地面を蹴って飛び出す。

「——瞬間に向かって私は呼びかける。時間よ止まれ、お前は美しい」

ルクアの足が地面を離れた直後、チヒロが詠唱を始めた。ルクア

の周囲に五本の氷の柱が現れ、囲まれた空間を絶対零度に落とし込んだ。

ルクアは同じ姿勢のまま等速度運動を続けているが、加速しておらず人間の目で知覚できるほどに遅い。チヒロはのんびりと柱の周りを回った。

チヒロが指を鳴らすと、氷の柱が砕けた。ルクアが止まった空間から解放され、とくにチヒロが歩き去っていた場所に降り立った。散っている氷の破片を眺め、彼は何が起きていたのか悟ったようだった。

「理解できたみたいね。まあ、こんなのはちょっとしたデモンストレーションよ。衝撃荷重から計算した厚さの氷壁を生み出す。進行方向に水を満たし、空気中の19倍の粘性抵抗で減速させる。水の平板で光を屈折させて虚像を映す。――あなたの最強の技ですら、防ぐ方法なんて幾らでも思いつく」

短い苦痛の声が聞こえ、ルクアは振り向いた。ヌトがうつ伏せに倒れている。その周りに五体の鎧が立ち、わき腹を蹴りあげていた。

「力量の差は明らかよ。あなた達に勝ち目はない」

「それでも、それでも私達はアア――！！！！」

咆哮は鳥類の鳴き声に取って代わった。緑色をしたウィツイロポチトリの巨躯が、床を踏み碎いて飛び出した。

革命軍死傷者十四名。ラウケラムウ軍死傷者五十八名。首謀者であるルクアとヌト両名を始めとし、革命軍は全員が捕縛された。

オナキマニム王国がここまで勢力を拡大してきたのは、騎士団に

よるところが大きい。焦った国王は、従来通り騎士団が機能することを条件に釈放を提案したが、彼らは了承しなかった。

処分はその日のうちに決定した。三日後、騎士団長と副騎士団長の処刑が城内で行われることになった。

0117：定まった道標

昨日の混乱が嘘のように、王都は静まり返っていた。

宿から出て町の中を歩く。路上では仕事を放りだした町人達が集まっている。どこの井戸端会議も、騎士団が反乱を試みたという噂でもちきりだった。

「騎士団が反乱を起こしたらしい」

「馬鹿なことをしたよなあ」

「――聞いたか？ 明後日、騎士団長と副騎士団長の処刑が行われるらしいぞ」

「ルクア様とヌト様の？ あの二人だけは城の人間にしては珍しく威張り腐っていないくて、好きだったんだけどねえ」

私は買い物をしているふりをして、町人達の会話に耳を傾けていた。

革命は失敗してしまったようだ。処刑が計画されているからには、まだ二人は生きているらしい。ほっとしたような複雑な気持ちになった。

考え事をしながら歩いていると、いつの間にか足は大通りに沿って城へ向かっていった。防衛隊の兵士達がぴりぴりした様子で町の中を歩き回っている。悪いことをしたつもりはないが、こそこそ道の端を歩いた。

ふと顔を上げると、周囲から浮いている人間の姿を見た。

白いマントを纏った女が、私と同じように道の端を歩いている。意志がはっきりしていそうな二重の大きな目に、落ち着いた雰囲気のある黒髪のハーフアップ。どこかで見たことがある女性だった。

後ろめたい思いが湧き上がり、思わず後ずさる。彼女もこちらに

気づき、眉間にしわを寄せた。

「あ、ちょっと——！」

言葉を最後まで聞かずに、背中を向けて全力で走り出す。どこからか命の危険を知らせるシグナルが鳴っている気がする。

小道に入ろうとしたその時、靴紐を踏んだみたいに足が上がらなくなり、前のめりになって転んだ。足元を見ると、氷で固められて足の裏が地面とくっついていていた。

ざりつと音を立てて、倒れている私の近くで女が足を止めた。

「人の顔を見て逃げようとするなんて、失礼じゃない？」

チヒロが指を鳴らすと、足の氷が溶けて地面に浸み込んでいった。私は覚悟を決め、彼女の方を向いて立ち上がった。

「体が勝手に……」

「余計に悪い」

頬を引きつらせたチヒロが、マントの中で腕を組んだ。

「なんで戻ってきたのよ。もう大宇宙には来るなって言ったでしょう。それとも、本当に凍らせて『ドラム缶に詰めて』オイクオツ湾に捨てて欲しかった？」

いつの間にか罰がレベルアップして、ドラム缶が増えていた。

「元の生活に戻ろうと努力もしてみたけど、いろいろあって駄目だったんだ……」

大学も行っだし、阿部警備のアルバイトも再開した。しかし結局大宇宙の経験が無かったことにはできず、小宇宙から追い出される状況を作り出してしまった。

チヒロは困った顔をした。

「この辺に、落ち着いて話せる場所ってある？」

私はチヒロを連れ、借りている宿に向かった。到着したチヒロはずかずかと部屋に入り込み、椅子に座って机の反対側を指差した。向かいの椅子に座り、彼女と別れた後、小宇宙で何があったかを話した。チヒロはいつぞやのように、つまらなそうな顔をしつつも相槌を打ちながら聞いていてくれた。

「馬鹿ね。小心者のあんたのことだから他は仕方がないとしても、芋虫なんて見捨てれば良かったのよ」

話が終わると、チヒロは真っ先にそう言った。

「やっぱりそうなのかな。自分と同じで二つの世界を行き来しているから、仲間意識ができて情が移ったのかも。でもどっちにしろ、あの生活を続けていたら、いつかまた同じことが起きていたと思う」

ベッドの上でシーツを被っている塊を一瞥した。珍しく暴れずに大人しくしている。

「それで、これからどうするの？ 小宇宙に戻るなら、新天地の永住権でも住民票でも用意してあげるけど」

小宇宙に帰っても、かつてのようにかつての場所で生活することはできない。チヒロは新しい生活場所の手配までできるらしい。限りなくブラックな匂いがするが、彼女のことから冗談ではなく本当に作れるのだろうか。

「できれば、こつちの世界で生活したいと思うんだけど……」
「勝手にすれば」

怒られると思いつつも、チヒロの顔色をうかがいながら口を開いたが、あっさり許可されてしまった。

「守れない約束をさせても無駄なもの。それにしても、よくラウケラムウに入れたわね。私が門番なら、こんな怪しい男は絶対に中に入れないけど」

「実際、追い出されたけどな。偶然又トさんと会って——」

気になることがあり、途中で言葉を切った。

革命を起こすにあたり、四柱の二人が問題だと言っていたのを思い出した。チヒロが偶然王都に来ていたとは考えづらい。ルクアと又トは彼女に捕まったのではないだろうか。

「昨日、ルクアさん達と会ったか？」

「会ったわ。二人と戦い、国王のところへ突き出したのは私よ」

遠回しに尋ねたつもりだったが、見透かしたかのように返事をしてきた。喋っているチヒロはどういうわけか、憂い顔をしていた。

「二人が処刑されるという噂は本当なのか？」

「ええ。でも、まだ騎士団の成員は牢の中にいる。あなたなら助け出せるんじゃない？」

「捕まえた当人がよく言うよ」

何故二人が捕まっていることを辛そうに話すのだろう。連れ出すことを勧めるようなことをするのだろう。チヒロの真意が分からなかった。

「小宇宙の人間だろうが、大宇宙の人間だろうが、傷つけたくないんでしょう？　だったら助ければいいじゃない」

「ルクアさんとヌトさんには、死んでほしくない。そんなの決まっている。……でも、騎士団の皆を解放すれば、また革命を起こそうとするんだろ？　俺は革命を応援したいわけじゃないから、結局どうしたらいいのか分からない」

ルクアが話していた新しい国は、上手くいくとは思えない。かといって、どこをどう変えればいいのかなんて分からない。こんな状態で手を貸す意味は無いのではないだろうか。

チヒロに促され、再び自分の考えを話した。

「妬む人間ていうのは、自分よりも相手が高い場所にいることを不公平に感じるから、相手を自分と同じ場所まで引きずり下ろそうとしているのよ。だったら、そんなことを考えつかないくらいに、棲み分けをはっきりさせればいいんじゃない？」

「それって、まさに今の国王の政策だろ。確かに、今まで妬みで被害を受けたことはないと思うけど、理想とはかけ離れているな」

上の人間はさらに上を目指し、下の人間を嘲笑う。下の人間は上の人間の恨み言を並べ、下へと沈む。全ての人がマイナスに向かっている。望ましくはない。しかし言われてみれば、システムは限りなく理想に近い気もする。

「あとは神の代わりになる思想？ 思想なんて、あんたが伝えたからって、そう簡単に変わるものでもないでしょうに。そもそも、その二つを分けて考えているからいけないんじゃない？」

「同じ問題として考える……？」

人々の妬みを抑えることができて、かつ神の代わりになりうる人生の指針。そんな都合のいい思想があるだろうか。

今の王に足りないものはきっと、国民に対する意識だ。国民に足りないものは、自身を高める意識。双方のベクトルの向きを変えてやる。

「そう。そうか——」

上の人間は下の人間が上に来れるように努力する。下の人間は上の人間を目標に努力する。全ての人プラスに向かう。思想であり、身の振り方でもある。

これがきつと、本来の人のあり方。

頬が緩む。先行していた助けたいという意味に追いつき、俄然やる気がわき出してきた。

「チヒロ、ありがとう！」

ルクア達の処刑は明後日。あまり準備に費やす余裕はない。部屋の扉を開け放ち、駆け出していった。

「——ごめんなさい」

部屋に残されたチヒロは、主のいなくなった室内で呟いた。

「悪い人間ね、私は。罪の意識を他人に取り除いてもらおうなんて考えているんだから……」

私はとある小宇宙の企業のビルの前にいた。時刻は深夜二時。ようやくすべての社員が退社し、建物の明かりが消えた。

周囲を警戒しながら、忍び足で窓に走り寄る。鍵の周りにガムテープを張り付け、石を叩きつけてガラスを割る。できた穴から手を差し込み、窓を開けて中に忍び込んだ。

警報機的位置は昼間のうちに確認してある。足を止めずに魔術で小宇宙に送った。

階段で地下に向かう。距離を確かめ、壁に手をついた。この辺りだろうか。扉の上には資料室というプレートがついていた。

「我は汝に啓示を与えるもの」

カードを顔の前に掲げ、詠唱する。光の点が四方に移動し、壁と重なって鏡が現れた。鏡面に足を踏み入れる。

鏡の向こうは、月明かりすらない暗闇だった。空気が停滞しており、かび臭い。さらに蔵か氷室の中にでもいるかのように肌寒い。

「誰か——いるんですか？」

眠そうなルクアの声が聞こえた。リュックサックから懐中電灯を取り出し、部屋の中を照らす。

中は正方体になっていた。出入り口は天井に設けられた、分厚い鉄の扉しかない。部屋の中央に立つ太い柱の前後には、鉄の鎖で繋がれ座しているルクアとヌト。その周囲に『川』の字というより『

『驕』の字で雑魚寝する騎士団の兵士達の姿があった。

「カズマさんですか？ どうしてここに……」

「ふわぁ。何一人で喋ってるんすかって、おお?!」

ルクアが喋っていると、ヌトも目を覚ました。彼が騒いだせいで、周りの兵士達も次々起きてきた。

「この前は、協力できず申し訳ありませんでした。どうしても納得できないことがあったんです」

「いえ、構いません。無理して戦うべきではありませんでしたから」

ルクアは鎖を鳴らし、私の前まで歩いてきた。

「でも、その件も、ようやく片が付きました。僕にも革命の手助けをさせて下さい」

「本当に——よろしいんですね？ ……よろしくお願いします」

ルクアが手を差し出してきた。騎士団の兵士達が見守る中、互いの手が力強く握られた。

「ここに来て、頼もしい助っ人登場っすね！ すぐにでも二度目の反乱を起こしましょう!」

ヌトが威勢よく言った。兵士達も上気した様子で、賛同の声を上げる。

「それなんですけど、一日だけ待ってもらえないですか。戦力に当てがあるんです」

「構いませんよ。この場はあなたに頼むしかないようですから」

再び場が静まる。私はリュックサックをひっくり返して、コンビ二のおにぎりを取り出した。

「思ったよりも人数がいたので足りるか分らないですけど、これ皆さんでどうぞ」

ビルから人がいなくなるのを待っている間、時間があつたので買っておいた。24時間営業の便利さは素晴らしい。大宇宙ではこうはいかない。

「カズマ君がその戦力を揃えてくれるまで、僕らはこのまま捕えられていた方が都合がいいっすよね。……これ、どうやって食うんですか？」

「そうですね。寒いところに取り残しますけど、すみません」

ヌトからおにぎりを取り上げ、ビニールを取り除いて渡した。

「この際、一日でも二日でも変わらないっすよ。これ美味っ！」

「二日後は私達の処刑ですけどね」

ルクアがぼそりと零すと、兵士達が笑った。彼らも見よう見まねで、おにぎりのビニールを外していた。

おにぎりが無くなり、小宇宙に戻ろうとしているとルクアが話しかけてきた。ちなみにおにぎりはツナマヨが一番人気だった。

「氷のアクツオハミアチとはお会いになりましたか？」

「はい。ルクアさん達を捕えたのは、チヒロだと聞きました」

手伝う決心がついたのはチヒロのお陰であること、捕えたことを辛そうに話していたことを付け加えた。

「そうですか……。あなたには、彼女のことでお話しておくべきことがあります——」

ルクアはそう言って、国王とチヒロの間で交わされていた契約について話し始めた。

夜が明けた頃、湖畔にあるチヒロの家に着いた。彼女は私の訪問に驚いていたが、すぐに地上階のリビングへ案内してくれた。

「騎士団を助けに行ったあなたが、どうしてこんなところにいるのかしら？」

二つの木のカップを机の上に置き、チヒロは口を開いた。

「ルクアさん達の革命を成功させたい。力を貸してくれ」

「聞かなかった？ 私は当人から計画のことを聞いて断ったわ。ちようどこの場所で、こんな風に。……それでも手伝う可能性があるとも思っただの？」

チヒロはそう言って、馬鹿にするように鼻で笑った。

「この場所が大切だから、と断られたって聞いた。それって、土地と引き換えに国王に力を貸す契約をしているからだろ？」

土牢でルクアから聞いたのは、この辺り一帯の開発を行わないこ

とを条件に、チヒロが国王の雑務を引き受けていたという話だった。アンフィスバエナの任務を引き受ける際、彼女は遠慮が無くなってきたと零していたし、王は調子に乗って過剰に借り出していたのだと思う。そこに付け入る隙がある。現に、チヒロはすぐには私の要求を断らなかつた。

「間違つてはいないわ」

「それなら、今度は断る理由はないよ。……今回は絶対に勝てる」
「へえ」

チヒロが革命軍に寝返れば、国王側の脅威はウィツタクのみ。さらにチヒロがウィツタクを抑えてくれれば、主力で国王を叩ける。チヒロは否定しなかつた。

「チヒロにだってメリットがある。これからは王の無駄な任務を引き受けなくて済むから、観測者に専念できる」

チヒロは腕を組んで顎をさすり、考え込んでいた。

「それって、革命軍に私の名を連ねることになるわよね」

「それがどういう？」

「今回だけ力を貸すだなんて都合のいい話はないでしょう？ 今後、国の一大事には見て見ぬふりをできなくなってしまう。今以上に中庸の立場を取りづらくなってしまうわ」

「そう、だな……」

中庸でなくなれば、静かにこの場所で暮らすこともできなくなってしまうかもしれない。今以上に悪化することもあり得る。そこまですべて考えていなかったのだから、曖昧な返事をしてしまった。

断られると思った。しかしチヒロは拒否の言葉を続けなかつた。

「あなたの家族の名前を教えてください。」

唐突すぎて、彼女が何を言っているのか理解できなかった。ぽかんと口を開く。

「家族の名前！」

「なんでそんなことを聞くんだ？ 父親は和也。母親は麻子。妹は

――」

「もういいわ。やっぱりね」

チヒロは勝手に納得し、再び考え込み始めた。
父の名前を聞いた瞬間、彼女の瞳孔が広がっていたのを見逃さなかった。和也のことを知っているのだろうか。

「……力を貸すという話、引き受けてあげてもいいわ」

「えっ?!」

引き受けてくれたことにも驚いたが、私の家族の名前を聞いて決心したことにはもっと驚いた。

チヒロがにやりと笑って言葉を続ける。

「ただし条件が一つ。事が済んだら、観測者の仕事を手伝いなさい。どうせやることなんてないんでしょう」

「うっ。……分かった」

図星だった。このまま又トのヒモになっているわけにもいかない。大人しく頷いた。

かれこれ2時間くらい険しい斜面を上っている。ここはミサゴダサ山とかいう山の中だ。禁忌とされている場所なので登山道なんてものはなく、かなり手間取っている。

チヒロを仲間にした後、フィオを誘いに洞窟に向かったが不在だった。元々生活感が無い家だったので分かりにくい、しばらく帰っていないと思う。

昔のように村を襲っている可能性もあったが、もう理不尽な暴力は振るっていないと信じて彼女の実家(?)に行ってみることにした。そして以前交わした会話の内容を思い出し、禁じられた金山、ミサゴダサ山を登っているわけだ。

木々の間を強風が吹き抜けていく。十字の影が枯葉で覆われた地面の上を走った。上空を見上げると、薄水色の空を背景にして紅の竜が飛び去っていくのが見えた。

フィオだろうか。竜が飛んでいった方向に走る。

葉々が切れ視界が開けた。吹き上げる強風に驚き足を止める。断層の急な崖になっており、地面と空が接していた。

宙に突き出した崖の上には竜が鎮座していた。体はフィオよりもさらに一回り大きい。腰を落とし前足でバランスをとった、いわゆる犬座りをしているが、物憂げに立てられた長い首と、緩やかに弧を描いて地面に横たわる尾によって優雅で知性的に見える。体表を覆いつくしている赤い鱗は、所々傷が入ったり欠けており、歴戦の激しさを物語っていた。頭の後部に突き出したトゲは年季が入っており、立派だった。

最強の竜——すなわち最強の獣、ワイバーン。

不気味な縦長い瞳孔が浮かんだ金色の瞳がこちらに向けられた。背中から突き出している蛇腹に折り畳まれた骨が開き、赤味がかっ

た膜が伸ばされる。体長の二倍以上ある翼が光を遮った。

直感的に悟り、ぞくりと背筋が凍った。これは人間が対抗できる相手ではない。

背を向け、崖に沿って全力で走り出す。

竜が羽ばたいて地面を蹴った。大きさのせいで距離感がおかしい。見た目以上のスピードで前進すると、首を伸ばし、頭を横にして噛みついた。びつしりと生え揃った長い牙が根こそぎ空間を抉り取る。私がいた場所に生えていた木の幹が砕け、地響きを立てて倒れる。

竜が私の方に向き直る。開かれた口の端から、無残に粉々になった木片がこぼれ落ちた。

「——お父さん、ご飯の準備ができましたよ。あら、お客さんが来てるんですか？」

突然林の中から、緊張感のない抜けた声が聞こえてきた。ワイバーンが頭を低くして、急に大人しくなった。

木々の間から一人の女性が歩いてきた。髪の色や顔つきの辺が、どこことなくフィオに似ている。女はワイバーンに近づくと、とびきりの笑みを浮かべて太い首に抱きついた。竜も目を細めて幸せそうにしている。

私は言葉を失い、啞然として眺めていた。竜のことを父と呼んでいたし、彼女がフィオの母親なのだろうか。

「さ、あの子も待っているし、早く帰りますよ」

竜が頷き、女を背中に乗せた。飛び去られる前に、慌てて話しかける。

「すみません！ あの子って、フィオ——いや、悪魔と呼ばれてい

た勝気な女の子のことですか？」

「ナビチちゃんのこと？　そうですね、あの子の知り合いの方ですか？」

ナビチ。聞いたことのない名前だが、多分フィオのことだろう。放任主義だから名前が無いなんて言っていたが、立派な名前を持っていたようだ。しっかり記憶に焼き付けた。

「はい。彼女と会わせて下さい」

「あらあら、男の子に足を運ばせるなんて罪な子。いいですよ、一緒に行きましょう」

女性は竜から降りて、林を指差した。

女に案内され、林の中を歩いてフィオの家に向かう。後ろからワイバーンが地面を揺らしてついてくるのが気になる。

まず、お互い自己紹介をした。彼女の名前はニニケスという。金山の開発をしていた頃にワイバーンと出会い、お互い一目惚れして結婚に至ったらしい。のろけ話を延々と聞かされた。

家に着くまで、もうしばらくかかるようだったので、ずっと気になっていた育児方法について尋ねることにした。フィオは小学生にも満たない年齢から独り立ちさせられていたという。過度な放任主義には何かやむを得ない理由があったのだろうか。

「娘さんって、その、独特な性格に育ちましたよね。お父さん似というか……」

「でしょう、でしょう？　よく見ていますね。あなたも、それに惹かれた口？」

別に褒めたつもりはないのだが、母親は何故か嬉しそうだった。

「はあ、まあ。聞けば、幼い頃から一人で生活していたとか」

「それについては私もちょっとだけ申し訳ないと思っっているんですけど、旦那とイチャイチャしたくてさっさと自立させたんですよ。豪胆な子になってくれて、結果オーライだったんですけどね」

顔に出ないようにするのが難しいくらいに、いらつとした。やむを得ない理由なんてない、単なる駄目親だ。それ以上詳しく聞くのは止めた。

到着したのは、小さな木造の家だった。庭には畑があり、近くには小川が流れており、不便なく生活できそうな環境が整っている。家の中に入ると、母親は一足先に廊下を走っていつてしまった。私は家の外にいるワイバーンの視線を背中に感じながら、扉を後ろ手に閉じた。

「ナビンちゃん、男の子のお客さんよ！ まったく、隅に置けないんだから！」

「あたしに客？」

中から母親の大きな声が聞こえてくる。林の中で聞いたものと、微妙に名前が変わっていた。

後を追って部屋に入る。リビングだったようで、部屋の真ん中に可愛い丸机が置かれている。椅子に座っているフィオに、母親が興奮気味に話しかけていた。

フィオはこちらを振り向き、幽霊でも見ているかのような珍妙な顔をした。

「——なんでここにいる？！」

家の中は見せたくないというフィオの希望で、外で話をする事になった。二人で畑の端の土手に腰かける。軽くお互いの近況について話し合い、私は今王都で起きていることを伝えた。

「フィオが革命を手伝ってくれば百人力なんだけど……」

「悪いけど、もうカズマが期待してくれているような戦いをするとはできないよ」

フィオは自虐的に笑い、鼻からため息をついた。そして私が彼女の元を去った日、王都の前で何があったのかを語りだした。

あの日、門の前に集まっていた兵士達が対峙していたのはフィオだったと知り、驚いた。魔力を失ったのは、あのタイミングでいなくなった私のせいでもある。誠心誠意謝ろうとしたが、自身の慢心のせいだからと跳ね除けられた。

「今のあたしじゃ、戦力にはなれない。他を誘って……」

以前の傲慢な性格が嘘のように、しおらしくなっている。私が引き下がった後、彼女は心に大きな傷を抱えたまま、山中でひっそり暮らしていくのだろうか。やりきれない思いが募る。

「戦力として期待していないと言ったら嘘になるけれど、フィオを誘った理由はそれだけじゃない」

口を開くと、フィオは俯いていた顔を上げた。

「俺達はサライの町で、人々の妬みに負けた。取るべき行動の答えが分からず、もう同じ生活に戻れないほどに打ちのめされた。……」

でも革命で目指す思想を考えていた中で、ようやく答えらしいものを見つけたことができたんだ。今度はラワケラムウで、それらと正面から戦いたいと思ってる。だから俺はもう一度、フィオと一緒にやり直したい」

そして私が密かに憧れていた、前のような血気盛んな彼女に戻って欲しい。と、そこまで吐露はしなかったが、一気にまくしたてた。

「まあ助けようとしているのは、フィオの力を奪ったのと同じ人だから、あんまり強くは誘えないんだけど……」

フィオは落ち込み具合からして、かなり魔力を奪った人間を恨んでいる気がする。そのことで断られたらどうしようもない思いながら、付け加えた。

「——今のあたしじゃ、町一つまともに滅ばせないぞ」

「滅ばさなくていい。王様一人を取り換える、簡単なお仕事だ」

「——四柱と同じくらいの、糞みたいな魔力しかないぞ」

「十分すぎるだろ。人類の九割九分九厘は糞以下だと言いたいのか？」

冗談交じりに答えていると、フィオが立ち上がった。

「仕方が無いな」

フィオがぼつりと呟いた。やむを得ないと言うものの、口の端が吊り上がるのを一生懸命隠そうとしており、どこか嬉しそうだった。

「事が済んだら、前みたいに何でも屋を再開しない？」

「それも悪くないけど、先約があつて……」

二人で行き当たりばつたりの暮らしをしていた、あの頃を懐かし
いと思うことも多い。戻りたいと思う気持ちもある。とはいえ、フ
イオのところへ来る前にチヒロも誘っており、彼女の仕事を手伝う
約束をしていたことを話した。

「やっぱり、やめた!」

フィオの機嫌が突然悪化し、大股で歩き出した。どうやらルクア
よりもチヒロのいることが気に食わないらしい。慌てて追いかける。

「そんなにお前ら仲が悪かったのか?」

「……あたしも条件を付ける」

困って頭を掻いていると、フィオが振り返って口を開いた。

「もうサライの時みたいに、勝手にいなくならないで。尻尾の先の
代わりとかじゃなくて、ずっと一緒にいて欲しい」

勝手に一人で追い詰められて出ていったことは、私だって後悔し
ていたことだ。大きく頷いた。

フィオと共に王都に戻る事になった。フィオは家の陰から鼻先
を出して覗いているワイバーンに手を振り、家から出てきた母親に
声をかけた。

「行ってくる」

「気を付けてね、ナナちゃん」

ナナ？ 思わず言葉を交わしている二人を見比べてしまった。完全に名前が変わっていた。

フィオは気にした様子もなく、家に背中を向けて歩き出した。

「呼ばれる度に名前が変わっている気がするんだけど？」

「あの人は、その場その場のインスピレーションで呼んでるだけだから。言ったでしょ、名前なんて無いって」

ニニケスは私の中で、駄目親のもう1ランク下の何かになった。そして日が暮れ、ルクアとヌトの処刑の日になった。

オナキマニム城は三階建てで、上空から見ると十字の形をしている建物である。十の交差部分は、歩道に大理石のタイルが敷き詰められ、芝の地面に神々を模した石像が立ち並ぶ豪華な中庭になっている。

中央には庭の雰囲気似合わない、黒ずんだ木の板が敷き詰められていた。その上には2本の大きな斧が突き立てられている。即席で設けられた処刑場である。

国王は処刑場の前に用意された椅子に腰かけていた。周囲には絶えず視線を走らせ警戒している親衛隊の兵士達が控えている。そして庭のあちこちや中庭側の窓には、警備にあたっている大勢の防衛隊の兵士の姿が確認できる。

処刑場の後方にあつた扉が開いた。戸口は地下牢の上に位置する看守室に繋がっている。

じゃらじゃらという金属音が鳴っている。中庭に現れたのは、防衛隊の兵士に付き添われたルクアとヌトだった。両手足は鎖で繋がれており、歩きづらそうに中央へ向かう。少し間をあけて、彼らの後を黒ずくめの格好をした二人の処刑人が追って歩いていた。顔の半分以上を隠しており、目の周囲しか露わになっていないが、神妙な面持ちをしているように見える。

兵士に指示され、二人は板の上に膝をついて座った。黒ずくめの二人が斧を手に持ち、ルクアとヌトのそれぞれの後ろに立つ。鎖の音が止み、中庭は静まり返った。

「国の英雄がその板の上に跪くことになるとは、数奇なものだ。…本当に、騎士団に戻るつもりはないのだな？」

国王が口を開いた。小宇宙の人間の中でも特に身長が高く、艶々した白い服の袖から厚く締まった筋肉が覗き、姿だけでも威厳が伺える。四角い形をした顔の上には、短い黒の縮れ毛がのっている。ルクアの真っ直ぐな瞳を、一重の感情を読みづらい冷たい目で見下ろしていた。

「今のような政治が続くのであれば、もう私達はこの国の剣でい続けることはできません」

「ならば副騎士団長。集団の言葉ではなく、自身の意見を述べるがいい」

続いて王はヌトに視線を移した。

「聞かれるまでもなく、騎士団は皆同じ志つすよ」

「……分かった、もういい」

王が手を上げ、処刑場の横に立っている顔の長い男に合図を送った。処刑を管轄する役人のようで、良い布の服を着ている。

「これより、罪人兩名の処刑を行う。騎士団長ウツオヌオア・ルクア、この者は国を守る立場にありながら、国家を中傷する言で騎士団の兵士達をたぶらかし、反乱という愚行へと導いた。副騎士団長ギアマンヌウオコ・ヌトも同罪である。彼らに更正の余地はなく、よって断首の刑を執行する」

役人の男が処刑の宣言を行う。ルクアとヌトが腰を曲げた。処刑人が足の位置を確かめ、斧を高く振り上げた。

「最期に言い残すことは？」

役人の男が声をかける。これは異例なことだ。それだけルクアは城に関わる人間の信頼を得ていたのだらう。しかしルクアは目を閉じたきり何も喋らなかった。

処刑人が同時に斧を振り下ろす。――中世のヨーロッパでは公開処刑が民衆の娯楽になっていたという。斬首、火あぶり、釜茹で。現代人なら見ただけで気絶しそうな野蛮な儀式が公然と行われ、貴婦人ですら嫌がる素振りを見せながらも欠かさず参加していた。人の中に残酷な面があるのは否定できない。斧の振り下ろされる最中、身を乗り出して見入っていた王の顔を見て『そう思った』。大きな金属音が城の壁に反響した。

砕けた鎖の破片が板の上を転がった。不要になった斧を板の上に突き立てる。ルクアとヌトは上体を起こし、自由になった手を動かしていた。

「な、何をしている?! 早く叩き斬れ!」

王が焦って声を張り上げた。

私は顔の前に手をかざし、覆っていたマスクを外した。横にいた処刑人もマスクを外し、赤毛の髪をふあさつと広げた。処刑人に扮していたのは和真とフィオだ。本物の処刑人は今頃、ルクア達が捕えられていた地下牢で眠っていることだらう。

「何だ、お前らは……」

王が椅子から立ち上がり、情けない声を出した。

「初めまして、騎士団の新メンバーです。フィオ、派手に合図をよろしく」

「うん」

フィオが手を掲げ、上空に向かって炎の玉を放つ。空中で炸裂し、音が城の窓を揺らした。

「星煌く天は我が顔、海は我が胸、大地は我が足、——我は汝に啓示を与えるもの」

魔法陣の描かれたカードを取り出し、詠唱を行った。警備していた防衛隊の兵士達の背後に大きな鏡が現れる。

鏡面から武装した男が跳び出す。二人、三人、騎士団の兵士達が次々に現れ、混乱して反応できないでいる防衛隊に襲いかかる。防衛隊の兵士達の喉元に槍を突き立て動きを止めた。

「敵襲、敵襲——！！」

城内から剣戟音と悲鳴が聞こえてきた。フィオの炎を合図に、城内に隠れていた騎士団の兵士達が行動を開始したはずだ。黒い処刑人の服を脱ぎ捨て、物陰に隠してあったリュックサックを背負った。

「最期の言葉、ですか。お心遣い感謝いたします。ですが、もうしばらく控えておきましょう」

ルクアが腕を回すと周囲に風が巻き起こり、手首と足首に残っていた鉄の輪が砕け散った。

音を立てて椅子が倒れた。王が背中を向けて逃げようとしている。私達が駆け寄るが、間に合わない。王は開いていた扉から城の中に入ってしまった。五人の親衛隊が剣を構え、戸の前に立って塞いだ。

足を止めた私達をよそにヌトが走る。腰に差していた剣を抜き、大きく難いで先頭の兵士を剣の上から強引に斬りつけた。二人目の兵士が振り下ろした剣先を紙一重のところで避け、剣を突き出し喉に突き刺してから抜く。血の雨が降り注ぐ中、素早く切り返して三人目を袈裟に斬った。

「ここは僕に任せて、団長達はあいつを追ってください！」

ヌトが吠える。額に突き出た角の先に、水の球が浮かぶ。飛び出した複数の水の帯がうねり、残りの兵士達を弾き飛ばした。

「分かりました。頼みましたよ」

ルクアが走り出し、私はフィオと共にその後を追った。扉をくぐってから振り向くと、ヌトが起き上がった兵士達と刃を交えていた。城の中を走っていた私達は、一際大きく豪華な扉の前で足を止めた。石造りの二枚の戸には、厳つい中年男性や昔風の美女が掘り込まれている。

「再びこの扉の先に挑む機会を得られたこと、感謝いたします」

ルクアはしみじみとそう言うと、左側の戸に手を伸ばした。私も右の戸に手をかけて押す。見た目の通り重い。ゆっくり扉が開いていく。微かにできた隙間から、しばらく家を空けていたときにする部屋の匂いがした。

扉が十分に開き、私達は中に踏み込んだ。大理石の床を踏み、軽やかな音が鳴った。そこは壁や天井中に彫刻が施され、四方から視線を感じる悪趣味な部屋だった。

窓から差し込む光を遮る影が二つ。片や白のマントで身を覆い、

片や黒のマントに身を包んでいる。

二人が頭の横に手を伸ばし、フードを下ろす。部屋の中央に立っていたのはチヒロとウィツタクだった。

ウィツタクは私達の顔ぶれを見て意外そうな表情をした。

「何であの男がここに？ いえ、それよりも——」

フィオの顔に視線を戻し、口の端を歪めて笑う。

「あれは悪魔？ あちらからわざわざ私にやられに来てくれたの？」

ウィツタクは大切そうに一步一步を踏みしめながら、フィオに向かって歩き出した。

「正直、中年の護衛なんて乗り気じゃなかったんだけど、ほんとラッキー。氷柱、あれは私がもらうわよ！」

チヒロは返事をせずに、呆れたように鼻から大きく息を吐いた。てつきり合図と共にウィツタクと戦い始めたのではないかと思っていたが、まだ裏切っていないということとは、より確実に複数人で戦いを挑もうとしているということだろうか。

横目でフィオが動いたのが見えた。ウィツタクに向かって歩き出している。私は彼女の背中に声をかけた。

「フィオ——」

「大丈夫、任せろ。あいつにはサライの借りを返しておく」

元世界最強のフィオと四柱のチヒロが協力してくれば、ウィツタクなんて敵ではない。しかしチヒロはそれでも動こうとしなかつ

た。

私はルクアと視線を交わし、部屋の中央で突っ立ったままにいるチヒロの元へ向かった。まずルクアが話しかける。

「あなたが手助けしてくれるとは驚きました」

「あの時は断って悪かったわね。前とは風向きと状況が変わったの。――うねれ、水の精ウンディーネ」

チヒロが光の魔法陣を宙に浮かべて詠唱を行う。みるみる手の中に水が集まり凝結して、刃が三叉になっている氷の槍になった。

槍頭がつつと宙を走る。チヒロは何故か槍の先を私に向けた。

「言っていることと、やっていることが違うぞ。どういってもりだ？」

私は内心焦りつつ尋ねた。

「約束どおり、革命の手助けはしてあげるわ」
「それなら――」

氷の槍を私に向けることが革命の為になるとはには思えない。チヒロの意図が分からなかった。

「けれど、その内容までは約束していないもの。私はルクアの行動に関与しない、それで手助けとしては十分でしょう」

彼女ほどの一騎当千の猛者なら、味方の戦力として参加しなくても、敵の戦力として参加しないでくれるだけで戦局はだいぶ有利になる。提示された条件は悪くない。しかし、だ。

「だからといって、俺がチヒロと戦う理由はないだろ！」

「忘れた？ あなたが小宇宙に帰る時に私は、『今度こっちに來たら、凍らせてオイクオツ湾に捨てる』と言ったのよ。私の約束は破っておいて、自分の約束を通そうなんて都合のいい話はないでしょう？ ケジメはつけてもらわないと」

口がぽかんと開いた。てっきりあの時の約束は、一昨日の会話の中で清算されたと思っていた。

「まだ根に持っていたのか。執念深いな……」

「執念深くて結構。姉貴分として、今日はとことんしごいてあげる」

チヒロは唇を舐め、槍にもう一方の手を添えて構えた。

ルクアが一人残され、私以上にぽかんとしていた。私の視線を追い、チヒロも気付いた。

「さっき言った通り、あなたの行動に関与するつもりはないわ。さつと行きなさい」

「まったく、あなたという人は……」

チヒロが私に視線を戻してから声をかける。ルクアはため息をついて奥の部屋に向かっていった。

ウィツタクがマントから手を突き出すと、一瞬にして側方に二体の鎧が現れた。耐魔の機能を持つ銀色の西洋風の甲冑。

「あなたがここにいることにも驚いたけれど、戦おうとしていることにはもっと驚いたわ。あなたはもう、暴虐の限りを尽くしていた

昔とは違う。ささやかな火を灯すにも苦勞するほどに弱くなっているのよ。よく私の前に立つ気になったわね」

ウィツタクが手を上げて合図を出すと、鎧が背中に担いでいた両刃の大剣を抜き八相に構えた。

「一人で村や町を滅ぼすには、あの力が必要だった。でもこうして仲間の期待に応えるだけでいいなら、この力で十分だ」

「仲間、ね。悪魔のあなたがそんな言葉を口にするなんて、ちゃんちゃらおかしいわ。あの町では、その仲間意識を持ってしまったせいで傷ついたのでしょうか？ 私が多少時期を早めたけれど、あれは人の本来の姿よ」

「まあね。確かに人と関わることを止めようと思ったこともあった。けれどあいつは、あの理不尽を克服できる、一緒にやり直そうと言ってくれた。だからあたしは戦うんだ」

フィオが顔の前に手をかざすと、手の中に、ぼくと火の玉が浮かんだ。以前よりも揺らぎの少ない炎だった。

和真やチヒロのいる謁見の間の扉を潜った先が王の間である。立方体になっているこの部屋は、隣の部屋とは打って変わって質素なつくりになっている。中には家具やベッドが置かれており、白い壁には歴代の国王の絵がびっしりと並んでいる。国王は扉向かいの壁の前に立っていた。

「やってくれたな。先日の失敗すら一計だったとは、私でも気付かなかった」

王が口を開く。ルクアは苦笑いを浮かべた。

「私を殺してどうする？」

「あなたが目指してきた、一部の人間が他人の幸せを搾取するような国ではなく、万人が幸せになれる国を作ります」

ルクアの返答を聞き、王は顔をしかめた。

「お前ほどの男が、私が私欲の為に国を動かしていると——そんな民の戯言を真に受けるか。格別の利益がなければ宰相や役人は動かん。国を回すには必要なことだ」

「利益に固執する人間が、他人の為に国を動かせるとは思えない。彼らは宰相の器ではないということでしょう」

「ほう。器、か。お前の器であれば国を御せると？」

ルクアは淡々と答えていく。王は口の端を吊り上げ、馬鹿にした笑みを浮かべた。

「国は一部の人間で作るものではありません。私達は皆で作り上げていきます」

「綺麗事だな。だが、お前の言いたいことは分かった。私のやり方とは決して交わらん。どちらか一方しか残ることはできないようだな」

王は喋りながら身を翻し背中を向けた。

「あなたの首を頂き、我々が残ります」

ルクアが背中から短剣を抜き、腰を落として構えた。

王が壁にかかっていた剣を見上げる。刃渡りが長く異様に幅広で、

部屋の飾りに見えないこともない。王は片手で柄を握り、壁から外した。

「やらせんよ」

ルクアの方を振り返り、重さを感じさせずに左右の袈裟に振ってから構えた。

0119：新たな国の誕生

部屋の外から聞こえていた声や音は止んでいた。総数は防衛隊の方が多いため安心はできないが、奇襲のお陰もあり城内部の制圧は完了したようだ。

ここ謁見の間では二組の戦闘が始まろうとしていた。私はチヒロと対峙することになってしまい、フィオはウィツタクと交戦している。フィオは手の中に火を灯し、今まさに駆け出そうとしている。

「余所見をしている余裕なんてあるの？ こっちは手を抜くつもりなんて無いんだからね」

チヒロは右足を下げ、氷の槍を右手に持ち、腕をきりきりと引いた。あの体勢はアクアラインで見たことがある。私の記憶が正しければ、当たったら怪我では済まない大技のはずだ。魔法陣の描かれたカードを片手に持ち、動きに集中した。

「——ウンディーネは音を立てて流れ寄れ！」

チヒロが体をねじり、重心を前に移動させながら氷の槍を投擲する。手から離れた槍が、後方に幾重にも蒸気のリングを纏い、急加速する。

「我は汝に啓示を与えるもの！」

素早く詠唱し、正面に鏡を生み出す。私の心臓を狙って放たれた氷の槍は、氷を散らして鏡面の中に吸い込まれていった。纏われていた冷気が足の間を吹き抜けていった。

振り下ろし終えたチヒロの手の指先には五つの水の球が浮かんでいた。

鏡を消して走り出す。空間や多方向からの攻撃をされたら、ひとたまりもない。守っているだけでは駄目だ。

「火から土を、粗雑なるものから精妙なるものを分離せよ」

走りながら周囲に十枚の鏡を生み出す。まず五枚を同時に放った。チヒロの手を離れた水球を、側面で分断する。

さらに五枚を、速度と方向を変えてチヒロに向けて放つ。

チヒロは表情を変えず、手の平を床に向けた。

私を囲んで五本の氷柱が地面から突き出す。ルクアが警告してくれた氷柱の秘術。次の瞬間には、視界から五枚の鏡とチヒロの姿が消えていた。

「広やかにみなぎり渡る大気よ、冷気をたっぷりと吹き入れよ」

後方からチヒロの凜とした声が聞こえてきた。慌ててカードをかざしながら振り返る。

「水気を含んだ霧の棚よ、漂い来たって辺りを巡れ」

水色の光を放つ魔法陣を三枚も展開して、大魔術の詠唱をしている。チヒロの周囲に巨大な水の渦が巻いていた。

「水よ、したたり、ざわめき、雲よ、捲き起れ」

渦の回転が一瞬収まり、縦長くなってチヒロを囲む水の牢になった。轟々と唸っていた音がぴたりと止む。

「虚妄の炎の戯れは一条の稲妻の光に！」

無数の水の柱——いや、刃が無作為ともいえる経路を通じてこちらに向かってくる。これでは正面に鏡の盾を張っても防ぎきれない。

膨大な数の斬撃が空間を占有する。ウォーターカッターさながら、水の刃が彫刻の掘り込まれた部屋の天井や壁、大理石の床を切り刻んだ。魔力から解放された刃はただの水に戻り、垂れ落ちて水溜まりになった。

「……出てきなさい。やられてないのは分かってるのよ」

「我は汝に啓示を与えるもの！」

小宇宙でやり過ごしていたのはお見通しだったようだ。チヒロに認知してもらったので、世界間の移動を思う存分に使えるようになっていた。

チヒロの後方に浮かべていた小さな鏡を広げる。彼女の死角から飛び出そうとした。

「扉を通過している最中なら、防御できないでしょう？」

まるでこちらが見えていたかのように、チヒロはぴたりと手の平を向けてきた。そういえば彼女は観測者の特性なのか、奇跡の粒子の流れに敏感だった。

彼女の言うとおり、今鏡を解除したら胴体が真つ二つになってしまふ。『魔術では』攻撃を防げない。

「胸骨の骨折くらいで許してあげる——」

チヒロは物騒なことを言って、手の平から勢いよく水流を放った。

「気が早いよ」

リュックサックから取り出した物体に受けさせる。水流が勢いを失い、床の上に零れ落ちた。

正面に向けて盾にしたのは、ア・バオ・ア・クウである。今朝見たら蛹になっていたので連れて来た。申し訳ない気もするが、まあ命を助けた一回分くらいなら彼（彼女？）も許してくれるだろう。

「星煌く天は我が顔、海は我が胸、大地は我が足、我は汝に啓示を与えるもの」

詠唱の後に誘導が必要な攻撃は、氷柱の秘術で制御を失ってしまふ。定点攻撃なら防げないはずだ。

光の立方体が現れ、断崖が六方からチヒロを包み込む。立方体が急速に縮小し、光の点になって消滅した。

「……ふう。これで扉までの往復の時間くらい稼げるだろ」

ア・バオ・ア・クウの蛹を床に下ろし、息をついた。無駄に大きくなり、鉄の塊みたいに重い。

「——それは無理ね」

再び後方からチヒロの声が聞こえた。眉をひそめ、思いきり嫌そうな顔をして振り返った。

砕け散った氷の破片が舞っている。氷柱の秘術は思考さえも凍結する。こちらの魔術が成功する前に詠唱されたら無効化されてしまふ。しかし先程確かに、チヒロが鏡の立方体の中に入っていたのを見た。

「幻影を見せたのか？」

「……太陽から私達のところへ届いている光は、八分前の太陽が発したものだ。実はもう太陽は消滅しているのかもしれない、なんていうロマンティックな話があるじゃない？」

「ロマンティックかはともかく、あるな」

チヒロは得意な顔をして、的外れな返答をしてきた。

「あれと同じよ。網膜に焼付いた像は電気信号に代わって視神経を通り、やがて脳が反転させて認識する。この間、コンマゼロ数秒。対象に集中し残像を映したならコンマゼロ数秒。魔術が実行されるよりも、この時間だけ早く秘術を使えば、過去の私を見せられるという訳。真似をしても無駄よ。タイミングを合わせられるのは、世界広しといえども私くらいなものだから」

秘術を使われる前に魔術を成功させようとしていたせいで、ままとそのコンマゼロ数秒しか存在できない幻影に騙されてしまったということか。さすが天才、こちらの行動は隅々まで読まれているようだ。これ以上の対処方法は思いつかなかった。

火の玉を手に、フィオが地面を駆ける。ウィツタクが手を振ると、八相に剣を構えた二体の甲冑が彼女の前に進み出た。

フィオが鎧の頭に右手で掴みかかる。尾を引き広がっていた炎が掻き消えた。

「耐魔の鎧か——！」

フィオが奥歯を噛み、手に力を込める。べきべきと音を立てて兜が五本の溝に従い歪んでいく。

もう一体の鎧が、伸びている腕に剣を振り下ろしているが、フィオは避けようとしない。とうとう手の中にある兜がへし折れた。振り下ろされた剣は遮られることなく下段で止まっていた。フィオが不思議そうに腕を見つめる。白い肌にはつくりと傷口が開き、鮮やかな赤い血液が垂れ流れた。

「なんで、こんな攻撃で……？」

フィオは飛び退き、右腕を左手で押さえた。止血の甲斐なく、指の間から血が流れ落ちる。

「気付いていなかったの？　今までは垂れ流しになっていた魔力が鎧の働きをしていたのよ」

ウィツタクが鎧に近寄り、潰れた頭を撫でる。首の上の鉄屑が膨らんでいき、みるみるうちにドーム型をした兜の形に戻った。

「もつとも、その様子だと少しはワイバーン固有の硬さも残っているみたいけど……」

普通なら腕は斬り落とされているはずである。ウィツタクは目を細めて言った。

フィオが右腕を押さえたまま突き出した。半ばまで曲げた五指の先から火の球が放たれる。五つの炎が、異なる軌道を描いてウィツタクに向かっていく。二体の鎧が手で掴んで掻き消すが、消しきれない。

「だからどうした！ 燃えろッ！」

フィオが叫ぶ。加速した三つの火の球がウィツタクに迫る。

「一人別世界にいた人間が、ここまで弱くなっているなんて、幻滅するわ。こんな悪魔を殺したところで、私の復讐は終わるのかしら……」

ウィツタクは鋼の両腕を掲げてクロスさせた。腕の幅が広がり、円形の鉄の盾になって炸裂した炎を防ぐ。

舌打ちしているフィオに、二体の甲冑が襲い掛かる。フィオは屈みながら尻尾を振り、足払いをかけた。強靱な尾に足をすくわれ鎧が二体とも転び、胴体から兜や籠手が外れてバラバラになった。

フィオが誇らしげにウィツタクに目を向ける。しかし直後、その視線は天井に向いていた。フィオは何かに足をすくわれ仰向けに転んでいた。

足元を見ると、転がっていたはずの籠手と手甲が両足に掴みかかっていた。

後頭部に衝撃を受け、視界に無数の星が飛んだ。振り返れば、兜が空を飛んでいる。フィオは堪らず片膝をついた。

「なんでだ。魔力はほとんど同じはずなのに……」

「最期に教えてあげてもいいわ。あなたは強引に力で押してくるだけだから、獣の対処をするのと大して変わらないの。莫大な魔力に慢心していたせいで、技術が伴っていないのよ」

甲冑の頭や手足が元に戻っていた。フィオを囲んで立っている。二体の鎧は腰をひねって剣を構え、フルスイングで難いだ。

謁見の間の隣、王の間ではルクアと国王が刃を交えていた。王が柄を両手で握り、鼻息荒く刃長幅広の剣を横に振る。刃先が音を立ててルクアの首に迫る。

ルクアは飛び上がり、空中で一回転し、王の後方に急降下しながら逆手に持った短剣で斬りかかった。王が反応し、柄の先端部分で刀身を弾いた。

ルクアが羽ばたき、距離をとって着地する。

「あなたが、ここまでの使い手とは知りませんでした」

処刑が失敗したと知った途端に、王は背中を向けて四柱が守ってくれる部屋へと逃げ帰っていった。鍛錬しているところを見たこともなかったのも、ルクアは彼が非力だからこそ、そういう行動を取ったのだと思っていた。

「一国の王を舐めてもらっては困る。こうした有事に備えて、一通りの戦闘術は嗜んでいる」

戦闘術。すなわち武術と魔法術。ルクアが足元に転がっている木の実に気づいた。地面を蹴り、大きく羽ばたいて飛び上がる。

木の実が弾け、緑の茎が四方に飛び出す。石の地面を突き破って根を張り、ルクアを捕えようと蔦が伸びる。短時間で茎は腕程の太さになっていた。

「くっ！」

ルクアが短剣を振る。刃先から風が巻き起こり、迫ってくる蔦を切り裂いた。

王が、はらりと落ちていく蔦を掴んだ。手の中で硬化して茶色に変色し、刃が三叉になっている槍になった。ゆっくり着地しようとしているルクアに、サイドスローで槍を投擲する。

ルクアが素早く羽ばたき、槍を横に避ける。しかし通り過ぎる最中に、槍から蔦が生えて伸びた。蔦から蔦が生え、瞬く間にルクアの全身を覆っていく。

王の脇を強風が吹き抜け、蔦の切れ端が転がる。正面には、短剣を持った腕を掲げるルクアの姿。蔦は呆気なく全て切り裂かれていた。

ルクアが地面を蹴り、王との距離を詰める。三度の短剣の突き。王は大剣の側面で受け、振り上げて短剣を弾く。それでもルクアは退かずに距離を詰めた。二段蹴り。王は剣の柄から手を離して片手で受ける。ルクアは羽ばたいて体を浮かせ、さらに後ろ蹴りを放った。王は足刀をもろに顎に受けて怯んだ。

「ふんッ！」

王が気迫で体勢を戻し、大剣を振り下ろす。ルクアが飛び退いた。

「さすが先代団長の息子、まともにやっては勝てないか。これは使いたくなかったが、仕方あるまい」

王は大剣を両手で逆手に持ち、真っ直ぐ地面に突き立てた。部屋を囲って五本の柱が地面から突き出した。柱は樹皮に覆われており、木の幹に見える。

「木柱の秘術?!」

「その通り」

ルクアは目を見開いて驚いていた。王はその姿を満足そうに眺めている。

「ですが、四柱の秘術は一子相伝のはず！　なぜ木柱ではないあなたが？」

「当代の木柱は自身で二つの秘術を編み出し、四柱として認可された例外中の例外。それ故、先代木柱は秘術を誰にも伝授しておらなかったのだ。そして私は偶然この町に寄った先代に指導を受けた」

王は言い終えると大剣を抜き、切っ先をルクアに向けた。

先程からチヒロは静かに私の出方を窺っている。その間に、チヒロにぎやふんと言わせる方法を考えているのだが、何も思いつかなかった。

「和真君が魔術を覚えてから、もう一年近く経つのよね。そろそろ自分の魔術がどういうものなのか気付いたんじゃない？」

「ずっと前にチヒロが教えてくれただろ。小宇宙と大宇宙の間を移動できる鏡を生み出す魔術だ」

小宇宙では消滅だの、回帰だの色々言われていたが、彼女に教えてもらってようやく納得がいった。何度も魔術を使いながら、半年もの間気付けなかったのは恥ずかしい思い出だ。

「うーん、20%正解。いや、超弦理論なら9%かしら」

ぎやふんと言わせる方法を考えるのを止めて、彼女の言葉を反芻した。何故、五分の一？　またよく分からないことを言い始めた。

「意味が分からない。だいたい、なんで俺の魔術のことを把握しているような口ぶりなんだよ？」

「あなたと同じ魔術を使う人間を知っているからよ」

チヒロは何故か恨めしそうな表情をして答えた。

同じ魔術を使える人間がいるというのは驚いた。だがよくよく考えてみれば、観測者ならそういう人間に関わる機会は珍しくないのかもしれない。私に対してしているのも、業務的な対応なのだろうか。少し心がもやもやした。

「じゃあ、その20%っていうのは何のことなんだ？ あと80%も隠された効果が残されているのか？」

「そうよ」

冗談で言っただつもりだったが、肯定されて、さらに驚いた。

「あなたの魔術は、次元の歪曲。小宇宙と大宇宙の間のような五次元だけに限らないわ」

「次元……？」

チヒロは黙ってカードを差し出してきた。受け取って見てみるといつも私が使っているような、魔法陣が描かれた魔術のカードだった。魔法陣を見て、無意味に慌てていた頃が懐かしい。

カードに描かれた円や線の重なりを目で追う。以前チヒロとした特訓のお陰で、なんとなく読むことができる。描かれた魔術の範囲や対象は、座標を変える転移の魔術に近い。しかしこのカードには、素人目でもおかしい点があった。

「転移を使うには、エネルギーが足りないんじゃないか？」

エネルギー源には以前のカードと同じように体温が指定されている。物体を移動させるには質量と距離に応じた仕事が必要であり、少々の熱で扱えるとは思えない。

「俗に言う転移とは違うもの。紙に描かれた始点と終点を、紙を曲げて合わせるように、三次元空間を捻じ曲げて二点を繋げるの。言い換えるなら、——跳躍？ 透過？」

ジェスチャーをしてきているが、やはりよく分からない。少ないエネルギーで転移と同じ効果を実現できるエコな魔術らしい。

「へー。でも、なんでこのタイミングで教えてくれたんだ？ 何も戦闘中に敵に教えることではないと思うんだけど」

「三次元間の干渉は同時に二つの平面を扱う必要があるから、使い方が難しいらしいわ。五次元間の干渉すら使いこなせていないようなら黙っていいよと思ったけど、それなりに扱えているようだったから話すことにしたの」

チヒロには最後まで戦う気はなかったようだ。それはそうだ。四柱に本気でやられたら、こうして五体満足で立ってられるはずがない。

「この戦いは、魔術を使いこなせているのか判断する意味があったのか。ケジメをつけるとか何とか言っていないで、素直に話してくれればいいのに。——ありがとう。さっきは執念深いとか言っごめん」

頭を掻きながら礼を言ったが、チヒロに睨まれた。

中足が胴を捉える。部屋の両サイドのガラスをそれぞれ突き破り、二体の甲冑が城の外へ飛び出していった。ウィツタクが眉をひそめる。

「なんだ。技術さえあれば勝てるんだな？」

フィオが脚を閉じて着地した。

「そう一朝一夕で魔法を使いこなせるようになるなら、四柱なんて存在していないわ」

ウィツタクがマントの中から右手を覗かせたところ、再び二体の鎧が彼女の前に構成された。

フィオはいつにもなく真剣な顔で、左手を掲げた。誰の魔法を模したのか、浮かび上がったのは正方形をした炎の鏡。腕を前に突き出して鏡を放つ。

甲冑が身を挺してウィツタクの前に並ぶ。縁を向けて滑空していた炎の鏡が掻き消えた。

正面に向けられたままになっていたフィオの手に熱が収束する。手の平から細い光が放たれた。鎧に妨げられ、斜めに逸れた光は壁を溶かして貫通した。

幼少から村を襲っていたフィオは、戦闘の経験なら他人と比較にならない程に積んでいる。これまで無数の名のある魔法使いと戦ってきた。当時は彼らの技術を小細工と評していたが、彼女は今ようやく彼らが積み重ねていたものの意味や大切さが分かった。

上空から無数の炎の刃が降り注ぐ。ウィツタクは腕の盾を展開して防ごうとしたが、できた死角を通ってフィオが殴りかかってきた。鎧が間に割って入り、拳打を受けて床の上を転がる。

つい先程の追い詰めた時までとは、魔法の使い方も動きも全然違う。ウィツタクは素直にフィオの戦闘のセンスに感心することしかできなかった。

「調子に乗りすぎよ！」

ウィツタクが両腕を正面に突き出す。マントの中から光の筋が幾本も走り、彼女の背後に多数の三叉の刃をした槍が浮かんた。

フィオは冷静に腰を落とし、血に塗れた右腕を地面に付き立てた。立ち上る熱気で姿が歪んでいく。

クオツネルガ
「紅蓮桜花」

プラズマがフィオの周りで光を発している。大理石の床が赤熱し、氷の上にもいるかのように溶けて沈み込んでいく。

魔力に物を言わせて空間を呑み込み、一帯の魔法を全て上書きする大魔術。しかし以前よりも範囲が狭い。攻撃に使うには魔力が足りないように思われた。

「無駄よ！ 今のあなたには使いこなせないわ」

ウィツタクが笑みを漏らす。フィオは無視して、地面から抜いた腕を正面に突き出した。

「——・散華^{ツナセ}！！」

熱量の塊が押し出される。通り道を根こそぎ蒸発させてウィツタ

クに向かっていく。赤い模様が床の上を這う。

ウィツタクの笑みが止んだ。受動的な攻撃だった紅蓮桜花は、驚異的な攻防一体の魔法に昇華した。呑み込まれた甲冑が崩れ落ち、槍が落ちて跳ね、耐魔の甲殻を残して金属が蒸発する。

「畜生おおお！！」

ウィツタクは残りの鉄を全て費やし、正面に巨大な盾を生み出した。熱気と盾が衝突する。補填するが、その度に金属が蒸発していく。ウィツタクが吠えた。

マントの内に隠していた鉄を使い尽くし、ウィツタクは力なく座っていた。フィオが歩き寄る。

「幻滅した相手に負けるなんて、惨めね。サライの借りを返すんでしよう？ …… 殺せば？」

「カズマから、お前の家族のことを聞いた。それを知らないで魔力をあげてしまったんだけど、言い訳に過ぎないよね。 …… ホントにごめん。二度と非道な戦いはしないと誓う。だから、できれば新しい国であたし達のことを見ていて欲しい」

ウィツタクは返事をしなかった。

天井から小さな破片が落ちる。戦っているときは気付かなかったが、城が揺れているようだ。フィオは何が起こっているのか不思議に思い、王の間へ続く扉を見つめた。

木柱の秘術は発動しているはずだが、自身の体が変わった様子はない。ルクアは不思議に思っていた。

国王が重心を落として足を踏ん張った。次の瞬間、床が細かく碎けて舞い上がった。

「え——」

気付けば間合いの内に王の姿がある。ルクアは思わず声を漏らしていた。ルクアが歴戦の経験から、とっさに屈む。横に振られた大剣が彼の頭の上を通り過ぎていった。

立ち上がりながら飛び、間合いを取る。刃先の触れていない壁に傷が刻まれていた。

「……木柱の秘術は、身体能力の爆発的な強化でしたか」

「さすがの慧眼。たったの一振りで理解したか」

王は満足そうに笑みを浮かべた。

「ならば、どう対処する?!」

再び床が碎け散る。王が残像を残すほどの超速度で間合いを詰めていく。ルクアはやつとのこととで反応して、横に跳んだ。鉄の刃と空気の刃が時間差で通り過ぎる。

ルクアは経験から、大型武器での連撃は来ないと確信していた。しかしどんな筋肉自慢の騎士でも不可能と思われる瞬時の速さで、大剣はその向きを変えていた。ルクアは目を見開き、現状で行える最善の防御姿勢をとった。

想像を超える強力な一撃。壁に背中を打ちつけ、肺の空気が強制的に吐き出された。壁に沿って崩れ落ちた。

意識は残っている。ルクアは霞む目で現状を確認した。横にして受けた短剣は真つ二つに折れ、頭を庇った腕は裂かれて赤く染まっている。指を動かしてみたが、腱は問題ない。吹き飛ばされていたことが幸いしたのか、傷は浅いようだった。

揺らいでいた視界はだいぶマシになっていた。ルクアがよろめきながらも立ち上がった。

「あれを受けて、立ち上がってくるか……」

喋っている王は、何故か荒い息をしていた。袖から覗く腕は紫色に鬱血している。皮膚の表面に凹凸が浮かび、筋繊維が過度に損傷して肉離れのような状態になっているようだった。

「その体どうしたんですか？」

「使いたくないと言った理由が分かったか？ 能力が向上するといっても結果だけで、骨や筋肉は以前のままだ。過酷な運動に体はついていけず、急速に壊れていく」

困った顔をして醜くなった腕を見つめ、言葉を続ける。

「これでは、しばらく使い物にならないだろうな。こうしている間にも、シタヌ王国が目を光らせているというのに」

ルクアは背中のホルダーから予備の短剣を抜き、腰を落として構えた。秘術は両刃の剣。視界が揺らいでいても、足がふらつこうとも、決して戦況は不利ではない。

王も大剣を頭の上に掲げ、上段に構えた。戦闘が長引けば自身が不利になる。この一撃で終わらせるつもりだった。

先に地面を蹴ったのはルクア。王はその場にとどまって、虎視眈

々と間合いに入ったところを狙っている。

ルクアが駆けて距離を詰める。超速度の移動法ではない。間合いに入る直前、ルクアは垂直に地面を蹴った。呆氣にとられ視線を上げる王の前で、体を縦に半回転する。天井に足の裏が触れた。

天井を蹴り落下する。重力と素早い羽ばたきで急加速。音に近づけば近づくほど、より執拗に行く手を遮る空氣の壁を、纏った風で削る。これが亜音速の剣撃。

王は一瞬の判断の後、大剣を一度下段に下ろし、振り上げて迎撃しようとした。強化された肉体によってタイムラグは無いに等しい。短剣と大剣が交わった。

ひゅうひゅうと、漏れる呼吸の音が部屋の中を支配している。

「見事だ……」

ルクアの足元で仰向けに横たわっていた王が、口を開いた。首元に短剣が突き刺さり、白い召物を鮮やかに赤く染めている。

「最期に言い残すことがあれば、お伺いします」

「まさかこちらが、遺言することに、なるとはな……」

王は辛そうに顔をしかめながら一言一言を発した。

「ではお前の言う、皆で作り上げる国に、今日の戦で負けた者達を、加えてやってほしい……」

「はい……」

答えたルクアは困った表情をしていた。

「最期に他人の命を心配するくらいなら、何故こんな政治を行ってきたのですか?!」

「国を支える人間が、そう乱れてどうする。人を安心させて、逝かせる気はない、みたいだな……」

「——すみません」

王は続けて喋ろうとしたが、諦めたのか口を閉じた。ルクアは言葉の続き待っていたが、すぐに無駄であることに気付いた。

「……父に代わり私を使って下さったこと、感謝しておりました」

ルクアは優しい声をかけて、身を翻した。王の口元が笑っていたように見えた。

戦闘の止んでいる謁見の間を通り、バルコニーへと歩き出る。和真、チヒロ、フィオがその後続く。ルクアは国王の死と革命の成功を伝えた。手を振り上げ威風堂々と宣言する彼の姿を、騎士団の兵士達と城内に入ってきた町民が歓声で迎え、制圧され拘束されていた防衛隊や親衛隊の兵士達が虚ろな目で見つめていた。

そして新しい国が誕生した。

0120：民族共同体

オナキマニム王国が生まれ変わってからしばらく経ったある日、私はチヒロと二人で荒野を歩いていた。ここは王都ラワケラムウの南西、ボギ砂漠を越えたところにある国境地帯である。

チヒロの話すところによると、以前この辺りで奇跡の粒子の密度に微弱なノイズが確認されたらしい。波形からして、何者かが小宇宙から大宇宙へ移動した可能性が高いとのことだ。私が大宇宙に戻ってきた四ヶ月前のことであり、その五次元間を跳躍した何者かは、小宇宙で戦ったあの男の可能性が高い。彼を探して元の世界へ返そうとしていたことを思い出し、奇跡の粒子の正確な測定をしに行くと言っていたチヒロについてきた。

「異常なし、と。やっぱり自然に通過したとは考えづらいわね」

携帯電話のような装置を見ながらチヒロが言った。黒い画面には、心電図の波形のような黄色い線が表示されている。

「洋平の可能性が高いつてことか。焦っていたせいで、無意識のうちに三次元間の移動が加わっていたのかな」

「無意識の方が優秀だなんて情けないわね。これからは酩酊状態で戦えば？」

酔っぱらって仰向けに寝ている自分の姿が浮かんた。真つ当な憎まれ口なので言い返せない。

私の無言を何かと勘違いしたのか、チヒロが慌てて顔を上げた。

「じよ、冗談よ？ 真に受けて凹まないでね」

以前はからかわれる一方だったが、革命の後からチヒロは妙に私に気を遣ってくるようになった。当人には悪いが、ギャップでおかしな感じがする。

「まさか。……なあ、俺の魔術って、次元の歪曲だって言ってたよな。四次元を歪曲させて、未来や過去に行くことはできないのか？」
「理論的には可能でしょうね」

さらっとタイムマシンが実現可能になった。歓喜の声を上げようとしたが、チヒロは人差し指を立てて「しかし」と続けた。

「でも、現実的には不可能よ。世界はエネルギー保存則に縛られている。単位時間、つまりプランク時間あたりの世界全体のエネルギーは不変でないといけないから、自分の質量分の莫大なエネルギーを魔術に入力しないといけないことになるわ。和真君の体重は？」
「最近量ってないけど、65キロくらいかな」

体重なんかを聞いてどうするつもりなのだろう。少しサバ読んで答えた。

「それならだいたい6エクサジュールは必要ね。これは太陽から地球に届くエネルギーの36秒間分に等しいから、取り出すことはまず無理でしょうね」

エクサとは、キロやメガと同じ接頭辞のことだろうか。もはや十がいくつ続くのか分からない。ダイエツトしてどうこうなる問題でもなさそうだった。

「魔力で何とかならないのか？」

「魔力は一概に計算できないところがあるから具体的な数値を提示

することはできないけど、全盛期のフィオくらいの魔力は必要なんじゃない？」

すなわち四柱が全員集まっても無理ということだ。四次元を移動するのは諦めた。

「やり直したいこともあるの？」

がつくりと頭を垂れていると、チヒロが尋ねてきた。

「仲間にもしものことがあったとき、時間を戻せるなら心強いだろう」「そんな消極的な……。だいたい、それなら生き返らせる方がまだ現実的よ。最近、損傷した体組織を元に戻す魔法が見つかったって風の噂に聞いたし。四柱の誰かだったかしら」

「本当か?! なんて奴なんだ？」

興奮気味に話しかけた。対してチヒロは不快感を露わにした視線を向けてきた。

「ここだけの話、実は昔四柱にはもう一人魔法使いがいて、本当の名称も五柱っていったのよ。ほら、秘術の時に地面から突き出す柱って五本あるじゃない？」

言われてみればその通りだ。もう一つの柱は何という柱なのだろう。何故四つになってしまったのだろう。次々に疑問が浮かび上がった。

「氷に、鉄に、石に、木に、あと何の柱なんだ？」

「——貝柱よ」

チヒロはいたって真面目な顔をして言った。

「……冗談だろ」

「冗談よ」

さらりと言って、奇跡の粒子の計測器に視線を戻していた。からかわれたらしい。

「あんまりつまらない話ばかりさせるんだもの、冗談の一つや二つ言いたくなるわよ。そんなんじゃないわよ」

彼女の言うとおり、がつつきすぎたかもしれない。少し散歩しようと思い、歩き出した。

「——おっと」

足元の注意が散漫になっていた。段差につまづいてよろけてしまった。

気付いたチヒロが駆け寄ってくる。

「大丈夫？ 怪我しなかった？ 少し休みましょう」

「大丈夫だって。気が抜けてただけだから」

思わず否定する。もう無理だと言っても休ませてくれなかった特訓の日々は記憶に新しい。チヒロの変化はとても不気味だった。

散策している和真とチヒロを、遠くから見つめている影があった。歩き寄ってきたウィツタクが話しかける。

「副騎士団長様がこんな所で何をしてるのよ。団長が連れ戻してこいだってさ」

フィオは嫌そうな顔をして振り向いた。

「あたしなんていなくても問題ないだろ。頼んだ、補佐」

「新しい国で私達のことを見ていて欲しい、なんて抜かしていたのは誰だったか……」

ウィツタクはため息をついた。彼女は革命の際にフィオに負けてへそを曲げていたが、王都での仕事を正式に与えられ、最近はいぶ丸い性格になっていた。

「だって、城に帰ってこないんだもん」

フィオが遠方の二人を指差して言った。

「あーはいはい、後で愚痴聞いてあげるから」

ウィツタクが面倒くさそうに言って、頭を掻く。すぐに真剣な顔になって言葉を続けた。

「にしても、何も今こんな所に来なくても良さそうなものだけど。あんたも無防備すぎよ」

フィオは意味が分からず、眉をひそめて首を傾げた。

「数歩先は、あのシタヌ王国よ。獣の血を引いている人間が見つかったら、何をされるか分かったもんじゃないわ」

「シタヌ王国？」

フィオはさらに首を傾げた。ウィツタクは呆れて眉間を押さえている。

「相方と揃いも揃って、ほんと無知よね。あの国の人間は、獣の血を引く人間を憎んでいるの。だから、そういう人種をおおらかに受け入れているオナキマニムを目の敵にしているのよ」

「何で獣の血を引くからって憎まれないといけないの？」

フィオは、暴れ回った自身は憎まれても仕方がないかもしれないが、大人しくしている人間も多いわけで、ただ獣の血を引いたというだけで憎まれるというのはおかしいと思っていた。ウィツタクもそれを見越す。

「あの国は昔っから人間が優秀で、獣が劣等だと盲信しているの。

優秀な子孫を残そうとして、純血にこだわっているのよ。まあ、他人の所見なんだけどね」

「何か気に食わない話だな……」

荒野の向こうに立っている大きな壁を睨んで、フィオが吐き捨てた。

私は荒野を見渡した。この辺りには人はもちろん、動物や植物の姿も見えない。

「さすがに四ヶ月も経てば移動しているよな……」

「ここから少し西に行けばシタヌ王国の王都があるわ。砂漠を渡っ

たとは考えづらいし、そこに行つたのかもしれないわね」

私でも言語と生活の違つたアフウシ村で生活できていたのだから、案外洋平だつてシタヌ王国で元氣にやっているのかもしれない。

「そつか。そのシタヌ王国に探しに行くことつてできるか？」

「そう簡単にオナキマニム王国の人間を入れてくれるとは思えないわ。四柱だつたら自由に出入りできるけど」

陸続きになつているから分かりづらいものの、ここは国境なのだ。小宇宙でいう入国手続きのようなものが必要になるのだろう。

「それなら、少々強引な手を使って見てくるか」

「どうするの？ あんまり危険なことは許可できないわよ」

チヒロの頭の中には、国境を強行突破するなんていう過激な方法が浮かんでいそうである。魔法陣の描かれたカードを見せたところ、彼女は納得して頷いた。

「我が月は塔の上の見張りに立ち、我が太陽は全てが生まれ変わる泉」

腕を突き出し、先日チヒロに貰つたカードで詠唱を行う。言葉は自然に浮かんできた。

「我が息は墓場の塵を芽吹かせ、我が王冠は贖罪所を包み込む」

指先に光の点が現れ、四方向に広がって鏡になつた。鏡面には小宇宙の高速道路と思しき、複数の車が並走している道路が映っている。

「ケルビム達の頭上を天翔けるもの！」

鏡の中の風景がぐにやりと歪む。やがて形が戻った鏡面には、石畳の道が映っていた。

「問題なさそうだな。じゃあ、ちよっくら行ってくるよ」

「え、ええ。気を付けてね。その風景、どこかで見たことがあるんだけど、どこだったかしら……」

煮え切らないチヒロの言葉を背に受け、鏡をくぐった。

結論から言うと、転移した先はビンゴだった。向かう先は適当に設定していたのだから、かなり運がいいと思う。正面には探し人である、工藤洋平の姿がある。

「あ、洋平。探したんだぞ」

かける言葉が見つからず、日本語で軽い感じに話しかけてみた。何故か王座に腰かけていた洋平は、ぽかんとして私の顔を見ていた。

石畳の道だと思っていたのは、広大な面積の床だった。こちらの世界にしては珍しい天井の高い造りの建物で、高い位置にある小窓から光が差し込んでいる。壁には幾つかの金ぴかの武器が飾られている。そこは城のような建物だった。

王座に腰かけた洋平は真っ白な生地に金の装飾の入った、王族が着ているような格好をしている。両脇には従者らしき男と女が立っている。

従者の二人もぼかんとしていたが、女の方はすぐに正気に戻った。

「王、これは一体？」

城『みたい』ではなく、どう見てもここは見知らぬ城の中だ。しかも謁見の間ではないだろうか。転移した距離から判断して、シタ又城以外にありえない。しかも洋平は王座に腰かけており、従者に王と呼ばれている。混乱してきた。

「お前は――、永田和真――か？」

ようやく言葉を発した洋平は小宇宙の言語を使っていた。みるみる顔が赤くなり、こめかみに血管が浮かび上がっていく。

「――コ・ロ・セツ――！」

洋平が声を張り上げたのと同時に、私の周りで十本の柱が地面から突き出した。石の柱と木の柱、すなわち秘術。あの従者は両方四柱らしい。

大魔法使いのとおっておきを同時に受けるなんて、命がいくつあっても足りない。後ろに跳んで、背後に残したままになっていた鏡に飛び込んだ。

鏡を通り抜けて着地する。

「ただいま」

後ろにいるであろうチヒロの方を振り返った。

「……アアア」

返事をしてきたのは、椅子に座った状態で鎖で拘束された、明らかにチヒロと違う女だった。手入れのされていない、がさがさの長いざんばら髪を垂らしている。丸みのある、幼さの残る顔立ち。頭に細長い布が二反巻かれ、両目が見えないようにされている。

よくよく見てみれば場所も変わっており、窓がなく蝋燭が唯一の明かりになっている薄暗い部屋だった。壁からして、石のブロックを積んで造られているようだ。換気をしていないのか、空気がこもって湿っぽかった。

再び女を見た。服とは言い難い、黒い布を巻いた格好をしている。露出している肌には深い傷がいくつも刻まれている。虐待でもされているのだろうか。眼帯を外そうと手を伸ばした。

「——ソレに触るな!!」

真に迫った声が聞こえ、手を止めた。振り向いたところ、部屋の入口に肩を上下させた老人が立っていた。

「それを取ったらいかん。お前も、儂も、皆が死ぬぞ」

私が手を止めたからだろう、老人は安心した様子で言葉を続けた。

「……この子は何なんですか？」

「ソレのことを知らないとは、新人か？ ソレは汚らしい獣、ゲードと人間の混血種じゃ。かつては、かの悪魔と同等の力を持つ存在として猛威を振るっていたが、シタヌ王国が捕え、使役するようになったのじゃ。ほれ、『死神』^{マキニシ}と言えはわかるじゃろ？」

聞いたことはなかった。この弱り切った少女がフィオと同等の力を持っているとは信じがたい。

「それにしても、眼帯を外そうとしていたから驚いたわい。こんな場所で邪眼が発動すれば、百人以上の死者が出ることになるからの」

老人は嘘をついているようには見えない。全然実感がないが、私も危なかったらしい。

入口の扉の外から慌ただしい足音が聞こえてきた。ここはまだシタヌ城の中らしいし、追手が来たのかもしれない。拘束された少女を横目で見た。

「止めてくれてありがとうございます」

老人に礼を言って、再び鏡に飛び込む。鏡面には元の荒野が映っていた。

洋平が王と呼ばれ、四柱を従者に行っていた訳。悪魔と対等の力を持っているという死神。色々と調べる必要がありそうだった。

和真の足取りは地下牢で忽然と途絶えており、結局見つからなかった。洋平と四柱の二名は再び謁見の間に集まっていた。

「侵入者のせいで会議が止まっておりましたが、続けてよろしいでしょうか」

従者の男が口を開く。洋平が頷いた。

「かの国との国境に近いボギ砂漠では、アンフィスバエナの群れが忽然と姿を消しました。また聞くところによると悪魔は力を失い、我ら四柱と同等まで戦闘能力が低下しているそうです。極めつけに、ご存じの通りオナキマニム王国では騎士団長であったウツオヌオアルクアを中心として革命が起こり、国王が代わって混乱が生じます。今が、オナキマニムを攻める好機です。私は進撃を進言します」

「クーハの言い分は分かった。アスウィシはどうだ？」

クーハと呼ばれた四柱の男が下がる。続いて洋平は四柱の女に尋ねた。

「四柱のうち二名が駐在しておりますが、所詮は若輩。警戒するにはあたりません。私もクーハと同じ意見です」

洋平は目を閉じて考え込んだ。和真の襲撃とも似つかない来訪は啓示なのかもしれない。心を決めた。

「獣人間どもを駆逐する！ 準備を進めろッ！」

洋平は目を見開き、部屋に響き渡る声で言い放った。

住人のいなくなったオナキマニム城の王の間では、ルクアとヌトが元国王の遺品整理をしていた。王の埋葬は革命の直後に済んでいたものの、しばらくは新しい国の体制の構築に四苦八苦していて、ここまで手が回らなかったのだ。

「どうつすか、国務の調子は？」

「どうも慣れないことをすると肩がこりますね……」

ルクアは苦笑いを浮かべて、肩を上下して見せた。

「とはいえ、新しい宰相も騎士団員も精一杯頑張ってくれていますから、弱音は吐いていられないんですけどね。そちらはどうですか。フィオさんは上手くやっていますか？」

「能力は申し分ないんですけど、どうも落ち着きが無いんですよ。今日も補佐が連れ戻しに行ってますよ」

「以前の私の苦勞が分かっていたただけだよ、何よりです」

ルクアが笑うと、又トはばつが悪そうに目を逸らした。

戸棚の引き出しを上から引いていく。三段目に、丁寧に布で包まれた物体が収まっていた。

「なんすか、それ」

又トの声に促され、ルクアが布をほどく。中から出てきたのは、細かく磨かれ白銀色の刀身をした短剣だった。

「これは……、多分父の剣です。何故王が……」

ルクアは窓から差し込んでいる光に剣をかざした。又トは探索を続け、下の引き出しを出している。

「なんにせよ、良かったじゃないっすか。ん？ 今度は紙の束ですよ」

又トが手にしているのは、随分と分厚い紙の束だった。ルクアが受け取り中身に目を通す。

シタヌ王国で新たに王座についた男。王都への戦力の集結。そこにはシタヌ王国の近況が詳細につづられていた。シタヌ王国のっている行動は、明らかに侵略に向けた動きに見える。こうしている間にも、シタヌ王国が目を光らせているというのに――。戦闘中に王が話していた言葉が脳裏によみがえる。

「これはひょっとして、かなりやばいんじゃない……」

「石罫をボギ砂漠に敷きます。直ちに防衛戦の準備を！」

シタヌ王国から遅れること数ヶ月、ようやくオナキマニム王国が慌ただしく動き始めた。

0121：ボギ砂漠の決戦

細やかな砂に覆われた、延々と続く黄色い地平線。吹きつける乾燥した風。ここはボギ砂漠。間に合わず中途半端に腰ぐらいまで積まれた石罫が、数列に渡って設けられている。

私は石罫に寄りかかり、戦闘に備えてじっと息をひそめている兵士達を見渡した。疲れた表情をした兵士。緊張で顔を赤くした兵士。震えている兵士。頭を抱えている兵士。気迫はなく、悲壮感すら漂っている。ルクアによれば、ここ十数年は安寧な日々が続いていたため、兵士のほとんどが戦争は初めての経験らしい。

早朝に斥候から、シタヌ王国の軍隊が王都を出発したという連絡が届いた。昨日までは余裕のある者達も多くいたが、戦闘が確実に始まることが判明した途端に皆しおらしくなってしまった。

無論、私とて不安である。鏡をくぐって元の世界に帰る夢を何度も見て、その度に激しい後悔の念で目を覚ました。気持ちに決着はつかずに、今も逃げ出したい思いはある。しかし革命を手助けた責任と、オナキマニムの行く末を見届けたい一心で私はここにいる。

心懸かりなのは、ア・バオ・ア・クウのことだ。先日久しぶりに宿に戻ったところ、ベッドの上に置いてあった蛹が忽然と姿を消していた。貴重だという甲殻を狙った泥棒にでもさらわれたのだろうか。

唸りを上げて強い風が吹いている。風はさらに強くなり、微かに地面の揺れが伝わってくる。

兵士達が顔を上げ、枯れていたはずの唾を呑み込んだ。

これは風ではない。敵の掛け声と足音だ。地平線が平行に黒く塗

りつぶされていく。とうとうシタヌ王国が攻めてきた。

王を直接狙う。それが今回の戦の作戦である。今のオナキマニム王国は王国と銘打ちながら、王がない。本来一番守らなければならぬものがないので、作戦は必然的に攻撃的なものになる。その要は私、チヒロ、フィオ、ルクアの四人が小隊を率いている遊撃隊である。あの三人と同等に扱われているのが心苦しいが、遠くで見ているだけではない分、多少気持ちは楽だ。

「我が月は塔の上の見張りに立ち、我が太陽は全てが生まれ変わる泉」

すっかり慣れた、三次元間歪曲の詠唱を行う。手を掲げて合図をすると、兵士達の手の中に炎の球を作り出した。

私の遊撃隊は陣営の中央で構えている。転移を使って、防衛隊の兵士達の魔法攻撃を超遠距離射撃に変換することが役目だ。

「我が息は墓場の塵を芽吹かせ、我が王冠は贖罪所を包み込む」

大きく数を減らすことはできないかもしれないが、敵陣営の士気が下がり、直接攻撃する遊撃隊の行動を支援することに繋がる。チヒロの受け売りである。

「ケルビム達の頭上を天翔けるもの！」

光の点が石壁に沿って浮かび、広がって四枚の鏡になった。手を振り下ろして次の合図を出す。鏡面に向けて兵士達が同時に魔法を放つ。

鏡は出入り自由である。あちらの反撃を受けないうちに直ちに消した。

「着弾確認しました！ 足取りが乱れています」

魔法で望遠し、観測を行っている兵士から報告が入った。

「二発目いくぞ！ さっき以上に、過激なヤツをぶちかましてやれ
！！」

「オウ！！」

詠唱を始めようとしたその時、地平線にかかった黒い波の中央辺りから、空に向かって赤い光が昇っていった。何かの作戦の合図だろうか。

「我が月は塔の上の見張りに立ち、我が太陽は全てが生まれ変わる
泉」

これだけ距離が開いていれば、後手に出ても十分対応できる。気にせず詠唱を再開した。

「大変です！ 魔法弾が空中で方向を転換し、こちらに向かってきます！」

「我が息は墓場の塵を芽吹かせ、我が王冠は贖罪所を包み込む――」

観測の兵士の報告が入る。合図ではなく攻撃らしい。

焦った兵士が先走ったのだろう。まだまだシタヌ軍は射程外だ。届かせるのも困難なのに、ピンポイントで狙えるわけがない。手を掲げて装填の合図を出す。

真っ直ぐこちらに向かってくる複数の火炎の球が視界に映っている。私が魔術で支援して射程を延ばしたように、あちらも補助できる人物がいるのではないだろうか。

私の姿を見てコロセと叫んだ、洋平の顔が脳裏に浮かんた。彼の魔術は引力と斥力の強化。小宇宙での小競り合いの際には、ダイナマイトを私に誘導させてきた。当然魔法弾を誘導することもできるはずだ。

「射撃中止！ 各自屈んで防御！」

指示を出して、私も石罫の陰に隠れた。

思っていたタイミングで衝撃と熱が襲ってこなかった。魔法弾は着弾していない。陣近くでさらに進行方向を変え、石罫の上から垂直落下を始めた。

以前ダイナマイトは、真っ直ぐ対象を追ってくるだけだった。しかし私が転移の魔術を覚えたように、あちらも技術を磨いていると考えるのが妥当だったはずだ。頭に響くブンブンという音がうるさい。

「くそッ?!」

火炎の球が散弾し、小隊全体に降り注ぐ。範囲が広すぎて鏡で受けきれない。一つでも着弾すれば、焼夷弾のように一帯が炎に包まれるだろう。

ブンブン鳴っていた羽音は、さらに大きくなっていた。

魔法弾と私達の間に、黒く丸い影が割り込んだ。影に触れた途端に炎が散って消えた。大きさに似合わない小回りの利く動きで全ての魔法弾を消失させ、影は私の正面に着地した。

「お前は――」

立ち上がった体長は、私の身長ほどあった。全身は黒光りする甲殻に覆われ、間接は節になっている。顔には点のような可愛い

小さな目が二つあり、中央に四つ又の立派な角が突き出している。太い六本の手足は刺々しく、釘バットを想起させる。

体に不似合いな大きな頭、腹の模様。この生物を見ると、ベッドを占拠していたあの姿が思い出された。

「――ア・バオ・ア・クウー、か？」

「……」

当然返事はないが、ア・バオ・ア・クウーは顔を動かして殻をきしきしと鳴らした。私には頷いたように見えた。

「さつきはありがとう。今までどこ行つてたんだよ、お前。随分雰囲気変わったな」

ア・バオ・ア・クウーの背中をばしばしと叩いた。

もっと再開を喜びたいが、感傷に浸っている余裕はない。直ちに兵士達に指示を出す。

「射撃を再開するぞ！ 防御はア・バオ・ア・クウーに任せた」

詠唱を再開する。ア・バオ・ア・クウーが私の背後でどすんと六つ足をついた。

チヒロは小隊を率いて、左翼から敵の本陣に向かっていった。

魔法弾の発射体制に入っている敵の前に堂々と走り寄る。チヒロがぼそぼそと呟くと、冷気が吹き寄せ敵陣の兵士達がぼろぼろと崩れ落ちた。

「制圧完了。ついてきなさい」

先頭を走る彼女の背中を見て、一人の兵士がぼつりと零した。

「俺達つて……、いてもいなくても関係ないよな？」

「そんな寂しいこと言いなさんな」

ベテランの兵士が慰める。伏した敵を横目で眺めながらチヒロを追いかけた。

「おかしいわね……」

「どうしたんですかい、アクツオハミアヂ？」

順調に敵陣の中を進んでいたが、チヒロは怪訝な顔をして足を止めた。ベテランの兵士が側に近寄って尋ねた。

「これだけ本陣に食い込まれたら、普通必死で王を守ろうとするじゃない？ それなのに、ここの連中は律儀に陣形を守っていて追ってこないのよ」

敵陣の中から、猛スピードで槍が飛んできた。チヒロがとっさに氷の盾を張って弾く。

挟まれた氷の破片が散り、槍が地面の上を転がった。槍は通常の矛先に円弧状の刃がつけられた木製のものだった。

「これ以上あなたに進まれても迷惑ですので、ここで私が潰します」

槍が飛んできた方向から一人の女が歩み出た。手足と首が長く、すらつとした体型をしている。染みのないと言えは聞こえはいいが、この世界で言えば不健康そうな白い肌。毛先のカールした長髪がそ

の華奢な背を飾っている。冷たい細い目は、他人を決して信用する気はないと周囲に主張しているようだ。

「やっぱり出てきたわね」

チヒロは嫌そうに苦笑を浮かべた。

「ただならぬ雰囲気のお仁なんです、知り合いですかい？」

「木柱、アクトオハミアチ・アスウィシと言えば分かるかしら？」

四柱――。兵士達の間には緊張が走った。

「あなた達は下がっていなさい。心配しなくても、弾除けに使ったりしないわよ」

「私を目の前にしても、退くつもりは無いと。勝てるつもりでいるのですか？」

表情を変えずにアスウィシが口を開く。その間に兵士達がそそくさと後退した。

「あんたとは、まともにやりあったことが無いからね。正直分からないのよねえ」

「実際に切り結ばないと力量の差が分かりませんか。あなたは私に近しい人間だと思っていましたので、少し残念です」

アスウィシは分かりにくいため息をついた。

「大した自信ね。こんな田舎じゃあ、少し頭がいいくらいで井の中の蛙になるのも仕方ないか……」

「井戸の中の蛙。比喻ですか？ 意味は分かりませんが、馬鹿にさ

れたのは分かりました」

「ソナナコトナイワヨ？ 来なさい、田舎の秀才さん」

チヒロとアスウィシを囲って、五本の柱が砂漠の中から突き出した。材質は、木。アスウィシの秘術である。

「いきなり秘術？ 見た目に似合わず激しいのね」

アスウィシが地面を蹴ろうとした瞬間、彼女の周囲に氷の柱が現れていた。

「瞬間に向かって私は呼びかける。時間よ止まれ、お前は美しい！」

アスウィシの周辺の空間が凍結される。チヒロはゆっくり歩いて背後に回った。

腕を掲げて指を鳴らす。氷の柱が砕け、代わりに砂の柱が巻き上がった。

「氷の秘術——」

アスウィシが降り注ぐ砂と氷の破片を横目で眺めながら呟いた。彼女は瞬時に移動し、チヒロのいた場所の地面を抉っていた。

「そうよ。ご自慢の身体能力の爆発的な強化も、私の秘術の前では無意味なの」

チヒロは元国王の秘術の詳細を聞いている。からくりが分かっていたら、初見でも対応は容易だった。

「しかもその秘術は、使う度に体が壊れていくんでしょう？ 勝負

あつたわね」

服の袖から覗くアスウィシの手足は紫色に変色していた。自爆が代償である一撃必殺の秘術を持つ彼女にとって、攻撃の当てられない相手との相性は最悪である。

「なるほど、既に一の秘術は知っていたのですね。漏らしたのは先代でしょうか。まったく最期まで仕方のない老人です」

「……『一の秘術？』」

数字のつけられた秘術の名称。余裕の表情。秘術を常用しているなら、しているはずのない白い肌。そして損傷した体組織を元に戻す魔法の噂。チヒロの脳裏に嫌な予感がよぎった。

「おつしやる通り、一の秘術は自身を窮地に追い込む欠陥品です。だから私は、この二の秘術を編み出し、四柱の認可を受けました」

アスウィシが目を閉じてゆっくりと息を吐く。紫色の痣が薄れていき、元の白い肌に戻った。

「なるほど、天才ね」

一筋縄で倒せる相手ではない。チヒロは真面目に気合を入れ直した。

ルクアは小隊を率いて、右翼から敵の本陣に向かっていった。

大勢のシタヌ軍の兵士達が、我先にと進み出る。その先にいるのは、ルクアと三人の騎士団員だけである。多勢に無勢で徐々に押さ

れ、彼らは敵の本陣からだいぶ離れてしまっていた。

「合図を！」

ルクアの言葉に応じて、騎士団員の一人が上空に向かって光の球を放った。

知覚阻害の魔法を使って潜んでいた兵士達が姿を現し、掛け声を上げて剣を振り上げる。ルクア達も本格的に攻撃に転じ、一斉に両翼と正面から挟撃した。あっという間に敵中隊を殲滅し、本陣の中央に向けて道ができた。

「あいつら統制も取れていないし、全然大したことないですね」

「畏だと疑っていても、状況は変わらないでしょうね……。突撃します！」

どういう訳か敵の本陣は混乱しており、できた穴を埋めようとしていない。ルクアは考えた末に攻めを選んだ。

ルクアと兵士達が敵陣の中を駆け抜ける。本陣の中央と思われる場所には、王ではない男が立っていた。

背が高く筋骨たくましい。日に焼けた浅黒い色の顔に、短く刈り込んだ淡い金色の髪が映えている。

「石柱、アクツオハミアチ・クーハとお見受けします」

ルクアは兵士に待機を指示して進み出た。

「そうだ。そういうお前は、元騎士団長か。俺はてつきりウィツタクが出てくると思って期待していたんだが、外れたか」

クーハが落ち着いた低い声を発した。

「四柱に劣るつもりはありませんので、ご安心ください」
「そうか。ではその力、試させてもらう」

クーハは片足を軽く上げ、砂地を踏んだ。黄色い砂が巻き上がり、意志を持ったかのように噴きつける。円錐状に揃った砂塊は巨大なランスのようだ。

ルクアは地面を蹴って横に跳んだ。彼の足型の残った地面を砂の槍頭が突き刺し、呑み込む。

「遅いな——」

クーハが呟く。今度は先程の起点と終点の二カ所から砂が噴き出した。避けられないようにルートを遮りながら宙を走り、さらに羽ばたき飛び上がったルクアを追う。砂の蛇が互いに絡み合いながら追尾する。一本がルクアに追いつき、足を絡め捕ろうと先端を膨らませた。

砂の蛇が砕けて地面に舞い散った。ルクアが振ったのは、白銀色の刀身を持つ短剣。王の間で見つかった父の形見だった。

ルクアがもう一本の砂塊も一振りで砕く。クーハの目には、白い刀身がぼやけているように見えた。

「奇怪な剣を使う……」

「この短剣の刀身は、わざと緩めて柄と繋がられているので、衝撃を吸収して振動し、切断に要する力を補います」

ルクアは空中で腰を落とし、微細に振動している短剣を正面に構えた。

「すなわち、斬れば斬るほど切れ味を増す刃——」

宙を蹴って跳び出した。素早い羽ばたきで急加速し、纏った風で空気の壁を削る。亜音速の剣撃。

着地したルクアの前には、崩れ落ちていく巨大な砂の壁があった。短剣で抉った傷口がみるみるうちに埋まっていく。

「防がれた……?!」

「大口を叩くだけあって、面白い。それなら全力で相手をしてやる——」

フィオは小隊を率いて、正面から敵の本陣に向かっていった。

「敵本陣から突出した数人が、真っ直ぐ味方本陣に向かっていきます！」

観測の兵士が大慌てで彼女の元へ報告に来た。

「そんなのはさっさと潰して、あたし達も本陣に切り込むぞ」

敵は既に、はっきり目視できるまでに近づいていた。足が地面から浮いているように見えるし、かなりの速度で移動している。

フィオを先頭にして、遊撃隊の一行が走り出した。全速力で走っているが、一向に近づけない。フィオは堪らず地面を蹴って飛び上がったが、それでも近づけない。彼らは思うように走れない夢の中のような、もどかしい気分を味わっていた。

「なんだこれ、どうなってる?!」

「分かりませんよお！」

彼らは近づくどころか離され、敵は真っ直ぐに味方本陣の中央に向かっていった。

「和真が危ない！ 戻るぞ！」

フィオが踵を返して、大きな声を出した。

「お言葉ですが、本陣に切り込んで直接王を叩く作戦じゃ？！」
「知ったことか！ あたしにとってはあいつが王なんだ」

兵士の説得に耳を貸さず、フィオは本陣に向かって走り出した。

「そんな……」

何かを言いかけて、兵士は倒れた。フィオもさすがに足を止めて彼の元まで戻った。

「ずいぶん体を張ったツツコミだな」

揺すってみたが、どうも様子がおかしい。首筋に手を当ててみると脈が無かった。

ばたり。ばたり。黄色の砂を散らして、小隊の兵士達が次々に倒れていく。

「何が起こつてる——？」

揺れる視界。眩暈が襲い、フィオは思わず片膝をついた。何故か急速に体力が失われていく。

四角い体に人間の頭が二つ。フィオは視界に奇怪な生物の影が映っているのに気付いた。

逆光に目が慣れる。四角く見えたのは台車で、二つの頭は台車を押す老人と、乗せられた少女のものだった。戦場で目にする組み合わせではないので、正体が分かったというのにさらに奇怪に思えた。台車の上の少女は、何故か手足を鎖で拘束されていた。痩せこけたがりがりの体に、ぼろきれのような汚い黒い布を服代わりにして巻いている。胸に垂らされた髪束は痛んであちこちを向いており、手入れがされていないことは明白だった。そして顔は――、少女の顔を見ることは、本能が拒否していた。

「これでも元世界最強だろ――、何、ただの小娘にびびってるんだよッ！」

声を張り上げ気合を入れて、フィオは視線を上げた。
ごっそりと意識が、自分が抜けていった。死んだ、と思った。

「――ぬ?!」

フィオは、すんでのところ意識を取り戻した。
見たはずの瞳が記憶から抜け落ちている。アレには何かとんでもない大魔法が込められている。アレが人間の魂や、生命力や、元氣や、そういう生を司るものを奪い去ってしまうようだ。

「殺られる前に殺ってやるッ！」

フィオは残りの力を振り絞り、指を曲げて地面に右手を突き立てた。魔力を解放し、周囲の魔法を上書きする。発生した熱が辺りの風景が歪ませる。

クオツネルガ
「紅蓮桜花——」

「紅の翼と尾。魔力に物を言わせた火の魔法。さてはお前、悪魔か」
光を散らし砂漠を焦がすフィオの姿見て、老人が口を開いた。

ツナセ
「散華！」

フィオは返事をせず、腕を前に突き出して、熱量の塊を台車に向けて放った。砂漠を溶かし痕跡を残しながら進んでいく。

「年は取ってみるもんじゃな。まさか死神と悪魔の戦いを見届けることができるのはの」

「死神——?!」

フィオは目を見開いた。死神マギニシと聞き、脳裏に幼少の記憶が蘇る。

老人は後ろから死神の顔に手を這わせ、左目の眼帯を外した。不可視の双眼が露わになる。

フィオの体から急速に魔力が失われていく。放った熱量の塊が消え失せた。フィオは意識を朦朧とさせ両膝をつき、うつ伏せに倒れ込んだ。

敵陣から数人が猛スピードで向かってくる。足が速いなんてものではなく、もはや飛んでいると思う。遊撃隊の接近を許さず、味方の本陣に切り込んできた。

「射撃中止。何なんだ、あいつは……?」

兵士達が寄つてたかつて敵を囲むが、ある距離以上は近づけずに進行を許している。彼らは私の遊撃隊を目指して進んできているように見えた。

「斥力の魔術——、洋平か」

ルクアが調べたところ、洋平はシタヌ王国の王になっていた。魔術に失敗したあの後、彼の身に何があったのかは分からないが、私と同じようにめまぐるしい生活を送っていたに違いない。

それにしても王が直接攻めてくるなんて、一体何を考えているのだろうか。

「永田和真ア——！」

いや、目的ははっきりした。私だった。

「我は汝に啓示を与えるもの！」

鏡を正面に生み出して進路を妨げる。洋平が魔術を止め、彼と四人の親衛隊が鏡の前で着地した。

「お前らは雑魚を相手しておけ。絶対に俺達の邪魔をさせるなよ」
「お任せください」

親衛隊の兵士達が剣を抜き、左右に分かれて歩いてくる。圧倒的な人数の兵士に囲まれているというのに、全く物怖じしていない。選りすぐりの優秀な兵士達なのだろう。

親衛隊の相手は兵士達とア・バオ・ア・クウーに任せ、私は洋平と対峙した。

「洋平、実はこの世界は——」

「ここが大宇宙なんだろう？ それくらい、神の使いもとい獣がいるところを見れば分かるさ」

ショックを受けないように勿体ぶって話そうとしたが、あっさりと答えを言われてしまった。地獄だと思っていた私とは大違いだ。

「それなら話は早い。今すぐにでも、俺の魔術で小宇宙に帰すよ。

色々巻き込んでしまつてごめん」

「いいや、俺は戻らない」

ずっと洋平は元の世界に戻ろうと必死になっていると想像していた。彼の返答を信じられず、じつと顔を見つめた。

「大宇宙に連れてこられたことだけは、お前に感謝しているんだぜ？ ここにいれば、小宇宙での後手後手に回る戦いではなく、獣を根本から絶つ戦いができる。さらに志を同じくした家来どもまで手に入つたんだ」

洋平は親衛隊と敵陣に視線を移した。獣は劣等だと盲信し、人間の純血にこだわるシタヌ王国の人間のことを言っているのだろう。

「血が混じっていれば、人ですらも根絶しようとする奴らと志が同じだつて？」

「そうか、お前はオナキマニムの人間だったな。……俺は獣なんて全て地上から消え失せればいいと思っている。そうすれば小宇宙も大宇宙も、突然の獣の襲撃に脅かされない素晴らしい世界になる。何らおかしいことではないだろ」

確かに獣によって、人々の恐れや悲しみが引き起こされている。

気に食わないが、彼の言っていることは私の目指していた、全体がプラスに向かう国造りに近いと思う。反論ができなかった。

「お前には感謝しているが、土人どもの施しを受けた屈辱の恨みはそれ以上だ。今日こそお前を殺す」

洋平は右手の中に炎の球を生み出した。

魔法をまともに使うには、子供の頃からの訓練が必要だとされている。実は彼はとんでもないセンスの持ち主なのではないだろうか。揺らめく尾を引いた火球が放たれた。

0122：劣等の意地

戦場と化したボギ砂漠は、喧騒に包まれていた。味方の本陣の中でシタヌ王国の親衛隊の兵士達が暴れている。奮闘しているア・バオ・ア・クウーのお陰で、味方の被害は小さく収まっているようだ。洋平が手の平から炎の球を放つ。兵士が真つ先に修得するという魔法弾。彼の引力と斥力の魔術だけでは、火は扱えないはず。やはり魔法を使っている。

洋平が指をくつと曲げると魔法弾の軌道が変わり、弧を描いて私の方に向かってきた。こちらは彼の魔術だ。しかも詠唱も魔法陣もインターブリーター詠唱省略する高等な技術を使っている。

「我は汝に啓示を与えるもの」

そんな芸当は私には無理だ。カードを顔の前にかざし、軌道上に正方形の鏡を生み出した。炎の球が鏡面に吸い込まれていった。

「要塞は自壊する、コマホン」

洋平がカードを取り出し、私と同じように顔の前にかざして詠唱する。

突然、視界が急速に流れた。

落ち着いて現状の把握を試みる。水色の空、雲一つない快晴。そして砂漠の地面が眼下に広がる。体が宙に浮いているようだった。地面との斥力を増大させ、私の体を上空に飛ばしたらしい。下は柔らかな地面なので落ちても怪我はないと思うが、さすがに身動きが取れない。

洋平は容赦せず、自身の周囲に十を超える炎の球を生み出した。

「攻城兵よ来たれ、メテイスラー！」

魔法弾を同時に放ち、カードを裏返して次の詠唱を行った。ばらばらの方向を向いていた炎が軌道修正してこちらに向かつてくる。

「ケルビム達の頭上を天翔けるもの！」

カードを代えて詠唱する。足元に鏡が現れた。自由落下して鏡面を通る。

洋平の背後で、地面と平行に現れていた鏡から現れ着地した。詠唱を省略したので、短い距離しか跳ぶことができない。

「おかしな魔術だな。以前城に忍び込んだ時にも、それを使ったのか？」

洋平が振り返りながら口を開いた。忍び込んだと言われると、語弊がある。

「まああの時は洋平のことを探しに行っただけで、城の中まで行くつもりは無かったんだけど」

転移先を変えながら鏡を回転させて縦にし、後ろに跳んで再び鏡面をくぐった。後方に転移し、さらに洋平と距離をとる。

洋平がボクシングのように腰を浮かせてステップを踏んだ。

「大鳥は舞い上がる、ローラー」

聞いたことのない詠唱だ。直後、彼の体が地面と平行に跳び出した。自分に魔術をかけて飛んでいる。本陣に向かつてくる時に使っていたのは、この技のようだ。

再び鏡面をくぐって間隔をあけるが、あっという間に距離を詰められた。その手には魔法弾が作られている。

「火から土を、粗雑なるものから精妙なるものを分離せよ」

即座にカードを代えて詠唱する。放たれた炎の球を、先に生み出した一枚の鏡で分断した。

「——これあらゆるものの中で最強の力なり！」

続けて周囲に百の鏡を生み出した。様々な方向を向いた鏡面が眩く光っている。さすがに洋平も顔色を変えて足を止めた。惜しみなく鏡を次々に放つ。万物を切断する白銀の刃の雨。回避するほかに術はない。

「大鳥は舞い上がる、ローラー」

洋平が側方に飛んで避ける。動きが速く、狙いをつけるのが難しい。絶えず鏡が砂漠に着弾し、砂を巻き上げた。周りに浮かんでいた無数の鏡は、いつの間にか一枚も無くなっていた。あっという間に撃ち尽くしてしまった。

「我は汝に啓示を与えるもの」

詠唱して背後に鏡を生み出す。お互いに魔術を知っているため、とてもやりづらい。作戦を考えようと思い、小宇宙に逃げ込んだ。

「異なるものの愛を、ターファアー！」

拳を構えた洋平が、鏡を通して追いかけてきた。自身を危険に晒

してまでは攻撃してこないと思っていたので、魔術を使って迎撃するタイミングを逃した。

片や静止し、片や十分に加速した空中戦。条件は圧倒的に不利だ。上段に突き出された洋平の左拳を、とっさにガードを上げて防いだ。肺の中から空気が絞り出された。から空きになっていた腹に洋平の右拳が食い込んでいた。視界が狭まっていて二発目が見えなかった。

仰向けに吹き飛ばされ、硬く冷たいコンクリートの地面の上に転がった。

むせ返りながら周囲を見渡す。鉄骨が露わになっている天井はかなり高い。壁際に設置されたクレーンは、建物中に積み上げられた四角いコンテナを運ぶためのものだろう。そこは港の倉庫の中のようだった。

洋平が手を掲げたが、何も起こらずに舌打ちをしていた。炎の球を生み出そうとしたようだ。

奇跡の粒子の濃度が低い小宇宙では、魔法は使えない。大宇宙での生活に慣れてしまったせいで、こちらの世界の戦闘は勝手が違って大変そうだ。頭を切り替えた。

「攻城兵よ来たれ、メテイスラー」

正式な魔術の様式に則り、洋平がカードを掲げ詠唱を行う。彼の横に置いてあったコンテナが地面を離れて飛んできた。

慌てて起き上がりながら走る。背後を通り過ぎたコンテナが、別のコンテナに当たって激しい金属音を立てた。

「まだこっちのエネルギー源は有効みたいだな……」

洋平が背中からたくさんのカードを取り出し、広げて扇状に持つ

た。彼のエネルギー源が残っているということは、阿部警備の皆はまだ健在だということだろうか。

「火から土を、粗雑なるものから精妙なるものを分離せよ」

どこからコンテナが飛んでくるか分からない。警戒して、自身の周囲に十五枚の鏡を生み出した。

「覆い尽くす混沌、シナー！！」

洋平が大きな声で詠唱した。其処彼処から金属音が聞こえてきた。洋平の周りでは、コンテナが全部浮かんでいた。振り返ると、後ろのコンテナも全部浮かんでいた。

「おいおいおい！」

素早く周りに視線を走らせる。無数のコンテナが四方八方に動き出していた。十五枚くらいの鏡で、どうにかなるわけがない。

こちらに飛んできたコンテナを避ける。倒れてきたクレーンを鏡で切断する。コンテナを切断して軌道を逸らす。

行き交うコンテナ。倒れる柱。崩れる壁。巻き上がる煙。倉庫の中は地獄と化していた。指示能力が失われ、建物が崩壊した。

敵陣の中で対峙している二組のうち、一組はチヒロとアスウィシである。アスウィシが拳を振りかぶり、地面を蹴って駆けだそうとする。

「瞬間に向かって私は呼びかける。時間よ止まれ、お前は美しい」

水色の光を放つ魔法陣を周囲に展開させ、チヒロが詠唱を行う。
五本の氷の柱に囲まれたアスウィシは、一切の思考と動きを止めた。
チヒロが歩いて背後に回り、指を鳴らして秘術を解く。アスウィシの走った経路に砂が巻き上がった。舞い落ちる砂のせいで、チヒロはアスウィシの姿を捉えることができない。

「場所が悪いわね……」

チヒロは呟きながら浮かんでいた魔法陣を切り替えた。
雨のように降り注ぐ砂の中で、アスウィシは真後ろを向いて跳び出した。速度をもった物体は慣性の法則に従うので、絶対零度でも止まることはない。つまり秘術を使っても動きを封じることができない。

チヒロは両手の平を横に向けた。水流を放ち、その反動で側方に跳んだ。

降り注いでいた砂の中から彼女の立っていた場所へ向かって、ほぼ同時に砂の柱が上がった。

アスウィシが動きを止める。彼女の白い肌は破け、鮮やかに赤い筋繊維が覗いていた。中程で千切れてぶらぶら風に揺れている。

チヒロはルクアから、木柱の秘術を使っても十回近くは運動に耐えられると聞いていた。しかしアスウィシが使ったのはたったの二回である。耐久力には元の筋力も影響しているのだろうかと考えを巡らせた。

とはいえ、アスウィシに限っては木柱の秘術の短所はカバーされている。アスウィシが息を整えると、筋繊維がくつつき、皮膚が塞がり、元のような綺麗な肌に戻った。

アスウィシが再び拳を振りかぶる。

「瞬間に向かって私は呼びかける。時間よ止まれ、お前は美しい」

今度は地面を蹴るよりも早めに凍結させた。その場から動かずに、手の平を時間の止まった空間に向ける。

「うねれ、水の精ウンディーネ」

集った水蒸気が凝結し、きらきらと光を乱反射させる。光が集い、アスウィシの周囲に十三本の氷の槍が現れた。

「ウンディーネは音を立てて流れ寄れ！」

それぞれの柄の後方で相転移を起こし、圧力で槍を押し出す。氷の槍が一斉にアスウィシに向かって放たれた。同時に五本の氷の柱が砕け、秘術が解除される。

「くッ!!」

意識の戻ったアスウィシが、視界に映る白槍を捉えて自分の置かれた状況を把握する。逃れる隙間はない。腰を落として構え、強化された両腕を振るった。

アスウィシは四本の氷の槍を手で掴み取っていた。滴った血が、地面の黄色い砂に吸い込まれていった。残りの九本が背中や首、足に突き刺さっていた。

筋肉に押し出された槍が勝手に抜け落ちる。みるみるうちに傷口が埋まっていった。

何事もなかったようにアスウィシは行動を再開した。チヒロに向かって拳を構え、地面を蹴る。

「瞬間に向かって私は呼びかける。時間よ止まれ、お前は美しい！」
荒い息をしたチヒロが詠唱し、氷の柱がアスウィシを囲って突き上げた。チヒロがアスウィシの後方を目指して歩き出す。
氷の柱が砕けた。指を鳴らすのを待たずに途中で秘術が解けていた。

秘術は何度も使えるような効率的な魔術ではない。チヒロは体に負担をかけすぎていた。

跳び出したアスウィシの拳打が擦れる。右腕が半月状に決れ、砕けた肉が飛び散った。チヒロは左手で腕を押さえた。

「魔法のキレが悪いですね。もう限界なのではないですか？」

消耗した筋肉を回復させながら、アスウィシが口を開く。チヒロは無言で睨んだ。

「今度は私が言う番ですね。勝負ありました——」

自爆が代償である一撃必殺の秘術を持つ彼女にとって、攻撃の当てられない相手との相性は最悪だった。しかし自爆の代償という短所がなくなれば、こうして相性は逆転してしまう。

しかし窮地にあるにも関わらず、チヒロはへの字になっていた口の端を上げ、不敵に微笑んだ。

「え、ごめん、何だつて？——リバースエンジニアリング完了。
その回復の魔法は、前後の組織構成から予測して損傷箇所を修復しているのね。……ということは、小さい傷を治すことはできて、原型が分からなくなるほど破損したら修復できないんじゃない？」

リバースエンジニアリングは本来、魔術師の詠唱と魔法陣を解析して、相手がどんな種類の魔術を使っているのか特定する技術である。しかし魔力の様態を解析して、魔法使いに対して行ったのは過去の歴史の中でも彼女一人だけだろう。

「……あなたは一体？」

仄かに浮かんでいた嗜虐的な笑みを止め、アスウィシが尋ねた。

「自分で言っていたでしょう。あなたに近い側の人間よ」

チヒロは右腕の傷を氷で止血し、手を離れた。

「そ、そこまで知っているなら、あなたが勝てないことも分かったのではないですか？ あなたの魔法の火力は、四柱の中でも一番低いのですから」

「そうみたいね。今まで必要が無かったから、そんな魔術は考えたこともなかったわ」

緊張して額に汗を浮かべているアスウィシと対照的に、チヒロは爽やかに笑って見せた。

「それなら大人しく――」

「ああ、今思いついた」

アスウィシの言葉を遮り、チヒロはあっけらかんとした声を出した。

アスウィシを囲って、五本の氷の柱が地面から突き出した。即興で編み出された、二の秘術。彼女の白い顔から血の気が引き、文字

通り青ざめた。

柱に囲まれた五角形から空まで続く空間が、無数の眩しい白い光を放つ。日光を散乱して輝く細氷が凝結していた。

「天才は天才でも、所詮は田舎の天才よね。見聞を広げて出直さない」

チヒロは眼前に巨大な魔法陣を浮かべた。

「諸氏に勝利を確約する。秘められた静かな闘志をもって、北方の若き勇士よ戦いに赴け！」

初めて紡がれた詠唱を受け、光が収束し氷の柱を形作る。さらに次々に光が集い、氷を肉づけしていく。

アスウィシは呆然として天上を見つめた。圧倒的な存在感をもつ氷の円盤が太陽の光を妨げている。

巨大な円柱状の氷は雲の上まで続いている。成層圈の上、ぎりぎり空気が存在する中間圏まで続く、氷の槌。

氷の大塊が落下していく。アスウィシは腰を落とし、両手の平を空に向けた。秘術で両手足を強化し、受け止めようとしている。

「中間圏までの空間を凝結させた5・8キロトンの氷槌よ。筋力をたかだか数百倍強化したくらいで、受け止められるわけがないじゃない」

チヒロが言い終える前に氷は接地していた。氷の槌は天蓋を支える柱のように砂漠に突き立っていた。

敵陣の中で対峙しているもう一組、ルクアとクーハの戦いは、一方的に進んでいるように見えた。

ルクアが目にもとまらぬ速さで突きを繰り返す。クーハは腰から手を離さず、地面から放たれた砂弾で短剣の切っ先をずらし、最低限の動きで避けていた。

回し蹴りから後ろ回し蹴りへのコンビネーション。ルクアの長い足が一蹴りで砂の壁を抉り、二蹴りで崩す。続けて、翼で体を浮かせて放たれる後ろ回し蹴り。再び現れた砂の壁に遮られた。

ルクアが足を引いて着地した。その目は、砂地に戻る壁を恨めしそうに睨んでいる。

「いい動きになってきたな。それでは、カウントダウンを始めよう」

クーハは満足そうに頷き、一般人でも分かるほど膨大な魔力が放出させた。恐らく石の秘術が来る。ルクアは範囲を見極めて退避しようとした。

砂漠の地面を掻き分け、灰色をした石の柱が一本だけ突き出した。出す場所を間違えたのではないかというくらい遠い位置に見える。ルクアは不思議に思い、ぽかんと口を開いた。

「何ていう顔をしているんだ？ 秘術はもう、始まっているぞ」

敵の兵士達が慌てて走り出した。彼らのいた場所に二本目の柱があった。柱と柱の間隔がやけに広い。

ルクアは嫌な予感に突き動かされ、見渡す範囲を広げた。

三本目。四本目。そして五本目。五角柱の空間は、軽く町を囲える広さを持っていた。

「これが、大魔法使い……」

「こんな馬鹿でかい範囲で魔法を使えるのは、俺以外にはいないだろうがな。俺は四柱の中でも最大の魔力を持っている」

クーハは秘術が始まっていると言っていたが、ルクアの体に変化はない。短剣を構えなおした。

振り上げた短剣の切っ先から竜巻が巻き起こる。砂漠の砂を巻き上げ、黄色い風が吹き荒れた。

「近接が駄目なら、魔法で来るか？」

竜巻の径が広がり、クーハの元へ強風が襲い掛かる。しかし傷つけるほどの威力はない。彼は手をかざし、細い目をしてやり過ごした。

黄色い風が急に掻き消えた。風に紛れて間合いを詰めていたルクアが、側方からクーハに斬りかかる。

「いえ、『どちらも』です」

鋭い突き。しかしそれでも防御の先に行くことはできなかった。

短剣は砂の壁に突き立っていた。

短剣を突き立てたまま、剣先から無数の風の刃を放つ。砂の壁が内側から砕かれた。

続けて放たれた風の刃は、瞬時に作り替えられた砂の壁で遮られた。

がむしやりに攻撃しても、クーハの防御を破ることはできそうにない。ルクアはいったん距離を置いた。

何かが音を立てて砂の上に落ちた。クーハを警戒しながら視線を向ける。それは崩れ落ちた、短剣の柄だった。おかしいのは剣だけ

ではない。よく自分の姿を見てみると、服がかかさど音を立てて破れていた。

「これは……」

「場所が幸いしたな。砂漠でなければ、破滅の光景を見せてやれたんだが」

これが石の秘術の効果らしい。理由は分からないが、早々に倒して秘術を解く必要がありそうだ。ルクアはすぐさま腰を落とし、柄の短くなつた短剣を握り直して正面に構えた。

地面を蹴り、急加速して突進する、亜音速の剣撃。短剣の刃は砂の壁で防がれていた。

ルクアが翼を羽ばたかせ、壁を飛び越える。身を翻し半回転してから空中を蹴り、急加速して突進する。二発目の亜音速の剣撃。

「——実におしい」

短剣の刃は、クーハを囲って生み出された半球状のシエルターに遮られていた。圧縮されてかなりの硬度を持っており、傷すらついていない。

砂の殻が崩れ落ち、クーハの顔が露わになった。

「間合いの内で防御を解くなんて、血迷いましたか！」

ルクアが声を張り上げ、追撃しようと短剣を引いた。

「え……？」

しかし急に眩暈が襲ってきたため、ルクアは思わず片膝をついた。

重力の感覚が麻痺し、立っているのか横になっているのかすら分からない。視界がぼやけ、その中でクーハらしき人影が歪んでいた。

「俺の秘術は、風化だ。肌で感じ取れないほどの短時間に温度変化を繰り返し、数秒で数十年分の劣化を引き起こす」

風化によって地上の物質は物理的、化学的に破壊される。これは代謝機能をもつ生体として例外ではない。温度変化により血圧は大幅に変化し、血栓がでやすい状態になる。また脳も急激な温度変化に弱いため、意識障害を引き起こしやすくなる。

ルクアは激しい運動を繰り返していたせいで血栓の症状が進行し、末端の脳細胞の虚血を起こしていた。

「その体ではもう、ともに戦うことはできないだろう。俺の勝ちだ――」

クーハが手を掲げると、両脇で砂の柱が巻き上がった。

ルクアは朦朧とする意識の中、クーハの後ろに視線を向けていた。幼い頃見ていた、戦う父の姿が網膜に浮かぶ。その身の半分にウィツイロポチトリの血を宿した、歴代最強の騎士団長。御された締まった筋肉を持った男が、逆三角形の広い背中をこちらに向けて立っている。

――ルクアは無意識の内に立ち上がっていた。

背中から生えて左右に広がっているのは、宝石のような光沢を放つ緑色の気高い翼。その羽ばたきは音の速さで身体を運び、敵陣の中を縦横無尽に駆け抜けさせる。

――地面を蹴り、翼を猛スピードで羽ばたかせて急加速する。クーハとの間合いが一気に詰められた。

「何度その技を繰り返しても無駄だ！」

クーハが腕を正面に突き出すと、二匹の砂の蛇がルクアに襲い掛かった。

そんな彼が得意としたのは、風を自在に操る魔法。魔力は少なくとも巧みに剣術と融合させ、纏わりついて敵を翻弄する。

——風に乗って身を翻し、急降下してきた砂の蛇をかわす。空中を蹴って地面に向かって突進し、もう一匹を縦に裂いた。そのまま膝のばねを解放し、跳び上がって砂の壁を越えた。

その手に持たれたのは、丁寧に磨かれ白銀色の刀身をした短剣。敵に間を与えず攻撃を続け、切れ味を増した刃で鎧を引き裂く。

——砂の半球の前に着地する。一閃。短剣が金属音を立てて弾かれる。二閃。三閃。四閃。繰り返す度に速度と刃の振動が増していく。

五度目の鋭い突きで砂のシェルターが砕けた。威力は削がれていない。中のクーハを突き刺し、シェルターを完全に崩して吹き飛ばした。

クーハは地面に背中を打ち付け、仰向けに倒れたまま動かなかった。腹に刺し傷が残っているが、浅く致命傷ではない。硬化した砂の殻に頭を打ち付けたことによる失神だった。

ルクアは歪んだ視界で、敵が倒れていることを知った。攻撃をする、防御をする、と意識を一つのことに向けてしまうと、それ以外の動作に遅れが出てしまう。心を止めずに行動できるのが達人の境地だと教わっていたが、こんなものなのかもしれない。父親の影を見送り、ルクアは今度こそ倒れた。

フィオは砂漠に顔を埋もれる直前で目を覚ました。体全体にひんやりとした金属の触感があり、視界の上下がかなり狭まっている。何故か鎧を身に着けていた。

がしやりと金属音を立てて立ち上がる。依然、眼前には死神の姿があるが、生命力や魔力を奪われている感じがしない。この鎧が死神の魔法を遮断しているのだろうかと考えを巡らせた。

「この鎧は――、ウィツタクか？」

「死にかけている姿が本陣から見えるんだもの。放っておくわけにもいかないでしょう」

紅の翼と尻尾がはみ出した奇妙な鎧の元へ、同じく鎧を纏ったウィツタクが歩き寄った。いつも傀儡として使っていたのでフィオは違和感を覚えたが、本来こういう使い方をするものだと思い付いた。

「それにしても、あの両目は何なの？」

ウィツタクが尋ねる。顔は死神に向けているが、直視することができずに焦点は足元に合わせていた。

「生命力を削ぎ取る右目と、魔力を削ぎ取る左目だ」

「なるほど、それで小隊の兵士達が全滅しているのね。そこそこ厄介なようだけど、耐魔の鎧があれば敵じゃないわ」

死神の座っている台車の後ろに立っていた老人が、眉をひそめ額の皺を増やした。

「ア・バオ・ア・クウーの甲殻か。邪眼すらも遮るとはの」

顎の髭を撫でて思考する。これを外せと命令するかのように、死神が腕を動かして鎖を鳴らした。

「それはいかん。お前は僕に従っていればいいんじゃない」

死神がさらに大きな音で鎖を鳴らし、きりきりと首を横に回す。

「いかん……。こんなところでコレを解放するわけには……」

死神が双眼で鎖を見下ろした。鉄製の鎖の一部が赤く錆び、砂のように形を崩して腐り落ちた。

「ひっ?!」

老人が台車から手を離し、ちらちらと後ろを振り返って様子を窺いながら逃げ出した。自由になった死神が台車の上で立ち上がる。解けた鎖が台車の上に落ちた。

死神が首だけ回して振り向き、自身を拘束していた男を流し見た。振り返った老人の目に焼付いたのは、塵も、光すらも逃さず全てを吸い込む、漆黒の瞳だった。最もそれを脳で処理する前に彼は絶命していた。

死神が一歩進んで砂漠の上に降り立った。手首と足首に垂らしていた枷の鎖が、ちゃりと音を立てた。

「四柱と元世界最強を相手に、近接戦でもするつもり?」

怯えているのか、ウィツタクの声は少し震えていた。背中に差さっていた剣を抜き、中段に構える。

二歩目。フィオの視界から死神とウィツタクの姿が消えた。

「やっぱり速い——」

フィオが振り向いて二人を視界に収める。

死神がウィツタクの胸を蹴り込んで後退させていた。膝は伸びきっておらず、離れないように力を抑えているようだった。素足にも関わらず、鎧が足の形に窪んでいる。

死神が足を引いて、代わりに拳を胸板に打ち込む。まだ着地しない。体を回転させた反動で、細い足で鞭のような回し蹴りを放った。鎧が割れ、破片が砂の上に飛び散った。

フィオが殴りかかってきたのを避け、死神はようやく攻撃を止めて後退した。

「ありがと。……凶悪な魔法を持っていて、近接戦も超一流？ 何なの、あいつは。あれだけ強ければ、どこかで名前を耳にしてもおかしくないと思うんだけど」

ウィツタクが鎧を補修しながら言った。フィオと並んで立ち、守りを固める。

「あいつとは、幼い頃に戦ったことがある。引き分けて再戦を誓っていたのに、それ以来会わなかったから不思議に思っていたんだ」
「魔力減退前のあなたと引き分けたの？ どおりで強いわけよ」

ウィツタクは兜の中でため息をついた。

「でも、なんで獣を目の敵にしているシタヌ王国にいるんだ？」
「だからこそ、じゃない？ 拘束している鎖や体中の傷を見れば、招かれたんじゃないことは分かるわ。大方、獣への憎しみを一身に

背負わされて、都合のいいように洗脳されていたんでしょう」

「そんな……」

フィオが怯えた目をして死神を見つめる。当人は無言で、手首の鎖を腐らせて外していた。

「魔力を削がれる以上、遠距離攻撃は無理ね。体から離さないように魔法を使いながら、近接戦で戦いなさい」

ウィツタクのアドバイスを受け、フィオは手を掲げた。手甲の節の間から炎が漏れ出す。揺らめいていた炎がまとまり、指先に炎の刃が形作られた。

「こうか？」

「そう、上出来よ」

ウィツタクは腕を突き出し、手の平から鉄の鎖を放った。死神の首に巻きついて動きを封じる。

鎖を引いて体勢を崩そうとする。しかし死神が鎖を見つめると、中程が錆びて腐り落ちた。均衡していた力のバランスが崩れ、ウィツタクが仰向けに転んだ。

「あの衰弱の魔法も厄介ね……」

ウィツタクはそう零しながら、掃除機のコードのように鎖を鎧の中に戻した。死神は腕を引き、片手で指を鳴らしている。

死神が地面を蹴った。音無く、けれども異様な速さで駆ける。倒れているウィツタクに掴みかかった手を、フィオが正面から掴んだ。フィオが炎の剣を袈裟に振るう。死神がスウェーで避け、三度蹴りを入れながら鎧を駆け上がる。フィオは思わず手を離していた。

死神が空中で身を翻し、バック宙して後退した。

「ハッ、あの寝ずの喧嘩を思い出すな！」

フィオが間合いを詰め、炎の剣を薙ぐ。死神は、尾を引く赤い剣筋の上で舞っていた。空中から横蹴りを放ち、足刀で首を狙う。寸でのところフィオがその足首を掴んだ。

足を斬り落とそうと、炎の剣を振るう。しかし死神は瞬時に片足を鎧にかけて空中で体勢を変え、炎を横から掴んで掻き消した。

フィオは死神の足を離して両腕に掴みかえた。引っ張りながら後転し、蹴り上げて頭越しに投げる。彼女は知らないが、その技は小宇宙では巴投げと呼ばれている。

「ナイス！」

ウィツタクが声を上げる。背中を打ち付けた死神の周囲で、五本の鉄の柱が地面から突き出した。囲まれた五角柱の空間が赤く染まる。

体内の鉄分を動かし、対象の体を自在に操る鉄柱の秘術。死神の体が宙に浮き、両手足が伸ばされた。

「大人しくしないと、引き千切るわよ！」

ウィツタクが警告するが、死神はぶちぶちと繊維が切れるような音を立てて手足を曲げた。粘性の高い水の中でもがくように、体をねじって赤い空間の外を目指す。

「さすが、あんたの同類ね。とんでもない魔法抵抗」

ウィツタクがフィオの方を向いて声をかけた。フィオは返事をせ

ず、翼を羽ばたかせて赤い五角柱の真上に飛び上がった。両腕を地面に向けて突き出す。

「こんな形で再戦の約束を果たしてしまつて、ごめん。元に戻つたら、また二人きりで戦おう。紅蓮桜花・散華クオツネルガ・ツナセ！！」

押し出された空気が熱気を帯びた風となつて吹き出す。フィオの周囲の大気がプラズマ化して光を発し、風景が歪んだ。鎧が赤熱して溶け落ちた。

「ちょ——、今のあんたじゃ、秘術を受けたらただでは済まないわよ——?!」

ウィツタクが叫ぶ。フィオは彼女に向かって微笑みかけた。翼をはためかせ、秘術の真っ只中へ突入する。熱量の塊を拳に収束させ、突き出した。

「まったく……。あんたといると、鉄の心臓と呼ばれた私でも寿命が縮むわ」

愚痴を零しながらウィツタクが歩き寄る。ぼろぼろになつた鉄の柱の中央で、死神とフィオが倒れていた。

死神は横を向いて気絶している。フィオは仰向けになつて荒い息をしていた。

「さすがにしぶといわね。止めを刺しておく？」

「だ、駄目だ！ あたしが何としても説得する！」

フィオが慌てて起き上がった。ウィツタクはその返答を予想していたようで、当人から見えないように優しい笑みを浮かべていた。

港に立ち並ぶ倉庫の内の一つが倒壊している。コンテナに入っていたのは衣類だったようで、燃えて灰色の空に黒い煙を巻き上げていた。私はぎりぎりのところで転移の魔術を使い、脱出していた。瓦礫の崩れる音が聞こえた。黒い煙の中から洋平が歩いて出てきた。

「……何でお前らは獣の味方をするんだ？」

洋平が5メートルほど離れた場所で足を止め、尋ねてきた。

「何が言いたい？」

「人を傷つけても鯨は保護する？ 神経のある動物は安楽死させる？ お前のやっていることは、過激な環境団体や動物愛護団体となんら変わらない。心を満たすための偽善行為だ」

どうやら洋平は、オナキマニム王国が獣を守るために行動しているんだと勘違いしているようだった。

「違う。俺達は獣の味方をしているわけじゃない。俺だって、人を傷つける獣は罰を受けて当然だと思ってる」

大宇宙に来てから、私はポリュペモスを、トロールを、様々な獣を殺してきた。

「それなら、どうしてシタヌ王国の大望を受け入れない？ 人を傷

つける獣がいなくなるのは、お前達にとっても望ましいだろう」

「お前らは獣を、獣の血を引いている人間すらもこの世から消すつもりなんだろ？ 自分達に不利だからと言って、全部取り除くような考え方は納得できない」

私が答えると、洋平は苦虫を噛み潰すような表情を浮かべた。

「俺には分からねえ。普通の人間なら、大切な人を危険にさらしたくない一心で、害をなすものをあらかじめ除いておきたいと思うんじゃないのか？」

彼の言い分を聞いてようやく、目指す国造りに近いにも関わらずシタ又王国の方針が気に食わない理由が分かった。

「危険な獣は殺す。危険な隣国の人間は殺す。危険な隣人は殺す。自分達に不利なものを全部取り除いていって、信用できる人間だけが暮らす世界にして、それは幸せだと言えるのか？」

「極論だ！」

洋平が声を張り上げる。

「いいことも悪いことも、全部ひっくるめて世界なんだ。それを全て享受し、逃げないで良い方向へ持っていかうとするのが、あるべき人の生き方なんだと思う」

カードを顔の前にかざし、魔法陣を目に焼き付ける。

「我は汝に啓示を与えるもの」

眼前に光の点が現れ、四方に広がり鏡を作り出した。鏡面にはボ

ギ砂漠の砂地が映っている。

鏡の中に飛び込み、大宇宙へ移動する。移動を繰り返していたせいで元の場所からだいぶん離れており、遠くに味方の本陣が見えた。

「大鳥は舞い上がる、ローラー！」

同じくカードをかざして詠唱した洋平が、鏡を通って後を追ってきた。

「獣の抹消は必要なことなんだ！　なんでお前にはそれが分からないんだ！　――復讐の成就を、ケリム！」

洋平が詠唱すると、私の周囲で砂漠の砂が浮き上がった。砂の礫による全方位攻撃を放つつもりのようだ。

これだけ頭に血をのぼらせていれば、切り札を使うことができるだろう。冷静に魔法陣のカードを代えた。

「ケルビム達の頭上を天翔けるもの」

転移の詠唱を行うと、右手の近くに小さな鏡が浮かんた。鏡面に腕を突き入れる。取り出された手には銃が握られていた。

装飾のない粗朴な黒いスライド。直線になっているグリップ。グリップの中央に刻まれた星印。コルト・ガバメントに似せて作られているが、よりによって安全装置が省略されている。30口径自動拳銃、トカレフ。どうやって手に入れたのかは知らないが、チヒ口から渡されたものである。

鏡面の映像が洋平の顔に変わる。即座に額に狙いをつけ、引き金を引いた。

砂漠に銃声が響き渡る。弾き出された薬莢と、私の周囲に浮かん

でいた砂が同時に落ちた。

「……残念だったな。それが決め手だったんだろう？」

洋平の靴の前に、真鍮色の弾丸が転がった。魔術で銃弾と自身の斥力を強化し、威力を殺して防いだのだろう。完全に防ぎきることはできなかったようで、額から血が垂れていた。

「復讐の成就を、ケリム」

洋平が詠唱し、再び砂の全方位攻撃を放とうとする。しかし何も起こらなかった。

「ふ、復讐の成就を——」

「その弾丸の先端には、お前の嫌いな獣の一つ、ア・バオ・ア・クウーの欠片が埋め込まれてる」

「あの魔術抵抗の高い甲殻をもつ生物か」

洋平の言う「あの」は、ベッドの不法占拠者のことを指しているのだろう。

「魔力は頭の中で生成されて、眉間から放出されているらしい。魔術でも、奇跡の粒子と深層心理の干渉がそこで起きている可能性が高いと思うていたけれど、当たっていたらしいな。その欠片が額に埋まっている限り、お前は一生魔術を使えない」

「——くそっ！！」

洋平は立てた人差し指を見つめた後、傷口に指を突っ込んだ。砂地に血の斑点ができた。

「うおおお!!」

指をぐりぐりと動かして傷口を抉り、あまりの苦痛に悲鳴を上げている。あまりに痛々しく見ていられずに、私は目を逸らした。

「もういい。魔術のことなんて忘れて、元の世界で元の生活をしていてくれ。星煌く天は我が顔、海は我が胸、大地は我が足、風が充たすは我が耳、輝く光を遠矢に射る太陽は我が目なり。我は汝に啓示を与えるもの」

詠唱を行うと、洋平を囲んで鏡の立方体が現れた。立方体が縮んでいき、光の点になって消える。洋平は大宇宙から姿を消した。

シタヌ王国の王はいなくなった。戦争は終わり、オナキマニム城で協議が行われた。

0123：近いは遠い、遠いは近い

倒れてこないかと心配になるような、ガラス張りの高いビル。片側三車線を埋めている色とりどりの鉄の車。奇抜なファッションに身を包んで闊歩する若者達。新宿の街は相変わらずだった。

私はというと、久しぶりに吸った排気ガスのせいで喉の調子が悪くなっている。

久しぶりに穿いたジーンズのポケットから、メモ帳の切れ端をつまみ出した。几帳面な字で日用品の名前が箇条書きされている。

要するに、小宇宙くんだけりまでやって来たのは、おつかいの為なのだ。チヒロにこの紙と金を渡され、今日一日観測者の仕事は休みにするから、リストに載っているものを全部買ってこいと命令された。

再びメモに書かれている品目に視線を走らせた。トイレ用洗剤。漂白剤。粘着ローラー。消臭剤。ヤ。ザキのパン。地下の移住空間で使うものだろう。だが、別に今日買う必要があるとは思えないものばかりに見える。ここ数日、顔に出るのを隠せないほど嬉しそうにしていたし、何か大切な用事があって私をフリーにしたくなかったのかもしれない。

横から来たサラリーマンにぶつかられ、バランスを崩した。男はさらりと謝罪の言葉を述べて足早に通り過ぎていった。

何をそんなに急いでいるのだろう。いや、これが元来の小宇宙の姿だった。考え方がだいぶ大宇宙側に毒されたというか偏った気がした。

こんな所まで来た私も悪い。学生の時のテンションで、はりきって新宿まで出てきたが、よくよく考えてみると近所のホームセンターで済ませられた。ため息を吐いてからデパートに向かって歩き出した。

デパートの中には映画館が入っていた。もちろん小宇宙にそんな魅力的な娯楽はない。どんなタイトルが上映されているか気になり、まずは映画館のフロアに来てしまった。

メモに載っている品目の合計金額を、一年前の価格で概算してみる。暗算できるようになっていたことに、さりと驚いた。チヒロから預かったお金には、だいぶ余裕があった。

勝手に使ったら怒るだろうか。軽蔑の目を向けているチヒロの顔が脳裏に浮かんだ。

「――よし、止そう」

弁解できる気がしない。回れ右をして歩き去ろうとしたその瞬間、脳裏に浮かんでいた顔と一致する人間の姿が見つかり、思わず足を止めた。

黒髪が後ろで一束に尻尾のように垂らされ、前髪はふわりと目にかかっている。ぱっちりとした眼はすわっており、大人びた雰囲気に見せる。服装はいつものフード付きのマントではないが、間違いない、チヒロだ。ショートパンツで細い脚を見せた、小宇宙の若者みちな格好をしていた。

歩き寄ろうとしたが、私は再び足を止めた。

チヒロは斜め横を見上げて笑みを零していた。その視線の先、彼女の隣には男が立っていた。ひよろつとした体型と垂れた眉が頼りない感じを醸し出す、四、五十歳に見える中年男性。

オナキマニム王国の革命の際に、チヒロは私と同じ魔法を使える人間がいると話していた。小宇宙に出かけてまで会う必要がある人物は限られている。それが彼のことなのではないだろうか？

私は呆然として遠くからチヒロの顔を見つめていた。彼女が見せている表情は、普段私に見せていたものとは違うように見える。胸の奥はもやもやするし、頭には血が上っていた。

チヒロと男は映画館の中に入っていた。私はメモをポケットに仕舞い、後を追った。

上映されていたのは、今更なケータイ小説が元になっている作品だった。親族間の禁断の恋がテーマだったが、内容は全く覚えていない。見入っている二人の後頭部を眺めていたら二時間が終わっていた。

プライベートまで詮索するのは良いことではない。それは分かっているのだが、中毒性や依存性があるみたいに目を離すことができない。獣が出たときに二人の邪魔をさせないように追っているのだと自分に言い聞かせて、無理やり納得させた。

その後デパートを出た二人を追いかけて、ファミレスや服屋までついて回った。結果、そわそわしていた心は徐々に落ち着いていった。親密そうに顔を見合わせたり、ボディタッチを交わすこともあるが、思っていたような男女の関係とは何かが違う。気遣いや、距離感のせいだろうか。お互いに向けられているのは、『慈しむ』という感情に見えた。

夕飯を食べた後、二人は店の前で別れた。男はほくほくした顔をして駅の方へ向かっていった。対して、チヒロはこちらに視線を向けて苦々しい顔をしていた。ストーキングしていたのがばれていたようだ。

「いつから見えた？」

歩き寄った私に向かってチヒロが話しかけてきた。

「デパートの映画館……から……」

「つまりほとんど全部ってことね。やられた。勘付かれないように、おつかいをさせたんだけど裏目に出たわね……」

チヒロはわしゃわしゃと頭を掻いた。頬がほんのり赤く染まっている。

「ごめん。肝心のおつかいも、パンくらいしか買えてないや。一緒にいた人って誰？」

「義理の父親よ。私と同じく観測者で、小宇宙側の扉の管理をしているわ。ああやって一月に一度は顔を合わせろってうるさいの」

いかにも迷惑だったように話しているが、会っている最中のチヒロは嫌がっているようには見えなかった。彼女も毎月の再会を楽しみにしているのではないだろうか。恐ろしくて口に出すことはできないが、そんなことを思った。

「てつきり前に言っていた、俺と同じ魔術を使う人間なのかと思っ
てた」

「あら、ひょっとして気になってついてきてくれたの？ 次元間干涉の魔術を使えたのは私の祖父よ。あいつは大した魔術が使えないから、こんな所に左遷されているの」

凶星をつかれ、今度は私が顔を赤くする番だった。

義理の父やら、彼を超えてしまった娘やら、次元間干涉の魔術を

使う祖父やら、観測者の一族は複雑な家庭らしい。唯我独尊の性格はその賜物だろうかと考えていると、チヒロは意地悪そうに口の端を吊り上げて笑っていた。

「聞きたいことはそれで終わり？ 釈明の時間には質疑は受け付け
ないわよ」

気前よく話してくれていたので、今回の件は見逃してくれるのか
とと思っていたが、そんなことはなかった。相変わらず執念深い。身
も凍る理詰め of 追及を受けながら帰路についた。

チヒロの家に帰ると、玄関で飼い主の帰りを待つ犬のようにフイ
オが半泣きで立っていた。

私は林を背にして湖畔に立ち、じっと彼女が来るのを待っていた。

オナキマニム王国の革命が成功してから、私はよくチヒロと一緒に
にいる。観測者の仕事を手伝うと約束したのが理由の一つだが、彼
女の方が何かと理由をつけて一緒に行動しようとしているせいもある。
ある時は魔術の訓練であり、ある時は作りすぎた料理の処理、
四柱の会合の付き添いなんていうのもあった。

態度も以前より柔らかくなった気がする。前は馬鹿だの阿呆だの
言いながら面倒くさそうに私の面倒を見ていたが、最近は一転して
親バカみたいに細かいことまで気を遣ってくる。正直、過度に馴れ
馴れしいと思うこともたまにある。

何故対応が変わったのか、私なりにいろいろと考えてみた。一つ
目は、私のことを認めてくれたという線だ。自分で提案しておきな

がら断言できる。これは絶対にない。

二つ目は、普段の私達の関係を見かねて、誰かが口出ししてくれたい線だ。ルクアならしてくれる気がするが、多分チヒロは聞き入れない。これも違うと思う。

三つ目は、私に気があるという線だ。これも考えにくいが、考えれば考えるほど、あれは露骨なアピールだったような気がしてきた。きつとそうだ。

自分の気持ちはどうなのだろう。先日チヒロの後をついて歩き、いもしない男の影に怯え、もやもやした気持ちになってみて痛感した。私は彼女のことが好きだ。きつとそうだ。

そんな問答を自分の中で繰り返し、とうとう私は告白する為にチヒロを呼び出していた。

「忙しいのに、呼び出してごめん。どうしても話しておきたいことがあるんだ」

歩いてきたチヒロに話しかける。一瞬彼女の顔が引きつったように見えたが、すぐに戻った。

「何よ、改まって。バイト代を上げて欲しいの？ 別にいいけど……」

「いや、そうじゃなくて」

「分かった、ジャストインタイムを本格的に教えてほしいんでしょ。一筋縄じゃいかないわよ。覚悟はできてる？」

私が話を切り出そうとすると、チヒロはその度に無理やり言葉を遮った。無理やりな笑顔を浮かべて、慌てているように見える。

まるでチヒロは私の話す内容が分かっているかのようにだった。いや、察しのいい彼女なら本当に分かっているのかもしれない。しか

しそれなら何故、私に続きを話させてくれないのだろう。

「いや、俺は——」

「まさか秘術を？ それは無理よ。あなたも知っているでしょう、あれには一子相伝っていうきまりがあつて——」

「お前のことが好きなんだ！」

もう我慢することができなかった。チヒロが喋っている途中で口早に叫んだ。

瞬間に浮かべたチヒロの表情を見て、私は後悔した。

「……ちよつと待って」

チヒロは目を閉じて眉間をつまんだ。

「確かに最近の私の態度は悪かったと思うわ。勘違いしてしまっても仕方がないと思う。ごめんなさい」

その謝罪は、勘違いさせたことに対するものなのだろうか。それとも私の発言に対する返事なのだろうか。

「何で——」

「ずっと黙っているつもりだったけれど、やっぱりそう都合よくはいかないわよね……」

チヒロは胸に右手を当て、私の目を真っ直ぐに見つめた。

「私の名前は永田千尋。母は永田裕美。父は永田和也。つまり、あなたの異母兄弟よ」

すぐには意味を理解できなかった。何故私の父の名前が出てくるのか不思議に思っていた。

イボキヨウダイ。チヒロの父が私の父と同一人物であるなら、彼女と私は腹違いの姉と弟ということになる。つまり、異母兄弟。

「そんな馬鹿な……」

「和也は代々小宇宙を監視していた家系、永田家の長男で、行く行くは観測者になるはずだった。でも彼は私を生んでから、母と私を捨てて家から逃げ出したの。そして私はスケープゴートとして、あの男の代わりに観測者として義理の父に育てられた」

彼女の目は私を通り越して遙か遠くを見ているようだった。

「逃げた和也は観測者という束縛から逃れ、自由と新しい家庭をもった。そして生まれたのがあなたよ、和真君」

父の過去はよく知らないし、父方の祖父母に会ったこともなかった。今まであまり疑問を感じていなかったが、改めて思い起こしてみるとおかしいことだ。彼女の話は辻褄が合っていた。

「あなたは私にとって、大切な弟なの。男女間の関係はあり得ないわ」

振られたことには動揺したが、それ以上にショックなことが色々ありすぎて、訳が分からなくなってしまった。

私は返事をできずにチヒロの顔を見つめていた。

「しばらくお互い頭を冷やしましょう。明日から、観測者の手伝いはしないわ」

言い捨ててチヒロが立ち去る。私は呆然と立ち尽くし、彼女の背中を見送っていた。

チヒロの家の地下では、家主とフィオが椅子に座って向かい合っていた。白い壁に貼られているモノクロのレントゲン写真には、横から見た頭蓋骨が写っている。

チヒロがボールペンでレントゲンの一部を指した。頭蓋骨の額部分、白い輪郭の中に黒い小さな石のようなものが紛れ込んでいる。

「人間離れた治療能力が災いしたみたいね。頭蓋骨と完全に一体化しているわ。これじゃ、小宇宙の現代医学でも取り除くのは不可能ね」

「そうか……」

チヒロはフィオの額に埋め込まれたア・バオ・ア・クウの欠片の状態を確認していたのだった。

フィオは蚊の鳴くような声で返事をした。診断を始める前からずっとテンションが低いままだった。

「そんなに落ち込まなくてもよさそうなものだけど。もう昔みたいにやんちゃする気はないんでしょう。今の力で十分じゃ——」

「カズマから告白されたんだろ。何で断ったんだ？」

チヒロの言葉を遮り、フィオが口を開く。チヒロは目を見開いて驚いたようだったが、すぐに眉をひそめて迷惑そうな顔をした。

「見ていたの？ 私の周りは、どういつもこいつもストーカーばかりね」

「家の前でやってるのが悪い。で、何でなんだ？」

物怖じせずにフィオが追及する。

「私と和真君は、姉と弟の関係なの。血が繋がっているのよ。そんな不純な提案、受け入れられるわけがないじゃない」

チヒロが言い捨てる。フィオはぼかんとしていたが、すぐに口を開いた。

「血が繋がっているからどうしたんだ。姉弟の夫婦なんて山ほどいるぞ」

呆けていたのは、二人の血が繋がっていることを聞いたからではなく、それを理由に断ったことに対するものらしい。今度はチヒロがぼかんとする番だった。

「あんた達は古い文化を持っているから、そんなことを言っているのよ。私達の世界は違う。もちろん結婚なんて民法第734条で禁止されているし、近親交配には障害のリスクがある。付き合うことだって、倫理上の問題で白い目を向けられるわ」

チヒロが立ち上がってまくし立てる。

「何をそんなにむきになってるんだ？ この国にはミンポウなんてものはない。別にあたし達だって変な目で見たりしない。問題ないじゃないか」

「分からない人ね！ あんた達みたいな原人とは、考え方が違うのよ！」

チヒロは取り乱し、荒い息で呼吸をしていた。その顔を、椅子に座ったフィオが冷静に見つめていた。

しばらく沈黙が続いた後、チヒロが頭を抱えて椅子に座った。

「言い過ぎたわ。ごめんなさい」

「こつちこそ、ごめん」

地下室に再び静寂が訪れた。フィオは椅子から立ち上がり、チヒロに背を向けて歩き出した。

「チヒロの気持ちはどうなんだ？」

「え？」

フィオが去り際に出口の前で声を発した。チヒロが伏せていた顔を上げる。

「なんで真実を知らせたきりで、自分の気持ちのことは伝えなかったんだ？ カズマのことが嫌いなら、ありのまま言えば血の繋がりのことを隠したままで済んだんだから」

返事を聞かずにフィオは部屋を出た。残されたチヒロは退室に気づかずに視線をさまよわせていた。

和真はオナキマニム城の一室にいた。会話もままならない状態で城を訪れ、一人で閉じこもってしまった。扉の前でルクアとヌト、ウィツタクが心配そうな表情をして聞き耳を立てている。

「なんとかしてよ、団長。悪い空気がここまで漂ってくるじゃない」

「いやあ、僕もこういうのは苦手で……」

ウィツタクとヌトがあたふたしていると、扉が開いた。土気色の顔をした和真が顔を出す。

「気を遣わせたみたいで、すみません。もう大丈夫です」

「とても、そうは見えませんが……」

ルクアが声をかける。和真は大丈夫だと機械的に繰り返した。

半分開いていたドアの隙間を押し広げて、ア・バオ・ア・クウーも部屋から出てきた。彼は戦争の後、名前の一部を取って『アクー』と和真により名付けられた。

「——いいところにいた」

横から声が聞こえ、四人と一匹が振り向いた。フィオがずかずかと廊下を歩いてくる。部屋の前まで来ると、和真の肩を押して中に押し込み、後ろ手に扉を閉めた。

廊下に残された三人と一匹が顔を見合わせた。

フィオの運んできた椅子に、向かい合って座る。部屋に閉じ込めて二人で話す機会を作ろうとしていたくせに、当人は背をぴんと伸ばして膝の上で手を握り、固く口を閉じていた。

沈黙が辛い。何故私が気を遣わなければならないのか分からないが、こちらから話しかけた。

「どうした？ 俺はもう大丈夫だぞ」

「当たり前だ。あのくらいでどうこうなるような弱い奴じゃないこ

とくらい知ってる」

『あのくらい』とは何のことを指しているのだろう。嫌な予感がせり上がってくるが、その前にフィオが言葉を続けた。

「カズマと初めて会ったのは、あたしがアフウシの村を震撼させた時だったな」

「違う違う。でかい図体で見境なく暴れているのを見たのが最初だ」

小宇宙で暴れていた時のことは黒歴史なようで、フィオは不満そうに眉をひそめて、ノーカウントだと言った。

「来る日も来る日も、あんたを殺すことばかり考えてた」

「そう面と向かって言われると怖いな……。まあなんだ。ああいう出会い方をしたんだから、仕方がないよな」

「出会った人間は皆いなくなる。だから一人の人間に執着する経験自体、初めてのことだったんだ。その気持ちが掛け替えのないものだと感じるようになってしまったせいで、止めを刺すタイミングを計れなかったり、再開した時には思わず自分の側に置いてしまったんだと思う」

執着の理由はともかく、悪い気はしなかった。照れ臭くなって頬を掻いた。フィオが言葉を続ける。

「サライでは、今までしてきたのとは正反対の生き方をしなくちゃいけなくて苦労したけど、振り返れば一番充実していた日々だった」
「俺は心臓をすり減らされたけどな。……でも、フィオは本当によく頑張ってくれた。あれがあつたからこそ、俺はオナキマニムを変えたいと思ったんだ」

「恥ずかしいからやめろ。有耶無耶になっただけど、あの時あたしは

求婚のことを真面目に考えて始めていたんだぞ」

「ほんとにすまなかった」

今度は冗談として、手を合わせるジェスチャーを見せた。フィオが顔をくしゃくしゃにして笑った。

「オナキマニムで再会してからは、前よりも一緒にいる時間が減ったな」

「前は日がな一日一緒に行動していたから、それと比べれば減ったかも」

こちらに来てからは、チヒロと観測者の仕事をしていることが多かった。明日からは来なくていいと言われていたことを思い出し、心が痛んだ。

「……サライの暮らしが充実していたっていうのは、やりがいがあったっていうのもあるけど、カズマといたっていうのが一番大きかったんだと思う。だからあたしはカズマと、ずっと一緒にいたいんだ」

「何度も言ってるけど、俺もそのつもりだ」

肯定の返事にも関わらず、フィオは表情を曇らせた。

「違うんだ。尻尾の先の代わりとか、何でも屋とか、ただの戦友とか、そういう意味ではなくて……。なんだ、難しいな」

フィオは言葉を切り、せわしなく顔の向きを変えた。赤い尻尾が椅子の後ろでのたうちまわっている。

「——好きだ。ずっとあたしの一番近くにいて欲しい」

フィオの言葉を頭の中で反芻する。意味を理解し、息を呑んだ。

「思ってくれることは、とても嬉しい。ありがとう」

返事をしなければいけない一心で、なんとか口を開く。その時、私の脳裏にはウィツタクに襲われた時の記憶がよぎっていた。

（好きとか愛とか、そういうのは正直分らない）

当時私はそう言った。フィオはあの時から思いを曲げず、私のことを好きになってくれたのだ。それに対して、私は彼女ではない女性を好きになってしまった。あんなことを言っておきながら、彼女の思いに答えることができなくなってしまった。胸が苦しくなった。フィオのことは好きだ。しかしそれはチヒロに対するものとは異なっており、例えるなら――

「でもごめん。俺の中でフィオは、世話を焼きたくなる女の子で、気兼ねなく腹の内を言い合えて、そんな妹みたいな存在なんだ」

怒られたり叩かれたりしても仕方がない返事だと思う。しかしフィオは何故かそれを聞いて笑った。

「そうか、まだ機会はあるっていうことだな。兄妹だからなんだ。姉弟だからなんだ。二人とも難しいことを考えすぎなんだよ」

『二人とも』とはどういう意味か。チヒロのシルエットが脳裏に浮かぶ。嫌な予感が形になった。

「――まさか聞いていたのか？」

告白を見られていたのは明白だった。フィオは無言で肯定した。

「だいたい、チヒロは血が繋がっているって告げただけだろ。カズマのことが嫌いって言ったわけじゃない。どうして諦めなくちゃいけないんだ？」

フィオが椅子に寄りかかり、なげやりに言った。

彼女の言うことはもつともだ。あの時は焦って告白して、勝手にシヨックを受けて、それ以上話することができなくなってしまった。本当に情けない。

「フィオは告白しに来たのか？ 応援するために来たのか？」

「そんなの分かんない。だいたい血が繋がっているって言っただけで、二人とも全然似てないだろ」

自身に関わることでから自信が無かったのだが、他人に指摘してもらってはつきりした。やはり私とチヒロは似ていない。顔も、性格もだ。改めてチヒロとの関係を見直してみると、他にも気になることがあった。

「それは俺も思った。そうだな。こんなところで落ち込んでいるよりも、行動している方が何倍もマシだな」

魔法陣の描かれたカードを取り出した。魔術は五次元間干渉。

「我は汝に啓示を与えるもの」

カードを顔の前にかざして詠唱した。浮かび上がった光の点が四方に広がり、長方形の鏡が現れる。

「フィオ、ありがとう!」

「礼を言うくらいなら、あたしを選べ。馬鹿」

和真が鏡をくぐって姿を消した。チヒロの元ではなく、小宇宙に向かったようだ。

フィオは一人部屋に残され、しみじみと天井を見上げた。

「そう。別に嫌いって言われたわけじゃない。どうして諦めなくちゃいけないんだ……」

自分に言い聞かせるように呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9435/>

ドッペルパスはかく語りき

2011年11月17日18時42分発行